豊中・古池遺跡

発掘調査概報

そのⅢ

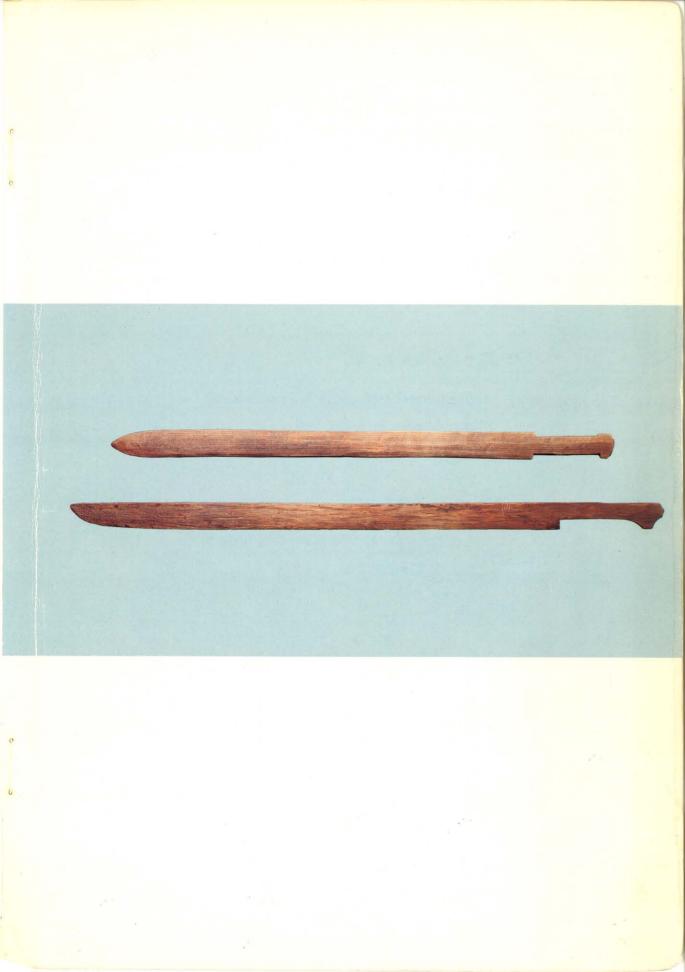
豊中·古池遺跡調査会

1976. 3



素環頭 遺物番号1

上池出土(O-19 河川中層、砂混り粘土層) 現存長 $10.5\,\mathrm{cm}$ $5\,\mathrm{tel}$



剣 (上)遺物番号3

上池出土 (G-33 河川中層、砂混り粘土層) 長さ 54.8 cm 巾 3.1 cm 5 世紀

刀 (下)遺物番号4

上池出土 (I-35 河川中層、砂混り粘土層) 長さ 64.6 cm 巾 3 cm 5 世紀

豊中・古池遺跡

発掘調査概報

そのⅢ

豊中・古池遺跡調査会

1976. 3

泉大津の市域には、古い古い歴史を地下に埋めている部分が多々あります。埋蔵文化財の包蔵地です。豊中の区画整理の地区もそのような地域でありますので、事業に先立ち本調査会による発掘調査が3カ年にわたって行なわれてまいりました。その結果多数の遺構遺物の検出を見ました。これらは名もない人々の地味な生活の跡なのです。私達はその遺構遺物を通じて、先人の長い長い苦労の道のりを偲んで、当時の人々の生き方を学ぶ必要があります。その道程の先端に今日の私達の生活があるわけです。そして今後の進むべき進路の羅針盤として広く活用せねばなりません。これが文化財に課された使命といっても過言ではないでしょう。本書がそのような時に手助けの一端ともなれば幸甚に存じます。

最後に本調査の関係者並びに本書の刊行にたずさわった人々に感謝の意を表します。

豊中·古池遺跡調査会 理事長 中 辻 捨二郎

- 1. 本書は、豊中・古池遺跡調査会が、泉大津市豊中区画整理地区に於いて行なった、昭和49・50年度発掘調査の記録である。
- 2. 本調査の経費は、泉大津市区画整理事業よりの委託費による。本調査にあたって、区画整理事務所の高岡所長をはじめ、全職員の方々の御援助を得たことを感謝します。
- 3. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師井藤 徹(現主査)、泉大津市 教育委員会社会教育課坂口昌男が担当して行なった。

期間は、昭和48年10月24日より、昭和50年5月16日までである。この間、西本孝 男、杉本俊彦、尾野幸雄、森 茂、芋本隆裕、吉川和則の諸君が調査に参加した。

- 4. 遺物整理、実測は財団法人大阪文化財センター第2遺物整理室(酒井龍一室 長)が行ない、遺物写真撮影は、同センター写真資料室(中西和子室長)が行なっ た。
- 5. 本書の作成は、遺構篇を坂口昌男、吉川和則が行ない、遺物篇は、酒井龍 一、正富博行、芋本隆裕、杉本朝美が行なった。
- 6. 骨壺及び鉄鍋の科学的保存処理は財団法人元興寺仏教民俗資料研究所によるものである。

目 次

第1章	訴	査にいたる経過1
第2章	地	理的環境
第3章	歴	史的環境
第4章	既	往調査概略
第5章	遺	構
		1. 街路部分
		2. 上池部分
		3. 遺構まとめ14
第6章	遺	物18
		1. 豊中遺跡(街路部分)出土遺物18
		2. 上池部分出土土器32
		3. 上池部分出土土器の考察35
		4. 上池部分出土木製品
第7章	和	泉に於ける「伝統的第V様式」に関する覚え書49
別。	表	
		街路部分(河川状遺構他)出土遺物一覧表71
		上池部分出土土器一覧表 85
		上池部分出土木製品一覧表
図 月	反	
		1 周辺の遺跡
		2 ····································
		3 既往調査遺構図

4調査箇所
5地区割図
6 ~19 街路部分遺構図
20•21上池部分遺構図
22~38 街路部分遺物実測図
39~45上池部分土器実測図
46上池部分木製品出土地点
47~56上池部分木製品実測図

 57~69
 街路部分遺構写真

 70~72
 上池部分遺精写真

 73~89
 街路部分遺物写真

 90~107
 上池部分遺物(土器)写真

 108~119
 上池部分遺物(木製品)写真

第1章 調査にいたる経過

大阪府泉大津市豊中には、「大福寺」の字名が残っており、遺跡の存在が早くから予想された。田畑には土師器・須恵器・瓦などの破片が散布し、府道泉大津中央線の道路工事に伴って、 遺物が出土したことからその存在は確定的となった。

近年の経済発展により、大阪・和歌山を結ぶ新しい道路が必要とされ、そのため建設省により、昭和40年に新道路が計画された。この道路は第2阪和国道と名付けられ、本市の東部を通過するものとなった。そのルート上に古池が存在するため、埋め立てられることとなり、それに先立ち池が干された。その時、池底から多数の須恵器片が出土した。その結果、昭和47年から48年にかけて、大阪府教育委員会によって発掘調査が行なわれ、旧河川、道路跡、倉庫跡等の遺構が検出された。又、第2阪和国道の予定路線上も同教育委員会によって調査され、住居址、井戸跡、倉庫跡等が発見された。こうして豊中遺跡は、相当広範囲にわたるものであることがわかった。その付近は、第2阪和国道に伴う区画整理事業が、泉大津市によって昭和40年に計画されており、以上の調査結果から、その事業地内を調査する必要が生じた。昭和48年10月に、泉大津市教育委員会は、大阪府教育委員会と協議の結果、豊中・古池遺跡調査会を設立し、その調査にあたることとなった。昭和48年度は、区画整理地区内に31カ所の試掘拡を掘り、断面観察を行ない調査対象地を設定した。そして、同年度に巾6m、長さ40mの部分を調査し、多数の成果を得た。上地部分及び、残りの街路部分は昭和49年度・50年度に実施し、今回の報告となった。

第 2 章 地 理 的 環 境

泉大津市は、大阪平野の南部で大阪湾に面する位置にある。北は高石市、東は和泉市、南は大津川をはさんで泉北郡忠岡町と接しており、南北に長い形をし、その面積は約 10.61km。人口は約6万8千人の山間部を有しない市である。

地場産業としては、織物工業が盛んで、特に毛布の生産量は全国の約95%を占めている。近年、堺以南の海岸部を埋めたてて、堺・泉北臨海工業地帯が造られ、泉大津市の部分には公共埠頭が建設されつつあり、港湾の町にもなろうとしている。本市の西部を南海本線と国道26号線が平行して走り、大阪と和歌山を結ぶ主要路線となっている。その道路に沿って市街が形成されており、徐々に東部の農村部も市街化へと進みつつある。経済の高度成長により、国道26号線は著しい交通量の増加を示し、麻痺状態となった。昭和40年に、建設省はそれを緩和するため、大阪・和歌山を結ぶ新ルート、第2阪和国道を万国博関連事業として計画した。そして、それに伴う区画整理事業が、堺市・高石市・泉大津市・岸和田市等、それぞれの市によって行なわれている。

豊中遺跡は、泉大津市の東部にある遺跡で、現在その大半は水田の下に埋もれている。その範囲は広く、国鉄阪和線和泉府中駅より北へ900m、南海本線泉大津駅より東南東の方へ約1800mの地点を中心として、南北約1000m、東西約800mの規模である。

この遺跡を地形的に見ると、大阪府と和歌山県の境界に、ほぼ東西に走る和泉山脈があり、北に向かっていくつかの丘陵が、その山脈より伸びている。和泉市内の信太山丘陵もその一つである。この丘陵より更に西に派生した舌状の微高地がある。豊中遺跡はその北西端の部分及び、南西側のわずかな谷を隔てた部分に立地し、標高は約12m~18mである。

水資源としては、この遺跡の南西に和泉山脈を源とする大津川が流れ、大阪湾へと続いている。その他には、付近に大きな河川はなく、溜池が数多く存在する。しかし、現在ではその大部分は埋められてしまっている。(今回調査が行なわれた上池も、調査終了後埋め立てられている。)現地表下には、ほぼ南北方向に幾条もの砂礫層が走り、地下水位も比較的浅く、以前には湧水の箇所が数多く見られた。和泉府中に存在する清水(和泉清水)は、かなりの水量を湧出させ、下流水田の灌漑に利用されていたが、現在では小規模なものとなっている。気候は温暖で降水量は概して少ないのであるが、このように灌漑用水に恵まれていたため、農業生産の場として古くから拓け、条里制遺構もよく残されている。

第3章 歷史的環境

豊中遺跡が所在する大阪平野の南部では、現在のところ弥生時代以降の遺跡は、多数発見され ている。しかし、それ以前の遺跡はそう多くない。昭和40年に、和泉市父鬼町の海抜約 390mの 地点で、泉大津高校地歴部によって発掘調査がなされ、旧石器時代のサヌカイトの石核、及び剝 片が発見された。又、最近では堺市野々井遺跡、高石市大園遺跡、岸和田市海岸寺山遺跡等で も、旧石器時代に属すると思われる石器、及び剝片が出土している。これ等からして、この時代 の遺跡は今後も発見される可能性は極めて高い。縄文時代の遺跡では、岸和田市箕土路遺跡より 中期初頭の土器片が、そして今回の調査地の上池より中期後半のやはり土器片が出土しており、 発見された近くには縄文遺跡が存在するものと思われる。又、信太山丘陵から打製の石匙が採集 されている。堺市四ツ池遺跡は後期・晩期、岸和田市春木八幡山遺跡は、後期の土器が出土して おり、くわしい報告がなされているが、和泉地方に於ける縄文時代は未だ明らかにはされていた い。堺市四ツ池遺跡は更に弥生時代へと続いている。北九州で始まった弥生文化は急速度で東進 し、この地方に伝わったものと思われる。それに続くのが泉大津市池浦遺跡で、畿内第 | 様式中 ~新に、和泉市、泉大津市にまたがる池上・曽根遺跡は畿内第 [様式新から始まると位置付けら れている。この池上・曽根遺跡でも、農耕集落として米作りが生活基盤となっていたことは、飯 蛸壺形土器や土錘、手網等の漁業関係の遺物を出土しながらも、木製品による農耕用道具や開墾 用道具が多数発見されていることにより、明らかである。この集落は大溝によって囲まれてお り、その発展段階、更には和泉地方に於ける弥生文化の発展段階を示す重要な遺跡として四ツ池 遺跡と共に知られている。

東部~中部瀬戸内沿岸に見られる高地性集落は、この地方では和泉市観音寺山遺跡・惣ケ池遺跡と2ヵ所が発見され調査がなされている。観音寺山遺跡の場合は、100箇以上の住居址が存在し、丘陵の中腹を濠がめぐって集落をとりかこんでおり、この遺跡の性格を判明させる上の重要なポイントとなる。又惣ケ池遺跡からは、弥生後期の竪穴住居と共に、工房跡と思われる竪穴の存在することが調査者によって報告されており、畿内の弥生時代における生産史を解明する一つの手がかりを与えている。遺体を埋葬した墳墓の一形態として方形周溝墓があげられる。弥生時代前期から始まったこの形態は古墳時代にも引きつがれていることが、泉大津市七ノ坪遺跡によっても明らかにされた。古墳時代を把握する方法として、今までは古墳の調査を主になされてきたが、最近では集落跡も多数調査されるようになった。(これには最近の広範囲による農地の宅地化にも一因があるが)この結果、弥生式土器から土師式土器へ移行する過程を示す多くの新資

料が得られた。豊中遺跡もこの時期から始まるが、他に高石市大園遺跡、和泉市上町遺跡、伯太 北遺跡、池上・曽根遺跡、泉大津市七ノ坪遺跡等があげられ、弥生時代にはまとまって集落が形 成されていたものが、古墳時代になるにつれて、その周辺部へと拡がって行き、それぞれグルー プを成していたようである。ある程度生産は分業化されているが、農業生産を基盤としてのまと まりは、軍事的首長によって統合されていたものと思われる。これはやがて和泉が国としての単 位にまで発展していった。和泉は早くから拓かれ、農業が行なわれていたことは既に述べた。こ のことはこの地方に於いても、条里制が敷かれる条件を満たした。しかしこれは、大化の改新時 この地に条里制が敷かれたことを意味するものではない。いつの時期に行なわれたかは不明であ る。和泉に国府が置かれたのは757年のことであり、それまでは河内国の一部であった。大鳥・ 和泉・日根三郡が716年に河内国に含まれながら、「和泉監」として半ば独立した行政体となっ た。しかしこの和泉監は740年には廃止され、もとの河内国に併合された。その後、前記の三郡 が「和泉国」となり、国衙が設置された。現在の和泉市府中町がそのあたりである。泉大津市古 池周辺の遺跡は、その国衙をとりまく集落の一部と思われる。

古池のすぐ西側に要池があり、この池の南側を昭和49年7月~同50年3月の期間で、大阪府教育委員会によって発掘調査がなされた。その結果、桁行6間梁行3間の特異な形をした並び倉が検出された。鎌倉時代に位置づけられ、新しい資料を提供したことで注目される。

註

- ① 和泉市史 第一巻 1965 和泉市史編纂委員会
- ② 中村 浩氏よりご教示
- ③ 井藤 徹氏よりで教示
- ④ ①と同じ
- ⑤ 「池上・四ツ池」 1970 第二阪和国道内遺跡調査会 「第二阪和国道内遺跡調査報告書」4 1971 同 同 」1.2.3. 1973 同 「池上遺跡発掘調査概要Ⅱ」 1973 大阪府教育委員会 「 同 Ⅲ」 1974 同
- ⑥ 「岸和田市春木八幡山遺跡の研究」 1965 岸和田市教育委員会
- ⑦ 「節・香・仙」第22号 1972 大阪府教育委員会文化財保護課
- ⑧ ⑤と同じ
- ⑨ 「観音寺山弥生集落調査概報」 1968 観音寺山遺跡調査団
- ⑩ 「和泉市信太山(鶴山台)惣の池遺跡発掘調査概報」 1970 和泉市教育委員会
- ① 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 1969 大阪府教育委員会「 同 」 1974 同

「七ノ坪遺跡試掘調査報告」 1974 大阪府立泉大津高等学校地歴部 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 1974 泉大津市教育委員会

② 「大園遺跡発掘調査概要 I 」 1974 大阪府教育委員会

「同 II」1975 同

「大園遺跡発掘調査概報 I 」 1975 大園遺跡調査会

- ⑬ 「上町遺跡発掘調査概要」 1975 和泉市教育委員会
- ⑩ 灰掛 薫氏よりご教示
- ⑤ 要池遺跡発掘調査概要 I 1974 大阪府教育委員会

第 4 章 既 往 調 査 概 略 (図版2・3)

泉大津市の中央部を東西に走る府道泉大津中央線の道路工事の時に豊中地区に於いて土器片の 出土が見られ、遺跡の存在が予想された。その後、昭和40年に第2阪和国道に伴う区画整理事業 の施行が泉大津市によって計画された。それが実施される同地区内の古池で須恵器の散布が見ら れたため、昭和47年~48年にかけて大阪府教育委員会によって、池の発掘調査が行なわれ、住居 址・倉庫址・河川等が発見された。又、昭和48年に行なった第2阪和国道敷地予定地内でも住居 址が発見された。こうして豊中遺跡の存在が明らかになったため、本調査会では昭和48年10月~ 12月にわたって、区画整理地区の街路予定部分に於いて、31箇所にトレンチを掘って範囲確認の 為の調査を行なった。その結果、全てのトレンチで耕土・床土の下の黄灰色土中に、土師器・須 恵器等の遺物を包含することがわかった。中でもとりわけ、ル625・ル629・ル630からは多数の遺物 が出土し、瓦器片も含まれていた。又紙25・紙31にはピットが見られ、紙30からは井戸枠である 曲物が検出された。以上の結果から、昭和49年3月5日より同月31日までの間に、18号道路の部 分で、巾6m、長さ40mの範囲を発掘調査した。この調査では、ピット・溝・竪穴住居址・土器 群が発見された。ピットは、相互に関連性を持っているかどうか不明であった。溝は東側で縁巾 1 m、溝底巾70cm、西側で縁巾50cm、溝底巾20cm、深さ13cmを測るものであり、竪穴住居址はこ の溝を埋めて造られたもので、4m×4mの大きさの規模であろう。この住居址には、炉跡が2 箇所に発見された。後世に上面を削平されているため、完全な形で検出することは出来なかっ た。溝と竪穴住居からは、庄内式の土器が出土している。このことから、この溝は長い期間存在 していなかったものと思われる。土器としては、土師器(細かい叩き目で器壁の薄い、黒褐色の 尖底土器。荒い叩き目で乳褐色の平底で弥生第V様式の系統を引くもの。)土製支脚、須恵器、 瓦器等が出土した。以上からして、弥生時代から古墳時代へと移行する時期に始まった集落であ ることがわかり、弥生時代のまとまって集落が営なまれていた段階から、その周辺部へと広がっ てゆく過程を知る上で貴重な遺跡であることが判明した。

注 石神 怡氏よりご教示

街路部分では昭和49年11月2日より昭和50年2月6日までの間、前年度に行なった18号道路の残り部分及び23号道路を、又、昭和50年4月5日より5月16日まで25号道路を発掘調査した。すなわちTOB・B地区、TOC・B地区及びTOC・C地区である。又、上池部分では昭和49年10月24日より11月28日までを第一次、昭和50年2月10日より3月31日までを第2次調査として行なった。

1. 街 路 部 分

TOC·B地区 道路第18号

道路第18号で前年度の続きの部分。巾6m、長さ53m。

上面 (図版 6 · 7 · 57)

床土約10mを除去すると暗茶褐色土、黄灰色土、灰褐色砂礫等がそれぞれほぼ同一面に見られ、 $BH\sim BM$ は暗褐色砂質土に灰褐色土のピットが多数検出され、井戸も2個発見した(1号井戸・2号井戸)。 $BN\sim B$ P までは、褐色砂利に小礫混り灰褐色土の入った不整形な大ピット(深さ約5 cm ~ 10 cm)があるのみだった。 $BR\sim B$ Y までは黄灰色土に灰褐色土の入ったピットが多数検出された。以上の各々ピット間に於ける相互関連性は不明である。 $BP\sim BA$ にかけて、灰色土の入った比較的浅い溝が検出され瓦が含まれていた。

下面 (図版9・10・57)

上面を約20cm位掘り下げると、灰褐色か、あるいは灰黄色の砂質土でこの層は無遺物層であった。BR、BU~BV、BX~BYの付近にかけて、褐色砂利層が見られた。暗灰褐色土の入ったピットが、砂利の面を除いた部分で検出されたが、やはり相互の関連性はつかめえなかった。上面の灰色土の入った比較的浅い溝は、BR付近の砂利層を切って作られたもので、灰色土の下には褐色の砂利層が見られた。

TOC · C地区 道路等18号 (図版7)

 $TOC \cdot B$ 地区の続きで、府道泉大津中央線までの約2 mの間である。上面には遺構は検出されなかったが、下面ではピットが7 個検出された。

TOC · B地区 (道路第23号)

道路第23号(長さ185m・巾6m)のほぼ半分の長さの西側部分である。

上面 (図版8・9・59)

床土 (約10cm) を除去すると灰褐色土があらわれ、BG $-O\cdot1$ 、BH $-O\cdot1$ には小礫群が見られた。これは半径約4 mの範囲内に、高さ最頂部約15cmの山状に積まれたもので、瓦、土師器、瓦製摺鉢等破片も含まれていた。中世以降のある時期に積まれたものと思われる。多分、田畑に落ちていたもので、寄せ集めてまとめて捨てられたものであろう。その西側部分には井戸(7号井戸)が検出された。BH $\cdot1$ には直径75cm、深さ25cmのピットがあり、大甕の破片が入っていた。17ラインより西側へ約170cmの所から地形は一段低くなる。BH-4に井戸(3号井戸)が検出された。そこから巾約1 m50、長さ約19m、深さ約25 \sim 30cmの溝が井戸に付属しており、その先端部は直径約4 m、深さ55cmの大きさの水溜状の大ピットとなっていた。BH $-14\cdot1$ 5には6号井戸が一部検出され、その東側にも溝が発見された。他にBF-18には4号井戸、BF-24には5号井戸が一部発見された。ピットは、14ライン \sim 18ラインの間にややまとまって検出された他は、あまり存在せず、ここでもやはりピット間相互における関連はつかめえなかった。この面でのピットには灰色土がつまっていた。

下面 (図版11・12・59)

15ラインより西側を更に約10cm掘り下げると、灰褐色もしくは灰黄色の砂質土があらわれた。 15ラインから21ラインまでの間と、25ラインから37ラインまでの間に多くのピットが見られた。 更に26ラインから28ラインの間に巾約4m、深さ南側で約45cm、北側で約17cmの規模の溝があ り、土師器片が多数含まれており、特に南壁際で西側部分では炭が多く検出された。この溝の方 向は現在の条里制の残されている水田の方向と同一である。

TOB · B地区(道路第23号)

道路第23号の東側半分である。

上面 (図版7・58)

床土 (約10cm) を除去すると、94ラインより東側 (76ラインまで) は、黄灰色砂質土が、そして西側は、灰褐色砂質土があらわれた。遺構としては、94ラインから 0 ラインまでの間に灰色土の入ったピットが検出された。その中でピット 1 は井戸 (8 号井戸)で、ピット 5 には柱根(図版62)が残されていた。大ピット 6 は深さ約20cmで不整形をしており、BH-96のポイント付近で、直径約 4 mの大きさで更に約10cm低くなっている。灰褐色粘質土が入っていた。又86ラインから91ラインにもピットが集まっており、大ピット20からは、土師器製塩土器の破片が河原石と共に多数出土した。この大ピット20は中世に掘られたもので、その中へ河原石と一緒に製塩土器が捨てられたものと思われる。

下面 (図版10・11・58)

76ラインから86ラインの間で、南側にトレンチを掘った所、 $1 \text{ m} \sim 1 \text{ m} 30$ の深さで庄内式土器の破片が多数出土した。その付近を全体に掘り下げた結果、ほぼ南北に走る河川の左岸であることが判明した。(後述・旧河川)

BH-90のトレンチ内で土師器が炭の上にのった状態で発見されたので、86ラインから96ラインまでの間の黄灰色砂質土を掘り下げた。その結果、住居址が2個重なりあった状態で検出された。(1号住居址・2号住居址)

TOC · C地区 道路第25号

上面 (図版13・60)

耕土・床土 (約10cm) を除去すると、灰褐色土の面に十数個のピットを検出した。多くのものは深さ約10cmで瓦器椀、土師質小皿、羽釜、瓦等が出土した。C-16は直径約 130cm、深さ90cmを測り、瓦器椀等出土した。

下面 (図版13・14・60)

上面を20cm前後掘り下げると、黄灰色土(東側)あるいは黄灰色粘質土(西側)となり、溝状 遺構 3、曲物井戸 1 (9号井戸)、五十余個のピットを検出した。瓦器、羽釜等の他、古銭や鉄 製鍋を被った骨壺の出土もみた。

溝一1 (14ライン) 幅170~200cm、底幅 70~110cm、深さ50cmを測り、暗黄灰色粘質土 (下層)、黄灰色砂質土 (上層) の堆積をみ、瓦器、土師質小皿等が出土した。

溝一2 (24ライン) 幅250cm、底幅100~150cm、深さ50cmを測り、暗灰黄色粘質土 (下層)、暗灰褐色土 (上層)の堆積をみ、瓦器椀、土師質小皿等が出土した。

溝一3 (33ライン) 幅120~160cm、底幅50~70cm、深さ15cm~30cmを測り、暗灰黄色砂利(下層)、暗黄灰色粘質土(中層)、暗灰褐色土(上層)の堆積をみ、瓦器椀、須恵器、土師器等の出土をみた。

C-21 薄く灰の堆積した幅50cm、深さ8cmの楕円形ピットを切り込んだ、直径60cm、深さ35cmの円形ピットで、鉄製鍋ですっぽりと覆われた中世壺が収まっていた。鉄製鍋(228)は口径約40cm、高さ20cmである。壺(229)は口径24cm、高さ33cmで土師質の様であり、外面に綾杉状の叩き目を施し、内面は下方を細かい、上方は荒い刷毛目である。内から黒塗りの漆器が塗膜だけの状態となり、数枚重なってみられた。又、このピットより東30cm附近より土師質小皿が二十余枚重なった状態でみられた。又、C-24は直径15cm、深さ8cmのピットで、底より皇宋通宝、元豊通宝を始めとする古銭五枚が、わらを通した状態で出土した。

次に、黄灰色(粘質)土の面を10~20cm位掘り下げると、土師器のみを包含する層へと変わる。灰黄色粘質土、暗黄灰色粘質土で、漸次砂質土へと変化し、40~60cm余で灰色砂、砂利へと

なる。尚、CU26~CU32にかけて、暗黄灰色粘質土の下層に暗灰黄色粘質土がみられ、比較的多くの土師器を包含していた。又、CU18附近で、暗灰褐色砂質土より多量の土器が折り重なった状態でみられたので拡張した。最後に調査地域西、34附近で南北方向にトレンチを設定した。灰色粗砂層からは、小型丸底壺、鉢を始めとする七ノ坪遺跡と関連する様な資料を得た。

以下個々の遺構について詳しく述べる。

井 戸

遺跡の大部分は砂礫層の上に立地するため井戸は比較的浅く掘られているが、3号井戸と6号井戸は深さ約3mもあり、特異な存在となっている。

。 1 号井戸 (TOC · B地区、図版18 · 64)

直径3 m50、深さ1 mの掘り方であり、底部に、直径50cm、深さ30cmの円形掘りこみがある。 井戸枠は不明であるが、下部の方に曲物が入れられてあったと思われる。出土遺物として瓦器 碗、木片、下駄等がある。

。 2 号井戸 (TOC · B地区、図版19 · 64)

1号井戸より西へ約1m寄った位置である。円形の井戸で、直径45cm、深さ60cm。底部に、直径40cm、高さ20cmの曲物の井戸枠1箇が存在、底部は敷石らしき石が一面に並べられていた。その上は、灰色の砂が堆積しており瓦器片や曲物片が入っている。更にその上は礫が堆積しており、完形の瓦器碗2個が上向きの状態で置かれていた。遺物として瓦器碗2、桶(一部底板欠損)。3号井戸(TOC・B地区、図版16・65)

上部瓦積み、中部石組み、下部陶質の井戸枠で構成されている井戸である。瓦積み部分は、上部径60cm、下部径80cm、高さ約45cmで持送りのドーム状をなしている。瓦は平瓦・丸瓦が使用され、最上段には、軒丸瓦及び軒平瓦が、最下段には軒平瓦が多く積まれている。地表より約20cm程高く、黄灰色粘質土で覆われており、上部外周径1m60、下部外周径約1m75である。中部の石組みは高さ約1m30、直径上段で約80cm、下段で約55cmと円形に、河原石を組んだものである。下部の陶製の井戸枠は、大甕の底部を穿ったものを使用し二段に積まれている。直径53cm、高さ52cmのやや胴ぶくれをしている。底は小礫を一面に敷いてあった。

この井戸は、瓦積み部分と石組み部分の境目が水平になっていない。井戸掘削時、瓦と石を同時に積んだのではなく、上部が石組みの状態で使用した後、更に瓦を積んで使用したと思われる。内部は粘質土で埋まっており、出土遺物としては、瓦器片、朱塗り椀等であったが、上部には、30数個の人頭大の石や瓦片が土と一緒に入っており、人為的に埋められたものと思われる。又、瓦積み部の一部分は瓦が全く存在せず、井戸内へ落とされたのであろう。井戸枠に使用され

た瓦は、平安時代後期~室町時代のものである。

この井戸の西側には、深さ10cmの落ち込みがあり、その中に人頭大の石が10数個置かれていた。この石は、井戸使用時に踏み石として使われた可能性がある。この部分より西側へ溝が伸びており、その規模は長さ13m、巾1 m40、深さ12cmで底は、巾40cm、深さ10cmと一段低い小さな溝が走っている。その先には、直径約4 m、深さ約55cmの大ピットが存在する。これは井戸の排水をこの部分で溜めるために掘られたものであろう。

。 4 号井戸 (TOC · B地区、図版19、66)

掘り方は直径50cm、深さ85cmである。底に、底部を穿った土釜を1個井戸枠として置かれている。その規模は、口縁部径30cm、腹部径39cm、底部径21cm、高さ22cmである。この土釜の上には、直径36cm、高さ8cmの曲物の井戸枠が一段現存する。

出土遺物として、完形の瓦器碗9枚が無造作に入れられていたのをはじめ、灯明皿4、瓦器片 や土釜片も多数埋もれていた。

。 5 号井戸 (TOC · B地区、図版17 · 67)

調査範囲外に掘り方の半分がかかる為、全形は不明であるが、推定で長径約1 m65、短径約70 cmの楕円形を呈する。深さは1 m75。井戸は掘り方の中心より東側寄りに造られている。井戸枠の曲物は7段が遺存しているが、実際はもう少し段数があったであろう。その規模は最上段で、直径41cm、高さ9 cm、以下38cm・10cm、34cm・25cm、34cm・17cm、33cm・18cm、31cm・30cm、28 cm・16cmで最下段の下には、比較的大きな石が敷かれている。

出土遺物としては、完形の瓦器碗7枚(このうち4枚は重ねられていた)土師灯明皿5枚、曲物底板(一部)がある。

。 6号井戸 (TOC · B地区、図版17 · 68)

石組みと曲物の井戸枠の組み合わせである。直径80cm、深さ2m50の規模で円形に河原石が積まれており、底はすぼまっている。この底部より更に下に、直径41cm、高さ20cm程の曲物の井戸枠が入れられてあった。この井戸の廃絶時には、土と一緒に人頭大の石が30数個、上部に埋められていた。

出土遺物として瓦器片があった。

。 7 号井戸 (TOC · B地区、図版18 · 68)

礫が多く混ざった褐色砂層に東西90cm、南北65cmの卵形の掘り方をなし西側に井戸枠が置かれている。土釜の底部を穿ったものが3段積み重ねられており、深さは約55cmである。中段の土釜は瓦器質であり、上下段は土師質であった。

出土遺物はなかったが、掘り方内には土釜片が散在していた。

。 8号并戸 (TOB · B地区、図版19 · 69)

掘り方は円形を呈し、直径1 m95、深さ30cm~50cm、底径1 m55の大きさのものに更に、直径75cm、深さ70cmの規模で深く掘られ、ここに井戸が造られてある。井戸枠は曲物で2 段に積まれ、上段と下段の接合部に、直径50cm、高さ8 cmの曲物がはめられている。上段の曲物は、直径47cm、高さ現存高約30cm、下段は直径44cm、高さ現存高約20cmである。上段の井戸枠の外周部には、礫がつめられていた。井戸枠は旧地表面まで積まれていたかどうかは不明である。大規模な掘り方は、土師器片、瓦器片の混ざった土で埋められている。

。 9 号井戸 (TOC · C地区、図版19 · 69)

円形の井戸である。掘り方は、直径 1 m50、深さ 1 m、底径 40cmである。曲物の井戸枠で 4 段が現存するが、痕跡からして 6 段積まれていたものと思われる。その大きさは、上段より直径 48 cm・高さ27cm (推定)、42cm・16cm (推定)、44cm・20cm、39cm・13cm、38cm・22cm、35cm・20 cm (推定)である。

この井戸は48年度調査の時に、トレンチ M25の南壁面に掘り方があらわれたものである。 この井戸よりの出土遺物はなかった。

住居址 (図版15・61)

今回の調査に於いて竪穴住居址が2軒重なり合った状態で検出された。いずれも大半が調査範囲をこえるため、全体の形を知る事は出来なかった。

• 1号住居址(TOB • B地区)

隅丸方形の竪穴住居である。南辺5 m50、西辺6 mの規模である。北辺と東辺は不明であるが 比較的大きな住居址である。後世大巾に削られているようであるため、その正確な規模は測りえ なかったが、床面から現存する壁の立上りは、南辺で10cm、西辺で8~10cm 位を 測る、壁際に は、巾約20cm、深さ約5 cmの周溝がめぐっている。そして、南辺の壁際には大形の方形ピットが 掘られており、規模は東辺60cm、北辺70cm、西辺90cmで深さ約30cmである。

柱穴は3箇所で検出され、東南隅は、直径40cm、深さ18cm、南西隅は、70cm×40cmの楕円形で底部は2個のピットで深さ33cmと21cm、北西隅は、直径40cm、深さ35cmのもので、壁際より約1m内側に存在する。

床面はフラットである。南西隅の柱穴と北西隅の柱穴を結ぶ線で、5 cm程の比高差をもって、 外側に高い段を有しているが、南西隅の柱穴に近づくに従って、段差はなくなっている。これは ベッド状遺構として考えてよいだろう。

炉跡は、住居のほぼ中心にあって、直径約70cm、深さ約17cmの規模である。底部の土は焼けて

おり、炭及び灰が残存し、その上に土師器が割れた状態で乗っていた。この住居址の時期は庄内 式土器平行期である。

。 2号住居址 (TOB · B地区)

北側は1号住居址によって、又南側は大きな円形ピット (時期は不明であるが、埋め土から考えて、ごく新しい時期のものと思われる。)によって切られているため、正確な規模は不明である。

現存値では、南辺4m、西辺2m30で隅丸方形の竪穴住居である。現存する床面からの壁の立ち上りは、南辺で4cm、西辺で2cm~5cmを測る。床面は、1号住居址よりわずかに高い。柱穴は、1筒所で検出されており、その規模は、直径45cm、深さ40cm位である。

この住居址の時期は、庄内式土器平行期であり、1号住居址より、古いものである。

旧河川 (図版17・61)

 $TOB \cdot B$ 地区の81ラインより東側で旧河川の流路が検出された。その流れの方向は、ほぼ南北方向に走り、南から北へ流れていたことは確かである。川巾は6 m40、川底巾は4 m50、深さ60cmで、左岸川底には、土師器片百数十個体分がびっしりと捨てられた状態で発見されたのをはじめ、自然木や炭も混じっていた。

この河川の右岸は、灰黒色粘土を切って肩となし、灰黒色粘土の東側は砂利層が続いている。 この砂利層は大きく続き巾 100m以上はあるものと思われる。この大きな河川を切って、庄内式 土器平行期に今回発見された河川が、できたのである。

左岸で発見された土師器は、その埋没状態からして、一時に大量に、しかも完形品で捨てられていたことがわかった。

その後、粘土や礫が堆積し、地表面も約25cm高くなった時期、すなわち古墳時代には、川巾4m、川底巾1m60、深さ50cmの規模になっている。この時期の川底に堆積する灰色細礫層には、須恵器片が発見されている。

2. 上 池 部 分 (図版20・21・70・71・72)

上池の中央部を作業用道路で二分して、ヘドロを一方側に移し調査終了後、残りの部分のヘドロを移しかえて上池全域の発掘調査を実施した。その結果、旧河川の跡が発見され、この付近の旧地形が一部新たに確認できた。

河川

池の東側から巾18m、川底巾 8.5m、深さ75cmの規模の河川が、北に向かって20mほど流れ、そこから北北西の方向へ向きを変え、池の中央部では、巾8m、川底巾5m50、深さ1m62の規模となり、さらに北西へと流れの向きを変えている。そしてそのまま池の西側へと伸び、端では、巾11m、川底巾6m、深さ1m402一段と深さをましている。

この河川は、灰色砂利層を肩とし、内側は、黒色腐植混り粘土層、砂利層、粗・精砂層等が、 交互に堆積していた。そして下層は、青灰色砂層が底部をなしており、土師器のみを出土する。

中層は、土師器・須恵器を多数含み、中には古式須恵器も見られた。完形品も多く検出され、単に捨てられたと考えるには、あまりにも多い。このほか池の東部K-29、青灰色砂層下部より、縄文式土器(中期後半・図版107)が出土し、この河川の上流部付近に縄文時代の遺跡が存在することと想定される。他に、M-1暗灰色砂利層より和銅開珎1枚が発見された。東南方向には、和泉国府跡があり、その国府をとりまく集落が、この付近一帯にまでおよんでいたことは想像







されうることである。当時貨幣経済はそれほど発達していなかったにせよ、和泉地方に於いて和 銅開珎が何らかの形で使用されていたことを実証する。

河川の右側には杭列が、流路に沿って、東から西の方向へ45mの間、2列ないしは4列に打たれていた(図版72)。何時の時代に打たれたかは不明であるが、河川がある程度埋もれ川底が浅くなった時点で打たれている。

池内の上層から下層まで多数の土師器や須恵器が出土していたが瓦器は発見されなかった。このことは河川が存在していた時期を決める一つの手がかりとなる。出土遺物から判断して古墳時代から奈良時代までは河川として役割を果たしていたが、平安時代初期には遅くても消滅しており、池が造られたのはその後のことであろう。

3. 遺 構 ま と め

豊中遺跡は、南北約1000m、東西約800mの広範囲に土器が散布する古墳時代~中世までの複合遺跡であると言える。古墳時代に焦点をあててみると、建築物遺構は、これまでの調査で散在して発見されている。この時期の集落は、弥生時代の池上・曽根遺跡に見られるような、密集し

たものではなくて、わずかの数の住居が1グループとなって、広くまばらに存在し、一つの大きな集落を形成していたようである。この1グループは血縁関係で結ばれ、それぞれが集まって地縁関係を持っていたと考えられる。

今回の調査で発見された遺構で目立ったものと言えば、竪穴住居址と井戸、及び自然河川である。このうち竪穴住居址は2軒分検出され、いずれも隅丸方形を呈している。この住居址は、互いに重なっており、2号住居の方が古く、1号住居はそれを切って造られていた。時期はどちらも庄内式土器平行期で、昭和48年度調査に於いて発見された隅丸方形の竪穴住居址と同時期である。前回の住居址及び今回の1号住居址には、壁際に方形の大形ピットが付属しており、貯蔵穴と思われるものである。1号住居址の底面には、わずかな高さ(比高差、最高5cm)ではあるが、一段高くなったベッド状遺構と思える施設がある。この住居の規模は、一辺約6mと比較的大きい。このような特殊な施設を持つ住居の主人は、集落の中でも重要な位置にあったのであろうか。それともベット状遺構は当時に於いては普遍的な施設であったのか、集落全体の把握と共に追求されるべきものである。ベッド状遺構に関しては、九州から関東にかけて分布しているが、その発見例は限られており、今後の資料が待たれるものである。

住居址の東側を北に向かって流れる河川は、集落の範囲を限定する位置にあるものと思われる。今のところ、この河川より東側に於いては住居址は発見されていない。又この河川の左岸で大量の土師器が出土したことからも、住居群は河川の西側にあったものと推測される。その大量の土師器の中には、完形品やそれに近いものが多数あり、破損したために捨てたものとは考えがたい。何かの意味を持って捨てられた可能性がある。いずれにしてもその数量より相当数の人間が住んでいたのであろう。これらの土師器は、住居址内より出土したものと比べると若干新しいようであるが、そう大差はない。

大ピット20からは、製塩土器が発見されたが、製塩に伴う遺構は検出されなかった。製塩作業がこの場に於いてなされたのか、それとも保管場所であったのかは多くの資料の検討を要する。中世の時期の井戸が計9個発見された。その形態は様々であったが、大半は浅い井戸である。(2個は深さ3mを越すものであった。)

類形別に分けると次のようになる。

- 1. 素掘りの井戸 1号井戸 (廃絶時に井戸枠を抜き去ったか。)
- 2. 一種類の井戸枠を積み上げたもの。
 - a. 曲物 2号•5号•8号•9号井戸

- b. 土釜 7号井戸
- 3. 異なった井戸枠を組み合わせたもの。
 - a. 瓦積み+石積み+陶製甕

3号井戸(瓦積みは後世に積まれたものか。)

b. 石積み+曲物

6号井戸

c. 曲物+土釜

4号井戸

以上の井戸の所有者は、3号井戸・6号井戸を除いては、当時の庶民が使用していたと考えられる。しかし、それは個人所有であったのか共同使用であったのか、住居址がはっきりと把握できなかった為不明である。3号井戸・6号井戸に関しても同様である。当時の井戸は、屋根の施設を備えていたのか、それとも露天であったのか握めえなかった。大半の井戸が示すように、比較的浅い井戸ということは、それだけ地下水位が高かったことを物語っている。しかし、3号井戸・6号井戸は深く掘られていた。これはどういうことであろうか。想像ではあるが、日照りが続いたため地下水位が下がり、浅い井戸は渇れたのではなかろうか。3号井戸に付属している水溜状の大ピットは、井戸の排水をここで更に溜めて再利用するためのものであろう。和泉地方に多く見られる灌漑用溜池は、こうした日照りが度々起こったため築かれたものである。

調査地の付近には、「大福寺」の字名の他に「小寺」があったりして仏教関係の建物が存在したことを想像させる。中世の骨壺が発見されたのは、この「小寺」にあたる場所である。寺院関係の記録は何も残されていない。

上池で発見された旧河川を、明治48年の陸軍測量の地形図(図版1)で、その流路を探してみる。まず谷部分をたどって上流の方へ行くと、府中村のすぐ北側を流れることになる。又反対に下ると、下条大津村へと到達し大阪湾にそそぎ込む。旧河川はこのコースを流れていたのではなかろうか、現在の新川が旧河川の下流であったと思われる。大津川の河口付近に「高津町」がある。これは「国府津」が訛ったのであろう。国府津すなわち国府の港である。 3 が沸の港と昔は呼ばれ、泉大津の名の起こりとされている。上池内の旧河川の右岸で発見された杭列は、護岸用をかねた港への近道であったかもしれない。

さてこの河川の廃絶期であるが、記録が残されていないので、不明であるが、奈良時代には埋 もれたようである。その頃に、河川としての役割があまり果たせなくなり、この水路を利用して 古池が築かれた。上池、古池と現在は二つに分かれているが、元々は古池一つで、池の中央には 弁財天が祀られていた。明治以後にこの池は二分されて上池ができたのである。

「イズミ」という地名が発祥したとはいえ、この地域は水資源が乏ぼしかったようである。平安時代には、灌漑用水施設の築造や修理が行なわれたが、それにもかかわらず、日照りによる旱魃や豪雨長雨による洪水で、農民の苦労は相当なものであっただろう。天長三年(826年)に和泉国の農民は、農業用池を築くことを要求し、国司はその要望に答えて五つの池を築いている。これらの池はどの池であるかは不明である。しかし、古池が築かれたのもそのような要望のもとにであろう。

上池に於いて、我国最古型式に属する須恵器が出土した。豊中遺跡の背後にあたる大阪南部の 丘陵地帯には、阪南窯址群と呼ばれる1000基を越す須恵器の窯跡群が存在していた。5世紀頃、 朝鮮半島より伝えられたと言われる須恵器生産の技術が、日本で最初に根をおろしたのが、この 丘陵地帯であることは、疑いない。現在知られている最も古い型式の須恵器を焼いた窯跡も調査 され、その整理が進められている。又最近では、この上池以外の集落跡からも、同時期の須恵器 の甕・壺・坏・器台等が発見され、初期須恵器生産者集団と地方豪族との関係、あるいは、須恵 器生産者と従来の土師器製作者とのかかわりあい等を解明する上で貴重な資料となっている。

注 和泉市史 第一巻 1965 和泉市史編纂委員会

第6章 遺物

1. 豊中遺跡(街路部分)出土遺物

豊中遺跡の発掘調査で出土し採集された遺物数量は、おおよそビニール袋で800 坏である。種類としては、弥生式土器・土師器・須恵器・瓦質土器・瓦器・瓦・土製品・木製品・柱・古銭・桃種等があり、時代的には弥生時代末~古墳時代前期及び平安時代~室町時代に所属するものが多数を占める。ここではそれらの内主たる遺物を紹介するにととめる。

I 弥生時代末~古墳時代前期の遺物

「河川」状遺構

西岸から投棄された大量の土器群は、甕・壺・鉢・高坏・坩・小型器台・坏・手焙形土器・製塩土器等により構成される。以下順を追って概観する。

- **甕** (1)~(6) 畿内第 √様式甕の伝統をほぼ受け継ぐ甕である。くの字形に屈曲外反する口縁部と縦長の胴部それに平底を持つ。その製作には分割成形及び叩き調整が用いられる。内面箆削りが用いられることはほとんどない。口縁端部にキザミを施こされるものが多いのは特徴的である。砂粒を含む胎土の焼成は不良で軟質のものが多い。主に黄色味の強い色調を呈する。
- **甕** (7)~(43) 通例庄内式甕と称され、すべて河内地方からの搬入品である。くの字形に大きく屈曲外反する口縁部と肩の張る球形尖底の胴部を持つ。その製作には分割成形・叩き調整・刷毛調整・内面箆削りが用いられる。口縁端部を上方へつまみ上げるのを主とするが、方形及び丸くおさまるものも多い。器壁は3 mmと極めて薄い。雲母粒を含む胎土の焼成は 比較的良好。茶褐色を呈するものの他に灰色味の強い色調を持つものが加わる。数的には伝統的第 ▼ 様式甕に対しておそらく30~40%を占めると思われる。
- 臺 (44)~(51) 斜上方へ直線的あるいは途中で屈曲してのびる口頸部を大きな球形体部にのせる。すべて平底がつく。製作にあたっては分割成形・叩き調整・箆磨き調整が主として用いられる。(44)は体部外面に使用痕としての籠目がのこる。(50)(51)は口縁部外側に粘土帯を巻き付け巾広の端部をつくる。この上に竹管文を施こすもの(51)がある。
- 壺 (52)(53) 垂直気味の頸部と水平に屈曲更に斜上方にのびる口縁部を持つ。体部は不明。極めて装飾性が強い壺で、櫛描による波状文・直線文や竹管文・断面三角形の貼り付け凸帯・指突文・円形浮文等により装飾され、その施文パターンもほぼ限定される。口頸部内外面を

篦磨き調整し、比較的精製された胎土を使用する。各部のつくりもしっかりしている。黄色味の強い色調を呈し、焼成も良好である。

- **壺** (54) 球形平底の体部にくの字形に屈曲外反する口頸部をのせる。口縁端部が両方に拡張されるのが特徴。外面は箆磨き調整される。
- **壺** (55) 中央の張るそろばん玉状の体部を持つ。口縁部は欠損の為不明。小さな平底を 持つ。外面の細かい横方向箆磨き調整が特徴である。
- **壺** (56) 球形体部にくの字形に屈曲外反する口縁部を持つ。底部は欠損し不明。体部外面は叩き及び箆磨き調整。内面下半は箆削りされ、外面の煤と考え合わせて煮沸用として製作。
- **壺** (57) 肩の張る体部に短く垂直に立ち上がる口縁部を持つ。いわゆる短頸壺である。 口縁端部は明確に尖んがる。外面は箆磨き。
- **鉢** (60)~(66) 口径10cm内外、器高6cm内外の小型品で、外開きの体部と平底を持つ。 底部からやや内弯気味にのび、そのまま丸くおさまる。体部と口縁部の区別は全くないか、不明 確。外面に叩き目及び箆磨き痕を持つもの他がある。(62)は外面に縦方向の粘土紐痕が遺る。
- **鉢** (67)(68) 口径13~14cm、器高7cm強の鉢。内弯気味の開く体部と指でのばされた踏んばるあげ底を持つ。外面に叩き目を持つものと刷毛目のものがある。
- **鉢** (69) 口径11~12cm程度、器高 9~10cm程度、内弯気味に高くのびる深い体部とくの 字形に屈曲外反する口縁部を持つ。小型の甕を呈するが外面の煤はない。外面には叩き目。
- 高坏 (70)~(77) 第 V 様式の伝統を受け継ぐ高坏である。屈曲外反する口縁部の坏を高い柱状部と広がる裾部の脚台にのせる。口径20~22cm、器高16cm程度の法量が一般的である。坏と脚台は分割成形され接合する。いずれも内外面ともていねいな箆磨き調整を施こされるのが特徴である。砂粒を含み黄色味の強い色調を持つ。
- 高坏 (79) 半球形の坏部を大きく裾の広がる脚台にのせたもの。脚台に柱状部はない。 ていねいな箆磨き調整が施こされている。
- 高坏 (81)~(83) 半球形の坏部を大きく裾の広がる脚台にのせるが、脚台に極めて短い柱状部がつく。脚端径は坏部口径をはるかに越えるのが特徴。口径10~13cm、器高10~12cm程度。白黄色・白灰色を呈し、キメの細かい胎土だがサクイ感がする。箆磨き調整。
 - 高坏 (80) 坏部は不明だが、短い中実の柱状部と大きく広がる裾部の脚台。調整不明。
- 高坏 (88) 浅い底部から屈曲して立ち更に斜上方にのびる坏部を中空柱状部と半球形裾部の脚台にのせたもの。極めて装飾性に富み、坏部内外面を櫛描波状文・竹管文のある円形浮文により飾る。箆磨き調整。白灰色を呈し、キメの細かい胎土はサクイ感がある。
 - 高坏 (87) 脚台は不明だが、底部から屈曲、更に屈曲外反してのびる坏部を持つ。坏部

内外面に細かい 箆磨き暗文を施こすのが特徴。即ち外面には横方向、内面には三段の放射状に施 こされる坏と脚台は分割成形。橙色を呈し、細かい胎土の焼成は良。

高坏 (86) 坏部は欠損の為不明だが、直線的に裾広がる大きな脚台を持つ。外面にはかすかな叩き目がつき、縦方向の篦磨きがなされる。内面には粘土紐痕がみられ、刷毛調整。白赤色を呈し、砂粒を含む粗雑な胎土である。

坩 (94)~(96) 口径10cm程度、器高10cm程度の小型坩である。やや肩の張る球形体部に くの字形に屈曲外反する口縁部がつく。すべて小さな平底。外面にかすかな叩き目が遺るものも あるが、箆磨きにより仕上げられる。胎土のキメは細かい。

坩 (97) 口径9.1cm、器高7.0cm。半球形に近いやや扁平体部にわずかに屈曲して上方に立ち上がる口縁部を持つ。やや中窪みの平坦底がつく。外面は箆磨き調整が施こされ、砂粒を含み黄褐色を呈する胎土を持つ。

小型器台 (90)~(93) 浅い皿状受部に直線的に裾広がりとなる脚台を持つ。口径10cm 弱、器高9cm弱の法量を測る。受部と脚台は比較的はやい時点で接合。(93)の口縁端部は横ナデされる。受部外面は細かい横方向の篦磨き調整、内面は平滑。脚部外面も細かい篦磨き、内面は刷毛調整。(92)は受部上半がやや外反する。端部外面は刷毛調整、受部外面は縦方向の篦磨き調整。脚台外面には粗い叩き目の上に縦方向の篦磨きが施こされる。内面は刷毛調整。受部の端部がほぼ方形に閉じるものと、やや上方へ立ち上がるものの二者があるが、前者の方がやや古様を呈する。細砂を含む胎土で黄色味の強い色調。

坏 (59) 口径11cm程度、器高 3.5cm程度が復元される。全体は浅く口縁部はやや内弯気味。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。外面は細かい横方向の箆磨き調整が施こされる。 淡橙色を呈し、胎土は細かい。

手焙形土器 (58) 口径15cm、器高17cmを測る。屈曲して腰の張る体部と天井部を持つ。 天井部・体部上半・下半を接合成形。天井部と体部上半は巾1cm程度の粘土紐積み上げにより成 形。天井部外面は叩き・箆ナデ・箆削りにより調整。体部下半外面も叩き・箆削りにより調整。 底部は不明。砂粒を含む胎土は淡黄灰色。

住居址

住居址及びそれに伴なう柱穴状ピットからは、壺・甕・高坏・小型器台等の出土をみている。 更に製塩土器片が数個体出土しており、この住居址を個性付けている。いずれも細片で全体の確認出来る土器はない。

甕 細片だが粗い叩き目を有する平底甕片が多い。

壺 (100) 頸部片。体部より屈曲し垂直に立ち上がり、更に外方へ屈曲する口頸部。頸部器壁が 1.6cmと厚い。頸部外面下端に指突文が施こされる。白赤色を呈し砂粒の多い胎土。 (2号住居址)

高坏 (104) 坏部は欠損して不明だが短い中空柱状部と屈曲し水平に大きく開く裾部の 高坏脚台である。柱状部外面は面取りされ、裾部には5孔遺存するが、10孔以上穿たれたと推定 される。上・下二段に穿たれる。脚台高 2.4cm、脚端径16.6cmを測る。細砂を含む胎土、橙色を 呈する。(2号住居址内暗茶灰色砂質土)

小型器台 (101)~(103) 2~3 個体片。浅い皿状受部に裾広がりの脚台、端部は上方に わずかに尖んがるが、「河川」状遺構出土のものに比較して古様を呈する。 (101)の外面は箆磨 き。 (102)は端部外面を櫛状のものでナデ、受部外面は削りあるいは指圧、脚台外面は箆磨き調 整。白黄色を呈し砂粒を含む胎土。口径は10cm程度に復元。

製塩土器 (別記)

拡張部・南北トレンチ

豊中遺跡を東西に分断する中央線の北側に設定された拡張部・南北トレンチ出土の遺物を一括する。若干時間巾をもって堆積しているが、いずれも先述の「河川」状遺構出土のものより時期的に後続する。出土土器の器種構成は、甕・壺・鉢・高坏・小型丸底坩・小型平底坩・小型鉢・台付椀・製塩土器等がある。以下順を追って概観する。

要 (105)~(108) 第 ▼様式の甕を受け継ぐものである。くの字形に屈曲外反する口縁部を縦長胴部にとりつける。平底。胴部外面には粗い叩き目が施こされ、内面は平滑だが箆削りは施こされない。 (105)のように内面を粗い刷毛目をもって調整されるものも含まれる。粗砂を多く含む胎土の色調は黄色味を呈する。

要 (113)(114) 通例庄内式甕と称されるが、かなり退化した様相を呈する。細片だがくの字形に屈曲外反する口縁部は外弯してのびる。端部は丸くおさまる。外面は横ナデ、内面は刷毛調整。胴部は欠損して不明だが、平坦底部が伴出している。胴下端部外面は粗・細二種の刷毛調整。内面は箆削り。数的にこの種の甕は少なく、「河川」状遺構で大量出土したのとは対照的である。

甕 (109)~(112) 布留式の特徴を持つ甕である。破片だが球形胴部に斜上方に外反する口縁部、すべて丸底である。外面は刷毛調整、内面は篦削りが施こされる。叩き目を有するのは全くない。口縁部の立ち上がりは内弯気味で、端部は上方が内側へ突出あるいは肥厚する。砂粒を含む胎土で、白味の強い色調を呈する。焼成は良好で硬質。

壺 (115)~(118) 斜上方へのびる口頸部を大きな球形にのせる壺。小さな平底がとりつくとみられる。 (115)の体部外面は刷毛調整。成形は前代の壺とほぼ同様。口縁端部の多くは上端を横ナデされやや厚味を増して内側へ肥厚する。 (116)は内面を刷毛調整、外面を細かい横方向の箆磨き調整されるのが特徴。数的にも主体をなす。砂粒を含む胎土は黄色味の色調。

臺 (120) 垂直気味の頸部と屈曲し更に斜上方にのびる口頸部を持つ。体部は不明だがおそらく球形平底となる。全体に装飾性に富む壺で、口縁端部にキザミ、外面には退化した櫛描波状文及び4~6単位の竹管文、頸部外面には刷毛描波状文、縦篦磨き、頸部には三角形の指突文が施こされる。先行する同種壺と装飾パターン及び器形は同一だが、装飾は退化している。明灰黄色を呈し、焼成は良。

壺 (119) 楕円形体部に斜上方にのびる口頸部を持つ。口縁端部が内側へ肥厚する。体部外面は刷毛調整で、肩部に数本の箆描線刻が施こされる。内面は横方向の箆削り。丸底。明橙色を呈し、粗砂多い胎土。焼成は不良。

鉢 (128)(129) 口径12cm、器高 $7\sim8cm$ 程度の小型の鉢である。外開きの体部と平底もしくは踏んばるあげ底がつく。外面は箆磨きあるいは平滑に仕上げられる。砂粒を含む胎土。

高坏 (121) 屈曲外反してのびる坏部を持つ。脚台は不明。内外面は箆磨き調整。

高坏 (122)(125) 底部から直線的あるいは内弯気味にのびる坏部を中空の高い柱状部と 屈曲して開く裾部の脚台にのせたもの。坏部と脚台を分割成形し、接合する。外面は細かい横方 向の箆磨き調整や内面には装飾性の強い放射状暗文が施こされるのが特徴。脚台は外面を刷毛調 整し、その上を細い横箆磨きをもって調整。内面には粘土紐積み上げ痕が遺る。裾部内面は刷毛 調整。いずれも褐色味の強い色調を呈し、焼成良好で硬質。細かい胎土。

高坏 (126)(127) その他類例が少ない各種高坏がある。

小型丸底坩 (133)(135)(136) ほとんどが破片からの復元だが、扁平球形の小さな体部から屈曲して斜上方に長くのびる口縁部を持つ坩である。端部内側が薄くなり尖んがって閉じる。内外面とも細かい横方向の細かい篦磨きをもってていねいに調整される。 (136)のように内面を刷毛調整し、その上に放射状暗文としての篦磨きが施こされるものもある。 高坏(122)等と共通する製作技法である。各個の個性が強い。褐色味の強い色調を呈し、精製胎土の焼成は良好で硬質である。

小型丸底坩 (137) 扁平球形の体部に屈曲して斜上方にのびる口縁部を持つ。端部は欠損し不明確だが、前者と比較して少し短い口縁部と考えられる。肩の張る体部外面とりわけ下半は顕著な箆削りでもって調整される。加えて細かい横方向の箆磨き調整。内面は平滑。底部は円板をはめ込み成形する。極細金雲母粒を含み、焼成は良好で硬質。灰茶色を呈する。

小型平底坩 (134) 扁平気味体部に垂直にのびる口頸部を持つ。平坦底がつく。器形・ 調整・胎土とも小型丸底坩とは相異する。やや厚味ある口頸部は横ナデされ、頸部下端外面は凹 線状に窪む。外面の調整は不明。黄赤色を呈し粗砂含む胎土は軟質。

小型鉢 (130)~(132) 二段に屈曲して外方に開く口縁部と外開きの浅い丸底体部を特つ 小型鉢である。内外面とも細かい横方向の箆磨き調整されるものと刷毛調整されるものの二種が ある。前者は褐色味ある色調で精製胎土。硬質。後者は細砂を含み淡灰黄色を呈し、焼成は中。

台付椀 (139) 半球形椀部が裾開きの低い脚台につく。椀外面は刷毛調整、脚台上半部 外面には指圧痕。細砂を含む胎土で焼成は中、淡黄色を呈す。

坏 (138) 外開きの浅い坏、内面は刷毛調整。口縁部外面は横ナデ、底部は指圧か。灰 黄色を呈し砂粒の多い胎土の焼成は中。

製塩土器

今回出土の製塩土器を一括してことにとりあげた。19個体の出土があるが、1 個を除いてすべて脚台部のみにとどまる。

- (140) 体部は欠損し脚台のみ。脚高 7 cm、裾径 7.0cmを測る。高い中実気味柱状部よりゆる やかに広がる裾部。外面には叩き目、上端外周には粘土帯。白赤褐色を呈し細かい胎土。二次焼成は不明確。(pit 20)
- (141) 脚台のみ。脚高 6 cm以上を測る。裾部は欠損するが中実気味柱状部と広がる裾部を持つ。外面には叩き目、上端外周には粘土帯。外面叩き目は二次焼成でかなり剝落し上端面は灰赤褐色に変色。裾部は白黄色。砂粒の多い胎土。 (pit 20)
- (142) 脚台のみ。脚高 6 cm以上を測る。裾部は欠損するが中実気味柱状部と広がる裾部を持つ。外面には叩き目、上端外周には粘土帯、裾内面は箆削りされ、上方に稜。黄赤色を呈し砂粒多し。柱状部上端は二次焼成により明赤褐色に変色。 (pit 20)
- (143) 脚台のみ。脚高6.6cm、裾径7.0cmを測る。中実の高い柱状部と広がる裾部を持つ。外面には小さな面がつき、叩き目も施こされる。内面は箆あるいは指削り、端部は内側へ小さく突出する。柱状部上端面は二次焼成により白紫色に変色。柱状部は白灰黄色・橙色、砂粒含む胎土。
- (144) 脚台のみ。脚高5.5cm、裾径6.8cmを測る。中実気味柱状部と広がる裾部を持つ。外面には叩き目。柱状部上端は欠損か。裾部内面は箆削り、上方に稜。白赤褐色を呈し、砂粒を含む胎土。二次焼成は不明確。 (pit 20)
 - (145) 脚台のみ。脚高 5 cm以上。中実・中空の柱状部と広がる裾部を持つ。裾端は欠損。外

面は平滑、内面中央に稜。強い二次焼成により白赤色に変色。砂粒の多い胎土。 (pit 20)

- (146) 脚台のみ。脚高5.8cm、裾径7.2cmを測る。中実・中空の柱状部に広がる裾部を持つ。 外面は平滑、裾部には下方向からの箆押痕。内面上方には稜。柱状部上端は白赤色に変色。それ 以下は白褐色を呈し、砂粒を含む胎土。(1号住居址)
- (147) 脚台上半のみ。脚高 5 cm以上を測り、中空柱状部とおそらく広がる裾部を持つ。外面は平滑、内面に稜。強い二次焼成により黄赤色に変色。細砂粒の多い胎土。(2号住居址)
- (148) 脚台のみ。脚高5.6cm、裾径6.1cmを測る。直線的に広がる脚台。外面上半には叩き 目、内面は箆削り。脚台上端面は白赤色に変色。それ以下は白灰色。粗砂含む胎土。
- (149) 脚台のみ。脚高5.7cm、裾径6.0cmを測る。直線的に広がる脚台。外面に比較的細い叩き目。上端外周に体部下端が帯状にまかれる。内面下端に指圧痕。灰色を呈し砂粒を含む胎土。二次焼成は不明瞭。(南北トレンチ)
- (150) 脚台のみ。脚高5.0cm、裾径6.0cmを測る。直線的に広がる脚台。外面に細かい叩き目、内面に削り、上方に稜。上端部は白紫色に変色。黄褐色及び灰黄色を呈し砂粒を含む胎土。(BH-27 溝状落込み)
- (151) 脚台のみ。脚高4.4cm、裾径5.5cmを測る。直線的に広がる脚台。外面には叩き目、内面には削り。内面上方に稜。白赤色・赤褐色に変色。砂粒を多く含む。 (pit 6)
- (152) 脚台のみ。脚高4.4cm、裾径6.8cmを測る。裾広がりの上半部に更に広がる裾部を持つ。外面には叩き目、内面は平滑。灰黒色を呈し、二次焼成は不明確。砂粒多し。(床土)
- (153) 脚台上半のみ。脚高 5 cm以上。裾広がりの裾部は欠損。外面には叩き目、内面上半に 稜。砂粒含み、赤褐色を呈する。 (小礫群)
- (154) 体部下半と脚台。筒状体部と裾広がりの脚台。脚台高は2cm弱と低い。体部外面には叩き目、脚台外面には指ナデ。白橙色を呈し、二次焼成は不明確。砂粒を含む胎土(BH19・21 褐色砂層)
- (155) 体部下端と脚台。筒状体部と脚高2cmの裾広がりの脚台。外面には叩き目。内面には 指圧痕。白灰色を呈し、二次焼成は不明瞭。砂粒多し。(BG78・80 耕土・床土)
- (157) 体部下端と脚台。反釣鐘状の体部と大きく広がる脚台。脚台高は2cm。外面には指ナデ。体部下内面は明赤白色に変色。脚台は白黄色を呈し、砂粒含む胎土。(「河川」状遺構)
- (158) 脚台のみ。製塩土器か不確定。大きく広がる脚台高3.5cm、裾径7.9cmを測る。内外面とも平滑。明黄赤色を呈し、キメの細かい胎土。 (床土)
- (156) 体部のみ。上半及び脚台は欠損。尖底から直線的に斜上方にのび反釣鐘状に近い。外面には叩き目。脚台は剝落、白黄色を呈し粗砂粒を含む。体部下端面は白赤色及び灰黒色を呈す

る。(CU18 拡張部灰黄色砂質土)

Ⅱ 古墳時代~奈良時代の遺物

pit 17

須恵器坏蓋 (217) 口径14.8cm、器高 5.5cmを測る。天井部と口縁部はなだらかに移行するが深い体部。両面はほぼ横ナデ調整、肩部のみ箆削り。中窪みの大きなつまみがつく。口縁端部は外方へ屈曲し、内面には端面を持つ。外面は赤茶色、内面は白灰色を呈す。砂粒を含む胎土の焼成やや不良。

(218) 口径14.0cm、器高5.1cmを測る。深い体部、口縁部と天井部の稜はにぶく凹線がつく。中位以下両面は横ナデ、天井部外面は箆削り。内面は仕上げナデ。外面に箆描沈線3本。口縁端部内面には凹線がつく。暗灰色を呈し、細砂の多い胎土の焼成は良。

5号井戸上層

須恵器坏蓋 (219) 口径9.9cm、器高3.3cmを測る。平坦な天井部と直立する口縁部を持つ。端部は丸くおさまる、天井部外面の箆削りを除いて横ナデ。白砂を含む胎土の焼成は良。灰色を呈す。

(220) 口径12cm弱、器高4cm弱と思われる。天井部から口縁端部迄なだらかに移行する。中位以下両面は横ナデ、天井部外面は篦削り、内面は仕上げナデ、端部は丸くおさまる。×の篦描記号を持つ。砂粒を含む胎土の焼成は良。淡紫灰色を呈す。

pit 20

須恵器高坏 (222) 口径11.7㎝を測る長脚の高坏である。脚台は欠損。内傾する立ち上がり端部は方形に閉じる。全体はナデ調整。青灰色を呈し、白砂含む胎土の焼成は良。

須恵器坏 (221) 口径14cm程度、器高4cm強を測る坏で高台がとりつく。口縁部はやや外弯し、両面は横ナデ、外面下位のみ箆削り。低い高台は外方へ踏んばる。暗灰色を呈し、白砂を含む胎土の焼成は中。

Ⅲ 平安時代~室町時代の遺物

1号井戸

瓦器椀 (180) 口径15.5cm、器高 5.6cmを測る。比較的深い体部と断面台形のしっかり した貼り付け高台を持つ。口縁端部近くの器壁が厚いのが特徴。内外面とも粗い横方向の暗文が 施こされる。焼成は良好で硬質。

下駄 (246) 一木から作り出され、平面楕円形で、長さ19.5cm、巾9.1cm、厚さ2.4cmを 測る。鼻緒孔は前方に1個、後方に2個穿たれ、孔の周辺には磨滅痕が認められる。台板表面に は右足痕が観察出来る。またかかと痕上方には不明の切り込みが存在する。尚両歯ともほぼ垂直 につくり出されるが、後歯の方が磨滅著しい。

2号井戸

瓦器椀 (181) 口径15.5cm、器高 5.2cm程度を測る。比較的深い体部と断面方形の貼り付け高台を持つ。口縁部内面に1本の沈線、外面には凹線状の深みがみられる。全体にかなりゆがむ。外面は粗く削られ、その上にやや乱雑な暗文、内面は平滑で横方向の暗文が施こされる。 焼成は良好で硬質。

曲物 極細片

板状木製品 (247) 全長37.4cm、巾10.9cm、厚さ1cmを測る。一見曲物底板の一部分を 思わせるが、側辺はすべて加工される。また両端部には若干の突起をつくり出しており、その付 近には押え痕もみられる。ところが側面には二つの目釘穴が存在している事実から、曲物底板の 再利用の可能性も考えられる。尚材質はスギと推定される。

3号井戸

瓦器 極細片にとどまる。

木製椀 (242) 底部径8.1cm、現在高3.8cmを測る。全面に黒うるしを塗り、更に高台内面以外に朱うるしを塗る。

軒丸瓦 (251) 直径13.2cm、厚味 2.2cmを測る三巴文軒丸瓦である。その周囲に円圏及び17個よりなる連珠文を施こす。巴文の頭は丸く、尾長である。全体にしっかりしたつくりで、白灰色を呈し、砂粒を含むが焼成は良好硬質である。

軒丸瓦 (250) 直径15.0cm、厚味 2.6cmを測る複弁 8 葉蓮華文軒丸瓦である。肉厚のない中房に1+6個の蓮子を配する。その周囲には花蕋をめぐらす。また蓮華文の周囲には1本圏線をつける。

軒平瓦 (255) 弦部巾約20.9cm、厚味 4.0cmを測る宝珠唐草文軒平瓦である。中央に宝珠が位置し、その左右にしっかりした均整唐草文を配し、圏線はない。白灰色を呈し、砂粒を含むが焼成は中。下面には炭素付着。

鬼瓦 (256) 復元巾約23cm、遺存高約19cm、最大厚 6.9cmを測る。遺存状況は不良で、

鼻・歯部分が主として遺存する。目は剝落する。砂粒を含む胎土の焼成は不良。軟質

4号井戸

瓦器椀 (182)~(187) 6 個と細片が加わる。口径13.6~15.0㎝、器高3~4㎝の法量を 測る。いずれも比較的浅い体部と極めて退化した貼り付け高台を持つ。体部外面下半は粗く削られ、口縁部下には稜あるいは凹線状の窪みがつく。内面には横方向の粗くまばらな暗文、あるいは連続輪状の暗文が施こされる。高台の断面は三角形・台形・方形・半円形等と多様である。多くは焼成不良で軟質。器壁表面が剝落気味で、炭素付着も部分的にとどまる。

土師小皿 (188)(189) 口径7.7㎝、器高1.4㎝及び口径8.1㎝、器高1.7㎝の2個がある。いずれも浅い小皿で、内面は平滑。底部中央は内方へ窪む。焼成は不良で軟質。

曲物 極細片

羽釜 (159)~(161) (159)は口径19.9cm、現高13.5cmを測る土師質羽釜である。口縁端部は外方へ短く曲げられ、断面は尖んがって閉じる。体部の肩・腰部に稜を持つ。外面は粗い箆削り、内面は箆ナデにより平滑。底部を抜いて井筒となす。砂粒をまばらに含む淡白褐色、焼成は良。外面には煤付着。

(160)は口径20.0cm、現高12.5cmを測る土師質羽釜である。口縁端部は外方へ短く曲げられる。 肩・腰部の張る体部外面は箆削りされるが剝落、内面は横刷毛調整。粗砂含む胎土は焼成不良で 軟質。淡白茶色を呈する。外面には煤。底部を抜いて井筒となす。

5号井戸

瓦器椀 (193)~(197)(202)(203) 口径15.3cm~16.3cm、器高5.0~5.9cmを測る。かなり深味のある体部にしっかりした貼り付け高台を持つ。外面には削りによる凹凸があり、その上に横方向の粗い暗文が施こされる。内面は平滑で、横方向を主体とする暗文が施こされる。口縁部下外面には稜がつく。外方に踏んばる高台断面はほぼ方形近くにおさまる。焼成は良好で、いずれも硬質。炭素付着も良好。

瓦器皿 (198)(199) 共に口径11.0cm、器高 2.8cmを測り、高台は持たない。体部外面下 半には指圧痕、内面は刷毛調整。焼成は不良で、炭素付着も光あるいは一部にとどまる。

瓦器小皿 (200)(201) いずれも口径9.0cm、器高2.5cmと2.0cmを測る。 (200)の体部外面下半には指圧痕、内面には横方向あるいは縦方向の暗文が施こされる。(201)の底部見込みには粗雑な円及び鋸歯文状の暗文を持つ。またわずかに片口風となる。いずれも焼成は良好で硬質、炭素の付着も良。

土師小皿 (204) 口径9.0cm、器高1.7cmを測る。口縁部内外面は横刷毛調整、内面見込みはナデ、底部中央は内方へ窪む。白黄色を呈し、焼成は中。

軒平瓦 (253) 片端が欠損、厚味約4cmを測る連珠文軒平瓦である。11個の珠文が遺存。上下縁には1本の圏線がつくが、上縁右側にはつけられない。白灰色を呈し、細砂を含む胎土。焼成は中。

曲物 (243)(244) (243)は直径37.3cm、現存高22.3cm、側板の厚さは0.5~0.6cmを測る。 材質はヒノキと推定され、桜の皮により接合される。一方の端部外面には廻しの側板がみられ、 おそらく補強の為であろう。またこの部分の端面には数ケ所に浅い窪みがみられるが、これは圧 力に関係のある加工であろうか。あるいは井筒外の水を井筒内にとり入れる為の加工か。尚この 曲物は井筒5段目に使用されていた。

(244)は直径40.9cm、高さ11.6cm、側板の厚さは0.5~0.6cmを測る。材質はやはりヒノキと推定され、桜の皮により接合されている。側板の一方の端部付近には計16個の穿孔がある間隔を置いてみられ、井筒として他の曲物と接合する為のものと思われる。穿孔の一つに木製目釘を確認した。尚いずれも側板内面には垂直方向の切り込みが施こされ、一部左下りの切り込みもみられる。

6号井戸

互器 細片にとどまる。

板片 朱塗が施こされるが不明。

7号井戸

羽釜 (162)~(166) (162)は口径29.9cm、現高20cmを測る土師質羽釜である。体部上端で断面方形に厚味を持って口縁端部となる。腹の張る体部外面上半は粗い箆削り、下半は箆ナデ、内面は刷毛調整。砂粒を含む胎土、淡黄褐色を呈し、焼成は中。外面には煤。

(163)は口径28.0cm、現高15cmを測る土師質羽釜である。口縁部は体部より短く立ち上がり更に外方へ短く屈曲する。端部は尖んがり気味。肩と腰の張る体部外面は数種の縦方向箆削りを施こし、内面は平滑。黄橙色を呈し、砂粒を含む。焼成は中、外面には煤。底部を抜いて井筒となす。

(164)は口径31cm、現高21.5cmを測る土師質羽釜である。口縁部は体部より短く屈曲して尖んがり気味にとじる。腹の張る体部外面は箆による斜方向の調整。内面は箆調整をもって平滑化。 淡黄褐色を呈し、砂粒を含む胎土の焼成は良。外面には煤。 (165)は口径28.6cm、現高25.4cmを測る土師質羽釜である。口縁部は外方へ強く曲げられ、端部断面は方形にとじる。腹の強く張る体部外面は箆による各種の調整。内面は箆による横ナデ調整。白黄褐色を呈し、砂粒を含む胎土の焼成は良好。外面に煤付着。底部を抜いて井筒となす。

(166)は破片だが、復元口径約32cm、現高14cmを測る瓦質羽釜である。口縁部外面には凹線がみられ、端部は平坦面をもっておさまる。直立気味の体部上半外面は篦削りと篦ナデを行な 5。内面は篦ナデ調整。砂粒を含む胎土の焼成は良好。外面の炭素付着は良好。黒銀色を呈す。

8号井戸

瓦器 極細片のみ。

曲物 (245) 直径46.3cm、高さ21.5cm、側板の厚さは 0.4cmを測る。材質はヒノキと推定され、桜の皮により接合される。側板の一方端部には計り個の穿孔が一部を除いてほぼ等間隔に施こされる。穿孔の直径は 0.2cmで、木製目釘が存在するのもある。側板両端面には浅い深みが数ケ所みられる。側板内面には垂直方向の切り込みが施こされ、一部右下りの切り込みもある。これは井筒1段目に使用されていたものである。

9号井戸 瓦器極細片のみ。

小礫群

羽釜 (168)~(175) (169)は口径17cm程度を測る比較的小型の土師質羽釜である。口縁 部は小さく外反する。体部外面は箆削り、内面は刷毛調整。白黄色を呈し、粗砂含む胎土の焼成 は中。

(170)は口径20cm程度の土師質羽釜である。口縁部はわずかに内傾し、端部はやや厚味をもってほぼ方形にとじる。体部外面は粗い箆削り、内面は箆調整。白黄色を呈し、金雲母粒をわずかに含む。焼成は良。

(168)(171)(173)~(175)は瓦質羽釜で口径14~28cm程度の法量を持つ。形態的には、直立気味の体部からわずかに内傾する口縁部を持つものが多い。口縁部外面には3本の凹線ないしは段を持つ。端部は平坦あるいは凹線がつく。体部外面は箆削り、内面は刷毛あるいは箆調整される。(168)は口径14cmと極めて小型で、あるいは三足が付くかも知れない。焼成が良好で明確な瓦質のものから、不良で一見土師質を呈する各種がある。

三足片の出土もみている。(178)(179)

瓦質土器 (176)(177) 細片だが口径22cm程度。大きな球形体部は欠損するが、それより 弯曲外反し水平にのびる口縁部を持つ。端部は上方に突出し、平坦な端面を持つ。頸部には平行 叩き、体部上方にはアヤ杉状の叩きが施こされる。内面は剝落。かすかに表面に炭素が付着する が、断面は黄茶色を呈す。この他(177)のような土器片もある。

土師小皿 (205)~(209) いずれも口径7.6~7.9㎝、器高 1.5㎝内外を測る。口縁部両面は横ナデ、外面下半には回転痕あるいは指圧痕。内面はナデあるいは刷毛調整される。黄色味の強い色調で、胎土のキメは細い。焼成は良。

瓦器坏 (210) 口径6.8㎝、器高2.4㎝を測る。高台を持つ小型の坏である。口縁部両面は横ナデ、外面下半は未調整。わずかに外方へ踏んばる高台。焼成良。炭素付着。

軒丸瓦 (249) 直径約15cm、厚味約 2.2cmを測る蓮華文軒丸瓦である。中房上の蓮子は極めて肉薄でその存在は不明確。中房の周囲には花蕋をめぐらす。白灰色を呈し、砂粒を含む。 焼成は不良で軟質。

軒平瓦 (254) ½が遺存、厚味約5㎝を測る唐草文軒平瓦である。陽刻をもって円の中に「陀」「仏」の二字が遺存する。他の二字は不明。上下縁には2本、側辺には1本の圏線。灰黒色を呈し、焼成は良。

pit 74

瓦器椀 (213) 口径16.4cm、器高 6.0cmを測る。深味ある体部にしっかりした貼り付け高台がつく。内外面とも横あるいは斜方向の暗文が施こされる。見込み内面にも鋸歯状暗文が施こされる。踏んばる高台の断面は方形。内面と外面上半のみ炭素付着。焼成は良。

pit 17

瓦器椀 (214) 口径15.0cm、器高 5.6cmを測る。深味ある体部にしっかりした貼り付け高台がつく。口縁部下外面には連続する削りにより段がつく。外面には粗い、内面には密な暗文が施こされる。器薄の高台断面は方形。内面のみに炭素。焼成は良。

軒丸瓦 (252) 直径17.0cm、厚味3cmを測る塔文軒丸瓦である。周囲に二重の内圏をつけ、その間に連珠文を配する。塔文中央に梵字を刻する。灰黒色を呈し、焼成は不良で軟質。細砂を含む。

pit 23

瓦器椀 (215) 口径12.8cm、器高 3.2cmを測る。浅い体部に退化した貼り付け高台がつ

く。内面にはまばらな横方向の暗文が施こされる。焼成は不良、一部のみ炭素が付着。

pit 10

瓦器椀 (212) 全体の約½片だか、径15.9cm、器高 5.3cmの法量が復元される。深みのある体部にしっかりした貼り付け高台がつく。体部外面は細かい削り、内面には横及び斜行の暗文が施こされる。両面とも不明瞭。高台断面は方形。焼成は不良。

T・O・C地区溝(CV24付近)

瓦器椀 (230)~(232) □径14.0~15.6cm、器高4cm弱を測る。いずれも浅い体部に退化 気味の簡略な貼り付け高台がつく。外面は削り痕がみられ、内面上半には横方向、下半には平行 線をもって暗文が施される。炭素付着の範囲は広いが不十分。

瓦器小皿 (235)(236) 口径9.2cm、器高1.6cmを測る。内面に横方向の暗文が施こされる。焼成は良。

土師小皿 (237)(238) 口径 9 cm前後、器高 1.5 cm前後のものが多い。口縁部両面を横ナデ、下面には指圧痕、内面は平滑であることを一般的とする。主として橙色を呈し砂粒を含み焼成は普通もしくは不良である。

土師皿 (234) 口径13.6cm、器高 2.4cmを測る。口縁部両面を横ナデし、底部には指圧 痕がのこる。砂粒含む胎土は白灰色を呈し軟質。

T・O・C地区溝(CV34付近)

瓦器椀高台片 (240)(241) 断面方形あるいは三角形を呈する貼り付け高台を持つ。内面 に平行線暗文がみられる。

T・O・C地区(CV26 C-16内上層)

その他の遺物

以上これまでとりあげた遺物の他に土錘・円板・古銭・桃種等がある。

土錘 (257)は長さ8.0cm、径2 cm弱の棒状土錘である。両端に穿孔がある。(258)はほぼ

同形を呈するが½片である。いずれも細かい胎土を持ち、焼成も良好。 (257)の重量は36.5g。 両者とも「河川 | 状遺構出土である。

(259)は長さ9.0cm、最大径5.5cmを測る大型土錘である。径2.5cmの穿孔が施こされる。細砂を含む胎土を持ち、焼成は中。重量は229g。BG-O床土出土。所属時期は不明。

円板 (223)~(227) 瓦あるいは瓦質土器を剝離あるいは研磨により円形に整形したものである。5 個以上の出土をみており、直径4.5~7.5cmのものが多い。性格は不明。

2. 上池部分出土土器

Ⅰ 層序と出土状況

今回の出土地は、上池の池床であったために調査開始前には厚いヘドロが全面に推積していた。これを排除すると砂利層があらわれ、旧河川状遺構の肩を構成する地山となっていた。遺物はこの砂利層内には認められず、旧河川状遺構内より集中して出土したものである。

旧河川状遺構内に堆積した土層には、茶褐色砂質土、灰色砂利層、ブロック状粘土混り灰色砂層、暗茶褐色粘土層、淡青灰色細砂層などがみられた。しかし、これら各土層の関係は一様に全面を覆うものではなく、地区、地点によってかなりの変化をみることができる。比較的明瞭な層序を示す範囲は、おおよそ中央西トレンチ以西すなわち地区割によるところのC-33からK-33を結ぶ線より西側の範囲である。この範囲での堆積土は、西側断面図でみるとヘドロを排除した面より下へ茶褐色砂質土層、灰色砂利層、暗茶褐色粘土層と続いている。なお、茶褐色砂質土層と灰色砂利層の境界は漸移的であり、茶褐色粘土層は部分的に淡青灰色細砂を含んでいる。

遺物は、茶褐色砂質土層、灰色砂利層から6世紀~8世紀の須恵器が出土した。暗茶褐色粘土層からは、口縁端部内面が肥厚する布留式甕やTK208型式に属する須恵器杯身などが出土した。従って、暗茶褐色粘土層も一時期の所産と限定することはできなかった。また暗茶褐色粘土層には、土器のほかに大量の木器が包含されていた。木器の個々についてはここでは触れないが、これらの木器の年代は少なくとも6世紀初頭以前のものであることを付記しておきたい。

このように、中央西トレンチ以西の範囲では比較的明瞭な層序が認められたのであるが、これより東へ行くにつれて層序はしだいに乱れをみせるようになる。 TK208 型式の須恵器が多く出土した I-27地区周辺では、灰色砂利層の堆積が厚く、その下半部は粘土が部分的に堆積するようになる。土器はこの下半部に含まれており、須恵器に混って同時期と思われる土師器甕もみられた。中央東トレンチ断面では、砂利層と灰色砂層とが混在し、その下に粘土層と灰色砂層とが互層をなして続いている。 互層をなす各層は南から北に向かって下降している。 さらに、K-21

からO-21をむすぶ土層観察用畦畔の断面をみると、8世紀代の土器を含む茶褐色砂質土の下に粘土がブロック状に混る砂利層が厚く堆積する地区と、暗茶褐色粘土が厚く堆積する地区とがみられる。遺物は、M-19地区を中心としてブロック状粘土を混えた砂利層に5世紀末ないしは6世紀初頭から6世紀末までに属する各型式の須恵器を多く含んでいた。このなかには2次焼成を受けた杯も少なくない。また、右岸沿いに堆積した暗茶褐色粘土層からも、6世紀前半に属する須恵器甕が出土している。このように、M-19地区周辺では、砂利層、粘土層に関係なく出土する土器に年代巾がみられるのである。

しかしながら、南岸沿いに堆積した淡青灰色細砂層から出土した土器には土師器が多く、これに古い特徴をもった須恵器が検出された。とくに、H-O地区周辺からは、小型丸底土器、高杯、甕を主体とした土師器の良好な一括遺物が出土したほか、M-1、O-0、L-5など近い地点の同じ層位からは最古式に属する須恵器の出土をみている。

以上のように、遺物は出土した地区と土層の状況によって、H-0地区周辺から南岸沿いに堆積した淡青灰色細砂層と西端部に拡がる暗茶褐色粘土層および【一27地区周辺の粘土混り灰色砂層さらにM-19地区周辺のブロック状粘土混り砂利層、暗茶褐色粘土層とに大別できる。今回報告する土器は、このような出土地点によるまとまりに従って分類し、観察を行なったものである。

Ⅱ 分 類

分類は形態的特徴および製作技法の両者を考慮して行なった。また、他地域の土器との時期差や器種構成の比較を考慮して、基本的な器種については各小期ごとの分類基準をあらかじめ明らかにしておくことにした。従って、土師器では、甕、高杯、小型丸底土器などのように畿内中心地域において布留式の全搬を通じて存在し、かつ器形の変化が特徴づけられるものについては、甕 $Aa\sim Ac$ 、高杯 $A\sim D$ 、小型丸底土器 $A\sim D$ に分ける。須恵器は初現期から従来よりいわれている【期の須恵器についてを器形、手法によって杯 $A\sim C$ 、甕A、壺 $A\sim C$ などに分け、【期以降のものについては器種別に観察結果を述べるにとどめた。

なお、土師器については分類基準をあらかじめ明記しておくことが心要と考えられるので以下 にその基準を与えておく。

 $oldsymbol{\mathfrak{B}}$ 布留式に特徴的な甕は、口縁端部内面が肥厚する甕 $oldsymbol{A}$ である。これは、ざらに肥厚の 形態によって3種類に分けることができる。 $oldsymbol{A}$ a 類は端部が丸く肥厚するもの、 $oldsymbol{A}$ b 類は上端に 平坦な面をもって肥厚するもの、 $oldsymbol{A}$ c 類は内傾する面をもって肥厚するものである。

高杯 杯部の形態から基本的にA、B、C、Dの4種類に分けられる。高杯Aは水平方向

にのびる底部より角度をかえて口縁部が大きく外反するものである。調整に丁寧なヘラ磨きを行なうとともに、しばしば暗文風の磨きが施される。高杯Aは初期の段階でヘラ磨き調整を行なうが、しだいにナデを主体とした調整に省略されていく。高杯Bは杯部の深さがAに比して浅く、杯底部から口縁部に屈折する境界が明瞭な稜をもたないものである。高杯Cは口径が小さく塊状の杯部を有するものである。高杯Dは口径が大きく、水平にのびる杯底部から外反する口縁部へ屈折する境界に凸帯ないしは段を有するものである。

小型丸底土器 小型丸底土器は布留式を特徴づける器種の一つである。ここでは初現期のものから須恵器を一部伴なうものまでをA、(B)、C、Dの4形態に分けることにする。Aは口縁部が外上方に大きくひらき、扁球形の小さな胴部をもつものである。(B)は口縁部のひらきが小さくなって口径と胴部最大径の差が接近する。A、(B)はともに精良な粘土を使用してヘラ磨きを行なった赤色系の土器である。CはA、(B)よりも口縁部が短少化しているうえに、大きな特徴として従来の赤色系の焼きあがりのものにかわって淡褐色、淡灰褐色を呈すようになることである。また、仕上げの段階でのヘラ磨きは省略され、口縁部はヨコナデにより、胴部はナデとヘラ削りを併用して調整するものである。Dは口縁部がさらに短縮したもので、調整に刷毛目仕上げのものが盛行する。

以上が布留式を細分する場合、推移の特徴を示す主な器種についての簡単な識別観である。これらの観点から上池遺跡出土の布留式土器を観察することにしたい。なお、土器の胎土、色調の記述は充分な客観性を有するものではないが、同様の形態をとる土器にも明確なる色調の違いが認められ、それが何らかの意味をもつ場合があるため記載した。

注

① 田辺昭三

「陶邑古窯趾群I」平安学園考古学クラブ 1966 「陶邑、深田」大阪府教育委員会 1973 ではC類に相当する。

- ② 畿内中心地域という地域設定を古墳時代の土器にあてはめることは、土師器の地域差が明らかではない以上、妥当ではない。ここでは布留式土器の中心地と和泉地方の同時期の土器とは差違がみられることを考慮して弥生土器に用いられる用語を便宜的に使用した。
- ③ 分類の基準については、おおよそを安達厚三、木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」 考古学雑誌第60巻2号 1974 に従った。
- ④ A類とB類は、口径と口縁部の長さが異なるものの、いずれもヘラ磨きを行なった赤色系の土器であり、その意味においては同一系譜に属するものである。従って、小型丸底土器の分類は大きくは $\bf A$ 、 $\bf C$ 、 $\bf D$ の $\bf 3$ 形態に分かれる。
- ⑤ 例えば、小型丸底土器Cの段階には、それまでにみられた赤色系の色調が失なわれるとともに精製土器3種のセットが崩壊していることなどがあげられる。

3. 上池部分出土土器の考察

後記で観察するように、上池出土の土器にはいわゆる布留式の土師器から8世紀の須恵器まで がみられた。そこで、まず観察結果のまとめとして、細砂層および暗茶褐色粘土層出土の土師器 について器種構成を述べ、土師器と古い特徴をもった須恵器が同時期に含まれるものかを検討す る。つぎに、上池出土の土師器の成立過程を検討することによって和泉地方における布留式土器 の在り方をみる。最後に、上池遺跡で土器が変化する過程を考えることによって、須恵器生産開 始期の土師器と須恵器の関係について問題となるべき点を2、3指摘することにする。

Ⅰ 出土土器のまとめ

土師器

上池出土の土師器には、いわゆる布留式土器と呼称される斉一性の強い器形がみられる。これに含まれるものとしては、小型丸底土器D、E、高杯B、C、D、甕A、B、壺A、B、C、小型器台などがあり、布留式の新しい段階にみられる器形である。さらに、各器種をそれぞれ詳細に観察すると、胎土、色調、調整手法などの特徴から2、3のグループに細分できるものがあり、型式的な変化がたどれるものもある。以下において得られた知見をまとめてみたい。

小型丸底土器にはDとEがある。DにはCの流れを受け継いで胴部外面を へ ラ削りする D a と、この時期に盛行する刷毛目仕上げのD b とに分けることができる。胎土、色調も、D a が雲母とクサリ礫様の赤褐色の斑点を含んだ精良な粘土を使用し、淡灰褐色の焼ぎあがりをなすのに対して、D b は砂粒含みの粘土を使用して器表面をスリップ調整する灰褐色の土器である。D a の出土量は、本遺跡では少量である。奈良県上ノ井手遺跡井戸SE 030 下層からは、小型丸底土器 C に混ってD a が出土し、刷毛目仕上げのD b との共存が認められている。同じ井戸上層には、口縁部がいっそう短縮し、胴部外面のへラ削りを部分的に行なうものと全面ナデ調整のものとが出土しており、いずれもD a が退化したものと考えられる。上池では、細砂層にD a と D b の共存はみられたがD a の形態変化を認めることはできなかった。D b では、口縁基部で外弯したのち端部近くで外反する口縁部に、胴部内面をへラ削りして薄く仕上げるもの(図版一39 1 ~3、6~10)が典型となる。これらは調整の仕方も丁寧である。口縁部が外弯し器厚の厚いものや直立する口縁部をもつものは、胴部内面をへラで掻いて調整している。調整の仕方はやや粗雑である。これらに対して、単純に外反する器厚の厚い口縁部をもつものや胴部の器形が極端な扁球形を呈するものは胴部の調整も粗雑である。このように、刷毛目手法を用いたD b のなかにも丁寧な作りのものと粗雑な作りのものとが混在している。しかし、H ー 0 地区周辺の土師器一

括資料のなかには、これらの両方がみられることから先後関係を指摘することはできない。また、EのなかにはDbと同様の刷毛目を施した例(図版-3920)もある。

高杯にはB、C、Dがある。Bは小型丸底土器Dbに伴なって盛行する器形である。これにも 杯底部外面をヘラ削りするBaと杯部全体を刷毛目で調整するBbとがある。しかし、胎土、色 調は両種とも大差がない。出土量ではBaが少量で、Bbが主体を占めている。杯部と脚部の接 合方法には、(i)脚部を先に調整段階まで済ませたうえに杯部粘土を積みあげて成形する方法、 と(ii)杯部と脚部を別々に製作し、生乾きの状態で脚部に心棒を差し込んだまま挿入する方法と がみられる。本遺跡の高杯は、Bam(i)の方法、Bbm(i)、(ii)の両方法で行なっている。 なお、Bbで(ii)の方法をとるものには、杯部と脚部がそれぞれ半完成品どおしを接合するため に、杯部の刷毛目と脚裾部内面の刷毛目とで原体を異にする例(図版-40.5)もみられる。杯部 が
城形を呈する小型の高杯

には、本遺跡では器形に高杯

Bの特徴を残した

C1が多く、完全な城 形を呈するC2は細砂層から出土していない。C1の脚部の形態は、脚柱部からなだらかに裾部 へ移行する小形のものである。 $C1 \ge C2$ の形態差は、C1がH-0地区周辺の一括遺物に含ま れていたのに対して、C2は一括遺物より後出すると思われる甕C、Dと同じI-27地区周辺に 堆積した粘土混り灰色砂層より出土したことから先後関係を示していると考えられる。調整方法 は、С1、С2ともに脚部との接合部をヘラ削りしており、刷毛目を用いた例は少ない。船橋0 Ⅰ、0 Ⅰの例では、出土したC2の器形すべてに刷毛目が用いられているのと対照的である。D は本遺跡とは破片が少量あるだけである。

甕にはA、B、C、D、Eがある。A、BはH一0地区周辺の一括遺物のなかに含まれていたもので、C、Dは I —27地区周辺の粘土混り灰色砂層より出土したものである。Eは0 —15地区河川右岸の凹部より胴部内面スリ消しを行なった須恵器甕とともに出土したものである。Aには、口縁端部が上端に水平な面をもって内側に肥厚するb類と、肥厚部に内傾する面をもつ c類とがみられる。Abは少量で、大半はAcに属している。AbとAcとは、単に肥厚の形態が異なるだけでなく、胎土、色調においても違いが認められる。すなわちAbは、小型丸底土器Daと同様の雲母とクサリ礫様の赤褐色の斑点を含んだ精良な粘土を使用しているがAcは、小型丸底土器Db、高杯Bbに通有の砂粒含みの粘土に器表面スリップ調整を行なったものである。胴部内面のへラ削りは、Abでは口縁部との接合部より開始され、0.3cm程度に薄く仕上げられている。Acには、へラ削りをほぼ全面に行なうもの(図版一41 2、3)と部分的にへラ削りを行ない他の部分はナデ調整するもの(図版一41 4、5)とがあり、器厚はしだいに厚くなる傾向がみられる。Acには、このほか暗茶褐色粘土層より器体全面に淡赤色の塗付物がみられ、2次焼成をそれほど受けていないものが出土している(図版一41 6)。いっぽうBは胴部内面を

刷毛目原体で削ったのちナデ調整したものである。器厚は薄く、胴部外面の刷毛目調整も丁寧に 行なわれている。Bの器形は、のちに甕Dの器形へと変化するものと思われる。

壺にはA、B、Cの3種類がある。Aは2重口縁の屈折部と口縁端部に凸帯を有するもので、精良な粘土を使用して淡赤色に焼きあがっている。伴出した胴部の小破片には、外面に比較的目の粗い刷毛目がみられる。上ノ井手遺跡井戸上層にも、2重口縁をもった刷毛目調整の壺が出土しており、上池においても細砂層出土の布留式土器に伴なうものと考えられる。Bは外上方にひらく直口口縁をもつもので、これには口縁端部が内外に肥厚する布留式の壺に通有のものと、口縁端部が丸くなっておわるものとがある。前者は精製、後者は粗製である。Cは、2重口縁をもち、胴部に甕Acと同様の刷毛目調整を行なったものである。口縁端部も甕Acと同様の肥厚を有している。船橋0【、0】をはじめ布留式の新しい段階に、小型丸底土器Db、高杯Bb、甕Acなどとともに盛行する器形である。

小型器台は、小型丸底土器 Daと同様の胎土のものと、小型丸底土器 Dbと同様の胎土で内面に刷毛目を有するものがあり、ともに盛行期の赤色系の精製品とは形態も異なっている。上池出土の土器は、小型精製土器 3種のセットが崩壊したのちの器形で占められていることから、これらの小型器台も同時期のものと考えたい。類例としては、高槻市郡家川西遺跡で小型丸底土器 Dbに伴なったものが知られている。

須恵器

上池出土の須恵器は、いわゆる【期に属するものが多い。なかでも細砂層出土の甕A、壺A、杯身A、杯蓋A、無蓋高杯A、C、把手付埦は古い特徴をもつものである。甕A、杯身A、杯蓋AはTK73型式の特徴を示しており、最古式に属することは確実である。これら細砂層出土の須恵器はH-0地区の一括遺物のなかには含まれていなかったものの、近い地点の同じ層からは、M-1地区で甕A、杯蓋A、N-0地区で壺Aと器台の破片、L-5地区周辺から甕A、無蓋高杯A、C、把手付埦が出土している。また、第2次の調査においても、河川南岸に沿ってH-0地区より続く同様の層位より小型丸底土器Dbと須恵器壺Aが出土している。このような事実から、少なくとも層位的には不整合な面を見い出すことのできない細砂層に、布留式の土師器と古い特徴をもった須恵器の共存が認められたのである。そこで同一層内に共存する土師器と須恵器とは同時期に属する土器群とみて考察を行なうことにする。

このように、層位的には共伴することが確認された布留式の土師器と古い特徴をもった須恵器は、さらに形態、手法においても相互の影響が認められた。

第1に、H-0地区周辺で一括出土した土師器のなかに、回転を利用した調整痕がみられることがあげられる。H-0地区出土の高杯(図版-40 1)は、杯部外面の調整に回転を利用したナデが行なわれている。また、杯底部内面に須恵器の粘土紐巻き上げ+ミズビキ痕に類似した渦巻き状の調整痕がみられるものがある(図版-40 5)。回転利用のナデを行なった高杯の器形が高杯Bに属することと考え合わせると、高杯Bの器形が盛行する時期に須恵器の導入がすでに行なわれていたのではないかとも推察できるのである。

第 2 は、E-37地区暗茶褐色粘土層より出土した土器に、器形は土師器に類似し、手法や焼成については須恵器の特徴を有する模倣土器がみられることである。(図版-40 22)は、2 重口縁の土師器壺Cに似ているが、胴部外面には格子叩きが施され、焼成も茶灰色の須恵器生焼け品に似ている。器形を模倣した土師器壺Cは、布留式の新しい段階に盛行するが、須恵器の出現とともにその機能は急速に須恵器へ移行したと考えられる器種である。いっぽう、格子叩きは古い段階の須恵器にみられる特徴の-0と考えられている。このような模倣土器の存在からは、土師器壺Cが姿を消す以前に古い特徴をもった須恵器の出現が考えられるのである。なお、模倣土器には、土師器甕Eの器形と胴部内面へラ削りの技法をまねて、外面には須恵器の手法である平行叩きを施したものが0-15地区より出土している(図版-45 21)。模倣土器もまた模倣した土師器の器形によって先後関係が認められるのである。

Ⅱ 上池細砂層出土土器の成立過程について

和泉地方における弥生第 V 様式以後の土器は、弥生土器の伝統をそのまま受け継いだ伝統的第 V 様式甕が引きつづいて用いられ、これに中、南河内地方で製作された上田町 II 式甕、さらに 2 重口縁の口縁部に櫛描き波状文や円形浮文を施文した装飾性の強い壺などで構成されることがすでに指摘されている。この時期は、中、南河内地方の土器編年では北鳥池下層式(上田町 II 式)から上田町 II 式にかけての土器が使用されていた時代である。和泉地方では、弥生第 V 様式の器形、手法を踏襲した土器が中、南河内の上田町 II 式期にまで継続するために、和泉の在地系土器による編年を行なうことは困難である。従って、和泉地方ではこの時期を弥生第 VI 様式として包括する見解が妥当であろうと考えられる。ここで問題とする弥生第 VI 様式以後の土器についても、和泉地方独自の特徴を有すると考えられ、その内容を検討することによって上池遺跡出土土器の年代的位置づけを行ないたい。

布留式土器について

布留式土器は、高塚古墳に象徴される古墳時代社会が畿内において出現し、社会体制がしだいに確立する時代に使用された土器である。そのため、布留式土器のなかで特徴的な小型精製3種土器が、斉一性をもった器種として全国的に拡がっていく現象を、小型精製3種土器による祭紀儀礼の整備と全国的な伝播と把える考え方もある。しかしながら、古式古墳に小型精製土器を中心に行なった祭祀儀礼の存在が明らかではない現状や、3種のセットが確立する以前にも小型器台が存在する例も認められていることなどからは、小型精製3種土器の具体的な機能および祭紀儀礼の整備といった政治的な性格についてはなお慎重な検討が必要とされる問題である。このような問題を考えるうえにも、地域ごとに土器の変化過程を把える作業が布留式においても必要不可欠なものと思われる。

現在のところ、土器型式として把えた布留式の成立については、畿内各地とも明確な一線を画することが困難であることが知りうる。内容的には、布留式の純粋資料とされる小若江北式の器種構成は、小型精製3種土器に口縁端部内面が肥厚する甕が伴なうものである。ところが、小型精製土器の古相を示すものに伴出する甕には、上田町 I 式甕のように布留式以前の土器と考えられているものが伴出する場合が少なくない。このようなことから、小型精製土器の出現は、甕の形態が変化する時期と一致するものではないことが明らかである。それゆえ布留式成立の概念も小型精製土器の出現を指標とするか、田中琢氏が提唱した庄内式の概念にもとづいて甕の形態変化を重視した小若江北式の成立を初現とするかで意見が分かれるところである。飛鳥地域出土の古式土師器を細分して型式を設定した例は、布留式成立過程と地域性を表現するためにも指標となるものであろう。

和泉地方の布留式土器

和泉地方において、小型精製土器の出現は泉大津市七ノ坪遺跡にみられる。七ノ坪遺跡出土の土器には、小型丸底土器A、B、小型鉢、小型器台の小型精製3種土器が含まれており、小型丸底土器は、全体を丁寧にヘラ磨きしたものと底部をヘラ削りしたものとがある。いずれも赤色系の色調を呈している。甕は、Aaが比較的細筋の叩き目を施した伝統的第 V 様式甕と共存している。Aaには、口縁端部の形態が上田町 I 式甕の影響を残して上方に若干肥厚するものと内面に丸く肥厚するものとがある。いずれも胴部は細かい刷毛目で調整している。壺には、2重口縁をなし精良な胎土のAと、直口の口縁部に端部が内面に肥厚するBとがある。高杯にはAがみられる。七ノ坪遺跡の土器は、小型精製3種土器のセットが確立した時点の器形である小型丸底土器Aにヘラ磨き仕上げのものと底部をヘラ削りのまま仕上げたものとがあり、これらに小型丸底土

器Bを加えることから、器形によってA、Bの各段階を分けることは不可能である。

小型精製3種土器のセットが崩壊した段階になると、現在までに得られた資料によれば細砂層出土の土師器の器形が盛行するようになる。しかし、土器型式の推移からは、七ノ坪遺跡と細砂層の土器のあいだになお間隙が感じられる。この型式学的な間隙を埋める資料として、泉大津市豊中遺跡A地区(大阪ガスKK用地内)溝より出土した一括遺物(挿図2)をとりあげてみよう。

土器は溝の底部に形成された凹部より一括で小型丸底土器7個、高杯、壺、小型鉢、蛸壺がそれぞれ1個、須恵器甕Aの口縁部1個体が出土した。このうち一部を図示する(挿図2)。小型丸底土器はCとDaが占めている。いずれも焼きあがりは淡灰褐色を呈し、雲母、クサリ礫様の赤褐色の斑点を含んだ精良な粘土を使用している。これらに、2重口縁をなし刷毛目調整の壺C、2段に短かく外反する口縁部に扁球形、丸底の胴部もつ小型の鉢、ナデ調整によって仕上げた高杯Aが伴出している。このような豊中遺跡A地区溝内の一括遺物を上池細砂層出土の土師器と比較すると、小型丸底土器Cや高杯Aは上池細砂層の土器にはみられず、型式的には上池細砂層の方に新しい要素が認められる。しかし、小型丸底土器Da、壺Cはともにみられる器形である。また、最古式に属する須恵器甕Aも両遺跡で出土している。このような出土遺跡から推察すると、小型丸底土器CからDaへの変化が豊中遺跡A地区溝の土器から考えられる。いっぽう上池細砂層では、Daと刷毛目手法を用いたDbとが伴出している。そのうえ両遺跡に小型丸底土器Dbとともに盛行する壺Cがみられることから、へラ削りで調整する小型丸底土器Cと刷毛目で調整するDbとは、さほど大きな時期差をもたないと考えられる。むしろ、両系統の土器は、胎土、色調、調整手法などにおいて明確な差違がみられることから、土器の生産地ならびに生産集団の相違が考えられるのである。

このような事例から、和泉地方における布留式土器の推移を次のように要約することができる。第1に、和泉地方において布留式を特徴づける何種類かの土器の出現は、七ノ坪、土生をはじめ多くの遺跡では伝統的第 V 様式甕および上田町 II 式甕ないしは上田町 II 式の影響を残したものと共伴することが考えられる。また、小型精製3種土器と布留式甕A a とは、純粋なかたちで伴出しないまま存在し、伝統的第 V 様式甕が衰退して布留式甕Aが主体を占める頃にはすでに小型精製3種土器のセットは崩壊しつつあったのではないかと考えられるのである。第2に、小型精製3種土器のセットが崩壊したのちにみられる小型丸底土器 C は、器形の変化とともに色調もそれまでの赤色系から淡灰褐色に変化することが注意される。そして、小型丸底土器 C の系譜は、しだいに衰退して D a へと続くのに対して、刷毛目手法を最大限に使用した土器が小型丸底土器 C の出現と相前後して盛行するようになる。細砂層出土の土師器は、このような刷毛目手法

を用いた小型丸底土器 Db、高杯 Bb、甕 Ac、壺 Cなどを主体として構成されたものである。 また、この時期のある時点からは、最古式の須恵器も出現し、上池遺跡への搬入が行なわれたものと思われる。

Ⅲ 須恵器出現期の土器について

近年における古式土師器の研究によると、布留式の新しい段階には最古式の須恵器を一部伴な うことが知られている。細砂層出土の土器には、このような同伴関係がみられた。さらに細砂層 の土師器より型式的には先行すると考えられる豊中遺跡 A地区溝内一括遺物にも T K 73型式の須 恵器甕 A が伴出した。これらの事実を重視すれば、和泉地方では小型精製土器 3 種のセットが崩 壊した後に出現する小型丸底土器 C、D について先後関係を認めることはできないと考えられた。 次に須恵器出現期前後の土器の型式的な変化をみることによって上池遺跡の土器を特徴づけて みない。

なお、前提として、古い特徴をもった須恵器には甕、壺のような実用品が多く、土師器のうち 貯蔵用の壺は須恵器の出現とともに急速に衰退し、その機能を須恵器が踏襲したとする従来の考 えを肯定する。また、上池遺跡そのものが5世紀中葉から8世紀前半に至るまで連続して営なま れたとの仮定に立っている。

細砂層出土の土器は、出土量では土師器が大半を占め小型丸底土器、高杯、甕、小型器台等の器種に貯蔵用の壺もみられる。これらに最古式の須恵器が伴なっている(図版39~図版42、図版43)。しかし、いわゆる【期の須恵器のうちでTK 208 型式の段階になると、須恵器は器種、量ともに急増するとともに、杯、高杯の類が圧倒的に主体を占めるようになる。これに土師器甕C、D、E、と高杯C 2が伴なっている(図版一43)。つまり細砂層出土の布留式の土師器は、5世紀中葉に出現したと考えられる最古式の須恵器が搬入されたのちも 5世紀後半までは共存したと考えられる。最古式の須恵器は上池全体を通じて一時期を構成する程の量をもたず、最古式の須恵器は独自では存在し得ないと思われるからでもある。しかし、5世紀末ないしは6世紀初頭の段階では、須恵器の杯、高杯に土師器の小型丸底土器、高杯の機能が吸収されるのかあるいは全く新しい用途に変化するのかのどちらかであろうが、土師器は煮沸用の甕と高杯の一部が残るだけとなる。このような土器の推移から、上池遺跡における土器型式変化の画期は、最古式の須恵器が出現しその一部が上池遺跡へも搬入された段階よりも、むしろ須恵器の杯、高杯が急激に増加したTK 208 型式前後の段階に認められるのである。従って、上池遺跡における布留式の土師器と最古式の須恵器との関係は相互補完的なものと考えられ、その後須恵器のセットが確立するなかで布留式は崩壊していったものと考えられる。そして、その完成はTK 208 型式の段階

にはみられ、土師器甕C、Dなどにわずかに前代の影響が認められるほかは甕Eのような須恵器 出現後の器形が主体を占めるようになると考えられるのである。

以上、上池遺跡における土器の変遷について若干の見解を述べてきた。次に、和泉以外で須恵 器出現前後の土器を出土した例を参照してみることにする。

和泉地方以外で古い特徴をもった須恵器を出土した遺跡としては、古墳を除くと河内では船橋 0 I、大和では平城宮跡第39次溝、平城京左京三条二坊溝 S D 681、布留、摂津では郡家川西などがあげられる。また、紀伊の楠見でも最古式の須恵器が大量に出土している。

このうち最古式の須恵器を伴出した船橋 0 II、平城宮跡第39次溝出土の土師器は、器形、手法に 2、3の共通する特徴を有することが指摘されている。甕は、口縁端部内面に肥厚を有する A c が少量で、端部が内傾する平担面となっておわるもの(甕 C)、口縁部が単純に外反して端部がそのまま平担面となっておわるもの(甕 E)、単純に外反する口縁端部が薄く尖っておわるものなどが主体を占めている。小型丸底土器は D b が盛行し、高杯には B b、 C 2、 D がみられる。高杯は、杯部全体と脚裾部内面に刷毛目を施したものがみられ、口縁端部や脚裾端部をへラで削って平担面に仕上げる特徴もみられる。

平城京左京三条二坊溝 S D 881 から出土した土器も類似した構成である。甕はAcのほかに、単純に外反する口縁端部が薄く尖っておわるもの、外反する口縁部の端部がさらに反転するものがある。いずれも胴部内面のヘラ削りは器表面の凹凸を調整する程度に行なわれている。小型丸底土器にはDbとEがあり、Eには調整に回転を利用したものがみられる。高杯にはBb、C2、Dがあり、Bbの杯部と脚裾部内面に刷毛目を施す手法もみられる。報告書ではこれらの土器を5世紀末ないしは6世紀初頭に比定している。

このような 2、3の類例によると、須恵器を伴なう最末期の小型丸底土器は刷毛目調整の Dbと考えられ、甕では口縁端部が内傾する平担面となっておわるものや単純に外反して端部が薄く尖っておわるものがみられる。高杯も Bbとともに C2が盛行する特徴がみられる。これに対して、細砂層出土の土師器には小型器台が残存することや高杯に C2がみられないこと、さらに小型丸底土器 Daが含まれることなど、古い要素が多く認められる。

いっぽう、最古式の須恵器が大量に出土した楠見遺跡の土師器は、口縁部が単純に外反し端部が薄く尖っておわる長胴の甕、高杯C2、Dが多くを占めている。小型丸底土器は、すでに消失しているのかみられない。このような構成から、楠見遺跡の土師器は布留式にみられる特徴を失なった以後のものかと思われる。ところが最古式の須恵器のなかには、外弯する口縁部の端部が内傾する平担面となる土師器甕を模倣したものがあり、同様の土師器甕は平城宮跡第39次溝、平城京左京三条二坊溝SD881などから出土していることが知られている。しかし共伴する須恵器

の器形からは、少なくとも楠見遺跡出土の須恵器よりも古式のものは、前者のなかには認められないことから考えても、楠見遺跡の土師器は、同時期にみられる器形のうち小型丸底土器 Db、模数土器にみられる器形をなす甕、高杯 Bbなどを欠くという特徴を示しているのである。

このように、須恵器出現期の土師器には、布留式の特徴を受け継いだ器形と須恵器出現後にあらわれる新しい器形とがみられ、同時期の須恵器とのあいだにさまざまな構成をなすことが考えられる。そして、須恵器出現期の土師器が受けた変化は、須恵器の搬入時期と器種構成の成立時期によって地域差や集団による差が存在すると推察できるのである。

IV 小 結

これまで上池遺跡出土土器の器形、器種の構成と時間的な推移の仕方から2、3の問題点を抽出し、若干の考察を加えてきた。最後にまとめを行なうことで結びとしたい。

第1に、細砂層出土の土師器は、和泉地方の地方色を脱して畿内中心地域と斉一性をもったものであることが指摘できる。その意味においては、細砂層出土の土器は和泉地方にあって純粋なかたちで出土した布留式土器として位置づけることが可能である。

第2に、和泉地方で上池細砂層出土の土器が出現するまでの過程をみることによって、小型精製3種土器のセットが崩壊する時期に一線を画することができた。しかしながら、小型精製3種土器のセット崩壊後にみられる小型丸底土器については、それまでの形態、手法を継承しながら色調が淡灰褐色に変化したC類と細砂層より出土した刷毛目手法のDb類とは、それ程大きな時期差を認めることができなかった。小型丸底土器Cは、同じへラ削り手法を用いるDaへと続く系譜がみられ、いっぽう小型丸底土器Dbは、高杯Bb、甕Acなどとともに一つの系譜を構成するものとなる。そして、この2つの系譜に属するDaとDbとが細砂層において共存していた。

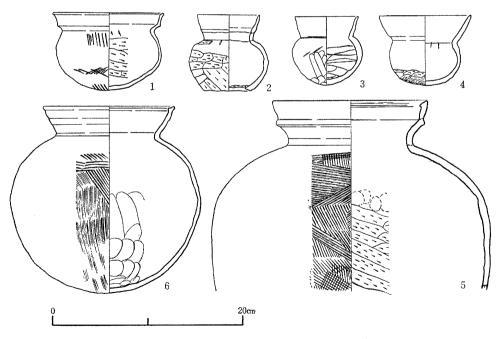
第3に、これら布留式の新しい段階の土師器には、古い特徴をもった須恵器が伴出した。しかし細砂層より出土した古い特徴をもった須恵器は、量的にみても一時期を構成するものとは考えられず、布留式の土師器使用時に搬入されたものと思われる。また、上池遺跡全体にみる土器の推移からは、TK 208 型式の段階に須恵器杯、高杯が急激に増加し、土師器の器形も変化したことがわかる。従って、上池遺跡において用いられていた土器が大きく変化する時点は、最古式の須恵器が出現した時期よりもむしろTK 208 型式の段階にあると考えられる。他遺跡の類例によると、須恵器を伴なう土師器は、小型丸底土器Db、高杯Bb、C2、D、が主体をなし、甕はAcよりもD、Eが主体を占めている。また、楠見遺跡のように、同時期でありながらも土師器の器形には布留式の特徴を残さないような例もある。このような現象は、須恵器を主体とした新しい器種構成の成立が布留式の土師器の衰退と関係をもつと考えられ、上池では、その時期をT

K 208 型式の段階におくことができるのである。

以上のように土器型式変化の過程をとらえると、上池遺跡を含めた一地域内における布留式土器の変遷には 2、3 の画期が認められる。とりわけ細砂層出土の土器にみる畿内中心地域との斉一化は、上池および隣接する古池の両遺跡の特有な現象と考えるか、和泉地方の集落遺跡全搬の傾向と考えるかで相違はあろうが、いずれにしても弥生第 V 様式以降の土器のなかでは七ノ坪などにみられる小型精製土器の出現期にもまして大きな画期となるものであり、この頃に背後の信太山丘陵において中期古墳が出現するのと呼応していることが注目されるのである。細砂層出土の土器は、さらに 5 世紀末ないしは 6 世紀初頭の段階でTK 208 型式の須恵器を主体とした新しい器種構成へと変化する。この時点において、それまでの器種が有していた機能を吸収あるいは変化させたことが推察され、上池遺跡内部における画期をもたらせたものと考えられるのである。

類別表その他の基礎資料を提示し得ないまま、きわめて大まかな見通しを述べてきたが、上池 遺跡出土遺物の重要性を考えるうえでの手がかりになればと思い考察を加えた次等である。大方 の御批評をお願いしたい。

なお、末筆ではあるが、本項目の作成にあたっては井藤徹、酒井龍一、坂口昌男の各氏より御 教示をいただいた。また、大阪文化財センター第2遺物整理室の方々には何かにつけてお世話に なった。ここに記して深くお礼を申し上げます。 (芋本隆裕)



插図2 豊中遺跡A地区溝内出土土器

注

- ① 布留式の純粋資料としては、昭和31年に公表された小若江北遺跡出土の土器が知られている。坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」しかし、昭和44年に平城宮下層溝より出土した土器には、布留式よりも古い要素をもったものが伴出したことから、布留式を広義にとらえて細分する考えが提起された。 安達厚三「古墳時代溝出土の遺物」 奈良国立文化財研究所年報 1969 昭和49年、飛鳥地域出土の古式土師器を資料として布留式の細分が具体的に示され、最末期に属するものとして上ノ井手遺跡井戸上層の土器があげられた。 安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」 考古学雑誌第60巻2号 1974 また、平城京左京三条二坊の報告書では、小型丸底土器を3段階に分けて第3の段階に船橋0 I出土のものをおいている。 「平城京左京三条二坊」 奈良国立文化財研究所学報第25冊 1975
- ② 前掲① 安達·木下
- ③ 「高槻市史」考古編に掲載されたものを高槻市教育委員会資料収蔵庫で実見。
- ④ 船橋遺跡では、須恵器を伴なわない 0 I の段階に出現し、最古式の須恵器を伴なった 0 II の段階まではみられるが、須恵器の出土量が増加する H II 、 0 III 以降は姿を消している。 原口正三「船橋 II 」 平安学園考古学クラブ 1958
- ⑥ 船橋遺跡では 0 \square の段階に格子叩き目をもつ土師器として報告されている。前掲④ 原口 また、須恵器のなかでも初現期にみられる特徴の一つと考えられている。
- 6 酒井龍—

「弥生式土器から土師器への移行過程について」 上町遺跡調査概要 和泉市教育委員会 1975

⑦ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」 考古学研究80号 1974

中遺跡溝内より伝統的第V様式甕、上田町II式甕と伴出している。

田辺昭三「須恵器の誕生」 日本美術工芸第390号 1971

- ⑧ 岩崎卓也「古式土師器考」 考古学雑誌第48巻 3 号 1962
- ⑨ 纒向遺跡水路下層(纒向 I 式) 石野博信「奈良県纒向遺跡の調査――三輪山麓における古墳時代前期集落の問題」 「古代学研究」 65号 1974東奈良遺跡庄内期溝内 現地説明会パンフレット 1975 などにみられる。和泉地方では泉大津市豊
- ⑩ 船橋KIa群 前掲④

鬼塚遺跡 東大阪市遺跡保護調査会年報 I 1975

東奈良遺跡・豊中遺跡 前掲⑨

これらは上田町Ⅱ式甕を伴なっている。

平城宮下層溝 安達厚三「古墳時代溝出土の遺物」 奈良国立文化財研究所年報 1969 纒向遺跡水路上層(纒向皿式) 前掲⑨ 石野

布留遺跡山口池地点 置田雅昭「大和における古式土師器の実態――天理市布留遺跡出土資料」古代 文化第26巻2号 1974 などにおいても大和の庄内式と考えられている甕が伴出している。

- ⑪ 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1974
- 12 前掲⑥ 酒井
- ③ 七ノ坪遺跡調査概要に掲載された土器も、小型精製土器を含む段階と、3種のセット関係**角壊後**の小型丸底土器Db、甕Ac、高杯Bbなどを含んだ段階とに大きく2分できる。
- ⑭ 「土生遺跡第2次発掘調査概要」「土生遺跡第3次発掘調査概要」 岸和田遺跡調査会 1975
- ⑮ 髙島忠平「最古の須恵器」 大和文化研究 第13巻12号 1968
- 16 前掲① 「平城京左京三条二坊」
- ⑰ 置田雅昭「天理市布留遺跡出土の須恵器」 古代文化第24巻11号 1972
- ⑱ 「高槻市史」 考古編 1974
- ⑲ 「和歌山市における古墳文化」 関西大学文学部考古学研究室紀要 4 1972
- 20 前掲① 安達·木下

4. 上池部分出土木製品

上池一次及び二次調査において多量の木製品の出土をみた。特に二次調査においては細片も含めばその数は数百点に達する。この様な多量な木製品のほとんどは暗茶褐色粘土層から出土しており、伴出土器(須恵器及び土師器)から、その時期は6世紀初頭以前のものと推定される。ところでこれらの木製品のほとんどが用途不明木製品である。ただ、概観してみると、刀剣類・農耕具・履物・紡織具・運搬具・建築用材・部分材等が認められる。さて、それでは以下に一群を形成する木製品それぞれについて述べてみたいと思う。

D・剣類 $(1\sim5)$ これらの木製品は武器 (D,) 剣類)の形態を有してはいるが、材質が木である為、武器としての機能は保持していないものと思われる。とするならこれらの木製品は鉄製武器 (D,) 剣類)を模して製作されたものだが、鉄製のものとは当然その性質を異にするものと考えられる。ところで、木刀が二種類出土していること、あるいは小型剣状の木製品が出土していること、さらには $2\sim5$ には磨滅痕跡が認められないことなどはいくつかの重要な問題を示唆しているように思われる。また、木製素環頭の場合、他に出土例はほとんど認められず、その性質も不明であるが、本遺跡においては木剣、木刀などと共に本遺跡を特徴づけている。

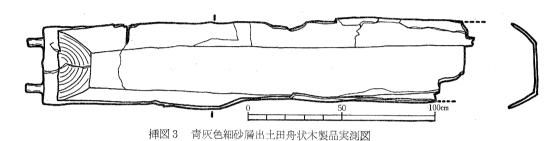
農耕具 (9~13) 農耕具は5点出土しているが、そのうち4点までも鋤である事実は重要である。また鋤についても形態がナスビ状を呈するもの(11は不明確)とスコップ状を呈するものとが存在するが、これらはそれぞれの用途に側して使用されるものと思われる。ところでナスビ形鋤は他の古墳時代の遺跡からも出土している。それらの鋤と比較すると、鉄の刃先が着装されると思われる部分が、本遺跡のナスビ形鋤の場合さほど顕著に表現されていない。また又鍬には使用痕跡が明確に認められない。

下駄 (16~17) 同地点から出土している。一方は杉、他方はヒノキのように思われる。ほぼ同一の形態、同一の機能の個々の材質の差や性格不明の削り痕跡はそれらの所有のあり方を示すものなのかもしれない。ところでこれらの下駄には明確に使用痕跡が認められるが、古墳時代の遺跡における下駄の出土はその遺跡の性格を知る一つの手がかりとなり得る。

紡織具 (18、20~23) まず、紡錘車状木製品について述べることにするが、この木製品を紡錘車と断定するにはまだ多くの問題を残している。例えば重量の問題であるが、この紡錘車状木製品(重量 69)は石製あるいは土製の紡錘車と比較してかなり軽い。しかし木製のものであっても軸の廻転にハズミを与えることが出来る可能性が考えられ、他にいくつかの条件がそ

ろうことによって使用に耐えうるものであったかもしれない。もっとも模造品の可能性もあり得る。チキリ状木製品は4個体出土しているが、それぞれに特徴を持っており、材質も一定していないようである。

田舟状木製品 (26~27) 田舟状木製品は破損しているものも含むと数個体出土している。ほとんどは外見上の観察ではあるが杉のようである。ところが最も大きい田舟状木製品(挿図3)のみはそれらとは材質を異にしているようである。ところで、これらを「田舟」と呼ぶにはまだ問題が残るが、運搬用具の一種と考えられる。また、本遺跡の場合、その大きさにおいて相違をみせているが、これは用途的は問題であろう。



有孔木製品 (60~62) 60~62は基本的に類似形態を有するものであるが、62は他の二個体とはその表現が若干異なっているように思われる。ただこれら三個体に共通なのは一端に円孔の部分を有すということである。つまり同じような箇所を破損していると思われるのである。 尚この他にも有孔木製品は出土している。

把手付板材 (81~84) 81~83は類似形態をもつものである。84については81~83と類似形態をもつものを加工した可能性が考えられる。81~83については孔を有するものとそうでないものとに分れる。外見上の観察であるが材質は一定のようである。以上簡単に述べてきたがこの他に建築材、組材、板材などがかなり多数出土している。ところで建築用材の場合、全面あるいは部分的に焼けた痕跡が認められるものが数点存在する。

工具について

今回の調査では、工具類の出土は認められないが、出土木製品には大多数製作にかかる工具痕が確認された。その工具痕から手斧・刀子(あるいはヤリガンナと思われるものも一例ある)といった工具の存在が理解された。それらを細かく観察すると、手斧の場合削り幅から4cm~4.5 cm以上の刃幅をもつものによって加工され、刀子は数種類を使用していることがうかがえる。つまり本遺跡出土木製品の大多数はそのカット面から鉄製の刃を持つ手斧と数種類の刀子によって加工されたものと考えられる。

材質について

本遺跡出土木製品の材質鑑定は、専門外の人間による肉眼観察であることをおことわりしておく。出土木製品のうち広葉樹系に属するものは極くわずかであり、大多数は針葉樹系に属するものであろう。おそらく50%ないしは60%は杉と推定される。2~5の刀剣類も杉の可能性が強い。また農耕具はカシの可能性が考えられる。杉の占める割合がかなり大きいことは極めて重要な問題であろう。

遺跡周辺の植生を知ることは極めて重要なことであり、木製品を理解する上において必要不可 欠である。その意味においては自然木も価値を有するものであろう。

以上簡単にとりまとめて述べてきたが、最後に整理しておきたいと思う。

- 一、本遺跡出土木製品のうち磨滅痕が認められないものが少なからず存在する。
- 二、今回の調査では工具痕は認められても工具類が出土していない。
- 三、木製の刀剣類が出土している。
- 四、下駄が数点出土している。(使用痕有)
- 五、未製品と思われるものが出土していない。
- 六、木製品製作過程において生ずる削りカス(木クズ)が出土していない。

以上六点から出土木製品に視点を限定するなら、本遺跡の隣接地にある程度の政治的権力を 有する集団の存在が考えられる。本遺跡はそのような集団と深いかかわりあいをなしていたも のであろう。 (正富博行)

注

- ① 常なる使用になるものではなかったと理解される。
- ② 黒崎直氏によると、弥生時代より古墳時代になれば鍬より鋤の出土率が高くなる現象が認められる。
- ③ 静岡県伊場・愛媛県福音寺遺跡等

第7章 和泉に於ける「伝統的第V様式」 に関する覚え書

---- 豊中遺跡出土遺物の整理をして ----

I はじめに

ここ数次にわたる豊中遺跡の発掘調査に於て、弥生時代末~古墳時代前期に位置付けられる諸遺構の検出と相まって多数の土器群が出土し、個々についての簡単な観察事項は別に載げた。これら土器群は、単に弥生式~土師式土器の移行過程を明示するのみならず、まさに「古墳出現前夜」というすぐれて重要な歴史的位置にある由に近年とりわけ研究者の注目を受けるところである。この和泉地方でもこれ迄多数の資料蓄積をみ、和泉市池上遺跡や多数の周辺遺跡群の調査により、それらが初期農耕集落としてこの地の拠点的役割を果してきた池上弥生時代集落が強い対外的諸関係動向の中で中期後半(第17様式)のある時点を境にし変質し多数の小集落群への分解を指向するという歴史過程の中に位置付けられることが理解されるに至った。筆者は遺物整理の立場から得られた知見をこれ迄にもとりまとめたが、今回更に豊中遺跡出土遺物を整理する機会を得て、ここに従来の認識を踏えつつそれらの持つ歴史的意義を考えてみたい。とりわけそれらが既に認識論的に設定した「伝統的第7様式」土器群の具体的実態を示すものとして注目することになる。また豊中遺跡でも出土をみたが和泉地方の製塩土器についても若干紹介しておく。なお本論は、和泉市上町遺跡出土土器群の整理過程でまとめた拙稿「和泉における弥生式~土師式土器の移行過程について――認識論的作業仮説として――」『上町遺跡発掘調査概要』1975年に後続し、かつ重複する部分も多いが参照していただければ幸である。

Ⅱ 認識の整理

これ迄和泉地方の弥生時代後期(第 V 様式)~古墳時代前期(布留式)に至る土器群を概観しいくつかの知見を得ている。即ちこの過渡期に実在するのは「伝統的第 V 様式」・「庄内式」土器群に加えて、なおまだ整理概念としての「装飾性の強い」・「外来系」・「布留式傾向」土器群等が存在する。後者の土器群の実態は現時点迄には十分把握してはいない。

それら土器群は時間差により組み合わせ構成に変化をみせ、第 V 様式──過渡期 J・II・II ── 布留式と区分し得ることが理解されることとなった。

これには次の補足が必要となる。「第 V 様式」と「布留式」の「過渡期」とは、都出比呂志 1974年の「第 VI 様式」にほぼ該当する。また「布留式」とは坪井清足1965年の指摘する「小若江 北式|を該当させるが、広義の「布留式」に於て「小若江北式」はやや後出する位置を占めてお り、より先行する土器群の存在が考慮される。和泉地方では七ノ坪遺跡が「小若江北式」より先 行する一括遺物を出土し、この地方の標式となる。都出氏は河内地方の編年で「上田町▼式上直 後に「小若江北式」を位置付けるが、この時点では既に小型三種土器そのものの形態がややくず れており、七ノ坪遺跡のより典型的土器は先行することになる。「外来系!土器群としては「庄 内式 | 甕・「酒津式」甕・「S字状口縁」甕等が知られるが、なお不確定の土器群が多い。 「装飾性の強い」土器も不確定である。「外来系」土器群に対して、論理的には「在地系」土器 群が存在する。これ迄の調査成果から、和泉地方には「第↓様式」以後もその製作技術が基本的 に踏襲されるとする立場をとり、「伝統的第Ⅴ様式」を設定し、「在地系」土器群を表象する。 もし他地方でも同様に「第V様式!の踏襲が検証されれば、各地の「伝統的第V様式!を認め得 ることになる。私見では「庄内式|甕という極めて先進的土器製作を実施する(諸)集団を除き、 大多数はなお「伝統的第Ⅴ様式|土器群を継続・製作していたと理解する。その後「布留式」の 伝播はかなりの全国的規模を持ち、この時点で各地の土器製作をめぐる諸状況が大きく変換する ことになる。「布留式」出現の実状はまだ十分に理解しないが、ついてはいくつかの示唆的状況 が観察される。即ち、各地の「伝統的第▼様式」と河内の「庄内式」甕は技術体系を別圏にする 諸集団により製作されており、河内の「庄内式!甕と「布留式傾向!甕は製作技術や形態が近似 するにもかかわらず、胎土や色調が全く異なる。かつ「庄内式 | 甕は「布留式 | 直前に於てその 製作・供給が衰退し、土器そのものも退化する。由に「布留式|甕の出現が、河内の「庄内式」 翌生産集団とは別個集団とのかかわりをもったことが推定され、その同定については「伝統的第 ▼様式」及び「庄内式」に平行する「布留式」以前の「布留式傾向」甕の製作集団所在地が問題 となる。従来知られている諸集団には「布留式傾向」甕の製作は検証されていない。しかし河内 の「庄内式」甕生産集団との技術的近密性や甕の丸底化・刷毛調整の先行から大和地方の特定集 団が考慮されるかも知れない。

「製塩土器」あるいは「土器製塩」に関する認識はこの地方では不十分であり、我々も岸和田市土生遺跡出土遺物の整理を踏み台として、ようやく製塩土器の識別を始めたばかりである。ここでは代表的な製塩土器を紹介し、それにかかわる知見を簡単に述べておきたい。

Ⅲ 「庄内式」の意義と実態

和泉市池上遺跡出土土器を概観した佐原真・井藤徹1970年は「池上遺跡の終末」に関して次のように述べた。「第 V 様式土器は多くない。しかし壺・長頸壺・細頸壺・鉢・器台・甕など一通りの器種をみる。長頸壺には、記号、絵画をつけたものがある。なお、第 V 様式における他の地

域からの搬入品としては河内の土器として西ノ辻【式がある。つぎの庄内式の甕も数圏体あるがいずれも河内からもたらされた土器である。同時期の和泉自体の土器をつかむことが急務である。」。そこでは和泉地方に於ける弥生式~土師式土器の移行過程を究明する出発点として、一つの示唆的な作業課題を提示した。とりわけ河内産「庄内式」甕に対して、まだ実態が不明だった在地系土器群を想定し区別して究明しようとする方向性は当然かつ重要でありながら、各地域に於ける諸研究に必らずしも十分理解されているとは言えない。

そもそも弥生時代後期の「畿内第 V 様式」に後続し、古墳時代前期の「布留式」に先行する土器群を「庄内式」として論理的に位置付けたのは田中琢1965年である。氏はその標式たる甕が「第 V 様式」と「布留式」の両者にかかわる技術をもって製作されていることに注目し、それに伴出すると思われる土器群を含めて「庄内式」土器として紹介した。そして「この庄内式は、現在のところ、摂津・河内・山城には確実に存在し、和泉にもおよんでいるらしい。」と記述し、その時点でこの和泉地方にも出土することをほぼ推定している。また「和泉にもおよんでいるらしい。」という文章ニュアンスからすれば、和泉地方に「庄内式」土器群が搬入され、時間的に並存する在地系土器群の存在を前程としているともとれる。しかしこの時点には甕の胎土が暗褐色の色調を呈することが多いとしながらも、なおまだそうした問題を十分に意識しなかったとするのが妥当であろう。

それに先立って原口正三他1962年は、船橋遺跡を調査し、K地区 I 層でのこの種甕が V 地区 I 層での第 V 様式風土器群に後出すると理解したが層位的資料としては必らずしも良好でないとされた。そして上田町遺跡の調査をむかえる。1968年同氏は同遺跡を I ~ II 層に区別して発掘し、その第 I 層にまさしく「庄内式」甕(上田町 I 層甕B)が包含され、第 V 様式風甕と共存し、かつ下位の第 I 層にはまだ出現してないことを確認した。更にその胎土が田中琢氏が観察したと同じく暗褐色ないし黒褐色を呈することに注目し、これが「器壁を内面から薄く削る技法に伴なった焼成技法であろう。」と述べ、器種・製作技法・胎土の色調(焼成技法)の関連と共に更には煮沸用器としての機能に至る迄の一連の関連を指摘した。この種の胎土は金・黒雲母粒を含み地質的には河内地方の堆積土壌に関連するものとされ、今日では中河内南部~南河内北部のより限定された地域に関連することが理解されている。

こうしたことを前提とすれば、極めて重要な問題が提起されることになる。「庄内式」甕が黒 褐色系の色調と雲母粒を含み河内地方のより限定された地域の胎土を持っているとすれば、それ と伴出する他の土器群はいかなることになるのだろうか。和泉地方での観察結果による限り、 「庄内式」甕を除いてはこうした胎土を持つ土器はほとんどない。この状況は単に和泉地方にと とまらず、他地方等でも同様である。搬入地たる地域では当然のことながら、河内地方に於てすら「庄内式」甕のみが他と区別された特殊な胎土が用いられる現象は注目されよう。同一地域で製作された土器群中「庄内式」甕のみに特殊化された胎土が使用されたのか、あるいは甕のみが他の土器群とは異なった特定の地域で製作されたのか、論議が分れよう。田中琢氏が、尖底気味の丸底・内面箆削り技法・細かい叩き目・刷毛目調整等に特徴付けられる甕をもって「庄内式」を規定付けたにもかかわらず、氏が一括紹介した他の土器群がいかにその標式的甕と関連するのかは十分検討されてはいなかった。胎土のみならず形態や製作技術からも両者の共通性はほとんど検証されないのが現状である。例え伴出しても型式学的に考える限り両者は明確に分離されるのが正当と考えられる。

それでは型式学的に「庄内式」土器が厳密には特定の甕のみに該当するとすれば、それ以外の土器群はいかなる呼称がなされ得るのか。いわゆる「庄内式」甕に顕著な内面箆削りや底部の尖底に近い丸底化・細かい叩き目や刷毛目調整といった諸技術は、同時代の畿内各地方ではほとんど確立をみないまま「布留式」の時代を迎えることになる。即ち「庄内式」甕にみられる先進的な土器製作の技術はある限定された特定集団のみの所有であり、他地域の諸集団はその土器を大量に搬入しつつも全くその製作技術をとりいれることはなかった。その甕が使用されている時代という意味で「庄内式」を用いることは可能だが、各地の実態を重視する立場をとればあくまで特定集団の作り出すその甕のみに該当さすのが妥当であろう。こうした状況は、各地で第V様式風の伝統をそのまま受け継いだ多くの土器群と明確な河内地方からの搬入品たる「庄内式」甕と共存出土することにより検証される。そこで第V様式以後「庄内式」を特徴付ける新技術が出現する時点をほぼ境にし、それ以前の土器群を「第V様式」、それ以後継続して第V様式の伝統をほぼ受け継いで製作され続けるものを「伝統的第V様式」と呼んで区別する。もちろんすべての土器を無制限に総称するのではなく、この時期には他地方の各種土器群の搬入も考慮されるが、これ等を「伝統的第V様式」の土器群に含み込む意図はない。

さて田中琢氏は「庄内式」提唱の時点で「古墳時代の土器が土師器であり、甕の内面へらけずりに代表される技法が畿内の土師器に固有のものならば、現在さかのぼり得る最古の土師器である。」とした。やはりこの場合でもそうした技術による甕のみを限定して「土師器」とするのか、あるいは伴出する土器群全体を「土師器」とするのかが不明確である。筆者はこの「庄内式」甕が畿内諸集団に対して搬出・供給されるべくかなり規格性を持っていること、河内中~南部のより限定された地域に於てある特定の(諸)集団により製作された可能性が考慮されること、煮沸用という限定された機能を持たせた一つの器種のみが大量に製作されていること、供給・搬入を受けた消費集団が煤の付着状況の画一性からみてある一定の使用法が限定された可能性が強

いこと、等から「庄内式」甕に「統率化された土器製作の専業集団が製作した土器」との可能性を認め、こうした意味から最古の「土師器」に該当させる。古墳出現前夜の集団関係を論じた都出比呂志1974年は、「これを古墳出現時の土器と認めない立場に立ち、土師器と呼ばないで弥生式土器に含ませようとすれば、畿内第 V 様式との連続面と共に、内面箆削り技法の西からの伝播が加わっている点も考慮して、これに畿内第 V 様式の呼称を与えては如何であろうか。」と提唱した。しかし和泉の地ではあくまでこの時代に「庄内式」甕を製作しているのではなく、これを搬入しつつも前代からほぼ継続して「伝統的第 V 様式」土器群を製作している事実があり、こうした意味から同時代の土器でも先進的な庄内式甕を「土師器」とし、「伝統的第 V 様式」土器群を「弥生式土器」と区別するのも極めて妥当性があると考える。

なお「庄内式」甕の器表面を観察すれば、かなり厚味をもって煤が付着していることが通例である。より古い「第 V 様式」や「伝統的第 V 様式」の煮沸用甕表面が調々に複雑なパラエテーを持つこととは対照的である。「庄内式」甕の濃い煤は、酸素供給が不十分な方法での使用が限定され、中世の羽釜類の器表面の煤付着状況程はいかないにしてもかなり近い様相をみせており、あるいは「カマド | 状施設の利用も推定される。

ところで豊中遺跡「河川」状遺構出土の「庄内式」甕は当然のことながらその基本的特徴に於 ては一般的なものと共通するが、細部については若干の特色が観察される。法量や器形について は問題ないが胎土中には全般的に雲母粒がより細かいものが多く、観察が困難なこともある。ま た色調が黒褐色や暗褐色のものもあるが、かなり灰色味が強くなってきている。更に形態的なこ とでは、口縁端部が明確に上方へつまみ上げられているものの他に、方形や丸味を持ってそのま まおさまる例が多くみられる。「上六万寺~北鳥池式では口縁部外面のヨコナデが強調されて二 段に外反する口縁形態となる。そして、この種の口縁は北鳥池以後、退化しながらも上田町【式 の丸底で内面箆削りを行なう甕にまで存続する。 | 芋本隆裕・稲山数十1975年という河内地方の 口縁端部の流れからみれば、端部が上方へつまみ上げを特徴とする通例の「庄内式」甕より更に 退化した様相と言える。これは豊中遺跡内に於いて第1次調査でのやや先行するAV-3土器群 中には13個体以上の「庄内式」甕が出土したが、いずれも黒褐色を呈し口縁端部が上方へ明確に 突出したし、C地区の最も新相の庄内式甕が丸くおさまる口縁端部を持つことからもいえる。細 部の特徴を問題とするには理由がある。時代的には「庄内式」甕の次に来るべきは「布留式」甕 だがやや内弯気味にのびる口縁部と内側に肥厚する端部をもってその基本的特徴の一つとされ、 両者に細部ながら相反する流れをみせている。加えて、形態・製作技術・胎土といった基本的特 徴についても「庄内式」甕と「布留式|甕とは、内面篦削り技法を除いて共通しないことは、両

者の相対的関係の実態を明白に示している。田中琢氏が「庄内式」甕を「布留式」甕の時間的先行土器として位置付けたのは適確な作業だが、両者の直接的な相対関係を必らずしも明確にしていたとは言えない。なおまだ現在に至っても「布留式」土器群の成立経過は明らかではないが、各地の「伝統的第V様式」や河内の「庄内式」以外の「布留式傾向」甕を既に生産している集団の存在が考慮される。「庄内式」甕の粗雲母粒を含み黒褐色を呈する胎土から、極細雲母粒を含み灰色味の強くなる胎土への大まかな変化についてはいくつかのことが考えられよう。従来の研究から衆知されるように河内地方中~南部の平野部の沖積土壌中には通例極めて粗い雲母粒が包含され、そうした胎土や色調の変化は使用粘土の変化や製作地の変化と理解することも可能である。製作地の変化を認めない限り現時点の認識では「庄内式」甕に用いられる胎土がやはり煮沸用としての機能に資する目的で人為的に配合されたと考えている。この場合より粗い雲母粒を含む堆積土壌から、より細かい丘陵地土壌への配分移行が考えられる。

最近の各地の遺跡でもこの「庄内式」甕の実態が明確にされつつある。今後の課題としてその 生産地の実態究明が必然となる。「庄内式」甕に関する限り消費地での甕はすべて使用痕跡たる 煤が付着しており、これに対しおそらく生産地では当然のことながら煤が付着していない可能性 が極めて強い。かつ器壁3㎜程度という高度の技術による製作過程では、その中途時点で破損・ 放棄された未使用の「庄内式」甕片が非常に多いと考えられる。こうした諸資料の発見される遺 跡がまさしく「庄内式」甕の製作地でもあり、今後それらの資料発見を課題とし河内中~南部の より台地上の踏査を実施して行きたいと考えている。

Ⅳ 「伝統的第V様式」土器群について

和泉地方に於て「伝統的第 V 様式」土器群を一括出土した代表的遺跡・遺構として、池上遺跡(I・K・C II・B-10地点 土器溜遺構他)、上町遺跡(「井戸」状遺構)、豊中遺跡(「河川」状遺構他)をはじめとして極めて多数にのぼる。この他池上遺跡やその周辺に群在する森・七ノ坪・古池北・古池・要池・上池・府中・大園・伯太・伯太北といった諸遺跡でも「伝統的第 V 様式」あるいはそれに後続する土器群の出土をみているが、現時点ではいずれも発掘もしくは整理中であり、将来より一層それらの実態が明確にされよう。対してこの地に於ける標式的な「第 V 様式」土器群を一括出土した遺跡・遺構としては、池上遺跡(I・K・B J地区 2号井戸及び3号井戸 他)があげられる。

「過渡期!

最も先行する「過渡期Ⅰ」の時点に位置付けられる池上遺跡・(Ⅰ・K・C・Ⅱ・B-10地点

土器溜)では、甕・高坏・壺等が確認されているが、「庄内式」甕の伴出は全くない。特徴の観察しやすい甕は2個体あり、いずれも上・中・下部の接合をもって胴部を成形している。外面は叩き調整だが、上位は水平方向、中位は水平方向と左下り、下位は左下りと明確に区別される。内面は平滑にされ、箆削りは施されない。高坏は「第V様式」を受け継いで、続状の坏部及び屈曲して外反する口縁部の坏部を持つ二種が存在する。前者はこれ以後ほとんどみられなくなる。

「過渡期Ⅱ

それに後続する第 \blacksquare 段階に位置付けられる上町遺跡(「井戸」状遺構)では、甕・壺・高坏・鉢・コップ形土器・短頸壺等が確認されており、若干ながら「庄内式」甕片も加わる。また注意されることは、概報作成時には識別されなかったが10個余の製塩土器脚台部の出土をみている。現在この地方で最も先行する製塩土器であるう。甕は平底で内面は箆削りを施こされない。なおまだ壺・高坏・大型鉢・コップ形土器等は「第 V 様式」の伝統を強くとどめているが、高坏・壺には粗雑ながら装飾性を持つものが含まれる。櫛描き波状文・円形浮文・凸帯・竹管文により構成されている。

今回調査された豊中遺跡(「河川」状遺構)では、甕・壺・鉢・高坏・坏・坩・小型器台・手焙形 土器等により構成される多数の土器群と40個体を上まわる「庄内式」甕の出土をみた。加えて西 岸に位置する住居址及び周辺地域他から20個体近くの製塩土器の出土がある。壺・高坏には極め て装飾性の強いもの、高坏には箆磨き暗文の施こされるものや半球形の坏部を持つ新たなもの等 が認められるも特徴である。上町遺跡出土土器群と似た器種構成をなすが「庄内式」甕が著じる しく多いこと、坏・坩・小型器台といったより新しい器種を含むこと、高坏に新たな技法・器形 (これは搬入品と思われる)のものを含むこと、更には全体の器形から判断してより新たな様相 が徐々に認められわずかに後出するものである。しかし基本的には「過渡期Ⅱ」の組み合せ構成 を持ち、上町遺跡をより(古)相、豊中遺跡をより(新)相として理解することができる。やは り甕には内面箆削りは施こされず以前の伝統をそのまま受け継いでいるが、口縁端部にキザミを 持つものが多いのは特徴的である。壺・高坏の装飾はこの時点では確立し、ある一定のパターン と丁寧さをみせている。即ち壺は口縁部を櫛描波状文と竹管文を有した円形浮文、頸部下端には 指突文をつけた断面三角形の貼り付け凸帯、体部上端には櫛描波状文を施こす。体部は欠損し不 明である。高坏は坏口縁部と脚裾部を櫛描波状文・竹管文・円形浮文・櫛描直線文をもって装飾 する。壺については、胎土・成形技法・調整法から判断して在地系の土器と考えられる。「庄内 式 | 甕はいずれも河内地方からの搬入品で、「伝統的第 ▼様式 | 甕と比較してその約30%以上を 占める数となる。口縁端部が丸くあるいは方形におさまる等この種の甕では(新)相を呈するも

のが多い。小型器台は小型丸底坩あるいは小型鉢と組み合わさって「小型三種」土器群として次の来るべき「布留式」を特徴付けることになるが、今回は6個体の小型器台のみ単独出土した。外からの影響をもって出現したのだろうが、それらの胎土・製作技法がこの地に一般的な土器群と共通する。粗い叩き目及び箆磨き調整が施こされている実例が含まれる。加えていずれも外面に赤色のスリップが塗られていないことが、「布留式」小型器台より先行するものであることを示している。「関東において、小型器台は前野町期・小型丸底壺は五領期にそれぞれ出現し、古墳時代の開始とともに両者は共存するようになる。しかしこれは関東だけに見られる現象だけでなく、各地に見られる現象である。」(高橋一夫 1975年)という指摘に合致しよう。

「過渡期Ⅱ」

豊中遺跡℃地区では、やや時間巾をもって「伝統的第▼様式」土器群として、甕・壺・高坏・ 鉢等に加えて極めて「布留式」を呈する甕・小型丸底坩・小型鉢・坏・高坏・他が多数加わる。 即ち、「過渡期Ⅲ」の組み合わせ構成をもつこの時点では「庄内式」甕の存在はほとんどなく数 片にとどまる。それの口縁端部は丸くあるいは方形におさまり、小さな平坦底がとりつくという 極めて新らしい様相を呈する。「伝統的第Ⅴ様式」甕は前代と連続するが、内面をはっきりした 粗い刷毛目調整するものが含まれる。壺・鉢の主体となるのはやはり前代と連続装飾を持つ壺も 遺存する。装飾パターンは基本的に変化ないがかなり簡略化され波状文も乱雑に描かれる。高坏 は外反する口縁部の坏を持つものが少数ながら存続する。この時期の特徴はやはり多数の「布留 式」土器群であり、細かい横方向の箆磨き調整される小型丸底坩・高坏・坏・小型鉢や刷毛目調 整される球形体部の甕・楕円形体部の壺が多数加わる。こうした組み合わせ構成は北接する七ノ 坪遺跡出土土器群と共通し、この豊中遺跡C地区がその遺跡の一部であることが理解される。こ の時期、即ち「過渡期■」に追加される「布留式」土器群はいわゆる「小若江北式」土器群より わずかに先行するものである。同様の組み合わせ土器群を出土する遺跡としては他に土生遺跡 (A地区・溝状遺構)がある。前後やや時間巾をもって堆積したものだが、「伝統的第Ⅴ様式」 甕・壺・高坏・製塩土器他「庄内式」甕、「布留式」甕・小型丸底坩・小型器台・小型鉢他、高 坏他が認められる。

「布留式」

このように組み合わせ構成の変化をみせつつも、やがて「布留式」土器群が「伝統的 第 ▼ 様式」土器群に代って主体をなす。この時期の標式的遺跡として古池・上池遺跡があり、その「布留式」土器群の検討については芋本隆裕氏が第 6 章 3 で実施するところである。

「伝統的第 V 様式 |

こうした「第 V 様式」~「布留式」の移行過程を示す和泉地方に於て、その在地系土器群とし て主体をなす「伝統的第▼様式」土器群はおおむね次のような本質性を持つ。胎土は個々複雑な 色調を呈しつつも、黄色味の強い色調で、砂粒を含むことが一般的である。この地方の地質は砂 岩をもって主体となし、含まれる砂粒もこれに関係する。焼成は全般的に不良なものが多く、軟 質である。その為器壁表面が剝落することが多い。「庄内式 | 甕や「S字状口縁 | 甕他著じるし く器形や製作技術の異なる各種土器群の胎土とは識別されることがある。器種は壺・甕・高坏・ 鉢・坩・小型器台・坏・手焙形土器・コップ形土器があるが、そのいくつかは時間的により追加 されるものも含まれる。これに製塩土器・蛸壺形土器等が遺跡の性格と相まって追加されること がある。「第 ▼ 様式」を特徴付けた長頸壺・器台は全く欠落する。当然長頸壺等によくみられた 記号・絵画も全く描かれることはない。基本的な製作技術は粘土紐積み上げ・分割成形・粗い叩 き調整・横ナデ調整・ナデ調整・部分的刷毛調整・指圧・キザミ・箆磨き調整等が用いられ、底 部は平底を原則としている。技術的には「第Ⅴ様式」のものをほぼそのまま踏襲していると言え る。細かい叩き目・甕の内面箆削・刷毛調整の多用・箆磨き暗文・細かい横箆磨き・丸底・坩外 面の削り他といったより新しい技術は原則として用いない。より先進的な「庄内式」甕や「布留 式傾向│甕の出現が、「伝統的第▼様式│土器群の技術体系とは別個の歴史的状況で行なわれた ことは極めて注目される。和泉地方ではそうした技術にかかる土器はいずれも搬入された可能性 が強く、そこにある特定(諸)集団の持つ土器製作技術が単に文化的伝播をもって簡単に移動し ない事実が確認されることになる。この時代に於ては既に土器製作の先進的技術はまさに特定 (諸) 集団の所有であり、単に文化的技術ではなくなっていたのであろう。とりわけ「庄内式」 甕が強い社会的側面に裏付けられて存在していたことは明らかである。ある生産物にかかわる保 守的状況と先進的状況とが共存しているこの時代に於て、和泉に於ける土器製作は「第▼様式」 の体系をほぼ踏襲し、まさに伝統性を遺存させつつ「伝統的第▼様式」土器群を製作し続けた事 実は、和泉地方の持つ歴史的立場を明確に示唆していると言えよう。

V 製塩土器

大阪湾の東側沿岸の和泉地方で弥生時代末~古墳時代前期の製塩土器が出土することが最近多くなった。豊中遺跡でも約20個体の出土をみた。従来より瀬戸内海沿岸諸地域や紀伊半島沿岸諸地域に於ける土器製塩の実態が究明されつつあるのに対して、両地域の中間に位置するこの地方では極めて不明で、現在ようやく同種資料の蓄積が開始されたばかりである。現時点で土器製塩に関し論述するにはまだ認識不足であり、これ迄の諸経過を簡単に整理し、代表的な製塩土器を

紹介するにとどめる。

さかのぼればこの地方で製塩土器の出土をみたのは1959年の高石市羽衣砂丘遺跡がある。それは既に森浩一『製塩についての二つの覚え書』1960年や近藤義郎『吉目良遺跡』1964年に紹介されている。だが出土数も少なく近藤氏の「目良式B類」にほぼ該当する高い脚台等が含まれるとわかった程度である。当時の「目良式土器」の分布は大阪湾沿岸で羽衣砂丘遺跡 1 ケ所に過ぎず、既に製塩遺跡の調査が集中されていた紀伊半島沿岸諸地域の著じるしい分布とは対照的であった。その地方での諸成果は、前記『吉目良遺跡』や、同志社大学『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学的調査報告』1968年としてまとめられた。

その後和泉地方ではいぜん製塩土器の出土をみなかったが、1971年西山要一氏は泉南市双子池遺跡に於てかなりの製塩土器を採集すると共に『泉南市双子池遺跡採集の遺物――特に製塩土器について』と題してそれらを紹介した。それによると、双子池遺跡は男里川の上流 2.5km、現時点の海岸線より 1.5kmの標高10~15mに位置する。遺物は双子池の周堤中の粘質黒褐色土層及びこの土層が崩壊して積った池底層中より採集された。弥生時代中期以降の土器や須恵器に混って出土した6個の製塩土器脚台を紹介している。高さ1~3cmを測る脚台は外面に指押痕を持ち、叩き目を持つものが3個体ある。遺存部から判断すると体部が細い筒状を呈するもの5個と反釣鐘状を呈するもの1個に区別される。そして「紀伊の弥生時代製塩遺跡、あるいは岬町、小島東製塩遺跡などを見ると、その立地は海浜や海に面する狭小な谷あい、狭小な孤島の海浜である。少なくとも双子池遺跡は、このような条件を満たさないし、とうてい塩生産を行なった遺跡とは考え難い。」と述べた。とりわけ、典型的な紀伊地方の製塩遺跡との立地条件の差異に注目したことは特記される。

また同年双子池遺跡の北東 6 kmの泉佐野市三軒屋遺跡では縄文式土器~土師器に混って 2 個の製塩土器の出土をみた。藤田正篤氏は「弥生式土器高环様土器脚部(タタキ文)、底面に指紋らしき痕あり、指整形か?弥生式土器・高环様土器脚部、内面指で斜めらせん状に成形した痕が10条程ある。外面も凹凸多し、指整痕か?、表面はほとんど灰白色、径 1~2 mmの砂粒 を多く含む。」と観察した。図示された 4 は双子池遺跡のものとほぼ同形だが、5 は高さ 6 cm弱の高い裾広きの脚台を持ち、若干異なる形態を持つ。この遺跡も現海岸線より約 3 km入り込む標高20m弱に立地する。

こうした諸経過を経て我々の眼前に製塩土器が出土したのは1974年の和泉市上町遺跡である。 この遺跡では「井戸」状遺構中より多数の「伝統的第V様式」土器群に混って10個以上出土した が、当時土器製塩に関する認識が不十分で、それらを製塩土器と識別し得なかった。『上町遺跡 発掘調査概要』(1975年)では、「今回確認された高坏は2種である。この他脚台のみにとどま るものも2種あり、いずれも高坏と断定されないので脚台として取り扱っておきたい。」と記述した。いずれも体部を欠損した脚台部だが、その器高が5cm以上~7cmと極めて大型であることが特徴である。それらを紹介すると次のようになる。

- (a) 高さ6 cm以上、脚端径約9 cmの非常に大型の脚台を持つ。3 個体ある。(1)は裾広がりだが、下半で内弯気味により広がる。外面下半には粗い叩き目、内面は極めて平滑。外面に白赤色の班点、上端は白赤色、(2)は中しぼりの中実柱状部と裾広がりの脚台を持つ。やはり下半でより広がる。外面下半に粗い叩き目、内面は平滑。全体に灰黄色。いずれも粗砂粒多し。(3)は裾部が欠損する。白赤色の部分がある。
- (b) 高さ6 cm、脚端径 7.5 cmの脚台を持つ。1 個体のみ。中実の高い柱状部に曲線的に広がる裾部を持つ。内外面とも平滑。柱状部及び裾内面は白黄色、裾部外面は灰黒色を呈する。細砂含む胎土。
- (c) 高さ5 cm程度、脚端径6 cm~ 7.5cm程度を測る。7 個を数え、数的には主体をなす。裾 広がりの脚台だが、下半でより広がるものが多い。外面には叩き目、内面には箆押痕がみ られる。(6)(7)のように上方あるいは下方より竹管状のもので押圧されるものや、(5)(6)のように体部との接合部に三方の切り込みが施こされるものがある。ほとんどが白灰色に近い 色調に変化する。細粒を含む胎土。

伴出する土器群は、「過渡期 I 」のより前半に比定され、現在和泉地方の製塩土器では最も先行する。上町遺跡は信太山丘陵から大阪湾に向って派生する標高約17mの小丘陵上に立地し、現在の海岸線より約2 kmに位置する。当時の高師浜が現在よりかなり入り込んでおり、それでも1.5kmは離れていたと考えられる。

更に同年、岸和田市土生遺跡 A地区「溝」状遺構中他より 100 個以上の製塩土器が出土した。 一部図示されたが多様な形態が混存している。この遺跡の第2阪和国道予定路線内の調査では、 竪穴住居址が発掘され、製塩土器の出土はそれを含めて広範囲に及ぶ。現在岸和田市教育委員会 が発掘調査中で、更に実態が究明されよう。遺跡は標高15m程度の沖積平野上に立地し、現在の 海岸線より2 km離れている。

今回調査の泉大津市豊中遺跡では約20個体の製塩土器が出土した。個々については既に別記した。注目されるのは竪穴住居址中及びその周辺からいくつか出土したことで、その使用地がかなり明確となった。やはりこの遺跡も標高12~18mの低位段丘下位面に立地し、海岸線より約2㎞離れている。

最近大阪府教育委員会による和泉市伯太遺跡の調査でも製塩土器が多数出土し、現在整理され

ている。この遺跡は標高20m近く、現在の海岸線より約 2.5Km離れた平地に立地する。この他最近では和泉市教育委員会による伯太北遺跡の調査でも多くの製塩土器の出土がある。標高約15m 弱、海岸線より 2.5Km離れることは他遺跡と共通する立地条件を持つ。

さてこれ迄に把握したことを一応整理してみよう。

- 1. 大阪湾の東側沿岸地方で弥生時代末~古墳時代前期の製塩土器を出土した遺跡として、双 子池・三軒屋・土生・伯太・伯太北・豊中・曽根・上町・羽衣砂丘他が知られている。
- 2. 羽衣砂丘を除き、現在の海岸線より 2 Km程度内陸の標高10~20m程度に立地し、紀伊半島 沿岸の製塩遺跡の立地とは極めて異なる。
- 3. 豊中・土生では竪穴住居址内及びその周辺より製塩土器が出土し、他遺跡も諸状況からその可能性が強い。製塩土器は10~数 100 個と比較的少ない。また脚台部が遺存するに過ぎないが、その多くに熱あるいは化学反応による胎土・色調の変化が観察できる。現時点では「炉」の検出はない。同様の状況は6世紀代に至る諸遺跡迄も認められる。

次に製塩土器の分類をする。規準は主に脚台部の形状をもって行なう。

- Ⅰ類 脚台高6cm以上、脚端径約9cmを測る極めて大型の脚台。体部は不明。脚台は大きく裾 広がりを呈する。外面下半に叩き目。
- ■類 脚台高6cm以上、脚端径約7cmを測る極めて大型の脚台。体部は不明。高い中実柱状部と広がる裾部を持つ。外面には叩き目が施こされるもの(a)、平滑なもの(b)がある。
- ■類 脚台高約5 cm、脚端径約6 cmを測る裾広がりの脚台。なおまだ上半に柱状部のなごりを とどめるものもある。筒状の体部がとりつく。外面に叩き目が施こされるもの(a)、平滑な もの(b)がある。
- Ⅳ類 脚台高約3cm、脚端径約6cmを測る裾広がりの脚台。外面に叩き目の施こされるもの(a)、平滑なもの(b)がある。筒状の体部がとりつく。
- **V**類 脚台高約2cm、脚端径5cm弱の小型裾広がりを呈する脚台、筒状の体部がとりつく。外面に叩き目が施こされるもの(a)、平滑なもの(b)、指ナデされるもの(c)がある。
- Ⅵ類 脚台高約2cm、脚端径約5cmの小型裾広がりを呈する脚台、反釣鐘状の体部を持つ。外

面にはかすかな指ナデ痕。

¶類 脚台高約2cm、脚端径約4cmの極めて小型裾広がりの脚台、反釣鐘状の体部を持つ。外面は指ナデがなされる。

以上の【~¶類に形態分類がなされる。一応編年試表を次に作成したが、正確な型式編年はより検討して今後作成したい。 (第1図)

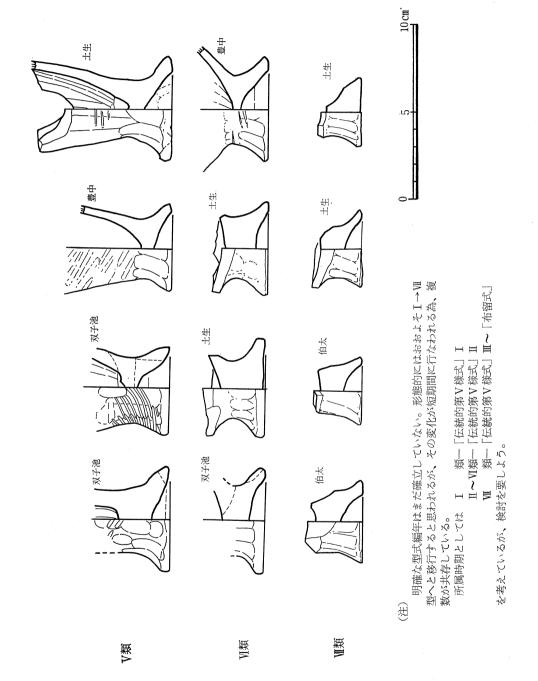
そこで紀伊半島沿岸地域の製塩土器と比較する。『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』では弥生時代~古代迄の製塩土器をA~G類の7型式に分類し、B類は弥生時代後期、C類が古墳時代前半期、D、E、F類が古墳時代後半期、G類が奈良時代をそれぞれ中心とするものと考えた。注目されるのは、A類が唐古第IV様式土器に近似することから、弥生時代中期後半にさかのぼる蓋然性をもつものとし、「A類の製塩土器がもし弥生中期にまで遡るものであるとすれば、弥生後期から古墳時代にかけて各地に出現する脚台付製塩土器が、弥生後期にまず備讃瀬戸において成立し、これが各地に影響を与えたとする従来の見解を改めなければならないことになる。」と指摘した。先立って近藤義郎氏は、弥生時代後期後葉の製塩土器として「目良式 B類」を設定していた。それは同志社大学のB類にほぼ該当する。そして「弥生時代後期のある時点に、北は大阪湾東岸から南は紀伊半島南端から東部沿岸にかけての広い地域に、ほぼ一斉に目良式B類土器を使用する製塩がはじまったことを示している。この時点は、備讃瀬戸地方における台底付師楽式土器による製塩の開始とほぼ相前後するものであって、現在知られている限りでは、この地方が西日本に於ける土器製塩の先駆的な地方の一つであることを物語っている。」と記述した。

和泉地方の弥生時代末~古墳時代前期の製塩土器は一応**【~**¶類に分類したが紀伊半島のものと次のように対照される。

和泉 **I II II IV V VI VII** (類) 紀伊 A B C (類)

その結果従来迄に紀伊地方であまり出土しない新たな和泉【及び【類の存在が知り得た。即ち、紀伊のA類より更に高い脚台のものと、高い柱状部と広がる裾部を持つ脚台のものである。 体部の形状は不明。形式的には紀伊A類=和泉【類に先行することは、【類にまだ柱状部のなごりをとどめることからも理解される。和泉地方で【・【類が出土する遺跡として上町・土生・豊

第1図 和泉地方に於ける製塩土器 (弥生時代末~古墳時代前期) 試表 土生 垂 LEJ 上町 # 土生 上 IV類 田類 II類 I類



中遺跡がある。特に【類は「過渡期』」のより古い段階の上町遺跡のみ出土し、それ以降の諸遺跡からの出土はない。「過渡期』」以前に出現する可能性も考慮されるが、現在では上町遺跡の時期が最もさかのぼる。』類は「過渡期』~』」の土器群に混存し出土するが、上町遺跡や豊中遺跡からみて「過渡期』」に中心を置くと理解される。最も後出する¶類は「布留式」に伴出すると考える。全体として紀伊地方と和泉地方と共通に変化するがいくつかの問題点が明確となる。即ち、紀伊地方にはあまり出土しない和泉』・』類の存在が知られ、その所属時期が「過渡期』」もしくはそれを若干さかのぼる可能性があり、和泉』類は「過渡期』」に一般的で形態的には森・白石氏による第『様式の可能性があった紀伊A類と共通する。今後両地方の関係がより検討される必要があるが、少なくとも紀伊A類の所属時期が弥生時代中期後半よりはむしろ、私見では「伝統的第『様式」に伴出すると考える。より高い脚台群の【類が最も先行する製塩土器として問題になろう。だが現在【類の出土数は少なく類例発見が必要となる。

更に把握できたことを整理する。

- 1. 和泉地方に於ける弥生時代末~古墳時代前期の製塩土器は整理上【~¶類に分類される。 なおまだ十分な型式編年は確立していないが、全体としておおむね【類 → ¶類へと変化すると考えている。単期間の為当然共存する。
- 2. 形態的には最も先行する高い脚台の【類は「伝統的第 V 様式」第 段階の古い時点に伴出し、出現はそれより若干さかのぼる可能性がある。だが「第 V 様式」に迄さかのぼる証拠はない。また 【・ 類とも南接する紀伊地方ではあまり出土しておらず、和泉地方に先行形態がある。後出する和泉 類と紀伊 A 類以降は両地方ともほぼ共通する様相をもって変化する。

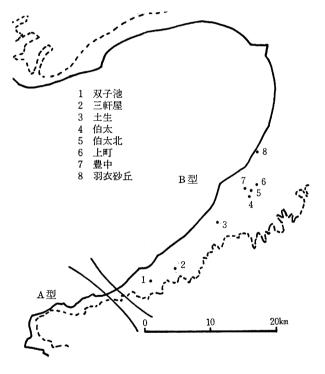
加えて瀬戸内海北岸地方の製塩土器と簡単に比較しておこう。この地方では弥生時代中期には 既に土器製塩が確立しており、はるかに紀伊・和泉地方といった大阪湾沿岸諸地域より先行する。藤田憲司、柳瀬昭彦1974年によれば、この地方の製塩土器はA~Eタイプに分類され、Aタイプは中期末に相当する。基本的には外開きの脚台に深い体部がとりつく形態で、器形変化は一貫した流れとして理解される。体部外面の箆削り調整もこの地方の特徴である。和泉 II 類以後はかなり近似した形態を呈するとは言え、製作技法もかなり異なり、両者の直接的関係はなおまだ不明である。とりわけ和泉 I・II 類に該当する器形は全く瀬戸内海北岸地域には出土せず、製塩土器にみる限り両地域の土器製塩にはかなりの隔りが存在する。両地域の相対関係については更 に検討を要しょう。

以上のような諸状況を踏えて和泉地方の土器製塩の実態を概括しておこう。この地方で土器製塩が開始されたのは、現在の知見による限り「第 V 様式」以降の「伝統的第 V 様式」に入ってからである。製塩土器の形態はその出現期に於て瀬戸内海沿岸地域のものとは異なり、この地方の独自性が考慮される。また南接する紀伊地方の土器製塩よりは時期的にわずかに先行する。紀伊地方に出現するのは和泉 M 類の時点で、それ以後両者は継続並行することになる。和泉地方では製塩土器の出土は現在の海岸線より 2 km~3 km、標高10~20mに立地する遺跡に多く認められ、その数も数10~数 100 個と比較的少ない。可能性として住居地中及びその近辺に使用地が考えら

れる。これは海岸線に直面して立地 する紀伊地方の製塩遺跡とは立地タ イプを基本的に異にする。諸状況か ら判断して、現時点では生産――消 費の視点から整理上一応次のA~C 型に区別して理解しておきたい。

A型 海岸に直面するという製塩 にとっては積極的立地条件を 持ち、製塩土器の出土数は無 数とも言える多数に及ぶ。お そらく明確な製塩炉を持ち、 可能性として生産・供給を実 施すると考えられる。

第2図 和泉地方に於ける製塩土器出土主要遺跡



B型 海岸より数km内陸という製塩にとってはやや消極的立地条件を持ち、製塩土器の出土数が数10~数 100 個と比較的少ない。製塩土器がおそらく一般的集落内の住居内あるいは近辺での使用が考慮される。直接に製塩、二次加工あるいは塩の消費にかかるものかは不確定。私見では二次加工に関するのではないかと推定するが現時点では論拠は少ない。集落内消費が考えられる。

C型 海岸より数10km内陸という製塩にとっては全く否定的立地条件を持ち、製塩土器の出土

が全くないか極く少数にとどまる。内陸で出土する製塩土器は製塩遺跡より何等かの理由 で搬入されたと考えられ、当然塩は生産地よりの搬入され消費される。

以上のように近畿地方の製塩土器出土遺跡の性格をおおよその目安をつけて一応整理し、各地の先駆的作業に依拠しつつも、今後とも検討してゆきたい。

Ⅵ まとめにかえて

これ迄「庄内式」「伝統的第 ¥ 様式」土器群及び製塩土器に関する認識を述べてきた。短時間内の記述の為十分意を得なかったが、簡単に整理することによりまとめにかえる。

かって田中琢氏により「庄内式」と規定された土器は、私見ではその標式となる甕のみに該当し、型式学的には他の土器群とは異にする。胎土及び製作技術の諸点からその甕は河内地方中~南部のより限定された土器製作集団にかかる可能性を持ち、より山麓部に近い丘陵地域の集団と予想している。そして単一器種の大量供給を目的とした生産が行なわれ、畿内を若干越えた供給範囲を有し、かつこの製作にかかる先進的技術は集団の持つ専有技術であり、基本的には他集団、例え近接集団であっても、に伝授されることはない。この時代に於ける土器製作の技術はもはや文化的段階でなく、社会的段階に達していたのである。他集団は原則としておおむね「第V様式」を踏襲し「伝統的第V様式」土器群を製作していた。いわゆる「在地系土器」で地域内生産・消費が原則的には行なわれる。今回調査された豊中集団は、基本的には「伝統的第V様式」土器群を持ち、「庄内式」甕の大量供給を受け、両者を消費していた和泉の一集団である。「布留式」への移行過程は本稿ではあまり触れなかったが、論理的には各地の「伝統的第V様式」及び河内の「庄内式」がそのまま「布留式」へ直続しないことが明確となる。

従来実態が不明であった和泉地方の土器製塩は我々もようやく資料集収が開始することになった。現時点ではこの時代の製塩土器を【~VII類に分類し、【類が「伝統的第V様式」第 II 段階に属すると共に紀伊A類は和泉 II 類に該当し、わずかながら先行形態をこの和泉地方に認めた。そして整理作業上紀伊の土器製塩を「生産・供給型」、和泉の土器製塩を「生産・消費型」と推定した。結果として紀伊の土器製塩諸集団と河内の「庄内式」甕生産(諸)集団とは基本的に共通する社会的側面を持つことを理解し、まさに和泉以外の地域には「政治性」への胎動が具体化していたのである。

最後に弥生時代~古墳時代に至る過渡期の史的位置を明確にすべく、それに先立つ周辺の遺跡 群動向を概観し、諸認識を重視させておきたい。 豊中遺跡は大阪湾東側沿岸に位置し、この地の拠点的集落として存在した池上弥生時代集落の西南 200mに接在する由に池上遺跡の動向が前提となる。第 【様式(新)段階に出現の池上遺跡は、当初よりおそらく環濠としての大溝や方形周溝墓等弥生集落の基本形態を完備し、この時点で環濠の範囲・住居域・墓域他諸機能域が設定され以後数百年間はほぼ踏襲される。集団の労働力と共同性は、大溝掘開やたぶん水田開拓・諸機能域設定の諸作業に発輝され、日常生活でも諸廃棄物を住居域と一定距離の窪地に投棄する等規則性を認めた。対外的には隣接の河内・紀伊地方と諸関係を持ち両地方の土器・石材等を搬入されるが、石材の多様性から交換体系の確立は不十分であると考えられる。前期の遺跡としては和泉地方沿岸部に四ツ池・池浦・春木八幡山他の遺跡が知られ、狭小な平野部入口に位置する四ツ池遺跡も同様に拠点的集落としての役割を果すことになる。

中期初頭以降には近畿中央部に広範囲な生産物交換体系が確立し、生産物移動が顕著となる。 池上では更に外側へ新たな大溝が掘開される。当然共同労働の結果だが、矛盾現象も表面化す る。即ち有時的大量労働力と共同性で掘開の大溝中には、無数の廃棄物が投棄され、大溝埋没を 著じるしく早める結果となる。つまり日常生活の潜在的非共同性が、生活集団全体の持つ有時的 共同性と対抗し始める。しかし継続して労働力結集はなされ埋没大溝の再掘開を 幾度 か繰り 返 す。中期中頃には大溝が更に外側へ掘開され、おそらく灌漑用水路の機能を持つべく集落外より の水路と結合し、前代の大溝が全く滞水していたこととは異なる。また住居個々の自立性と相ま って、近接して貯蔵穴・廃棄物処理穴も設けられる。対外的には確立した交換体系に裏付けられ ることにより、各拠点的集落は生産・消費型の経済体系を持つ。集団内部に於ては前期以来複数 の小墓群に加え、中期後半には集落南側に複数の大型方形周溝墓群が新たに出現し、ここに明確 な下位単位群の確立が表面化することになる。更に前期以来十数回に及んだ大溝再掘開は中止さ れることにより、集団全体の共同性の視覚的象徴たる環濠が消滅する。第Ⅳ様式の墓群が大溝埋 没後に重複することから、その消滅時期が第Ⅳ様式前半期頃には確実に生じていたことが理解さ れよう。こうした現象とほぼ時を相前後して周辺平野部の各地域に新たな遺跡(集落)の出現が 急激となる。既に中期前半に先行していた伯太遺跡や大園・森・穴師・伯太北・七ノ坪・要池を はじめとした諸遺跡がこの時期に存在し、おおよそ視覚的には池上集落を核としたドーナツ現象 を呈する。その出現背景は理解しないが、当然池上集団内部にみる下位単位群の確立及び環濠の 消滅等がそうした状況の前提となるべき現象と思われる。この時代に於ても近畿地方中央部では 確立した交換体系に裏付けられ、各地域集団間を各種土器類や石器素材をはじめとした各種生産 物の移動事実が観察されると共に、各地域の拠点的集落を核とした生産・消費体系をもって地域 社会を構成していた。だが第∏様式の多数の諸遺跡は何故か単期間をもってその存続を一時中止

する。対して後背丘陵上にはいわゆる高地性集落たる惣の池・観音寺山・上松中尾といった諸集 落が急遽出現し、和泉地方で活発な遺跡群動向を展開することになる。この地方に於ける高地性 集落の出現は第Ⅳ様式末~第Ⅴ様式前半という極めて限定された時間に実施され、第Ⅳ様式での 平地遺跡の減少と相まっていることが特徴である。その時点では交換体系そのものの破壊は決定 的なものではなく、平地集落でも高地性集落でも各地の石器用石材や西ノ辻【式土器等の移動も 行なわれている。高地性集落の中でもとりわけ大規模な観音寺山遺跡は 103軒の住居址と二重の 環濠がみられ、集落形態としては中期池上遺跡とほぼ共通する。かつ数群の住居址群は明確な複 数下位単位の存在を示し、池上遺跡との関連性をより検討される必要を考えている。第▼様式の 池上遺跡は、住居址・井戸・方形周溝墓他をもって大規模に集落構成されており、生活領域が前 代のをほぼ踏襲されるに加えて、方形周溝墓は前期以来の墓域に追加され、中期後半に出現した 二群の大型方形周溝墓群のいずれにも全く追加されることはない。この注目すべき状況は中期大 型方形周溝墓群を造営した階層諸成員の欠落とみられ、周囲に出現した中期後半諸遺跡との関係 が注意されると共に、後続する高地性集落群との関係が更に注目されることになる。和泉平野を 概観すれば、現在明確な第Ⅴ様式の遺跡としては池上・七ノ坪・要池・伯太遺跡等が知られてい るが、池上遺跡を除いてはいずれも集落址としての遺構は確認されてはいない。現時点で言える ことは、第√様式の平地遺跡が第√様式及び伝統的第√様式の遺跡数と比較して著じるしく少な いことは指摘されよう。可能性としては池上集落への回帰もしくは高地性集落への移動が当然考 えられる。極端に図式的に整理すれば、池上(平地)――惣の池・観音寺山・ 上松 中尾 (丘陵 上) が対比されることになり、第 V 様式に於ける和泉地方平野部での大規模集落としてはまさに 池上遺跡のみという異常な状況を呈することになる。また観音寺山遺跡がなおまだ中期的集落形 態を持つに対し、池上遺跡は既に環濠を持たないに加えて、方形周溝墓は中期の複葬から後期は 単葬へと移行し、群構成する井戸は各群毎に独自の小祭祀を持つ傾向を示すという個人や小集団 の分化が顕著になる状況をみせている。この時代に於ては土器にみる限り、西ノ辻【式以降~庄 内式に至る間しばらく他地方のものが搬入されることは極めて少なくなり、確立した交換体系に より供給されてきた石器用石材による石器製作も中止される。そして全く供給体制を異にする鉄 製品にすべて変換する。おそらく従来の近畿地方中央部の中期大社会を越えた地域との強い関係 をもって鉄製品あるいは鉄素材が搬入されることになったのだろうが、従来の土器移動の中止と 遠隔集団との強固な結び付き及び異常な集落配置と立地といった諸状況は、極めて政治的色彩を 帯びた感を呈する。

こうした諸状況を経て、今回視点をあてた「伝統的第 V 様式」の時代を迎える。既に高地性集落は放棄され、著じるしい数の小集落が平地上に設定されることになるが、もはやこの時代には

かっての池上集落という拠点的様相を持つ大規模集落は分解しており、極めて広範囲に立地条件 に応じて点存あるいは列存する小集落群として視覚的には拡散的に分布するという状況を示す。 今回とりあげた豊中遺跡もまさにそれらの中の一つである。この時代に於ては幾度か述べたよう に河内あるいは紀伊地方では生産・供給型の諸集団の出現をみ、既に政治的社会への移行が具体 化かつ表面化しつつある。おそらく相前後して出現する大規模な前期古墳を有する畿内中央部の 諸勢力とのかかわり合いをもっていることは当然考えられよう。しかしかなり等質的様相を呈す る多数の小集落が群存する和泉地方に於ては、なおまだ明確な生産・供給型諸集団の存在を確認 しておらず、可能性として生産・消費型の傾向をとどめていると言えよう。この時代に於ても和 泉地方ではなおまだ現象的に明確な政治的動向を検証することは現時点では困難である。激しい 政治的社会への時代的接近という歴史の流れの中で、伝統的な地域社会性を強く遺存させつつ、 この地で明確に政治関係が具体化かつ表面化する四世紀後半へと時代が進むことになる。

(付記)

本稿作成については、和泉地方に於て発掘調査に従事される多数諸氏をはじめとして西山要一 氏には有益な御教示・資料提供を、更に土器製塩に関しては近藤義郎氏に多くの御教示を受け た。文末ながら記して感謝いたします。 (酒井龍一)

引用及び参考文献

安達厚三・木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60号第2巻

石神怡 1975 『大園遺跡発掘調査概要』 [[

石部正志 1970 『鶴山地区信太山遺跡(その2)調査概報』

1975 『古墳文化論——群集小古墳の展開を中心に』『日本史を学ぶ』 I 原始・古代

石野博信 1972 「奈良県纒向遺跡の調査」『古代学研究』第65号

芋本隆裕他 1975 『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』

宇田川誠一 1959 『羽衣砂丘遺跡調査報告』 (大阪湾沿岸の古代漁村集落の一資料)

置田雅昭 1974 「大和における古式土師器の実態」『古代文化』第26巻第2号

近藤義郎 1964 「古目良遺跡」『田辺文化財』 8

酒井龍一 1975 「和泉における弥生式~土師式土器の移行過程について」『上町遺跡発掘調査概要』

佐原真他 1970 『池上・四ツ池』1970

高橋一夫 1975 「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究』 2

田中琢 1965 「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号

都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号

坪井清足 1965 『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』

原口正三 1969 「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府島上高等学校研究紀要』

原口正三他 1972 『船橋 I · Ⅱ』 (復刻)

藤田憲司・柳瀬昭彦 1974 「上東遺跡」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』

藤田正篤 1971 「三軒屋大斗木遺跡その後」『会報』 6 和泉古代文化研究会

西山要一 1971 「泉南市双子池遺跡採集の遺物――特に製塩土器について」『会報』 7 和泉古代文 化研究会

森浩一 1960 「製塩についての二つの覚え書」『古代学研究』第23号

森浩一他 1968 『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』

森浩一他 1968 『観音寺山弥生集落調査概報』

第2阪和国道内遺跡調査会 1971 『池上・四ツ池遺跡』16

1970 『池上・四ツ池』

1971 『第2阪和国道内遺跡調査報告書』 4

1973 『第2阪和国道内遺跡調査報告書』1~3

豊中・古池遺跡調査会 1974 『豊中・古池遺跡発掘調査概報』その [

大阪府教育委員会 1974 『七ノ坪遺跡発掘調査概要』

1973 『池上遺跡発掘調査報告書』Ⅱ

1974 『池上遺跡発掘調査報告書』Ⅲ

1975 『大園遺跡発掘調査概要』Ⅱ

和泉市教育委員会 1975 『上町遺跡発掘調査概要』

1973 『和泉の文化財』1・2

岸和田市教育委員会 1975 『土生遺跡発掘調査概要』第2次·第3次

堺市教育委員会 1975 「土師遺跡49年度発掘調査概報」

その他大阪府・和泉市・泉大津市・岸和田市・高石市他教育委員会等による調査成果を参考に させていただいた。

別 表

街路部分(河川状遺構他)出土遺物一覧表

番号	種 類	法 量(cm)	特
1	甕	口径 17.4 器高 22.6	口縁部 くの字形に屈曲外反する。両面は横ナデされ、端部はわずかにつまみ上げられる。端面に は箆によるキザミ目 胴 部 縦長の胴部中央やや下位には接合痕。外面には上方より左下り、水平、左下りの叩き目。 内面上半には2~3cm巾の粘土紐接合痕。その上を斜方向の箆によるナデ調整。 底 部 やや突出する平底 備 考 白黄色を呈し、焼成は良。砂粒含む胎土、頸部下を除く外面全体に煤付着。 出土地 河川内42
2	装	口径 18.8 器高 24.6	口縁部 くの字形に屈曲外反する。上端は箆で切りとられて端面となす。 胴 部 縦長胴部の中央やや下位に接合痕。外面には左下がりの粗い叩き目。内面上半には約8本 の粘土紐痕。その上に横方向の箆によるナデ調整。下半は極めて平滑。 底 部 円板状の平底 備 考 全体に白紫色、橙色を呈す。二次焼成とそれに伴なう化学反応の可能性。砂粒含む胎土。 出土地 河川内117
3	変	口径 12.2 器高 22.4	口縁部 くの字形に屈曲外反する。両面は横ナデされ端部は丸くおさまる。 胴 部 肩のはる縦長の胴部中央やや下位に接合痕。外面は上半、下半とも左下がりの粗い叩き目。 内面は極めて平滑。 底 部 平底。 備 考 外面下半に煤付着。橙色、白黄色を呈し、焼成は不良で軟質。砂粒含む胎土。 出土地 河川内52
4	甕	口径 14.0 器高 20.8	口縁部 くの字形に屈曲外反する。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。 胴 部 ややゆがんだ球形を呈し、上・中・下の三部を接合する。外面上方より水平に近い左下り、 右下り、そして左下りの粗い叩き目。内面上位には2~3cmの粘土紐接合痕。中央には箆によるナデ調整。下位は極めて平滑。 中央部のやや窪む平底。 備 考 白赤色を呈し、焼成不良、細砂粒の多い胎土。口縁部外面、胴下半外面に煤付着。 出土地 河川内127
5	甕	口径 15.3 器高 21 程度	口縁部 くの字形に大きく屈曲外反する。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。 胴 部 やや縦長の胴部、接合痕は不明確。外面には上方より左下り、右下り、左下りの粗い叩き目。 内面は極めて平滑。 底 部 (欠損) 備 考 白灰黄色を呈し、焼成は不良。砂粒多い胎土。外面は煤が付着し、上半は特に器壁剝落が はげしい。 出土地 河川内29
6	装	口径 14.9 器高 12 以上	口縁部 体部よりくの字形に屈曲外反して斜上方にのびる。上方はより外側へそり返る。両面とも 横ナデされ、端部はわずかに上方へつまみ上げられる。 体 部 やや扁平球形の胴部外面はとりわけ上半部に粗い叩き。中央部はわずかに水平方向の叩き がのこる。内面はきわめて平滑。上半に箆押痕。 (欠損 備 考 外面は白赤色、内面は白灰色を呈し、砂粒を含む胎土。外面全体に煤。 出土地 河川内BF-78青灰色粘土
7	禁	口径 約18	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。外面は横ナデと指圧痕、内面は刷毛。端部は上方へわずかにつまみ上げられる。 胴 部 (欠損) 備 考 灰茶褐色を呈し、細金雲母をまばらに含む。煤はなし。 出土地 河川内115
8	蓌	口径 約18	口縁部 欠損するが外反する口縁部。内面は横ナデ外面は横刷毛。端部は上方へつまみ上げられる。 端面には刷毛によるナデ。 (欠損) 購 考 茶褐色を呈し、目立たない細金雲母粒を含む。外面には煤。 出土地 河川内115
9	粱	口径 約17	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は指圧と横ナデ。外面は指圧と横ナデ。端部は上方へつまみ上げられる。端面は凹線状。 胴 部 (欠損) 購 考 灰茶褐色を呈し、ほとんど目立たない金雲母粒を含む。外面には煤。 出土地 河川内。
10	饗	口径 約19	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。外面には横ナデ、粘土接合、指圧、刷毛の諸痕跡。内面は横ナデ。端部は上方へつまみ上げられる。端面は平滑。 胴 部 (欠損) 庸 考 灰茶褐色を呈し、ほとんど目立たない金雲母粒。外面には煤。 出土地 河川内40

番号	種	類	法	量(cm)		特	徴		
11	饕		口径	約16	口縁部 胴 部 考 出土地	端部はわずかに上方へ引き上げられるが丸くおさま (欠損)	ほとんど目立たない雲母極細粒を含み、白灰褐色を呈する。外面は煤。		
12	装		口径	約19	胴 部 備 考	くの字形に大きく屈曲外反する口縁部。外面は強いナデ、内面は横刷毛。端部は丸くおさまる。 (欠損) 灰褐色を呈し、細金雲母粒を含む。外面一部に煤。 河川内BF―79、青灰色砂層			
13	装		口径	約17	胴 部	くの字形に屈曲外反する口縁部。両面とも横ナデ。 方は尖んがるが、上方へは突出しない。 (欠損) 茶褐色を呈し、極細雲母を含む。外面に煤顕著。 河川内BF-79青灰色砂層	(欠損) 茶褐色を呈し、極細雲母を含む。外面に煤顕著。		
14	袭		口径	約17	胴 部 備 考	くの字形に屈曲外反する口縁部。外面は横ナデ・指圧痕、内面は横刷毛、端部は上方へつまみ上げられる。端面にはかすかな凹線がつく。 (欠損) 3所機色を呈し、極細金雲母を含む。外面に煤。 可川内 B F - 79、青灰色砂層			
15	甕		口径	約17	胴 部 備 考	くの字形に大きく屈曲外反する口縁部。外面は横ナデ、内面は横刷毛、端部はわずかに上方へつまみ上げられ、端面にはかすかな凹線がつく。 (欠損) 灰褐色を呈し、金雲母細片を含む。外面に煤。 河川内BF-79、青灰色砂層			
16	쭃		口径	約18	胴 部備 考	くの字形に屈曲外反する口縁部。外面は横ナデか刷上げられ、巾の広い端面には明確な凹線。 (欠損) 茶褐色を呈し、金雲母粒を多く含む。外面は煤。 河川内BF―79、青灰色砂層	毛、内面は横刷毛。端部は上方へ引き		
17	甕		口径	約16	備考	くの字形に屈曲外反する口縁部。両面は横ナデされほとんど欠損するが、外面には粗い叩きがかすかに蒸褐色を呈し、極細金雲母を含む。外面煤は無し、河川内117	遺存する。内面は箆削り。		
18	虁		口径	約16	胴 部備 考	くの字形に屈曲外反する口縁部。内外面は刷毛目、端部はほぼ丸味を持って閉じるが、内側下がわずかに凹む。 (欠損) 茶褐色を呈し、金雲母細粒をまばらに含む。外面煤。 河川内117			
19	甕		口径	約17	口縁部 那 考 出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。両面横ナデ、端面に明確な凹線が1本つけられ、端部が上方へわずかにつまみ上げられる。 (欠損) 茶褐色を呈し、金雲母粒をまばらに含む。また径5㎜程度の白砂粒を含む。煤ナシ。 河川内BF―78、青灰色粘土層			
20	甕		口径	約15	備考	くの字形に屈曲外反する口縁部。内外面は横刷毛、外面下位に指圧痕。端部はわずかに上 方へ引き上げられる。 まとんど欠損するが球形の胴部外面は左下りの細かい叩き目と斜刷毛。内面は斜方向の篦 割り。器壁2.5~3 mm まとんど目立たない極細雲母粒を含む。灰褐色を呈す。外面全体に煤。 可川内BF-78, 灰色粘質土層			

番号	種 類	法 量(cm)	特		
21	鞭	口径 16.9 器高 21.2	コ縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛、外面は横ナデ。粘土の接合痕、端部はへわずかに突出、端面には凹線。 同 部 肩部に張りのある球形の胴部。中央部にて上下接合。上半外面と底部の周囲外面に細き目。肩部以下には刷毛。内面は極めて平滑に箆削り。器壁3 mm	r v OD	
22	甕	口径 約17	□縁部 くの字形に屈曲外反する□縁部。外面は横ナデ、内面は横刷毛、端部はわずかに上方出する。 同 部 (欠損) 南 考 灰茶色を呈し、金雲母・白砂粒を含む。外面は煤。 出土地 河川内BF―79、灰黒色砂質土層	へ突	
23	装	口径 約18	1縁部 くの字形に外反する口縁部。外面は横十デ、内面は横刷毛。端部はわずかに上方へ引 げられる。明確な端面を持つ。 同 部 (欠損) 龍 考 茶褐色を呈する。外面わずかに煤。 出土地 河川内BF―79、灰黒色砂質土層	き上	
24	装	口径 約15	コ縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内・外面は横ナデ。外面には縦方向の箆押と細かい押 内面には指圧痕。端部は上方に尖んがる。 同 部 肩部以上のみ遺存。外面に細かい叩き目、内面は箆削り。器壁2.5mm 請 考 茶褐色を呈し、極細金雲母を含む。また白砂粒もまばらにみられる。外面に煤。 出土地 河川内	痕。	
25	甕	口径 約15	口縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横刷毛と横ナデ、外面は横ナデと指圧。端部は 方へ引き上げられ、端面に凹線。 同 部 ほとんど欠損するが、細かい叩き目、内面は節削り。器壁 4 mm弱 情 考 茶褐色を呈し、細黒雲母粒を含む。煤は無し。 出土地 河川内136	は上	
26	装	口径 約18	1縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。両面とも横刷毛。端部は丸くおさまるがわずかに上た 突出気味。 同 部 上半のみ遺存する。外面には細かい叩き目。内面は箆削り。器壁4mm弱。 情 考 茶色を呈し、細黒雲母を多く含む。胴部上端を除いて外面に煤付着。 出土地 河川内97	方に	
27	甕	口径 約17	□縁部 くの字形に屈曲外反する口縁部。内面上半は強い削り、外面は強いナデ。端部は上方/確に突出。端面にはわずかな凹線。 同 部 (欠損) 情 考 茶褐色を呈し、細黒雲母粒を含む。外面には煤。 出土地 BG-79、№③	〜明	
28	装	口径 約18	1縁部 外反する口縁部。両面とも横ナデ。端部は上方へつまみ上げられる。端面にはかすかっ線。 同 部 (欠損) 電 考 茶褐色を呈し、極細雲母粒を含む。外面は煤。 出土地 河川内148	な凹	
29	奕	口径 約16	1縁部 比較的ゆるやかに屈曲外反する口縁部。両面とも横ナデとかすかな刷毛、端部は上方/ ずかにつまみ上げられる。端面には凹線がつく。 同 部 (欠損) 青 考 黒褐色を呈し、極細雲母粒を含む。外面は煤。 出土地 河川内148	へわ	
30	装	口径 16.2	端部はほぼ丸くおさまる。	上半のみ遺存。外面には粗い叩き目とその上に細かい刷毛目。内面は箆削り。器壁3mm弱。 茶色味の強い灰色。黒雲母粒が含まれる。外面には煤。	

番号	種	類	法	量(cm)		特		
31	鑋		口径	約16	口縁部 胴 部 構 出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。外面横ナデと指圧、内面は刷毛。端部は上方へつまみ上げられる。 (欠損) R機色を呈し、ほとんど目立たない雲母粒。外面には煤。 河川内45		
32	甕		口径	約17	備考	くの字形に外反する口縁部。両面は横ナデ、端部は丸くおさまるが、わずかに引き上げられている。端面には細い凹線。 取形の胴部、中央に接合部。外面は細かい叩き目、左下がり。下半は縦刷毛。内面は横方向の篦削り、下半は特に薄く仕上げる。器壁5~2mm。下位は欠損。 金雲母を含み、灰黄褐色を呈する。外面全体煤付着、内面の下半に灰黒色部。河川内46		
33	貗		口径	約18	胴 部備 考	くの字形に屈曲、外反する口縁部。外面は横ナデ、内面は横刷毛。外面かすかに指圧痕か、端部はわずかに上方へ引き上げられる。 (欠損) 黄褐色を呈し、細雲母粒を含む。外面わずかに煤。 河川内29		
34	34		口径	17.6	口縁部 胴 部 備 考出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。外面は叩き痕と横ナデ、内面は横ナデ。端部はやや内側上方へつまみ上げられる。端面には凹線。上半のみ遺存。外面には水平方向の叩き目。その上に縦刷毛、内面は箆削り。器壁3.5mm 黒褐色を呈し、細雲母粒を多数含む。外面煤、内面下半に黒色部分。 河川内110		
35	甕		口径	約14	口縁部 胴 部 借 考出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。通例の上田町II 甕と比較して屈曲角度が少なく、斜上方へのびる。外面は横ナデ・指圧・叩き目等、内面は横ナデ・刷毛。端部は内側上方に大きく突出し、端面には明確な凹線がつく。 ほとんど欠損するが、底部近くの破片には粗い叩き目がのこる。上方ではその上を細かい刷毛調整する。 日褐色を呈し、雲母粒はほとんど目立たない。外面に煤。河川内140		
36	誕		口径	約16	口縁部 胴 部 備 考 出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛・横ナデ、外面は横ナデ・指圧。端部は上方へつまみ上げられる。 上半部のみ遺存。外面は細かい叩き目。内面は篦削り、器壁3mmかなり平滑。 黄褐色を呈し、金雲母粒を多く含む胎土。外面には煤。 河川内52		
37	甕		口径	約16	口縁部 胴 部 構 考出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛・横ナデ、外面は横ナデ・指圧。粘土の接合痕がのこる。端部は上方へわずかに引き上げられる。 上半部のみ遺存。上半外面にはやや粗い叩き目、下半は刷毛のみ。内面は箆削り、極めて平滑。器壁3mm弱。 茶褐色を呈し、極細金雲母粒を含む。外面全体に煤、内面胴下半に灰黒色部。 河川内 青灰色精砂層		
38	変		口径	約16		くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横ナデ・刷毛、外面は横ナデ。端部は上方へ引き上げられる。 (欠損) 茶褐色を呈し、細金雲母粒を含む。外面には煤。 河川内34		
39	甕		口径	約16	口縁部 胴 部 備 考出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛・横ナデ、外面は横ナデ・指圧。端部は上方に尖んがる。 (欠損) 茶褐色を呈し、細雲母粒を含む。外面の煤は少ない。 河川内34		
40	甕		口径	約16	口縁部 胴 部 構 考出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横ナデ、外面は横ナデ・粘土の接合痕・叩き目・ 指圧。端部は上方へつまみ上げられる。 上半部のみ遺存。外面には細かい叩き目。内面は篦削り、とりわけ肩部内面以下を平滑に 篦削り。器壁3mm。 暗灰褐色を呈し、金雲母粒多し。胴部上端を除いて外面に煤付着。 BG-79 Ma15		

番号	種 類	法 量(cm)		特 徵		
41	蒸	口径 約15 器高 18弱	備考	くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛、外面は横ナデと指圧。端部は上方へつまみ上げられる。 球状を呈し、下半部は尖んがって底部となる。上半外面には細かい叩き目、下半は刷毛。 内面は横方向の篦削り。極めて平滑。器壁3mm弱。 灰褐色を呈し細金雲母粒を含む。外面全体に煤、内面口縁部下に煤。内面胴中央やや上位 より下部分は黒色気味。 河川内64		
42	猰	口径 約17		くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は横ナデ・指圧、外面は横ナデ・指圧。端部は上方にややカーブする。 (欠損) 灰褐色を呈し、黒雲母粒を含む。外面に煤。 河川内64		
43	裚	口径 15.8 器高約21.3	口縁部 胴 部 備 考 出土地	くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛、外面は指圧・粘土の接合痕。端部は上方へつまみ上げられる。 中央の張るほぼ球形を呈し、下半部は尖んがって底部となる。外面上半には細かい叩き目、中央の張るほぼ球形を早し、下半部は尖んがって底部となる。外面上半に斜方向の箆削り。下半は極めて平滑。器壁2,5mm 灰褐色を呈し、目立たない細雲母粒を含む。胴部上端を除いて外面に煤。内面中央部より下半が黒色気味。河川内117		
44	壺	口径 13.7 器高 29.5	口縁部 体 部 底 部 備 考 出土地	体部より屈曲して斜上方へ直線的に大きくのびる。端部はやや尖んがってとじ、その両面は横ナデする。外面は縦方向の箆磨き。 球形の体部。外面は組か叩き目の上に箆磨き、内面の上半は箆による横方向のナデ、中央部は箆にて横方向に平滑化、下半は平滑、底部内面は篦押、内外面に粘土紐痕あるいは接合痕。 比較的小さな平底。 白黄色あるいは灰色を呈し、砂粒を含む胎土。体部下半外面に黒色塗料。そして全面にカゴ目痕。 口頸、体部上・中・下を接合成形。底部下面がみだれる。河川内BG一79 1/615		
45	壺	口径 14.5	体 部 備 考	体部より屈曲して斜上方にのびる。端部は丸くおさまる。両面は横ナデ。 ほとんど欠損する。外面は篦磨き、内面は刷毛。頸部下内面に指圧痕。 白赤色を呈し、キメの細かい胎土。 河川内?		
46	壺	口径 16.2	体 部 備 考	体部より屈曲して斜上方へ直線的にのびる。口縁部内面は横十デ。外面は横十デと指圧痕。 外面下半は斜のナデ。端部はわずかに内側へ厚味を持ち丸味をもっておさまる。 ほとんど欠損するが外面は叩き目。内面は粘土紐痕。 白黄褐色を呈し粗砂を多く含む胎土。 河川内63		
47	壺	口径 13.9	体 部 備 考	体部より屈曲して垂直に立ち上がり、更に屈曲して大きく外開きする。端部は方形におさまる。外面には粘土紐痕。頸部外面は刷毛原体によるカキトリ。 ほとんど欠損するが、外面は箆磨き、内面は粘土紐接合痕と指圧痕。 白灰色あるいは白黄色を呈し、細砂を含む胎土、やや軟質。 河川内24		
48	壶	口径 13.0	体 部 備 考	体部より屈曲して垂直に立ち上がりやや屈曲して斜上方に外開きする口頸部。端部両面は横ナデされ、端部は方形におさまる。頸部内外面は横ナデあるいは刷毛か。 (欠損) 白黄色あるいは橙色を呈し、細砂を含む胎土、かなり軟質。 河川内44		
49	壺	口径 17.6	口頸部 体 部 備 考 出土地	体部より屈曲してはは垂直に立ち上がり、やや屈曲して斜上方に大きく外開きする。内面の調整は不明だが、外面は縦方向の篦磨きがなされ、口縁部は横ナデが加わる。頸部外面にはわずかに指圧痕がある。端部は下端が尖んがり断面はほぼ方形に近くとじる。頸部下端外面には半竹管文が連続してつけられる。下半は欠損するが、外面は箆磨き、内面には粘土紐接合痕がのこる。巾は 3.5 cm程度。また内面には指圧痕もみられる。 黄白色を呈し、砂粒を含む胎土の焼成は不良。河川内146		
50	壺	口径 14.3	体部備考	体部より屈曲して垂直に立ち上がり、更に屈曲して斜上方に外開きする。また口縁部外面に粘土帯を巻きつけて厚味を増しているのが特徴。口縁部と頸部との境は段をなす。頸部外面にはかすかな面とり。口縁部内面には篦磨きがなされ、端部は丸くおさまる。ほとんど欠損するが、内面には粘土紐痕及び指圧痕がみられる。白黄色を呈し、細砂を含む粘土。河川内		

番号	種 類	法	量(cm)		特
51	壺	口径	16.0	口頸部 体 部 備 考地	体部より屈曲してやや外開きに立ち上がり、更に屈曲して斜上方に外開きする。また口縁部外面と上端に粘土帯を巻きつけて厚味を増している。口縁部と顕部の境は段をなす。顕部外面にはかすかな面とり、口縁部外面には2~3個単位の竹管文がつけられる。顕部内面は箆磨き。端部は丸くおさまる。口縁部両面は横ナデ。下半は欠損するが、上半からみればやや扁平気味球形の大きな体部である。肩部以下外面には粗い叩き目がつけられ、それより上位は篦磨きにとどまる。内面肩部には粘土紐痕がのこり、指圧痕もみられる。それより以下は平滞。 黄赤色を呈し、細砂粒を含むとはいえキメの細かい胎土。河川内28
52	壺	口径	17.5	口頸部 体備出土地	体部より屈曲して垂直に立ち上がり、屈曲して水平にのび、更に屈曲して斜上方にのびる。口縁部外面には4段の楠描き波状文がみられ、下端には円形浮文がつけられる。内面は遼磨きされ、端部は丸くおさまる。口縁部下面は横ナデ。頸部外面は刷毛状箆により縦方向にナテられ、下半は更に横ナデ張がつく。頸部下端にはシャーブな断面三角形の貼りつけ凸帯がつけられ、指突とキザミがなされる。凸帯のやや上位より頸部下端が深く削られる。頸部内面は縦篦磨きがなされる。体部は全く矢損するが、体部上端外面には構造波状文の一部がみられる。淡黄灰色を呈し、精製胎土、焼成は比較的良好で硬質。河川内 黄灰色粘砂土層
53	壺	口径	16.3	口頸部体 佛	口綾部内・外面には3段の櫛描扇形組み合わせ波状文がつけられ、2個1組3単位の円形 浮文が下端外面につけられる。頸部外面は横ナデ、内面は横篦磨き。頸部尖端には断面三 角形の貼りつけ凸帯がつけられ、指突文が加わる。口縁端部は丸くおさまる。 欠損するがその上端に櫛描き波状文の一部がみられる。 灰黄色を呈し、細砂を含む胎土、焼成は良。
54	壺		11.8 12.4	口縁部 部	体部よりくの字形に屈曲外反する。両面は横ナデされ、端部はとりわけ上方につまみ上げられ、明確な端面を持つ。内面にかすかな篦磨き痕。やや肩の張る体部の外面は縦篦磨き。内面は横方向に削り。中央部やや下位に上半と下半の接合痕。内面その部分に帯状の厚味あり。貼りつけの平底。 白灰色を呈し、キメの細かい胎土。体部下半に黒斑1。 河川内BF-78 青灰色粘土層
55	壺	現高	9.3	口縁 部 底	体部より外反する口縁部は欠損。 中央部の大きく張るそろばん玉状の体部。外面は横方向の箆磨き。内面に粘土紐の痕跡、 4 本が上半にのこる。下半は極めて平滑。 中央がわずかに窪む平底。その周囲に面とり。 黄灰色を呈し、砂粒含む胎土、焼成は良。 河川内BF-79 青灰色粘砂層
56	壺	口径	11.5	体 部 底 部 備 考	体部よりくの字形に屈曲外反する。外面は横ナデの上に箆磨き、内面にも箆磨き痕、端部は上方に突出気味。 底部は欠損するがやや扁平球形の体部。外面中央にかすかな叩き目痕、その上に箆磨き。 内面は箆削りによりとりわけ下半を薄くする。 (欠損) 自黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。体部中央外周に煤、下半は熱による器壁剝落。体部上 半に黒斑。 河川内79
57	壺		10.9 12.1	口縁部 部	体部より屈曲して短く垂直に立ち上がる。両面は横ナデされ、端部は尖んがってとじる。 肩の張る体部の外面は縦方向の箆磨き。上半は剝落気味、内面上半には指押痕。下半は平 滑、口縁部下に接合痕跡。 円板状の平底。 灰黄色を呈し細砂を含む胎土。体部外面に黒斑。 河川内80
58	手焙形土器	口径器高	15 17	天井部 体 部 備 考地	体部をおおうり球状の天井部外面には巾1cm程度の粘土紐痕。外面を粗い叩き目を施こし 篦ナデをもって調整。所々に篦削り痕。下端側辺を縦方向の篦ナデをもって調整。 腰の張る体部だが底部付近は欠損。上半部と下半部をその屈曲部分で検合。上半部はやは り巾1cm程度の粘土紐を積み上げ成形。下端側辺を削り別によって調整。下半部外面には 粗い叩き目痕。底部周辺は削りを施こす。中窪みの平担部があるが底部かは不明。やや位 置がずれる。内面上半は篦ナデ。 砂粒含む胎土の色調は淡黄灰色。 河川内
59	坏	口径器高	11 程度 3.5 程度	口縁部体 部備 考出土地	全体は浅い皿状を呈し、口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。外面は横箆磨き、内面は横ナデ、底部は厚味を持つ。 淡橙色を呈し、焼成は中、胎土は細かい。全体の¾片。 河川内 B G —79 - № 9
60	鉢	口径器高	10.7	底 部備 考	やや内彎気味に斜上方にのびる体部を持つ。端部は丸味をもって閉じる。外面は粗い叩き目の上にやはり粗い篦磨きが施こされる。内面は縦方向の篦磨きがなされ、極めて平滑。平担な平底。 灰白色を呈し、砂粒をまばらに含む。焼成は中。 河川内95

番号	種 類	法	量(cm)		特	
61	鉢	口径器高	10.1 9.0	体 部 底 部 出土地	白灰色を呈し、砂粒をわずかに含む。	
62	鉢	口径器高	8.9 5.9	底 部 備 考	やや内彎気味に斜上方にのびる体部を持つ。端部は丸くおさまる。外面に縦方向の粘土紐接合痕。粗い箆磨き。内面は上半をていねいに箆磨きし、平滑。極めて平担な平底。 灰黄色を呈し、胎土のキメは細かい。 河川内129	
63	鉢	口径器高	10.9 6.1	体 部 底 部 考 出土地	直線的に斜上方向にのび、口縁近くでやや内彎気味となる体部。端部はやや尖んがり気味で丸くおさまる。外面は粗い叩き目、内面は極めて平滑。底部には箆押痕。 をくわずかに窪む平底。 黄褐色を呈し、胎土のキメは細い。 河川内137	
64	鉢	口径器高	9.0 6.4	備考	やや内彎気味に斜上方にのびる体部を持つ。端部は丸くおさまる。外面はやや凹凸をなし指圧痕か。内面は平滑、底部の周囲を指圧痕がめぐる。 体部に比してやや大きな底部。あげ底となる。 黄赤色を呈し細砂を含む胎土。黒斑 1。 河川内 B F 78 褐色粘土質層	
65	鉢	口径器高	11.0 8.0	体 部 底 部 考 出土地	下位で彎曲して斜上方に直線的にのびる体部。端部は尖んがり気味で閉じる。口縁部両面は横ナデ。内外面は平滑。 平底。 赤褐色を呈し、砂粒をまばらに含む。 河川内29	
66	鉢	口径器高	8.7 6.6	体 部 底 部 備 考 出土地	やや内彎気味に斜上方にのびる体部。端部は丸くおさまる。口縁部内面は横刷毛、外面は横ナデ。口縁部内面下に稜。外面かすかに粗い叩きがのこる。内面は平滑。 平底。 黄褐色を呈し、砂粒を含む胎土。 河川内135	
67	鉢	口径器高	14.0 7.3	底 部備 考	内鬱気味に大きく広がり斜上方にのびる体部。端部は尖んがり気味にとじる。外面には粗い叩き目、内面は極めて平滑。 リング状の底部がとりつき、その周囲は指圧痕がめぐる。あげ底。 白灰褐色を呈し、キメの細かい胎土。体部に大きな黒斑1。 河川内88	
68	鉢	口径器高	13.4 7.1	底 部備 考	内彎気味に大きく広がり斜上方にのびる体部。端部は丸くおさまる。外面は刷毛目、内面も刷毛原体により平滑。内面底に箆押。 指で引きのばして高台状の底部をつくる。あげ底。 明白赤色を呈し、砂粒を多く含む。 河川内 B G - 79 青灰色粘砂層	
69	鉢	口径器高	12.0 9.6	口 縁 部 体 部 底 備 出 土 地	くの字形に屈曲する口縁部。その両面は横ナデ。外面に接合痕と指圧痕。端部は尖んがり気味にとじる。 内冑気味にとため、 内冑気味に上方に立ち上がる。外面とりわけ下位に粗い叩き目が明確。中央部はかすかに削られる。底部の周囲も縦方向に粗く削られる。内面は極めて平滑。上半は箆磨きか。 かすかなあげ底。 白灰色を呈し、砂粒を含む胎土。体部外面に黒斑1。 河川内60	
70	高坏		22.0 16.6		坏底から屈曲し斜上方に外彎してのびる口縁部を持つ。口縁部外面は横ナデの上に縦の箆磨き、内面も同様。端部はわずかに上方にカーブして丸くおさまる。底部内外面の箆磨き。中実の高い脚柱状部に広がる裾部。柱状部外面は縦箆磨き。裾端部内面は横ナデ。裾部に外方からの5 孔が穿たれるが同一個所により上位に穿け直されている。白黄色を呈し、黒砂粒を含む、焼成中。	

番号	種	類	法 量(cm)		特		
71	高	坏	口径 19.8 器高 15.5 前後		面もおそらく箆磨き、端部は尖んがり気味で丸くおさまる。 中空の高い柱状部にやや屈曲して広がる裾部を持つ。柱状部外面は 部に3孔が穿たれる。柱状部上端外周に接合の粘土帯。 赤黄色あるいは灰黄色を呈しキメの細かい胎土軟質。		
72	高	坏	口径 21.4 器高 15.1	脚台備考	坏底から屈曲し斜上方に外彎してのびる口縁部を持つ。口縁部外面は刷毛調整しその上に 篦磨き。内面と底部内外面も篦磨き、端部はやや厚味を増してとじる。その両面は横ナデ。 中空の高い柱状部と広がる裙部。柱状部外面は雑だが面取り、内面は削り痕。裾部は横ナ デ・刷毛・篦磨き痕。裾部に3孔が穿たれる。端部外面は横ナデ。 白黄褐色を呈し、砂を含むが全体にはキメの細かい胎土。坏部に黒斑。 河川内底BF-78 黄灰色粘砂層		
73	高	坏	口径 21.2	脚 台 備 考	环底から屈曲して斜上方に外彎してのびる。外面は箆磨き、内面は 接合外面に横箆磨き、端部は方形にとじる。 (欠損) 黄灰色を呈し粗砂を含む胎土 河川内70	(欠損) 黄灰色を呈し粗砂を含む胎土	
74	高	坏	口径 20.、	环 期 備 考 出土地	环底から屈曲して斜上方に外彎しのびる。内外面とも箆磨き、端部 裾部は欠損するが、中実の柱状部の外面は面取り状の箆磨き、3 引 から6~7 孔が想定。 白灰色を呈く、砂粒は多い胎土 河川内129		
75	高	坏	口径 20.4	脚台備考	び横箆磨き。端部は上方に突出し端面を持つ。 裾部は欠損するが中実の高い脚柱状部。外面は縦箆磨き。		
76	高	坏	脚端径12.4	脚 台 備 考	(欠損) 中実柱状部に広がる裾部。柱状部外面は粗い面取り状箆磨き、裾内 丸くおさまる。 橙色を呈し、白砂粒を含む胎土。 河川内BF-78 晴青灰色粘質土層	面には箆押痕。端部は	
77	高	坏	脚端径11.7	坏 部 台 備 考 出土地	(欠損) 中実に近い柱状部に広がる裾部。外面は箆磨き。その他器壁剝落気孔と思われる。端部は方形にとじる。 白赤色を呈し、キメの細かい胎土。 河川内	味、3孔がのこるが4.	
78	高	坏	脚端径11.2	坏 部	(欠損) 中実気味の柱状部に内臀して広がる裾部。柱状部は縦篦磨き、裾部も篦磨き、裾部内面は 平滑、端部は方形にとじその内面は横ナデ。外方向からの3孔が穿たれる。 白灰黄色を呈し、細かい胎土。 河川内		
79	高	坏	口径 12.6 器高 9.4		半球状の坏部、端部は丸くおさまる。外面は横ナデと箆磨き痕、内毛の上へ箆磨きか。 毛の上へ箆磨きか。 裾広がりの脚台。柱状部はない。外面は箆磨き、内面はかすかに刷坏・脚接合部外周に粘土紐。 白灰色を呈し、キメの細かい胎土。 河川内53		
80	高	坏	脚端径14.7	坏 部	(欠損) 中実の短い脚柱状部に大きく直線的に広がる裾部。外面は篦磨きた わずかに突出、内面は横ナデ。4 孔を有する。 白褐色を呈し、砂粒の多い胎土。 河川内146	が剝落。端部は下方へ	

番号	種 類	法 量(cm)	特
81	高 坏	口径 11.9 器高 10.4	お
82	高 坏	口径 13.1 器高 10.8	 ・
83	高 坏	口径 9.9 器高 12.0	 本 ・
86	高 坏	脚台高 8.6 脚端径16.6	「
87	高 坏	口径 23.0	 坏 部 底部より屈曲して立ち上がり、更に屈曲して針上方に大きくのびる長い口縁部を持つ。端部は上方へ突出し、その両面は横ナデ。端面をもつ。外面は細かい暗文状の横方向箆磨き、内面は三段の放射状箆磨き暗文。 (欠損) 備 考 橙色を呈し、細かい胎土、焼成は中。 出土地 河川内BG-79№ 5
88	高 坏	口径 18.7 器高 12.2	 环 部 浅い皿状の底部より屈曲して短く立ち上がり、更に屈曲して斜上方にのびる口縁部。口縁部外面上方に櫛描き波状文、内面上方にも櫛描き波状文。外面上端と下端に円形浮文列。外面横方向の箆磨きと思われるが不明瞭。 脚 台 細い中空が穿たれる高い柱状部と半球状の裾部。外面は箆磨き、内面は平滑。端部は方形にとじる。4 孔が穿たれる。 白赤色・白灰色を呈し、キメの細かい胎土。焼成は不良で軟質。 出土地 河川内31
89	高 坏	脚端径17.3	 (欠損) 高い中空の柱状部は欠損。それより段状を呈する厚味ある裾部。外面には3条の櫛描き波状文。上端には竹管文列、端部外面は稀ナデ、その上に竹管文列。内面は縦方向の箆磨き。柱状部外面は縦刷毛。 (
90	小型器台	脚台高 5	受 部 (欠損) 脚 台 直線的に裾の広がる脚台。外面は箆磨き、外からの4孔が穿たれる。端部はやや尖んがり 気味に閉じる。 備 考 黄赤色を呈し、粗砂を含む胎土。器表は剝落気味。 出土地 河川内
91	小型器台	口径約 10	受 部 浅い皿状の受部。端部は尖んがり気味に丸くおさまる。外面は縦篦磨き、内面は剝落。脚 台 (欠損) 備 考 淡黄灰色を呈し、粗砂を含む 8×4 cm片 出土地 河川内123
92	小型器台	口径 9.4 器高 8.9	受 部 斜上方にのびる受部に上方につまみ上げられる口縁端部を持つ。端面は刷毛状のものによるナデ。受部外面上方も横ナデ。外面は縦箆磨き。内面は横箆磨き。 直線的に裾広がりとなる脚台。外面は粗い左下がりの叩き目とその上に縦方向の粗い箆磨き。内面は刷毛と刷毛原体による削り、端部は内側へわずかに突出する。 自黄色を呈し、砂粒を多く含む。 出土地 河川内61

番号	種 類	法 量(cm)		特		
93	小型器台	口径 9.1 器高 8.7	受 部 台 考地	浅い皿状受部に上方につまみ上げられる口縁端部を持つ、口縁部内面は横ナデ、外面も ナデによりわずかに凹線状となる。皿部外面は細かい箆磨き。内面は平滑。 直線的に裾広がりとなる脚台。外面は細かい箆磨き。内面は斜方向の刷毛。外方向からの 4 孔を持つ。 白灰褐色を呈し、砂粒を含む胎土、焼成は良。やや軟質。 河川内		
94	圳	口径約 10	口緣部体 部	体部よりくの字形に屈曲して斜上方にのびる。両面は横刷毛、端部は丸くおさまる。 肩部に張りのある扁平球状の体部、下半は欠損。外面は縦箆磨き、内面は平滑だが一部に 粘土紐接合痕。 (欠損) 灰茶褐色を呈し、キメの細かい胎土。 河川内147		
95	圳	口径約 7	口縁部 体 部	体部よりくの字形に屈曲して斜上方にのびる。内面は不明だが、外面は箆磨きと横ナデ。 端部は丸くおさまる。 腹部に張りのある扁平球状の体部、下半は欠損。外面は箆磨き。内外面とも粘土紐接合痕 がのこる。 (欠損) 黄灰色を呈し、胎土のキメは細かい。 河川内52		
96	圳	口径 8.6 器高 8.0	口縁部 体 部 底備 出土地	体部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。 球形の体部外面は篦磨き。下半はすぼまる。内面は極めて平滑。 小さな平坦底。 暗灰色を呈し、精製胎土。体部外面に 1 口縁部外面に 2 の黒斑。 河川内底 B F - 78 黄灰色砂質土。		
97	坩	口径 9.1 器高 7.0	口縁部 体底 部 考 地	る。 半球状のやや扁平な体部。外面は篦磨き、内面は篦押痕。 ややあげ底気味の平坦底。		
98	坩	口径 9.6 器高 8.0	底 部	くの字形に屈曲外反する口縁部。内面は刷毛、外面は横ナデ。端部は丸くおさまる。やや肩の張る球形の体部、下半はすぼまる。外面は平滑に仕上げられるがかすかに右下りの粗い叩き目痕がのこる。下半には粗い叩き目がのこる。内面は極めて平滑。上半には刷毛目がのこる。 極めて小さな平坦底がつけられる。 黄褐色を呈し、砂粒を含む胎土。外面 2 ケ所に黒斑。 河川左岸 \mathbf{BF} -79 青灰色粘砂層		
99	壺	口径約 15	口頸部 体 部 備 考 出土地	体部より外彎する頸部と更に斜上方にのびる口縁部を持つ。内面はなだらかに移行し、外面には稜を持つ。器壁剝落の為調整不明。端部は丸くおさまる。 (欠損) 白粗砂含む胎土は白褐色を呈す。焼成不良で軟質。 Pit 20		
101	小型器台	口径約 10	脚台備考	浅い皿状の受部、端部はわずかに上端で尖んがる。外面は縦箆磨き。 (欠損) 白黄色を呈し、粗砂含む。6.5×3.5cm片 1 号住居址内大ピット		
102 103	小型器台	口径約 10	脚台備考	浅い皿状の受部を持つ。端部は上方へわずかに尖んがる。端面は刷毛状原体で横ナデされる。外面は削りあるいは指圧、内面は平滑。 接合しないが同一個体と考えられる。上半欠損し、直線的に裾広りする脚台。端部は突んがる。外面は斜方向の篦磨き。穿孔がみられる。 白黄色を呈し、砂粒を含む。 ともに 7×3.5cm片、7×5.5cm片で全体は不明確。 1号住居址内大ビット		
104	高 坏	脚端径16.6 脚台高 3	備考	(欠損) 中空の短い柱状部と屈曲して水平に大きく広がる裾部。柱状部外面には箆によるかすかな 面取り。調整は不明。端部は丸くおさまる。脚裾が光遺存するが、5 個穿孔が乱雑に配置 し、全体では10個を越えよう。 橙色を呈し、細砂を含む胎土、焼成不良。 2 号住居址 B G - 89 暗茶灰色砂質土。		

番号	種 類	法 量(cm)		特			
105	葇	口径 13.9 器高 18 以上		胴部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。両面とも横ナデされ、端部は上方へ引き上げられる。端面には凹線、内面頸部に刷毛目。 れる。端面には凹線、内面頸部に刷毛目。 離長の胴部、下端は欠損。下半に接合痕がみられるが上・中・下部の接合により成形。上 半外面は左下りの粗い叩き、中央部には細長い水平方向、下半は左下りあるいは水平の叩き き疲がみられる。内面は粗い斜刷毛により平滑に調整。接合痕は全く消される。上半外面 は煤、中央以下は熱による剝落。器壁は4mm強。 (欠損) (次損色を呈し、砂粒多い胎土、焼成は中。 (乙U8 南北方向トレンチ 暗灰黄色粘質土層			
106	築	口径 12.2 器高 12.3	底 部 備 考	胴部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。両面は横ナデされ、端部は丸くおさまる。 縦長の胴部。外面上方より左下り、水平、左下りの叩き目。内面上端には粘土紐接合痕。 その上に刷毛目痕。それ以下は極めて平滑。器壁は6mm強と厚い。 突出する平底。中央わずかにあげ底気味。 白灰赤色を呈し、砂粒多い胎土。ススは全くなし、底部面のみ真黒。 CU-18 拡張部 灰黄色砂質土層			
108	鐭	口径 15.5 器高 16.4	胴 部 底 部 備 考	胴部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。両面は横ナデされ、端部は上方へつまみ上げられる。洞部との接合部外面には刷毛目痕。 球形に近い胴部中央外面に接合痕。上半外面は水平に近い粗い叩き目、下半は左下りの叩き目。内面極めて平滑だが、粘土組痕及び接合痕。底部近くに箆押。 突出する平底。中央わずかにあげ底気味となる。 淡灰黄色を呈し、砂粒の多い胎土、焼成中。 CU-18 拡張部 灰黄色砂質土層			
109	裚	口径約 16	胴 部 備 考	UU-18 拡張部 灰貝色砂質工僧 胴部よりくの字形に屈曲し、やや内彎気味にのびる。端部は内側へ丸味をもって肥厚する。 内外面とも横ナデ、外面下部を特に強い横ナデ。 (欠損) 灰茶色を呈し、細砂含む胎土。焼成良。 CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂層			
110	蓰	口径約14.7	胴 部 備 考	体部よりくの字形に屈曲し、やや内彎気味にのびる。端部は内側へ丸味をもって肥厚する。 内外面とも横ナデ、外面下端を特に強い横ナデ。 (欠損) 白赤色を呈し、砂粒の多い胎土、焼成良。 CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂層			
111	築	口径約14.6	胴 部 備 考	胴部よりくの字形に屈曲外反する。内彎気味にのびる厚味ある口縁部。端部はわずかに両方に突出。外面中央よりやや上に稜。両面は横ナデ。 (欠損) 灰褐色を呈し、砂粒の多い胎土の焼成やや不良。 CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂層			
112	魏	口径約 14	胴 部備 考	胴部よりくの字形に屈曲外反する口縁部。端部は内側に肥厚する。両面とも強い横ナデ。 下半は欠損するが、球形の胴部。外面は刷毛目、内面は箆削り。器壁3 mm強。 白灰黄色、灰茶色を呈し、砂粒の多い胎土。焼成は良。硬質。另 外面全面に煤。 CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂層			
113 • 114	甕	口径 18弱	胴 部 部 備 考	胴部よりくの字形に屈曲外反する。端部は丸くおさまる。内面は横刷毛。外面は横ナデ。ほとんど欠損するが上端内面は箆削。 同一個体かは確認されないが、平坦底。胴部下位外面は粗い刷毛+細い刷毛。 底部内面に炭化物。茶褐色を呈し、極細雲母粒を含む。焼成中。8×3.5cm片8×7 cm片 CV-6~12 灰黄色砂質土層			
115	壶	口径 18.0	体 部 底 部 備 考	体部よりくの字形に屈曲し、斜上方に直線的にのびる。端部は内方へ突出し、上端面を持つ。両面とも横ナデ。 やや肩の張る球形の体部。下半は欠損。外面は刷毛目、内面は粗い箆削り。 (欠損) 灰黄色を呈し、砂粒多し、焼成中。 CV-28 暗黄灰色粘質土層			
116	壺	口径約20.6		直線的に斜上方にのびる。端部はやや内方へ厚味をもってとじる。内面上半、外面は横ナデ。外面は細かい横箆磨き。内面下半は指圧痕及び刷毛目。 (欠損) 黒褐色、茶褐色を呈し、細砂含む胎土の焼成は良。硬質。 CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗砂層			

番号	種	類 法 量(cm)		特	徵		
117	壺	口径約 17	体 部 備 考				
118	壺	口径 15.7	体部備考	体部より外彎しつつ斜上方にのびる。端部は方形近くにおさまる。外面箆磨きと考えられるが調整不明。 球形の体部は欠損。上方外面は平滑だがかすかに叩き目がのこる。内面は3本の粘土紐痕。 その上に指圧痕。 橙色を呈し、粗砂多し、焼成中。 CV-34 南北方向トレンチ 灰色粘土混細砂層			
119	壺	口径 12.8 器高 23.7		でる。上端は内側にやや厚味をもっては 楕円形縦長の体部外面は刷毛目調整。内 丸底。	明橙色を呈し、粗砂多い胎土。焼成不良。下半部よりやや下位以下外面に煤。		
120	壺	口径 15.3	口頸部 体 部 備 考 出土地	備 考 明灰黄色を呈し、粗砂含む胎土の焼成良。			
121	高 ±	不 口径 18.7	脚台備考	は横ナデ。外面は縦箆磨き、内面も箆磨きと思われる。环底と口縁部の接合痕。その下位には刷毛目。 (欠損) 暗茶色を呈し、細かい胎土の焼成は良。			
122	高 t	不 口径 18.4	坏 部 脚 台考出土地		口縁部。端部に内側へわずかに肥厚し、方形近射状箆磨き。外面は細かい横方向の箆磨き。端部 い胎士、¼ 混細砂層。		
123	高 垟	不 口径約 17	脚台備考	底部は欠損するが、斜上方にやや内彎気外面は細かい横方向の箆磨き。底部とのる二段の削り、その下方に不明瞭だが縦(欠損) 茶色を呈し、細砂を含む胎土の焼成は良CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗	。硬質精製。		
124	高 ઇ	K 口径 17.7	脚台備考	底部よりわずかに屈曲して斜上方にのび 緑部外面は横ナデ。底部との接合部外面 (欠損) 橙色を呈し、細砂含む胎土の焼成は中。 CV-34 南北方向トレンチ 灰黄色砂			
125	高 均	脚台高11.0 脚端径12.0	脚台備考	(欠損) 中空の観開きの柱状部に屈曲して開く裾 柱状部内面には4段の接合痕としばり痕 わずかに突出する。 淡白褐色を呈し、細砂多い胎土の焼成は CV-34 南北方向トレンチ 青灰色粗			
126	高 圪	脚台高 5.2 脚端径10.5	脚台備考	(欠損) 裾開きの脚台やや内彎気味。外面に粗いもみられる。4孔。端部は尖んがり、そ淡白灰色を呈し、細砂含む胎土。焼成中CW-26 トレンチ内 灰黄色砂利混り	•		

番号	種 類	法 量(cm)		特
127	高坏	脚台高 9.3 脚端径17.2	坏 部 台 備 考 地	(欠損) 中空の柱状部に屈曲して大きく開く裾部を持つ。脚柱状部内面には削り痕。裾部外面は横 方向の細かい箆磨き。内面にはかすかな刷毛、端部内面には横刷毛、端部は丸くおさまる。 4 孔。 橙色を呈し、キメの細かい胎土、焼成中。 CV-34 灰黄色砂質土層
128	鉢	口径 11.6 器高 8.0	底 部 備 考	やや内彎気味に立ち上がる体部にわずかに屈曲外反する口縁部を持つ。端部は丸くおさまる。体部外面は箆磨き。内面は平滑箆磨きか。 外方に踏んばるおげ底。外面には指圧痕、端部は内面に折り返す。 明黄灰色・灰橙色を呈し、砂粒なし。焼成は良、硬質。 CU-18 拡張部 灰黄色砂質土層
129	鉢	口径 13.0 器高 7.0	底 部 備 考	斜上方にのびる下半部とやや屈曲して内彎気味に更にのびる上半部を持つ。外面・内面とも平滑だが調整不明。端部は薄く丸くおさまる。底部内面に箆押痕。厚味ある平底。 貫白赤色・灰黒色・白灰黄色を呈し、粗砂含む胎土、焼成中。 CU-18 拡張部 灰黄色砂質土層
130	小型鉢	口径 16 程度	体部備考	体部より二段に屈曲して斜上方にのびる。端部は尖んがってとじる。両面とも横方向の細かい篦磨き。 底部は欠損するが外開きの浅い体部。内面は横方向の細かい篦磨き、外面は不明瞭だが箆削り。器壁2mmと極めて薄い。 茶褐色を呈し、焼成良、硬質、胎土は細く精製。光片による推定図化。 CV-34 南北方向トレンチ 灰色粘土混細砂層
131	小型鉢	口径 16 程度	体部備考	体部より二段に屈曲して斜上方にのびる。端部は尖んがり気味にとじる。内外面とも横方向の細かい篦磨き。 下半は欠損するが外開きの浅い体部。内外面とも横方向の細かい篦磨き。外面は箆削り、器壁4㎜。 茶褐色を呈し、もとの細かい胎土、焼成は良、硬質、精製。 CV34南北方向トレンチ 青灰色粗砂層
132	小型鉢		体部備考	体部より二段に屈曲して斜上方にのびる。端部は欠損する。外面は刷毛、内面も刷毛。下半は欠損するが外開きの体部。やや腰が張る。外面は刷毛目、内面は平滑。内面上端に接合痕。 淡灰黄色を呈し、細砂粒多く含む胎土、焼成中。 6 × 6 cm片による推定図化。 C V - 34南北方向トレンチ 青灰色粗砂
133	小型丸底坩	口径 10.3 器高 約7 8 8	体部備考	体部より屈曲して斜上方に直線的にのびる。端部は内面より薄くなりやや尖んがり気味にとじる。外面は細かい横篦磨き。内面もほぼ同様であろう。 下半は大部分連続しないが同一個体と思われる部分が併出している。極めて扁平球形を呈する体部外面は篦磨きか。内面上方に篦原体と思われるものによるナデ。 淡黄茶色を呈し、焼成は良、硬質、細い胎土、精製土器。 CV-34 南北方向トレンチ
134	小型平底坩	口径 8.3 器高 9.0		体部より屈曲して垂直に立ち上がる。器壁は7mmと体部壁より厚い。端部内面がやや薄くなり丸くおさまる。両面は横ナデ、外面下半の調整は不明。また外面下端は強くナデられ凹線状をなす。 半球状のやや扁平な体部下端に小さな平担底がつけられる。外面の器壁剝落、内面は箆削りされ平滑。 黄赤色を呈し、粗砂極めて多い胎土、軟質粗製。 CV-30南北方向トレンチ断面 暗灰黄色粘質土層
135	小型丸底坩	口径 約11 器高 約6 強	口縁部 体 部 備 考 出土地	体部より屈曲して斜上方に大きく開く。端部は内面に稜ができて尖んがってとじる。内外面とも横方向の細かい篦磨き。5mmと体部の器壁より厚味がある。下半は欠損するが、扁平球形を呈する。調整は不明だが外面は平滑、内面は凹凸がある。器壁は2mmと薄い。 外面は茶褐色内面は淡黄赤色を呈し胎土は細かい。焼成不良で軟質。7×7cm片による復元。
136	小型丸底坩	口径 12 強	口縁部体 部備 考出土地	体部より屈曲して斜上方に大きくのびる、端部は欠損。外面は横方向の細かい箆磨き。内面は横刷毛の上に放射状の箆磨き暗文を施こす。 (欠損) 赤褐色を呈し、焼成は良、胎土は細かい。精製土器と言えよう。7×5 cm片より復元。 CV-34南北方向トレンチ 灰色粘土混細砂層

番号	種 類	法 量(cm)	·	特	徴	
137	小型丸底坩	器高 7 強か	する。内面 体 部 扁平球形の 備 考 外面は白灰	は横ナデ、外面は細い横箆 体部。上半は細い横箆磨き 茶色、内面は灰黄色を呈し て体部底となす。	でのびるのかは不明。体部よりく 磨き。やや内鬢気味にのびる。 、下半は粗い箆削りにより調整。 、極細の金雲母粒を含む精製胎±	内面は平滑。
138	坏	口径 12.3 器高 4.0	は横刷毛、 備 考 灰黄色を呈	開きする。底部より曲線的 口縁部外面は横ナデ、底部 し、砂粒の多い胎土の焼成 南北方向トレンチ 灰色砂	中。	くおさまる。 内面
139	台 付 椀	口径 11.4 器高 8.9	じる。外面 脚 台 裾開きの底 痕。 備 考 淡黄色を呈	は刷毛調整。内面やや凹凸	る。両面は横ナデ。椀底部と脚台 焼成中。	

観察結果

旧河川状遺構南岸淡青灰色細砂層ならびに西端部暗茶褐色粘土層出土土器

小型丸底土器Da

外上方にひらく短い口縁部に球形の胴部を有し、胴部最大径は肩部に位置する。口縁部径と胴部最大径は、ほぼ同大である。調整は、胴部の最大径部以下の外面を横方向にへラ削りし、最大径部以上はヨコナデによって仕上げている。口縁部と胴部の境界は、接合痕を消すべくヨコナデを繰り返すために、口縁部の基部で外彎する器形となる。

図版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎土、色調	備考(出土地点、層位)
図版39		口 径 9.6 胴 径 9.3 器 高 8.6 口縁部高 2.4 胴 部 高 6.2	口縁部 胴 部	外上方にひらく短い口縁部。口縁部径と 胴部最大径は、ほぼ同大である。 胴部外面のヘラ削りを底部近くでタテ方 向に行なって小さな平底を削り出してい る。胴部内面は、一ラ削り+ナデによっ て平滑に仕上げられている。胴部断面に は、接合痕が2ヵ所認められる。	砂粒を含まない精良な 粘土を使用 雲母の微粒とクサリ礫 様の赤褐色の斑点をな かに含む。 外面は淡灰褐色。 内面は灰黒色。	G-29地区 淡青灰色細砂層。
図版39 5	図版 90	口 径 9.0 胴 径 9.4 器 高 8.6 口縁部高 2.5 胴 部 高 6.1	口縁部 胴 部	同上。 尖りぎみの丸底をもつ。胴部内面は、横 方向(左から右)の刷毛目のうえをナデ 調整する。 内面に粘土紐の接合痕が3ヵ所認められ る。	砂粒を含まない精良な 粘土を使用。雲母の微 粒とクサリ礫様の赤褐 色の斑点をなかに多く 含んでいる。 外面は淡灰褐色。 内面は赤褐色。	口縁部と肩部の外面に 煤付着。 L-5 淡青灰色細砂層。

小型丸底土器Db

外上方にひらく口縁部は、一般に基部で外彎し、端部で外反する形態をとる。胴部は、いずれも最大径部が器体の中位ないしはやや下位に位置し、扁球形を呈するものが多い。調整は、胴部外面に刷毛目を施し、内面はヘラ削り+ナデによって仕上げている。さらに、刷毛目には、目の粗いものと細密なものとがあって、一個の土器を製作する際に2種類の刷毛目原体が併用されている場合がある。

図版	番号	法 量 (cm)		個 々 の 特 徴	胎 土、色 調	備考(出土地点、層位)
図版39	図版 90	口 径 9.0 胴 径10.4 器 高 9.8 口縁部高 2.4 胴 部 高 7.4	胴 部	外上方にひらく口縁部は、基部で外彎し端部でわずかに外反する。 最大径は、器体中位にあって底部は尖りぎみの丸底となる。 外面の調整は、器体下半部に目の細かい刷毛目を用い、上半部には目の粗い刷毛目を 用いている。器体中位では、目の細かい刷毛目のうえに粗い刷毛目を重ねている。 内面は、横方向(左から右)に丁寧なへ ラ削りを施しており、器厚は0.3cm前後と 凄い。	0.1cm 前後の砂粒を含むが器表面は平滑である。 外面は淡赤褐色。 内面は灰褐色。	M-11 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版39 2	図版90	口 径10.6 胴 径10.4 器 高10.2 口縁部高 3.4 胴 部 高 6.8		外上方にやや長くのび、口縁端部でわずかに外反する。 器体中位に最大径を有し、丸底でおわる。 外面の刷毛目は、器体上位が縦方向、以下は乱方向に施されている。刷毛目原体は、いずれも同一である。 内面は、横方向(左から右)にへう削りし、底部は指圧痕のうえをへラで搔いている。	0.1cm 前後の砂粒を含むが器表面は平滑である。 内面、外面ともに淡褐色。	H-0 暗茶褐色粘土層。
図版39	図版90	口 後 8.6 胴 径10.4 器 高 9.5 口縁部高 2.8 胴 部 高 6.7	口縁部 胴 部	基部でわずかに外彎し、そのまま外上方にのびて端部に至る。 器体中位に最大径を有し、やや尖りぎみの底部をもつ。外面の刷毛目は、器体上位では、ヨコナデによって消されているが、中位で横方向(右から左)、以下は乱方向の刷毛目が認められる。 内面は、全面にわたって横方向(左から右)にヘラ削りされ、器厚を0.4~0.5cmに仕上げている。	0.1~0.3cmの砂粒を含むが器表面は平滑である。石英、雲母を少量含んでいる。 内面、外面ともに明るい灰褐色。	H - 0 暗茶褐色粘土層。

図版	番号	法 量 (cm)		個	々	0)	特	徴		胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版39		口 径10.0 胴 径10.0 器 高 9.6 口縁部高 2.9 胴 部 高 6.7	口縁部 胴 部	外面の 位で横 施され 内面は	制毛目 方向(え ている 、	は、暑 左から で器ま	器体上(右)、 長面を打	、丸底で、 立で縦方 下位で乱 骚いたの 7cmと厚	句、中 方向に ちナデ	0.1~0.3cmの砂粒を含むが器表面は平滑である。 雲母、石英の微粒を少量含む。 外面ともに灰褐色。	I-37 暗茶褐色粘土層。
図版39	図版90	口 径 9.2 胴 径 9.6 器 高 8.3 口縁部高 2.2 胴 部 高 6.1	旧 部	端扁め刷ら目内 内間は	わをるがにか、/ず皇。施変い最ラ	いに外が 体れす毛 はれず毛 にいる にいる にいる にいる にいる にいる にいる にいる	豆すのは 立いは 立いは 立いは では で体さを では で体さを を を に に に に に に に に に に に に に	、基部で: 毛目に2章 だは同の目 は下位は下位にで でででで に 横方(0	種類の(方) を が取れかに がないかに がない。	0.1cm前後の砂粒を含 み、軟質であるが、器 表面は平滑である。 内面、外面ともに淡赤 褐色。	I-0 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版39		口 径10.2 胴 径10.8 器 高 9.4 口線部高 2.3 胴 部 高 7.1	口縁部 胴 部	する形態扇の形が中の形が中の形が、方で面は、方で面は、	ーと を位にる、 を立てる。全 な すれ 体	· 描 器 厚 「 る 。 方 方 方 方 で 横 ぞ で 横 ブ	が内面に は0.5~ ト面の智 (右か 目の粗に ち向(2	でわずか。 は単純に ~0.6cmと 器体上位 ら左)、 い刷毛目; 左から右 後に仕上	外厚 が で 下が に たが に へ	0.1cm 前後の砂粒を含む。石英、雲母の微粒 を少量含む。 内面、外面ともに黄赤 褐色。	図版 95 大形壺と伴出 G-29 淡青灰色細砂層。
図版39	図版90	口 径 9.4 胴 径10.4 器 高 9.3 口縁部高 2.5 胴 部 高 6.8	口縁部 胴 部	部でわる大径が外面の	ずが制消制 、 か器毛さ毛へ	外反で 下はに は に お 記 が 表 し で 表 き で 表 き る た う で る た う で る ろ る ろ る ろ る ろ る ろ る ろ る ろ る る る る る	ける器子 位大後し うらを掻いる 面を掻いる	ハたうえ	呈す。 ナデに 下は乱	砂粒をほとんど含まな い精良な粘土を使用。 雲母を含む。 内面、外面ともに暗灰 褐色。	I - 0 青淡灰色細砂層。
図版39	図版91	口 径 9.0 胴 径10.0 器 高 8.8 口縁部高 2.7 胴 部 高 6.1	口縁部 胴 部	と 器でかるい 乱面は	。 位に を は が 目に は に は は は は は は は は は は は は は は は は	大径 を すの刷 た ・施 粗 に ・ 上 位 た	を有する 毛目は、 こい刷毛 いら中(部。器厚はる扁球形の る扁球形の 、全体体上の 目を重ねた でで調整	の形態 目の 立に る。 て へラ	0.1~0.2cmの砂粒と若 干の雲母を含む。 器表面は、内面につい ては平滑であるが外面 は刷毛目の一部が摩滅 によって消失している。 内面、外面ともに明る い灰褐色。	N-2 淡青灰色細砂層。
図版39 11	図版91 5	口 径 8.5 胴 径 9.4 器 高 9.3 口縁部高 2.5 胴 部 高 6.8	口縁部 胴 部	形をな 球形・ が認め きない。	す。器 丸底の られる 。たた	学学は0 部体を 以外に でし、者	.6~0. ともち、 は調整: 学厚はC	かに外反 .7cmと厚 、外面に 方法の観 5.7~1cm が特徴と	ハ。 副毛目 察はで と非常	0.1~0.2cmの砂粒を含む軟質の土器である。 内面は淡赤褐色。 外面はやや黄色の強い 赤褐色。	I-0 淡青灰色細砂層。
図版39	図版91	口 径 7.8 胴 径10.0 器 高 9.1 口縁部高 2.9 胴 部 高 6.2	口縁部 胴 部	よって 最大径 玉 大 と 大 で か ら い い い れ い い れ い ら い ら い り い り れ り い り れ り い り れ り れ り れ り れ り	平 部形以上が は態上しが 指したが はたが はたが はたが はたが はたが はたが はたが はたが はたが は	面 器と目施方痕を 体るのさ向の	ジ は は は は で で 面 い 最 さ を で 面 い 最 さ を さ え ま こ か こ か こ か こ か こ か こ か こ か こ か こ か こ	張りをも り 利 毛 目 が そ そ て て で で で で で で で で で で で で で で で で	ち算盤 は、角 縦方向 下は粗	砂粒を多く含んだ粘土 を使用。 石英、雲母を含む。 内面、外面ともに淡赤 褐色。	H-0 淡青灰色細砂層。
図版39 14	図版92	口 径 9.8 胴 径11.2 器 高 9.6 口縁部高 3.4 胴 部 高 6.2	口縁部 胴 部	くで再 最大径(球形を 毛目が 下位で	びわず によす しる上向	"かにタ て、外で 立 で う で う で う で え で え で え で る で る で る う に う に う に る う に る う に る う に る う に る う に る う に る う に る う に う に	ト 反 す <i>を</i>	外彎し、i る。 小さい極i 、目の細i 、中位でだ 行なわれて っナデ調整	端な扁 かい刷 黄方向 いる。	0.1cm以下の砂粒を少量含むが、焼成は堅緻 で器表面は平滑である。 雲母、石英の微粒を含 内面、外面ともに淡灰 褐色。	I-37 淡青灰色細砂混り暗 茶褐色粘土層。

図版番号	法 量 (cm)	and a solution	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版39 図版92	口 後 9.0 胴 径11.4 器 高 9.6 口綾都高 2.2 胴 部 高 7.4	口縁部 胴 部	単純に外反する口縁部、口縁端部は尖りぎみにおわり、鈍い稜を形成する。内面には、斜方向の目の粗い刷毛目が認められる。 板端な扁球形を呈し、底部は平坦な面をもつ。外面の刷毛目は、目の粗いもので、乱方向に施されている。 内面は、ヘラ削りののちナデ調整する。肩部に2条の接合痕あり。器厚は0.3cmと薄い。	0.1~0.2cmの砂粒を含むが器表面は平滑である。 人内面、外面ともに暗灰 褐色。 胴部外面に 9 cm×8 cm の黒斑。	J−1 淡青灰色細砂層。

小型丸底土器E

胴部の形状は小型丸底土器 Db に類似するが、口縁部は 2 重口縁様の器形となるもの。刷毛目で仕上げたものとナデ仕上げのものとがある。

図版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版39 13	図版92	口 径 8.6 胴 径 9.3 器 高 8.8 口縁部高 2.2 胴 部 高 6.6	口縁部	短く外上方にひらく口縁部は、胴部との 境でヨコナデを繰り返すことによって口 縁部の器形は2重口縁部様を呈するよう になる。	0.1cm 前後の砂粒を多く含む。 内面、外面ともに灰褐色。	I - 0 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
			胴 部	完全な球形・丸底をなし、外面には刷毛 目を施さず、ヘラで掻いたのちナデ調整 する。内面も同様の調整方法をとる。		
図版39	図版92	口 径 9.2 胴 径12.0 器 高12.2 口縁部高 3.1	口縁部	胴部との境のヨコナデが強調されて口縁 部は中途に段を有する2重口縁の形態に なる。	0.1~0.2cmの砂粒を含む。石英粒を含有。 内面、外面ともに淡褐	G-29 暗茶褐色粘土層。
20	J	胴部高9.1	胴 部	球形・丸底の胴部を有する。外面には細かい乱方向の刷毛目を施し、内面は器体下位を横方向(左→右)にヘラ削りする。	色。 	

小型粗製土器

図版	番号	法	量 (cm)		個々	Ø	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版39 19	図版95	旧器器	径 8.4 径 4.7 高 7.4	口縁部 胴 部	単純に外反すの場合では、 は、 は、 は、 が、 が、 が、 が、 は、 は、 は、 が、 は、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が、 が	きは、 の胴部へ このちこ	ョコナラ ココナラ へと つって かご 調整 アご 調整	づく。 行ない、内面! をする。	外面 灰褐色。	M-11 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
18		口胴器	径10.0 径 9.0 高 5.9	口縁部 胴 部	単純に外反すたのちナデ制全体に、作りて成形したう と成形したう上げている。	関整する は粗雑	る。 椎で、目	=づくねによ	精良な粘土を使用。 雲母を含む。	I -35 暗茶褐色粘土層。

小型器台C

杯部が前代のものとくらべて大きく、器厚も分厚いずんぐりした形態である。調整はナデを主体に行なっている。

図版	番号	法	量 (cm)			僴	4	,	Ø	特		徴		胎	± ·	色 調		備考(出土地点、層位)
図版39	図版92 5	杯音器	径10.6 部 高 4.0 高 9.6	杯 脚	部。	わ 基呈全口	。 がるにとを を が。仕 紙 施	くと上部し、	ょり ば は る も も も も も そ し る し る り る り る り る り る り る り る り る り る	、「// まり 目原々	」の写 「寧で 本 に 』	こくなってお ド形の形状を ではない。 こる横方向の は指ナデによ	精かりを全	良雲に繰り	粘土を 母の得 の赤名)含まる。	なりサ	小型丸底土器Da、甕Ab の胎土と類似する。 O-15 淡青灰色細砂層。

小型器台D

小型丸底土器Dbおよび高杯Bbと同様の製作手法を有するもので、調整は内外とも刷毛目による。

図版番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版39 図版92 17 6	口 径11.2 杯部高3.5 器 高8.5	杯 部 脚 部	脚部より「く」の字に外折し、外上方にのびたのち口縁端部近くで外反する。 内面はクモの巣状の刷毛目を施したのちョコナデ調整する。外面は接合部を縦方向(上から下)の刷毛目で調整するほかはナデ調整による。ゆるやかに大きく広がる脚部。内面に横方向(左から右)の刷毛目を行なう。杯部との接合部には棒さし痕が残り、杯部にまで貫通している。	0.1cm 前後の砂粒を含むが器表面は平滑である。石英、雲母を含む。 全体に淡赤褐色。	L - 5 暗茶褐色粘土層。

蛸壺

図 版 番 号	法	量 (cm)		個	\z	?	0	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
	器器	径 4.0 高 7.4		である	5.	内面	をへ			0.1cm前後の砂粒を多く含むが器表面はナデによって砂粒を押さえ 込んでいる。 全体に赤褐色。	K-27 淡青灰色細砂層。

高杯Ba

水平方向ないしはいくぶん外上方にのびる杯底部より、ゆるやかに角度をかえて口縁部がつき、外反しつつ端部にいたる。底部と口縁部の境は、漸移的で、明瞭な稜は形成しない。杯底部の外面には、脚部との接合部をヘラで削って調整している。また、脚部との接合部に棒さし痕は認められない。

図版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版39 21	図版93 2	口 径16.2 杯部高5.1 器 高10.4 (現存値)	杯 部 脚 部	わずかに外上方にのびる杯底部より、ゆるやかに角度をかえて口縁部がつき、外反しつつ端部にいたる。 杯部との接合部は、ヘラ調整するが、削りの痕跡は明瞭ではない。脚柱部内面は、しばり痕+ヘラ削りで調整している。	0.1~0.2cmの砂粒を含むが器表面は平滑である。 杯部は黄褐色、脚部は 黄色のかかった灰褐色。	I - 0 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版39 22	図版93	口 径15.6 杯 部 高 5.4 器 高12.8	杯 部 脚 部	同上。ただし口縁部は外反せずに端部にいたる。 この種の高杯で全体の器形のわかるものはこれのみである。脚部においても刷毛目を使用した痕跡はみられず、刷毛目使用の頻度の高い裾部内面は、ヨコナデによって仕上げている。	胎土には0.1cm以下の 砂粒を含むが、器表面 は平滑である。 全体に黄赤褐色。	M-10 淡青灰色細砂層。

髙杯Bb

水平方向にのびる杯底部より、ゆるやかに角度をかえて口縁部がつき、外反しつつ端部に至る。口縁部は、高 杯Baに比して、外反するカーブが明瞭である。底部と口縁部の境は、漸移的で、明瞭な稜は形成しない。調整は、 杯部外面に縦方向の刷毛目を施し、内面にも横ないしは斜方向の刷毛目を施す。また、脚部の調整にも刷毛目が 使用され、とくに裾部内面に多く認められる。さらに、杯部と脚部の接合の際には、脚に心棒をさし込んだまま 杯部に挿入されるために、接合部には棒さし痕の残る場合が多い。接合部の外面にはみ出した粘土については、 刷毛目原体によって再度調整される。

図版番号	法 量(cm)	個々の	特 徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版39 図版93 25 4	「口 径18.0、杯 部 高 5.8 器 高11.6 (現存值)	角度をかえて口縁 端部に至る。外面に 面は横方向の刷毛 をしまでした。 はり痕のうえを横 でである。	底部より、ゆるやかに 部がつき、外反しつ内 は縦方向ので調整する。 目によって神のの調整する。 れず、脚柱部内面はし 方向(右から左)にへ 響きは、杯部との接合	む。雲母の微粒を若干 含む。 全体に灰褐色。	M-10 暗茶褐色粘土層混り 淡青灰色細砂層。

図版	番号	法 量 (cm)		個	セ	の	. 4	 特	SHI.		87.	_L	FEI	(株本/ 川) は や マルン
図版39	-	口 径17.4	杯	郭 形態	は同上	,			徴			土・色 i .2cmの砂粒		備考(出土地点、層位) G-29
000		杯 部 高 5.6 器 高13.5			たヨコ				0仕上げで E全に消さ		英粒を 全体に	含む。 黄赤褐色。		淡青灰色細砂層。
26	6		脚	邪 脚柱 れる て消	部内面が、そ	の他の いる。	の部分 裾部[はへ 内面の	ぱり痕が認い見りには、横方向 いる。	よっ				
図版40	図版94	口 径18.4 杯部高5.9 器 高9.3 (現存値)	杯音	調整 斜方 面全 てい	向の刷 体は、	面に納毛目を	を施す うえに	。 🗆	『毛目、内 「縁部外面 ナデを行 ・利用した	と内なっ	母の微線 杯部内 杯部外		。 みが	H - 0 淡青灰色細砂層。
1	3		脚	調整 合部	はその さし痕:	面をへ うえに	トラ磨 こ刷毛	きし	*ある。 、杯部と 施す。内 りを行な	面に	脚柱部	は黄赤褐色	0	
図版40		口 径18.0 杯部高5.9	杯音	に内刷しる。	ってなれ は、口紅 目が施: 回転利用	かば消 縁部に きれ、 用のE	肖され に横方 底コナ	て向はデ	左から右 ヅビキに 行なわれ) の 類似 てい	む。	「後の砂粒 は平滑であ		I-0 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
				版40. れた	3と同様	·)、杯 入法に	部と脚	い部は	離しており は別途に製 合された	作さ				
図版40		口 径16.6 杯部高5.3	杯 部	その	は同上。 まま残る されてい	るが、	面には 内面	縦方はヨ	向の刷毛 コナデに。	よっ				E-29 淡青灰色細砂層。
図版40 4	図版94 4	口 径16.0 杯部高5.0	杯 部	によ 脚部 状が	って消さ	されて 合部に までの	こいる。 こみら つもの	。 れる	はヨコナー 棒さし痕の 干変化し	の形てい	む。ク+ 色の斑 _月	後の砂粒 ナリ礫様の 気と雲母、 を少量含む。 で褐色。	赤褐 石英	高杯23と伴出した。 I-1 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版40	図版94	口 径17.7 杯 部 高 5.5 器 高12.8	杯 音	調整方の。 ぎょう	向の刷き 全体は まった いた いたの が なった が れた。 か に の が に の が に り に り に り に り に り に り に り に り に り に	面目 デミランド 前目 それ できる かい こうしょう かいしょう かいしょく かいり かいしょく かいり かいしょく かいしょく かいしょく かいしょく かいしょく かいしょく かいしょく かいしょ かいしょく かいし かいしょく かいし かいしょく かいり しょく いいしょく かいしょく かいしょく いいしょく いいしょく かいしょく いいしょく いいしょく かい	: 施す。 転えを はんた	。に利粘調	毛目、内で 縁部外面で コナデをイ したもき上い 紐巻き上れ 痕がみられ	面と行でげる。	むが、* 用してい	責赤褐色、 I	を使	M-11 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
5	7		脚 音	ス 脚合脚ら毛目 (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)	裾部が~ 部外面の に行なれ 部をへう の刷=	つく。 りへれり もりてりて	・ミガ: いる。 、裾: *行な	キは 。 の を う。	かに角度 を 、杯調整 との が が が が は が は が は が は が の の の の の の の	の接 は、か を刷				
図版39	図版93	口 径16.0 杯部高4.8 器 高9.1 (現存値)	杯 部	内面 高杯 い。 脚部	Bbに特 との接る	徴的	な刷きは、材	毛目に 棒さ	デを行ない は認められ し痕がみら 製作にあた	い、 にな られ	おり、器 ある。 雲母、石 量含み、	押さえ込まれ 最表面は平常 英の微粒を クサリ斑点が認め	骨でを少く	高杯4と伴出した。 I-1 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
				ては、	、脚部を	先に	作りる	その	表にあた うえに杯音 われる。	部粘 .	れる。	が、	10	
図版39	図版93	口 径16.0 杯部高5.8 器 高12.5	杯 部	増して内面、	つつ外上 外面と が、内面	:方に :もに	のびる	る。 ナデリ	、脚部から によって信 毛目が残っ	±.E.		2cmの砂粒を E粒を含む。 そ褐色。		L-5 淡青灰色細砂層。
			脚部	部に、ラ磨る	おいては	内面部は	をへう内面、	ラで! 外!	調整は、脚 蚤き外面を 面ともヨニ	-				

高杯CI

椀状の杯部をもつ類であるが、杯部の形態には底部と口縁部が見分けられ、口縁端部でわずかに外反するものがあるなど高杯Bに類似する点が認められる。調整は、内面・外面ともに口縁部はヨコナデし底部はナデが行なわれている。また、杯部と脚部の接合は捜入法によって行ない、接合部外面にはみ出した粘土はヘラで搔き取っている。脚部は、脚柱部が短く、なだらかに裾部へ移行する形態である。

図版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版40	図版 94	口 径13.8 杯部高5.2 器 高11.4	杯音脚音	度をあげて口縁部がつく。	精良な粘土を使用。 す 全体に灰褐色、一部黄 で 褐色。	L-1 淡青灰色細砂層。
図版40 7	図版94	口 径14.4 杯部高4.8 器 高10.4		形態は高杯Bに類似し、口縁部と底部 境が比較的明瞭である。口縁部内面に 刷毛目がみられる。 脚柱部と裾部の境をもたない小形の脚部 杯部との接合部には棒さし痕がみられる 内面の調整は、脚柱にあたる部分がし り、裾部は刷毛目(原体は杯部のもの 同じ)による。	は、むが器表面は平滑である。 る。 る。全体に黄灰褐色。 。	N-4 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版40 8		口 径12.5 杯部高5.5	杯:	外上方にのびる底部より、ゆるやかに)度をあげて口縁部がつく。端部は丸くっておわる。杯部だけが接合部で完全,剥離していることより、杯部と脚部はなに製作した後、乾燥がかなり進んだ↓階で接合されたことが観察できる。	な み、やや軟質の土器で こ ある。 別 全体に赤褐色。	N-6 淡青灰色細砂層。
図版40	図版94 6	口 径13.9 杯部高5.1	杯音	形 同上。	砂粒をあまり含まない 精良な粘土を使用。ヨ コナデの面がスリップ の模をなしている。 全体に鮮やかな赤褐色。	K-21 淡青灰色細砂層。
図版40 10		口 径13.6 杯 部 高 5.2 器 高 7.8 (現存値)	杯 品脚		部 全体に明るい灰褐色。	L-1 淡青灰色細砂層。

高杯C2

図版40	口 径 14.6 杯部高 5.2 器 高 9.3		完全な椀形を呈し、口縁部は直立してお わる。内外面ともにナデ調整によって仕 上げている。		I -33 淡青灰色細砂混り暗 茶褐色粘土層。
11	(現存値)	脚部	細い脚柱部を有する。 杯部との接合部には棒さし痕がみられ、 杯内底面にまで貫通している。外面にへ ラ磨きが施され、内面にはしぼり痕が残 っている。	に明るい灰褐色。	N. POLITIZE O

高杯脚部

図版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版40 12	図版95 4	裾 部 径 9.4 器 高 5.0	脚部	脚柱部内面にしぼり痕がそのまま残り、 裾部内面は目の粗い刷毛目で調整されて いる。	砂粒をあまり含まず、 器表面は平滑である。 雲母の微粒を含む。 全体に灰褐色。	K-3 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版40 1 3		裾 部 径 9.5 器 高 6.0	脚部	脚柱部よりゆるやかに屈曲して裾部が広がる。器高が低い小形の脚部の内面の調整は、脚柱部がしばり、裾部は横方向の刷毛目による。	精良な粘土を使用。 外面は赤褐色。 内面は黄褐色。	O-5 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版40 14		裾 部 径11.8 器 高 7.2	脚部	内面は、脚柱部がしぼり十へラ削り、裾 部が刷毛目で調整する。 杯部との接合方法は同上。	砂粒をあまり含まず、 器表面は平滑である。 全体に明るい赤褐色。	H-0 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版40 16		裾 部 径12.4 器 高 8.8	脚部	内面は、脚柱部がしぼり十へラ削り、裾 部が刷毛目で調整する。杯部との接合方 法は同上。脚部上面は杯部内面としてナ デ調整されている。	0.1cm前後の砂楠を含む。雲母、石英の微粒 を含む。 全体に黄赤褐色。	裾部内面にヘラ記号× 印あり。 O-15 淡青灰色細砂層。

図版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版40 17		裾 部 径12.4器 高 8.8	脚部	中空の脚柱部より屈曲して裾部が低くの びる。 内外ともナデ調整によって仕上げている。	0.1cm前後の砂粒を含 む。 全体に灰褐色。	H-33 暗茶褐色粘土層
図版40 18	図版94	裾 部 径12.0 器 高 8.5	脚部	脚柱部内面はヘラ削りを行なう。杯部との接合部は杯部粘土の剝離が認められ、この高杯の製作にあたっては脚部を先に作り、心棒を差し込んだままの状態で杯部の粘土組を積み上げていったことがわかる。裾部は横方向のナデ。	0.1cm前後の砂粒を含むが、器表面はヘラ磨きおよびヨコナデの面がスリップの模をなしている。 全体に淡赤褐色。	G-27 淡青灰色細砂層。
図版40 19		裾 部 径14.1 器 高 7.5	脚部	内面は、脚柱部がヘラ削り、裾部は横方 向のナデ調整。杯部との接合方法は、そ れぞれ別々に成形したものを捜入法によ って接合する。	0.1cm前後の砂粒と雲 母の微粒を含む。 全体に灰褐色。	G - 31 暗茶褐色粘土層。

甕Ab

球形、丸底の胴部に、「く」の字に外折し、外彎ぎみに立つ口縁部を有する。口縁端部は、内面に肥厚し、肥厚部分の上端はヨコナデによる水平な面をもつ。調整は、胴部外面を刷毛目調整し、内面をヘラ削りによって器厚を薄く仕上げている。

図版番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版41	口 径12.5	口縁部 胴 部	「く」の字に外折し、外彎ぎみに立ち口縁 部端部は内方に肥厚し、上端は水平な面 となる。 球形、丸底の胴部。 外面の調整は、口縁に近い部分を縦方向 の刷毛目+ヨコナデによる。肩部は横方 向の刷毛目に斜方向の刷毛目の動を 大面を 大面を 大面を 大面を 大面を 大面を 大面を 大面を 大面を 大面	粘土を使用し、雲母の 微粒を含む。 全体に淡灰褐色。	同様の胎土を使用する ものに小型丸底土器Da 小型器台Cがある。 O-2 淡青灰色細砂層。

甕Ac

基本的な形態については甕Abと同一であるが、2、3の相違点を指適できる。まず第1に、口縁部の外折する角度が鈍く、口縁端部の肥厚の形態も内側に内傾面を有する。さらに、胴部外面の刷毛目は目の粗いものが多く、内面の削りは口縁部との接合部から開始されずに、肩部より行なわれる。

			7			
図版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
2	図版 95 7	口 径16.0 胴 径24.0 器 高15.7 (現存値)	川縁部 胴 部	部は内方に肥厚する。肥厚の形態は内側 に内傾面を有するもの。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。石英粒を含む。 全体に赤褐色。	外面全体に煤が付着する。 O-2 淡青灰色細砂層。
図版41	図版 96	口		同上。 形態は同上。外面の調整は、肩部を刷毛目原体による横方向のナデで仕上げ、最大径部は縦方向の刷毛目に横ないしは斜方向の刷毛目を重ねる。 以下は乱方向の刷毛目を施している。 また、肩部には、刷毛原体の先端による刺突が2カ所にみられる。 内面の調整は同上。器厚は0.3~0.5cm程度。	0.1cm前後の砂粒を含む。石英粒を含む。 全体に黄赤褐色。	胴部下半に煤付着と器 表面の剝離が認められ る。 H-33 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版41 4	図版 96	口 径13.8 胴 径22.8 器 高25.5 (推定)		同上。 肩の張ったやや長手の器体。 外面の調整は、肩部を横方向の刷毛目で 行ない、以下を乱方向の刷毛目で行なう。 内面は、口縁部に近い部分をナデ調整し、 肩部から最大径部までを横方向にへう削 りする。最大径部以下はヘラ+ナデ調整 による。器厚は0.4~0.6m程度。	0.1cm前後の砂粒を含むが器表面は平滑である。 全体に灰褐色。	G一0 淡青灰色細砂混り暗 茶褐色粘土層。

図版	番号	法	量 (cm)		個 々 の 特 徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版41 5		П	径15.2	口縁部 胴 部	同上。 形態は同上。外面の調整は、肩部を横方 向の細かい刷毛目で丁寧に行なわれている。 内面の調整は同上。器厚は0.4cm。	0.1cm前後の砂粒を含む。 外面は赤褐色、内面は 灰褐色。	胴部外面に煤が付着する。 J-18 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
図版 41	図版 96		径15.0 径23.1 高24.4	口縁部 胴 部	同上。 形態は同上。 外面の調整は、肩部から最大径部にかけて横方向に目の細かい刷毛目で行ない、最生目で行なう。 肩部には、刷毛目原体の先端による刺突が3カ所認められる。刺突は、左から右の方向に行なわれている。 内面の調整は、口縁部に近い部分をナデカ面の側層が以下を斜方向(左上からからが、上へ振いによっかでは、下から下)にへき間がする。底部では、下から上へ攝き上げるようにして器壁を削っている。器厚は0.3~0.5cm程度。	砂粒を含まない精良な 粘土を使用。 全体に淡黄灰色。	2 次焼成をそれほど受けず、外産品には、内強になった。 の面、外産面におたり付着してからなった。 1 一33 淡青灰色細砂混り暗茶 機色粘土層。
図版 41	図版 96	問點	径13.4 径19.3 高21.4	□縁部 胴 部	胴部との接合部の外面に縦方向の刷毛目 がヨコナデによって消されながらもわず かに残存する。	0.1cm前後の砂粒を少量含むが器表面は平滑である。雲母を多く含む。 全体に暗い黄褐色。	胴部下半に13cm×10cm の黒斑、反対側には煤 が付着する。 K-21 淡青灰色細砂層。

甕Β

球形、丸底の胴部に短く外反する口縁部がつき、口縁端部は外面に若干肥厚し、上端は水平面をなす。甕Aとは、口縁部の形態および胴部の調整方法に相異がある。

図版	番号	法	量 (cm)		個	√	の	特	徴		胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版41	図版 101	口胴器	径13.0 径21.9 高22.9	口縁部	るたと	めのヨ: した粘	コナデる	と行な・	を水平な面 & う際に外方へ ナデしたもの	ヽは	0.1cm前後の砂粒を少量含むが、器表面は平滑。 全体に淡赤褐色。	胴部外面の肩以下に煤 が付着する。 O-3 淡青灰色細砂層。
8	3			胴 部	上部行も内調十一の以なの面整ナ	ら下うでのすデルー おおい おおい おいま でんしょう おいま でんしょ おいま でんしょ しょく いんしょく いんしょく いんしょく いんしょく いんしょく いんしょく いんしょく いんしょく いんしょく はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいまい かいまい はいまい はいまい はいまい はいまい はいまい はいまい	の刷 方 后 目 は 、 は 、 は 、 は 、 は 、 に る に る に る に る に る に る に る に る に る に	毛目で行 上いず 家部目が て仕上り	上を斜方向 テない、最大 下)の目の組 がいる目のの細 がいるにいる がないる。 を がないる。 を にいる。 を にいる。 にい。 にいる。 にし。 にいる。	大言か ナ削		

壷Α

二重口縁の大型品で、屈折部の外側は凸帯状に突出して段をなす特徴をもつものである。

図版	番号	法	量 (cm)		個	4	の	特	徴		胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版40 20	図版97	П	径21.5	口縁部胴部	上で口は 形外面	をつけ 下段の5 端部な 平 本 に は に は に は に は に は に れ に れ に れ に れ に れ	た端側な あ向ここはにっ るの	とによ 擬口縁れ も凸帯 ている。 が、破	って生っ てなぐ かめ た み	部の上にいるとが施るとが施るとが施された。	量含む。石英粒を含み	M-11 暗茶褐色粘土層。

壷Ba

外上方にひらく直口口縁を有し、口縁端部は内外に肥厚する。作り方、ならびに胎土が良好なものである。

図版番号	法 量 (cm)		個々の	の特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版42	口 径17.4		外反して 上方、 口質 から 「く」 では から 「く」 で がら 「く」 で がら 「く」 で がら いた に から 「外面 整 し に へ 、 、 の う に に は た こ に に は な こ 個 有 する。	内外に肥厚 の字にくて iを目の細が 部以下を積 している。	きする。 ドれてつながっ いい刷毛目で調 貴方向(左から	0.1cm前後の砂粒を少量含むだけの精良な粘土を使用。 ま変しまでは、リップ調整の膜のために淡灰褐色を呈す。スリップ膜の剣雕面は淡赤褐色。	胴部に煤が付着する。 K-21 淡青灰色細砂層。

壷Bb

直口口縁の壷のうち、作り方ならびに胎土が粗質のものである。

図版	番号	法	量 (cm)		個々の	特	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版42	図版 97	口胴器	径18.2 径29.0 高29.9	口縁部 胴 部	球形、丸底の胴部かは縁部がつく。全体に調節より鋭くくびれて高さより最大径の方が形をなしている。外面には凹凸がかなりがかなりがあります。	調整は粗雑である。 で胴部につながる。 がわずかに大きい球 デを行なうが、器表 残っている。 (左上 しをあらく行なうが、	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 全体に暗い灰褐色。	胴部下半に10cm×20cm の黒軟あり。反対側は 不明。 I-0 淡青灰色細砂層。
図版42 17	図版 97 5	胴	径15.3 径21.6		長胴化した球形の胴台 く屈曲して口縁部がが 外面は、あらいへラ は平滑にされ、内面に て底部に近いほど器層 る。	外反する。 響きによって器表面 は全体をヘラ削りし	0.1〜0.3cmの砂粒を大量に含む。 全体に黄赤褐色。	J-1 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。

壷C

口縁端部は甕Acと同様に肥厚し、口縁部の中途で外側に鈍い稜を、内側に狭い段をなして二重口縁に仕上げている。胴部は、頸部よりくびれてつながり肩の張ったやや長手のもので丸底で終る。

図 版	番号	法 量 (cm)		個	Ŕ	Ø	特	徴		胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版40	図版97 3	口 径15.6 胴 径28.0 (推定)	口縁部 胴 部	っ 肩外行内デ	肥 張のいは整厚 る調以に、し	る。 やは、長肩 下縁部に 肩部以	の部が近下を がある のが のが のが で が で が で に が が が が が が が が が が が が が	方向の届 毛目調	*おわる。 則毛目で 整する。 E痕+ナ Gから左)	0.1~0.2cmの砂粒を含むが器表面は平滑にされている。 全体に灰褐色。	口縁部内面に黒色塗付物が付着。 〇一3 淡青灰色細砂層。

壷Cを模倣した格子叩き目をもつ壷

図版	番号	法	量 (cm)		個	々	Ø	特	徴		胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版40	図版 97	胴	径16.0 径12.5	口縁部 胴 部	せ 球外度リ内ら	に 、の格しは平 丸調子状、担 底整叩ナ肩	面とはきデ部といる。 おぼがい おいまい おいまい おいまい おいまい おいまい といい といい といい といい といい といい といい といい といい	っ れ部施すする るいこう るいこう るいこう るいこう あいこう しょう かいこう かいこう かいこう かいこう	に一辺 0.4c	m程 をス 上げ	0.1~0.3cmの砂粒を含む。石英とクサリ礫様 の赤褐色の斑点をなかに含む。 全体に灰茶色で焼き上がりは須恵器の生焼け品に類似している。	胴部下半に煤が付着する。 I -37 淡青灰色細砂混り暗 茶褐色粘土層。

杯身A

たちあがりは短く内傾し、底部の調整に回転を利用しないヘラ削りを行なったものである。

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版42 図版98	受部 径13.4 器 高 5.4 (推定)	たちあがり 内方に短く傾斜する。調整は、内外とも回転を利用しないヨコナデによる。 受部との境に接合痕。 受部 外方に鈍い稜をもって突出するが、蓋を支える面は平担面にならず、斜上方に傾斜する。調整は、内外とも回転を利用しないヨコナデによる。 体 部 器高の深い体部である。外面には、全体の約%にわたって回転を利用しないへラ削りが時計回りに行なわれている。内面は、横方向のナデによって仕上げている。破損面は、粘土紐の接合部が剝離したもの。	0.1~0.2cmの砂粒を含む。 全体に灰褐色をなし、 充分に環元されていな い状態を示す。	I -31 灰色粗砂層(暗茶制 色粘土層の下層)。

杯身B

たちあがりは内傾するが杯身 \mathbf{A} に比して長く、端部は丸く仕上げる。また体部は回転を利用したヘラ削りによって丁寧に調整されたものである。

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版42 図版98	口 径 9.2 受部 径10.7 器 高 4.9	たちあがり 内傾し端部は丸く仕上げる。成形は、回転を利用したオリコミ技法による。 受 部 外上方に短く突出し、端部は丸くなっておわる。体部へは段を形成せずにスムーズに移行する。 体 部 底部は平担な部分をもつが、全体に丸みを感じさせる形態である。調整には、回転を利用した時計回りのヘラ削りが全体の%に行なわれ、調整は丁寧である。 た、内底面はナデによって平滑に仕上げる。	きわめて精緻な粘土を 使用。 内面は暗灰色、外面は 黒色塗付物が付着する。 焼成は堅緻。	K - 33 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。

杯身C

I期の須恵器として特徴的なたちあがりが高く直立し、全体にシャープな感じのものである。

図版	番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版 42 11	図版98	口 径11.5 受部径13.3 器 高5.0	たちあがり 内傾したのち直立する。端部はわず かに内傾面をつくる。 受 部 外上方に突出し、端部は綾を形成する。	精良な粘土を使用。体 部外面は黒色。黒色塗 付物が認められる。そ の他の部分は淡灰 褐色。 焼成は堅緻。	体部外面にヘラ記号 φ あり。 G - 33 灰色砂利層(暗茶构 色粘土層の下層)。
			体 部 底部は丸みをもつ。外面の約%を時計回りにヘラ削りし、内面は回転ナデ調整する。		
図版42	Code do Language	口 径10.8 受部径13.0 器 高5.3	受 部 ほぼ水平に張り出し、端部は鈍い稜をも	胎土には土師器にみら れるようなクサリ礫様 の好点を含む。 外面は淡灰褐色、内面 は淡黄褐色。	E-37 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。
12			つ。 体 部 底部が丸みをもち、外面の乳を時計回り にへう削りする。内面は、回転ナデ、中 央部はスリ消し状ナデ仕上げ。	焼成はやや軟質であるが器表面は平滑である。	

杯蓋A

天井部はわずかなふくらみをもち、中心部になか窪みのつまみを有する。器厚は0.5~0.7cmと厚い。口縁部はやや外開きで端部は薄くなって内傾する。天井部と口縁部、天井部外面に櫛による刺突がめぐる。

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版 42 図版 98 2-a 図版 99 2-b	口 径11.9 器 高 4.6	口縁部 短く外反し、端部は内傾する面をもつが 内側に稜はない。 工縁部と天井部の境の稜は水平方向に突 出する。端部は丸くなっている。 天井部はふくらみをもち、中心につまみ がつく。つまみは上面が窪み、中心部分 にわずかな突起をもつ。 外面に櫛列点文が2帯めぐり、そのあい だに直線文を施文する。櫛目は0.8cm巾に 7本。 外面の調整は、全体を時計回りの回転サ デで行なう。内面は、内底面がナ戸調監整、 その他の部分は回転ナデを行なう。置厚 は0.7cmと厚く、鈍重な感じの土器である。	精良な粘土を使用。内 底面のみ灰色、その他 は暗青灰色。 焼成は堅緻。	M-0 淡青灰色細砂層。

杯蓋B

低く平担な天井部に、直立する口縁部がつくシャープな感じの杯蓋である。

図版	番号	法 量 (cm)		個	Þ	Ø	特	徴		胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
凶版 42 5	凶版 98 1	口 径13.7 天井部径13.9	1 1 D1.	下 口先な天削内ナ端 縁端る井り面デ	中担 平担 ポピーク ポピーク ポピーク ボーク ボーク ボーク ボーク ボーク ボーク ボーク ボ	な	な よよ での整全 る 鋭り 、	か	出大 にりのの	精良な粘土を使用。 全体に暗灰青色。 焼成は堅緻である。	N - 19 暗茶褐色粘土混り淡 青灰色細砂層。

無蓋高杯A

椀状の杯部に、基部が細くしまり裾広がりの脚部がつく小型の無蓋高杯である。

図版	番号	法	量 (cm)			個	Þ	の	特	徴		胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
2 2	図版 98 8	<u>디</u> 왕	後12.2 高 8.7	1	部	上断っ面用基部を	は 平 担 に り 出 形 に う に が 細 く 、 に が れ に の に 。 に に 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。	面のれナ調 ゆ脚なさいデ整 る端	る。口稿: る。凸帯: る。也 いる。 と か た た た た た た た た た た た た た た た た た た	日帯があたがめで、 が断いで、 が断いで、 がいのでで、 がいのでで、 がいのでで、 がいのでで、 がいのでで、 がいのでで、 がいのでで、 がいのでででででででででででででででででででででででででででででででででででで	はには転く	焼成は堅緻である。	G — 33 暗茶褐色粘土層。

無蓋高杯B

杯蓋を逆にしたような杯部と外方に踏んばった脚部を有し、脚部外面に一条の凸帯がめぐる。

図版番号	法 量 (cm)	個	₽.	の	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版42 図版98 7-a 図版99 7-b	口 径12.5 器 高 7.7	に内のが を を が、い を を を を を を を を を を を を を を を を を を を	 す帯デの おが い に に に に に に に に に に	平担面と 円形に 料理に ま回転が は 関語に まった まった まった	となる。 なぐは 調が は 形 は 形 な の に の に の に の に の に の に の に の に の に の		全体に灰青色。 焼成は堅緻。	M-1 淡青灰色細砂層。

無蓋高杯C

外面に波状文を施文し、小さな把手を有する大型の無蓋高杯である。

図版番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版42	口 径20.8	杯 部	る。	精良な粘土を使用。 全体に青灰色。 焼成は堅緻である。	K-4 淡青灰色細砂層。

福泉

いずれも口縁部が欠失する。胴部は、大型のものと小型のものとがある。

図版	番号	法量(cm)	個 々 の 特 徴 胎 土・色 調 備考(出土地点、履	夏位)
図版42	図版 100 5	胴 後17.6 器 高12.8 (現存値)	欠失するが、基部が細くしまった形態である。 肩が張り尖りぎみの丸底の底部をもつ。 肩部外面は2条のヘラ沈線で区画したあいだに櫛描き波状文を施文する。波状文の目は10本/mと細かいものである。 波状文のあいだに円孔を一個穿っている。 調整は、外面を時計回りの回転ナデによって行ない、内面は上半部を時計圧原+粗い回転ナデで、下半部を時計回りのヘラ削りで行なっている。	
図版42 7		胴 径11.8 器 高 8.2 (現存値)	 欠失する。 底部が平担な扁球形をなす。 肩部に往1.1cmの円孔を1個有する。 調整は、回転を利用しない横方向のナデによって行なわれ、内面下半部は指成形のままである。	0

壷Α

口縁端部近くと口縁部文様帯間に凸帯をめぐらせ、胴部はほぼ完全に叩き目をスリ消している。口縁部から胴部に細かい波状文をめぐらす。

図版番	号 法	量 (cm)		個	√	Ø	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43 図	版 100 口胴(推	径18.6 径26.8 定)	口縁部 胴 部	端口描凸 張描調状デ部縁き帯 りき整け調	丘尾皮で とせばできくの状よ も状、にすに外文っ っ文外よる 脚面かて たと面っ。	面に3区 胴直をて外面に3区 胴直をて外面	施さ 。文方なの文れ 肩を向い叩いる の	The Table	精良な粘土を使用。 全体に暗青灰色。 焼成は堅緻。	K-27 淡青灰色細砂層。

甕Α

口縁端部近くに一条の凸帯を有し、端部を丸く仕上げるTK73型式の甕。

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版42 図版	9 口 径44.7 (推定)	おわる。端部近くに凸帯が一条めぐる。	精良な粘土を使用。 全体に暗青灰色。 焼成は堅緻。	M-1 淡青灰色細砂層。

8

図版番号	法 量 (cm)		個	Þ	の	特	徵	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図番42	口 径18.1	口縁部胴部	調整!	は、口糸 こ平行口	豪部の 叩き目	为外と が残る	同上。 も回転ナデ。 。内面は横方向 リ消されている。		M-1 淡青灰色細砂層。

布目圧痕を有する小型坩

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版42 図版 15 7	70 口 径 7.1 胴 径 9.8 器 高 9.3	る。内面はヘラ削り+ナデ調整。外面に	精良な粘土を使用。 灰茶色で須恵器の生焼 け品に似ている。底部 外面は一部灰黒色。	L-6 淡背灰色細砂層。 井戸状遺構内。

把手付椀

図版番号	法 量 (cm)	個 々 の 特 徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版42	口 径10.0 器 高 7.3	わずかに外反し、端部は薄くなる。 つ縁部との境に一条の稜線が終 線の下には凹線がみられる。外 細かい波状でが一帯施文される。 調整は、底部の内面、外面と 利用しないへラ削りを行なう。 他の部分は回転ナデ調整。	全体に灰青色。 全体に灰青色。 焼成は堅緻 ・いる。 いに回転を	L — 5 淡青灰色細砂層。

I-27地区周辺河川内推積土(暗茶褐色粘土混り灰色砂層)出土遺物 杯身C

図版	番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43	図版100	口 径11.6 受部径14.0 器 高5.1	たちあがり 内傾したのち直立し、端部は内傾面をもっておわる。 受 部 外上方に突出し、端部は鈍い稜をもつ。	精良な粘土を使用。 体部外面は青灰色。 他は灰緑色。 焼成は堅緻。	I -27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。
			体 部 浅い体部に尖りぎみの底部をもつ。外面 のほぼ全面を時計回りにヘラ削りする。 内面はナデ調整によって平滑に仕上げる。 体部の器厚は0.3~0.5cmと薄手である。		
図版43 7		口 径11.0 受部径13.3 器 高5.3	たちあがり 内傾し端部は丸く仕上げる。 受 部 ほぽ水平に突出し、端部は鈍い稜をもつ。	0.1~0.2cmの砂粒を少 量含む。 全体に灰茶色、一部青 灰色。	I ー29 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。
			体 部 受部とのあいだに明瞭な段をもたず外面 の彩を時計回りにヘラ削りする。内底面 はナデ調整、他は回転ナデを行なう。	環元されない状態で焼 き上がっている。 焼成はやや軟質。	
図版43		口 径12.0 受部径13.8 器 高5.3	たちあがり 内傾し、端部は内傾面をもっておわる。 受 部 外上方に突出し、端部は丸みをもつ。	精良な粘土を使用。 全体に灰褐色。 環元されない状態で焼 き上がっている。	外面に煤、内面に炭 化物が付着する。 I ―29 暗茶褪色粘土混り灰
•			体 部 底面はほぼ平担で、外面の%を時計回りにヘラ削りする。内面は全体を回転ナデによって仕上げる。	焼成は軟質。	暗状陶巴竹工化りが、 色砂層。
図版43		口 径10.7 受 部径12.5 器 高 4.7	たちあがり 内傾したのち直立する。端部はわず かに内傾する平担面となる。	精良な粘土を使用。 全体に暗青灰色。 焼成は堅緻。	I -25 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。
9			受 部 外上方に突出し、端部は稜をもつ。 体 部 浅いが全体に丸みをもつ。外面の光を時		
:			神 茂いが宝体に丸みをもつ。外面の名を時 計回りにヘラ削りし、内面は回転ナデに よって丁寧に仕上げる。		

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43 図版1	0 口 径10.2 受部径12.4 器 高 5.2	たちあがり 内傾したのち高く直立し、端部近くで再び内傾する。端部はそのまま平担面となっておわる。	精良な粘土を使用。 体部外面は灰茶色、そ の他は淡灰褐色。 環元されない状態で焼 き上がっている。 焼成はやや軟質。	I - 29 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

杯身D

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43	口 径10.5 受部径12.6 器 高 5.2	たちあがり 内傾したのちゆるやかに立つ。 端部は丸くなっておわる。 受 部 ほぼ水平に突出し、端部は丸い。 体 部 全体に丸みをもつ。外面の多は時計回り にヘラ削りし、内面は回転ナデによって 仕上げる。底部の器厚は0.8cmの厚みを もつ。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 全体に灰褐色。 環元されない状態で焼き上がっている。 焼成は軟質。	口縁部から受部外面に かけて2次焼成により 器表面が剝離している。 J-27 暗茶樹色粘土混り灰 色砂層。

杯蓋B

図版番号	法 量 (cm)	個 々 の 特 徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43	器 高 3.7	天井部 口縁部との境の稜は鋭く、稜の径は口径 とほぼ同大である。 天井部は低く平担である。外面の光以上 を時計回りにヘラ削りし、内面は回転ナ デによって丁寧に仕上げる。	0.1cm前後の砂粒を少量含むが精良な粘土を 使用。 外面は灰色、内面は茶 褐色。 売分な環元炎焼成では ない。 焼成は堅緻。	I 一29 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

杯蓋C

杯身Cとセットをなす類である。杯蓋Bに比して天井部はふくらみをもち、口縁部との境の稜もややシャープさが欠ける。

図版番号	法 量 (cm)		個	Þ	の	特	徴		胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43 図版100 4 2	口 径13.2 器 高 4.8	天井部	ふくら い。 外面の	みをも %を時	ち、E 計回り	コ縁部) にへ		を 様は鈍 、内面	0.1~0.3cmの砂粒を含むが精良な粘土を使用。 外面は灰色、内面は茶 褐色。 充分な環元炎焼成ではない。 焼成はやや軟質。	I -27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

有蓋高杯C

杯部は杯身Cの形態をとる。脚部は「ハ」の字形の短い脚が外方へ踏ん張った形態である。

図版番号	法 量 (cm)	個々々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43	杯部高4.9器高7.6	部 たちあがりはわずかに内傾して高く立ち、端部が内傾面となっておわる。 受部は外上方に突出し、端部は丸い。 体部は浅く、外面はヘラ削り十回転ナデによって調整し、内面は底部に円孤文その他の部分は回転ナデによって仕上げる。 部 基部は太く、外方へ張り出した脚部の先端は平担面となって内面が接地面となる。	精良な粘土を使用。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	H-27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

壷Β

口縁端部は段を作らず、口縁部外面に細かい波状文と凸帯をもつ形態は ${\mathbb R}^A$ と共通する。 ${\mathbb R}^B$ は胴部外面に施文をみない。

図版番号	法 量 (cm)		個	A	Ø	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43 図版100 2 6	口 径18.1 胴 径24.0 器 高24.3	口縁部 胴 部	外面に 凸帯が 肩の張 十スリ は器体	12本 / 2条 * ったし お 上 半 き	/ cmの系 かぐる。 求形ナデ 形とデ を とデ	田かい 底で半脚を の調整とし	平担面でおれ 波状文が 2 [†] 形。外面は「 する。 のでも では異なる。 、下半を指	者と 全体に灰青色。 焼成は堅緻。 叩き 原体	K-27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

壷C

口縁端部は段を作らず、口縁部外面に波状文と凸帯を有する。胴部外面には叩き目がそのまま残っている。

図版番号	法 量 (cm)	個々の	特 徵	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43	口 後22.5 胴 後37.3 器 高33.6 (推定)	部近くには断面三 波状文が4帯と占 段の波状文は、が ナデ(時計回り)にいる。 ・ 最大径部は器体 出す。外面に縦が 部では斜方向の回 面は上半部を指す	は平担の を は 平担の を は で も で も も で も で も で も で も で も で を さ く れ た に に は と に に は と に に は と に に は と に に に に に に に に に に に に に		M-27 暗茶褐色粘土混り灰 色砂層。

土師器甕C

口縁端部が内傾面をもっておわり、肥厚をなさないものである。

図版番号	法 量 (cm)	個	Þ	の	特	徴		胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43	口 径13.6 胴 径15.0 器 高12.9	 る横器内と下	担句のへいの 面の低ラ。粗 と粗い削外い	ない胴り面 利部には上 は 毛目	おわる。 目土底て まる おき おき おき おき おき と おき と おき と おき と おき と お	部は若干P。 。内では っナデておっている 厚は0.3~ 縦方の が が が が が が が が が が が が が が が が に が り が り	調整は る。 の.4cm 上句	0.1cm 前後の砂粒を多く含む。 く含む。 全体に暗灰褐色。 少量の雲母を含む。	K-31 暗茶褐色粘土混り砂 利層。 最大径部以下に煤が 付着。

土師器甕D

3要Bの影響が認められるもので、口縁端部は外面に若干肥厚する。

図版番号	法 量 (cm)	個々々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43 図版1	1 口 径15.6 胴 径18.6 器 高18.9	胴 部 中位に最大径をもちやや尖りぎみの丸底	砂粒は押え込まれてお り器表面は平滑。 暗灰褐色、底部外面は 赤褐色。	K-31 淡青灰色細砂混り暗 茶褐色粘土層。 外面全体に煤が付着 内面下半に炭化物が 付着。

土師器甕E

単純に外反する口縁部をもち、端部はそのまま面となっておわるものである。

図版	番号	法	量 (cm)		個	Þ	Ø	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版43	図版 101	口胴器	径14.4 径18.7 高18.1	口縁部 胴 部	っ土や外刷か最内でにや面毛ら大面	およ歪は目下圣はわっ曲縦のへ部へるてし方方、にラ	。肥た向向下は 端厚球のは半 は 半 接合り は は は は は は は は は は は は は は は は は は は	外み、い大下痕掻面る丸刷径かがきは。底毛部ら認削	まま平担面と ? はみ出した* の胴部。 目を施す。 を境に上なう。 かられる。 りナナデ調整。	も。 外面は淡赤褐色。 内面は暗褐色。	O-15 灰色細砂層。 TK208型式の須恵器 皺とともに河川右岸 の凹部に堆積していた。 外面に煤付着。

M-19地区周辺出土の土器

杯蓋C

図版	番号	法	量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版44 1	図版 102	口器	径12.4 高 5.0	口縁部天井部	る面となる。	0.1~0.4cmの砂粒を含む。 全体に灰褐色。 焼成はやや軟質。	M-19 粘土混り砂利層。 口縁部に煤が付着する。
図版44 2		器	径12.4 高 4.8	口縁部天井部	直立する口縁部。端部は内傾する面となる。 ドーム状にふくらむ。口縁部との境に稜をもつ。外面の%を時計回りにへラ削りする。内面の中央部はナデ調整。	精良な粘土を使用。 全体に灰色を呈す。 外面には黒色塗付物が 付着する。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。
図版44 3	図版 102	器器	径12.0 高 4.7	口縁部 天井部	直立する口緑部。端部は内傾する面となる。 わずかにふくらみをもつが、中央部は平 担面となる。口縁部との境に稜をもつ。 外面の気を時計回りにヘラ削りする。 内面はほぼ全面をナデ調整。	0.1cm前後の砂粒を含む。 外面は淡灰色、内面は 茶褐色。 焼成はやや軟質。	M — 19 砂利層。
図版44 4	図版 102	器	径13.6 高 4.7	口縁部天井部	直立する口縁部。端部は平担面となる。 ふくらみをそれほどもたず、平担な面と なる。口縁部との境に稜をもつ。外面の ほぼ全面を時計回りにヘラ削りする。 内面の中央部はナデ調整。	0.1cm前後の砂粒を含む。 全体に淡灰色。 焼成はやや軟質。	M — 21 砂利層。
図版 5		器器	径11.8 高 4.4	口縁部天井部	直立する口縁部。端部はわずかに内傾する面となる。 ふくらみをそれほどもたず、中央部はほば平担。天井部と口縁部をわける稜は鋭さを欠く。外面のほぼ全面を時計回りにヘラ削りする。中央部内面はナデ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を少量含む。 全体に灰色。 外面の一部暗灰色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。

杯身C

図版	番号	法	量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版44 6	図版 102 6	器器	径 9.8 高 4.7	たちあがり 内傾したのち直立する。端部は内領する面となる。 受 部 水平に突出する。端部は鈍い稜となる。 体 部 丸みをもち、外面の%を時計回りにヘラ 削りする。中央部内面はナデ調整。	0.1~0.3cmの砂粒を含 む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	M-21 砂利層。
図版44 7		口器	径 9.4 高 4.6	たちあがり 内傾したのちやや立つ。端部は内傾する面となる。 受 部 水平に突出する。端部は鈍い稜となる。 体 部 丸みをもち、外面の衫を時計回りにヘラ 削りする。中央部内面はナデ調整。	0.1cm前後の砂粒を少量含む。 全体に淡灰色。 焼成は堅緻。	M-21 砂利層。

図 版	番号	法	量 (cm)	個々の特徴胎土・色調	備考(出土地点、層位)
図版44	図版 102	器器	径10.2 高 4.4	たちあがり 内傾したのちやや立つ。端部は薄く 尖っておわる。 受 部 水平に突出する。端部は鈍い稜となる。 体 部 底部は平担で中央部がやや窪む。外面の	M — 19 砂利層。
図版44 9		口器	径10.4 高 5.1	たちあがり わずかに内傾しながら高く立つ。端 部は丸くなっておわる。 受 部 水平に突出する。端部は薄く稜となる。 体 部 底部は平担な面となり、外面の3/2を時計 回りにヘラ削りする。内面は回転ナデ。	M-19 砂利層。
図版44 10		口器器	径10.8 高 5.4	たちあがり 内傾したのち直立する。端部はわず かに内傾する面となる。たちあがりは貼 量含むが精良な粘土を 付け。 受 部 水平に突出する。端部は丸い。 体 部 丸みをもち深い。外面の%は時計回りに へう削りする。底部内面はナデ調整。 の	1-29 灰色砂層。
図版44 11		日器	径10.7 高 5.4	たちあがり 内傾したのち立つ。端部はわずかに 内傾する面となる。 量含むが精良な粘土を 使用。 タ 部 外上方に突出する。端部は稜をもつ。	M-19 砂利層。
図版44	図版 102	口器	径11.0 高 5.2	たちあがり 内傾したのち立つ。端部はわずかに 内傾する面となる。	M-23 灰色砂混り粘土層。
図版44 13		口器	径10.8 高 4.8	たちあがり 内傾する。端部は内傾する面となる。 受 部 外上方に短く突出する。端部は鈍い稜と なる。 体 部 浅く、底部は尖りぎみ。外面の兆を時計 回りにヘラ削りする。底部内面はナデ調 整。	M-19 砂利曆。

杯身D

I期の杯と器形はそれ程変わらないが、調整に省略が目立つものである。

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版 44	口 径10.3 器 高 5.1		0.1~0.3cmの砂粒を含む。 内面は暗灰褐色、外面 は灰褐色。 焼成は軟質。	M — 21 砂利層。
図版44 15	口 径10.5 器 高 5.1		0.1cm前後の砂粒を含む。 な。 全体に暗灰色。 焼成は堅緻。	M — 21 砂利層。
図版44 16	口 径11.4器 高 5.0		0.1~0.4cmの砂粒を含む。 全体に灰色。 焼成はやや軟質。	O-19 河川右肩部下層砂混 り粘土層。
図版44	口 径12.0 器 高 4.3		0.1~0.2cmの砂粒を含む。 全体に淡灰色。 焼成は堅緻。	M-19 粘土混り砂利層。

杯身

図版	番号	法	量 (cm)	個 々 の 特 徴 胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版44 23		器	径13.8 高 5.7	たちあがり やや内傾する。端部は薄く尖ってお わる。 受 部 外上方に短かく突出する。端部は丸い。 体 部 底部に平担面をもつ。外面の5/を逆時計 回りにヘラ削りする。底部内面はナデ調 整。 焼成はやや軟質。	M — 21 砂利層。
図版44 25	図版 103 7	器器	径13.5 高 6.2	たちあがり 内傾したのち短く立つ。端部は丸い。 0.1~0.3cmの砂粒を含む。	M-21 砂利層。
図版44 26		器	径13.5 高 5.9	たちあがり 内傾したのち立つ。端部は丸い。 0.1~0.3cmの砂粒を含む。 全体に茶褐色ないしは 外面の%を逆時計回りのヘラ削り。底部 内面はナデ調整。	M — 19 砂利層。
図版44 27	図版 103	监	径13.1 高 5.7	たちあがり 内傾したのち立つ。端部は薄く尖っておれる。 0.1~0.2cmの砂粒を含む。 受 部 水平に突出する。端部は鈍い稜をもつ。体部 底部は尖りぎみ。外面の%を逆時計回りにペラ削りする。底部内面は回転ナデ調整。 (機成は軟質。	M — 19 砂利層。
図版44 28		器	径14.6 高 5.6	たちあがり 内傾したのち直立する。端部はわず かに内傾する面をもつ。 かや・方に傾斜する面をもって突出する。 端部は丸い。 端部は丸い。 体 部 比較的浅い。外面の½を時計回りにヘラ削りする。底部内面は粗い回転ナデ調整。	M-19 砂利層。 底部外面にヘラ記号 N がみられる。
図版44 29		器器	径12.3 高 4.1	たちあがり 内傾したのち短く立つ。端部は丸い。 0.1~0.3cmの砂粒を少量含む。 受 部 外上方に突出する。端部は鈍い稜をもつ。 内面は暗灰色、外面は 灰色。 成部は尖りぎみ。外面の多を逆時計回り にヘラ削りする。底部内面はナデ調整。 焼成は堅緻。	M -23 灰色砂混り粘土層。
図版44 17	図版 103 10	口器	径11.0 高 3.9	たちあがり 内傾したのち短く立つ。端部は薄く	M-19 砂利層。 内面全体に黒色塗付物 が付着。
図版44 18	図版103	器	径10.9 高 4.3	たちあがり 内傾したのち短く立つ。端部は薄く	M-19 粘土混り砂利層。 体部内面に黒色塗付物 が付着。体部外面に自 然釉が付着。

蓋

図版	番号	法	量 (cm)		個	\(\phi\)		の	特		徵			胎	土・	色態	ij	備考(出土地	点、層	位)
図版44 19		器	促11.2 高 4.7	口縁部 天井部	口縁	面を 部と の%	もち め を 時	、中は四点	央部に 線でも りにへ	つって	ー まみを て区切	うつ。 を有す。 りられる。 ける。中	量使内暗	と含む E用。	が精り 灰褐(砂粒 見な粘 色、外	土を	砂和 天井 跡。		a焼き <i>0</i> トで出	
図版44 20		口器	径13.4 高 4.8	口縁部天井部	は内に口縁が形	頃す <i>。</i> 部と 成さ	る面 の境 れる	とな は回 。外i	る。 転ナテ 面の ½	゛に。 ゙ を i	よる針 逆時言	く。端部 ・い凹線 十回りに デ調整。	量使内灰	含む 用。 加面は 褐色	が精身 茶褐6	砂粒 製な粘 色、外 では	土を面は	砂和		ラ記号#	¥-が
図版44 21	図版 105	口器	径16.6 高 5.9	口縁部 天井部	も口く外天	。 部とで みをも の3/4 部内i	の境 , ち逆 面 し	には 中央 時計[全体	鈍い凹 :部に! 回りに]線; はつ :ヘ:	がめく ラまみ ラ削り デ調虫	する面を ぐる。ふ を有す。 りする。 隆。 回転	む全焼		灰褐色)砂粒 色。	を含		-19 上混り面	少利層。	

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版44 22	口 径16.2器 高 4.5	口縁部 内彎ぎみに立つ。端部は内傾する面となる。 天井部 ふくらみをもつ。口縁部との境は鈍い稜をもつ。外面の5を時計回りにヘラ削りする。削りを行なったヘラのタッチはやや不明瞭。中央部内面はナデ調整。	cmの石粒を含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	M−19 砂利層。

有蓋高杯C

杯部の形状が杯身にCに類似するものである。

図版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版44 30		口 径11.0 杯部高5.0		たちあがりは内傾したのち立つ。端部は わずかに内傾する面となる。 受部はほぼ水平に突出し、端部は鈍い稜 をもつ。体部は外面の彩を時計回りにへ ラ削りする。底部内面はナデ調整。 欠失するが短脚一段透しのものと思われ る。	0.1~0.2cmの砂粒を多 く含む。 全体に灰褐色。 焼成はやや軟質。	M−19 砂利層。
図版44 32		口 径10.4 杯部高4.5 器 高9.3	杯 部 脚 部	たちあがりは内傾したのち立つ。端部は 内傾する面となる。 受部は外上方に突出し、端部は鈍い稜を もつ。 体部は外面の%を時計回りにヘラ削りす る。底部内面は回転ナデ調整。 短脚一段透しの脚部。透しは長方形。 4 孔の間隔で3方向に穿つ。	0.1~0.2cmの砂粒を少量含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。 杯部の受部に重ね焼き の痕跡あり。
図版44 35		口 径10.0 杯部高4.9 器 高9.2		たちあがりは内傾する。端部は内傾する面となる。 受部はほぼ水平に突出し、端部は鈍い稜をもつ。 体部は外面の%をヘラ削り(方向不明)する。底部内面は回転ナデ調整。 短脚一段透しの脚部。透しは長方形で3方向に穿つ。	砂粒を含まない精良な 粘土を使用。 全体に暗灰色。 焼成は堅緻。	M-19 砂利層。
図版36 36	図版 104 3	口 径11.1 杯部高5.0 器 高9.7	杯 部 脚 部	たちあがりは内傾し、長い。端部は内傾する面となる。 受部は外上方に突出し、端部は棲をもつ。 体部は回転ナデ仕上げ、底部内面のみナ だ調整。 短脚一段透しの脚部。透しは長方形で3 方向に穿つ。外面にカキ目がみられる。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 内面は茶灰色、外面は 灰色(杯体部外面は暗 灰色)。 焼成は堅緻。	M-21 砂利層。

無蓋高杯C

杯部の形状が杯蓋Cを逆にした恰好のものである。

図 版 番	号	法 量(em)	個々	Ø	特	徴	胎 土·色 調	備考(出土地点、層位)
図版44 33		杯部高	5.2 4.0	る面となる。 体部は口縁部 %を時計回り は回転ナデ制 短脚で脚端部	Bとの境)にヘラ B整 。 Bは上下	に稜を 削りす に肥厚	端部は内傾す もつ。外面の る。底部内面 する。透しは 句にみられる。	量含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	O-17 粘土混り砂利層。
図版44 図 34	2	杯 部 高	4.6 9.8	もつ。 体部のは口縁を をが回転すう 整。 基部をもつ。 脚部に3角形を	『仕上り』 で仕まり。 『ひまではまではない。 『ないまではない。 『ないまではない。 『ないまではない。 『ないまでは、『はいまでは、『はいまではいまいまでは、『はいまでは、『はいまでは、『はいまではいまいまでは、『はいまではいいまでは、『はいまいまでは、『はいまではいまでは、『はいまいまでは、『はいまでは、『はいまでは、『はいまいまではいまいま	に を部 字 がなそ	内傾する面を する面を も内ではいかが でいる。 が る。 が る。 は が る。 は で し る。 は る。 は な る。 は な る。 は な る。 は な る。 は る。 は	粒を少量含む。 全体に灰青色。 」焼成は堅緻。	P-6 灰色砂混り粘土層。

蓋付椀

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版 45	口 径15.4 体部径21.4	たちあがり 内傾する。端部はそのまま面となっておわる。 受 部 外上方に傾斜する面をもち、体部との境に一条の凸線がめぐる。端部は鈍い稜となる。 体 部 ふくらみをもち、底部は欠失する。外面に細かい波状文が一帯めぐる。施文の方向は時計回り。 調整は回転ナデによって行ない、内面下半はナデ調整する。	砂粒を含まない精良な 粘土を使用。 全体に灰色、体部外面 は黒灰色。 焼成は堅緻。	O-17 粘土混り砂利層。 体部外面に黒色塗付物 が付着。

恴

図版番号	法 量 (cm)	個 々 の ‡	持 徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
17	口 径10.0 胴 径13.1 器 高12.2	口縁部は2段に外反しが一条めぐる。外面にされている。 大きく肩が張り、尖り中央部に径1.2cmの円はさんで上下にその区画内に11一帯施文されている。の叩き目がそのまま残部内面はナデ調整する	波状文が一帯施文 ぎみの丸底をもつ。 引孔を穿つ。円孔を れ2条の凹線状文が た本/cmの波状文が 底部外面には細筋 いている。胴下半		O-21 河川右肩部粘土層。

無蓋高杯

図版	番号	法	量 (cm)		個	Þ	の	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版44 31	図版 104	口 杯 部 器	径15.1 阝高 4.3 髙 8.7	 部部	へ内っ短内、	よる? ト面とも いる。 P柱部に トとも E	た線が- もあらい こ、大き 回転ナラ	一条めぐ い回転で く拡が	ボの境はないが ぐっている。 トデ調整を行な る裾部がつく。 を行なっている。	む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	M-23 砂利層。
図版44 37		口 杯 部 器	径10.6 高 4.9 高16.7	 部部	部が立 の部分 長脚2 脚部中 穿って	こつ。庭 では回載し は段透し なにば あれば	ま部内面 まナデ語 と脚の器 は凹線が 、上下	面はナラ 周整を行 器形。送 が2条め にわか	ト轡ぎみに口縁 で調整、その他 すなう。 をしはもたない。 うぐる。透しを れる境となる。)痕がみられる。	む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	Q —17 灰色砂層。

長頚壷

図版	番号	法 量 (cm)		個々	Ø	特	徴	胎	土・	・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45 12	図版 104 5	胴 径17.0 現存高19.4	口縁部 胴 部	肩の張った。 の脚がつく。 肩部外面に[がみられる。 櫛目状の刻。	リ線 2 川線 2 中 り目が 可転ナ	条。底 目のれ 施さ底	底部に一段透し 部外面に叩き目 体は巾1.5mm、 たものである。 部内面はナデ調	む。	灰青 部茶		粘土混り砂利層。

甕

図版番号	法 量 (cm)		個	4	の	特	徵	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45 図版104 23 5	口 径16.7 胴 径28.6 器 高27.8	胴 部	粘土を排 さての張っ 外面は叫	「り返っ いる。 いた球∄ こまを行	すこと じ、丸 うなっ	こで外i L底のi ったう:	響する。端部は 面に幅広く肥厚 器形。 えにカキ目を施 がそのまま残る。	量含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	O-21 河川右岸部、灰色砂 混り粘土層。 外面全体に煤付着、胴部内面に有機物付着。

小型丸底土器Db

図 版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45	図版 106 1	口 径 9.8 胴 径10.5 器 高 8.2 口縁部高 2.5 胴 部 高 5.7	口縁部 胴 部	外上方にのびる短い口縁は、わずかに外 彎する。 扁球形の器体で、外面の刷毛目は、器体 中位の最大径部以上を目の細かい縦方向 の刷毛目で調整し、最大径部以下を目の 粗い縦方向の刷毛目で調整する。 内面は、最大径部以上を指圧痕+ナデで 行ない、以下をヘラで搔いて調整してい る。	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 雲母の微粒を含む。 内面、外面ともに暗い 灰褐色。	胸部外面は灰黒色を呈 し、2次焼成による器 表面の剝離がみられる。 M-21 灰色砂混り晴茶褐色 ・粘土層。
図版45	図版 106	口 後 9.2 胴 後 8.1 器 高 9.4 口縁部高 3.0 胴 部 高 6.4		外上方に外彎しつつ長くのびる。 器体中位に最大径を有する算盤玉に近い 形態をなす。 器表面は、摩滅のためか調整痕の残りは わるく、わずかに口縁部と胴部の境に縦 方向の刷毛目が認められるだけである。 内面は、粘土紐の積み上げ痕をそのまま 残している。	0.1cm前後の砂粒を多く含み、軟質である。 雲母の微粒を少量含む。 内面、外面ともに赤褐色。	M-21 灰色砂混り暗茶褐色 粘土層。

土師器椀

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45	口 径15.8 器 高 5.5		砂粒をほとんど含まない精良な粘土を使用。 雲母、石英の微粒を含む。 須恵器生焼け品のような焼き上がりを示す。 全体に茶褐色。	N-23 灰色砂層。

土師器甕

図版番号	法法	量 (cm)	個	· A	Ø	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45 図版 15 10	105 口胴器	径12.3 径13.6 高12.3	は薄れる	くなって 圣部は引 く。 な外面を	ておわる 長りをも ヒナデ訓	る。 もたず、 周整し、	外反する。端部 丸底の底部に 内面は底部に ナデ調整する。	0.1cm前後の砂粒を含む。 全体に茶糊色。	M-19 粘土混り砂利層。 胴部外面に煤付着。胴 上半部と口縁部内面に 有機物付着。

土師器高杯Cの脚部

図版番号	法 量 (cm)		個	々 の	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45	器 高 6.0 裾 部 径 9.6	脚部	は漸移的 2方向に 外面から 調整は、	である。 径 1.3cm 内面に向 脚柱部内 内面は横	の円孔? って行? 面がし!	部に至る。境界 を穿つ。穿孔は なわれている。 ぎり痕+ヘラ削 左から右)に刷	褐色(スリップ模が残	M — 21 砂利層。

土師器甕Eを模倣した土器

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版 15 21	口 径16.4 胴 径24.6 現 存 高14.7	口縁部 単純に外反し、端部はそのまま面となっておわる。 胴 部 やや長手の器体。下半部は欠失する。外面に縦方向の叩き目を施したのち、スリ消し状ナデ調整する。内面は横方向(右から左)にヘラ削りする。器厚は最大径部で0.4cm程度。	く含む。 全体に灰褐色。 須恵器生焼け品のよう な焼きあがりを呈す。	O−15 粘土混り灰色砂層。

河川上層出土の土器

16

図版	番号	法	量 (cm)	個	Þ	Ø	特	徴	胎 土・色	調	備考(出土地点、層位)
図版45 1	図版 104 4	胴	径18.0 径24.4	 補充し 外面に	て拡張 は縦方向	長する。 句の叩き	≱目+	は外側に粘土をカキ目を施し、	0.1~0.2cmの砂 量含むが精良な 使用。 外面は灰青色、I	粘土を	胴部に煤が付着する。 G-37 灰色砂層。
				内面は	まめらり	→ 同心 F	当又を	残す。	灰褐色。 焼成は堅緻。		

蓋

図 版	番号	法 量 (cm)		個々の特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45 2		口 径 9.9 器 高 3.4	口縁部	口縁端部がわずかに外がわる。天井部との境界できない。 へきない。 へき切り(逆時計回り) 内面は全体を回転ナデ	E区切ることはで による。	0.1~0.2cmの砂粒を含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻。	M-19 灰色砂層。
図版45 3	図版105	ロ 径11.2 かえり部径 8.6 器 高 3.1	口縁部 天井部	口縁端部は丸くなっておえりをもつ。 天井部中心に宝珠形のでくらみをもたない天井的り(方向不明)し、内门する。内面中央部はナ	つまみがつく。ふ 邸は外面をヘラ削 面を回転ナデ調整	精良な粘土を使用する。 全体に灰色を呈し、焼 成は堅緻。	I -35 灰色砂混り茶褐色砂 質土。
図版 4 5		口 径16.9 器 高 5.1	口縁部 天井部	端部に内傾面を有する。 余りふくらみをもたず、 口縁部との境は、ををい 回線で区画される りが面の%には時計回りのれ、内面は中央部に円孔 転ナデを行なっている。	中央部で窪む。 たず、わずかな りへラ削りが施さ 瓜文、その他は回	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 全体に灰青色。 焼成は堅緻。	G-37 灰色砂利層。
図版45 5		口 径14.4 器 高 5.4	口縁部 天井部	天井部との境界を区切る 口縁部は外替し、端中に ふくらみをもたず、中の る。中心に中窪みのつっ は、逆時計回りにへう 面は粗い回転ナデを行っ	は内傾面をもつ。 は部は平担面とな はみを有す。外面 別りを行ない、内	精良な粘土を使用。 全体に灰色を呈し、焼 成は堅緻。	I —33 灰色砂層。
図版45 6	図版 105 4	口 径16.4 かえり部径 14.0 器 高 2.6		かえりを有し、口縁端き 出する。 低平な器形で、中央部1 たつまみがつく。外面1 回りにヘラナデして仕	こ扁平な形をなし は、全体を逆時計	0.1cm前後の砂粒を少量含むが精良な粘土を 使用。 全体に灰青色。 焼成は堅緻。	M — 21 灰色砂層

杯身

図版番号	法	量 (cm)	個 々 の 特 徴 胎 土・色 調 (備考(出土地点、層位)
図版45 図版1 7 6	5 口器	径 8.1 高 3.0	たちあがり 内傾し短い。端部は薄く尖っておわる。 受 部 外上方に突出する。器厚は分厚く、端部は丸い。 体 部 底部はヘラ切りによって平担な面となる。底部と体部の境にヘラ切りの際に生じた、沈線がめぐる。内外とも回転ナデ調整。	0-17 茶褐色砂質土。

凶 版	番号	法	缸 (cm)		個々の	特	徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45	図版 105	日器	径13.1 高 5.4	口縁部 底 部	外反する口縁部のなおわる。 平担な底面にはへき口縁部との境は時になわれている。	切り痕	が認められる。	0.1cm前後の砂粒を含 むが精良な粘土を使用。 外面は灰褐色、内面は 黒色塗付物が付着。 焼成は堅緻。	I - 29 灰色砂利層。
図版 45 9		高台器	径16.3 計径10.4 高4.4	口縁部底部	外上方にのびる口紅でおれる。 平担面には垂直に ける。調整は、内川部分を回転ナデに	立つ低い底面をプ	い高台を貼り付 ナデ、その他の	0.1~0.3cmの砂粒を含む。 外面は灰青色、内面は 灰褐色。 焼成は堅緻。	K-27 灰色砂利層。

高杯

図版	番号	法 量 (cm)		個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45 10		口 径12.6 杯部高4.1	杯 部	たちあがりは短く内傾し、端部は丸くなっておわる。体部は浅く、底部外面を時計回りにヘラ削りする。内面はあらい回転ナデによる。	0.1cm前後の砂粒を含む。 全体に灰青色。 焼成は堅緻。	G - 37 砂利層。
図版45	図版 105 6	裾 部 径14.6 脚 部 高11.4		長脚二段透し高杯の形態である。上段の 透しと下段の透しとは2条のヘラ沈線で 区画する。脚柱部内面はヘラ削り、その 他の部分は回転ナデ調整。	0.1~0.2cmの砂粒を含む。 全体に灰色。 焼成は堅緻である。	I-33 灰色砂層。

高台付磣

図版番号	法 量 (cm)	個々の特徴	胎 土・色 調	備考(出土地点、層位)
図版45 11 a b		口縁部 欠失する。 胴 部 肩が張り、底部に平担な面をもつ器形。 底部には外方に踏んばった形の短い高台が付く。端部はそのまま面をなしておわる。接地面は内側にある。肩部の円孔が 穿たれている部分は、注口に適した受口 状の器形をなしている。	焼成は堅緻。	G-35 粗砂層。

上池部分出土木製品一覧表

種 類	遺物番号	形態の特徴	備考
素 環 頭	1	現存長10.5cm、幅5.7cm、厚さ2.2cmを測る。全面に黒漆がぬられている。つか部には、0.3cm幅の茎をさしこむ部分がもうけられており、表面全体にわたって糸状のものを巻いた痕跡が認められる。 材質は広葉樹系のものであろう。	河川中層砂混り粘土層
小型 剣状 木製品	2	全長27.5cm、幅2 cm、厚さ0.35cmを測る。剣と類似形態であるが小型 である。材質は針葉樹系のものであろう。	砂混り粘土層
木 剣	3	全長54.8cm、幅3.1cm、厚さ1.1cmを測る。全面に刃子痕が明りょうに 認められる。 また身部には鎬を削った痕跡が確認された。ところで本品にはまめつ 痕跡が認められない。材質は針葉樹系のものであろう。	河川下層 粘土混り砂層
木 刀	4	全長64.6cm、幅3cm、厚さ1cmを測る。全面にわたって、ていねいに 仕上げられている。本品も木剣と同様まめつ痕跡は認められない。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川下層 砂混り粘土層
	5	全長46.5cm、幅4.4cm、厚さ1.5cmを測る。上記の木刀とは若干柄の部分のつくりが異なっており、特に柄から身に移行する部分には細かい削り痕が認められる。また上記の木刀と比較してみると、柄の表現は明確であるが、全体的につくりは荒い。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
刀先状木製品	6	全長38.5cm、幅2.7cm、厚さ1cmを測る。―端は刀先状に削られているが、他端は破損の為不明である。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
	7	全長96cm、幅4.2cm、厚さ1.8cmを測る。一端を刀先状に削っている。 全体的に削りは荒く大まかである。	河川中層 砂混り粘土層
杵	8	全長91.7cm、最大径は9.6cm、最小径は2.6cmであり、断面ほぼ円形の 身部と柄部からなる。両端部ともにまめつ痕が認められるが、一方は 他方に比してそれが特に著しい。身部には腐蝕の著しい部分がみられる。 材質は広葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
鋤	9	一見ナスビ状を呈す。 現存長42cm、幅14.3cm、厚さは最厚部で1.1cmあり、刃先部は0.4cmと 薄くなっている。また先端部よりほぼ10cm上方から両側面に若干のく びれ部を有し、刃先に至っているが、この部分には鉄の刃先がつけら れるものと思われる。	第Ⅱ層 砂混り粘土層
	10	9と同様ナスビ状を呈するものと思われる。 現存長は23.8cm、幅11.7cm、厚さは最厚部で1.3cmである。ところでこの鋤のくびれ部から刃先方向に5cmの間には両側面には約0.3cm幅の溝状痕が数ケ所みうけられる。	河川上層 粘土混り砂層
	11	一見ナスビ状を呈すが、身の大半が欠損している為二又状になる可能性を有している。現存長24cm、幅10.8cm、最厚部1.4cmである。ところで現存する身部は厚さが一定していない。つまり、片側半分は他方より約0.3cmほどうすくなっている。	河川下層 砂利混り砂層
	12	形態はスコップ状を呈し、柄と身は一木でつくられている。現存長は51.8cmであり、そのうち柄の現存長は25.8cmである。ところで、身から柄に移行する部分は他に比して、かなりな厚みをもっている。たとえば、柄について述べてみると柄の身と接する部分は3.9cmの厚みをもっており断面は少々いびつな夕円状を呈するが、端部付近は3.cmの厚みで断面はほは円形を成している。身の場合、頭部付近は3.7cmの厚みをもつが刃先部に近くなるに従って薄くなっている。ところで9~12の鋤の材質は広葉樹系のものと推定される。	河川上層 粘土混り砂利層
又 鍬	13	長さ18.3cm、幅31.1cm、最厚部は2.6cmである。着柄孔は円形であり、 着柄部には一面にのみ降起をつくり出している。着柄角度は、身に対 して65°である。ところで隆起部のある面以外の面は身の上端部から 刃先に向って30.4cmのところまでは他の身に対して10°の角度をもって いる。つまりその部分は若干隆起部のある面に傾いている。また身は、 刃先になるに従って薄くなっている。材質は広葉樹系のものであろう。	粘土混り青灰色砂層
鎌柄	14	現存長11.5cm、現有する柄の上端部付近の径は2.3cmである。また、柄の下端部には突起がつくりだされている。全面ていねいに仕上げられている。材質は広葉樹系のものであろう。	
槌の子	15	全長13.4cm、最大径7.4cm、〈びれ部の径3.2cmを測る。 刀子痕跡が認められる。一次二次調査をあわせると数個体分の破片が出土している。 材質は広葉樹系のものであろう。	河川右肩部 灰色細砂層
下駄	16	全長25.3cm、現存幅9cm、台板の厚さは1.2cm、歯の厚さは1.9cmを測る。鼻緒孔は、前歯、後歯の前方にそれぞれ穿たれており、前ツボは中軸より右に偏よっている。その為本品は、左足用のものと思われる。また台板表面及び両歯には使用痕跡が認められる。前歯は前方に後歯は後方にそれぞれ若干ふんばり気味につくられている。ところで、後ツボ後方左側面にはV字状の切り込みがみられる。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中層 砂利層

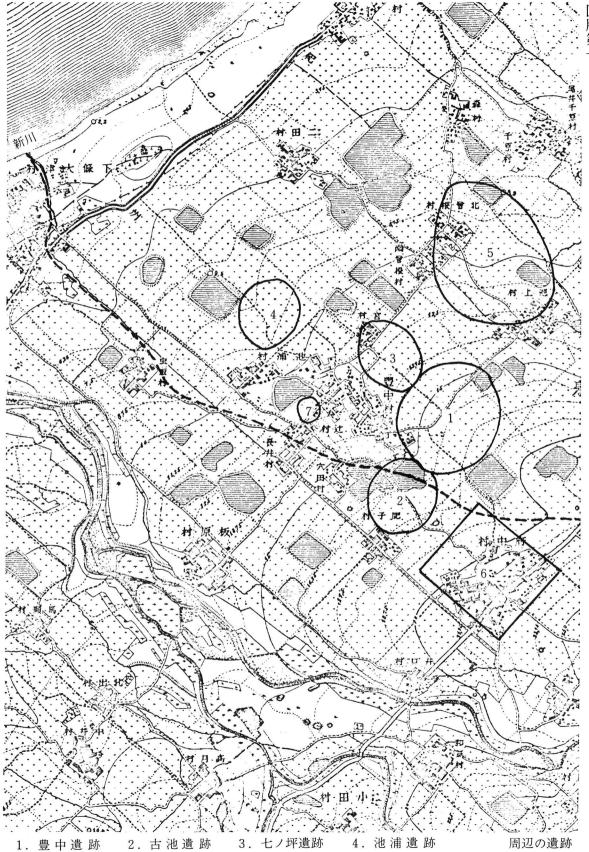
種	類	遺物番号	形	態	Ø	種	類		備	考
下	駄	17	全長22.6cm、幅9.9c 孔は前歯、後歯の前 に偏よっている。そ ついては16とほぼ同 ている。ところで16 も左側面が長さ3cm 材質は針葉樹系のも	Ĵ方にそれ。 ・の為本品↓]様であるヵ ĵは左側面↓ ĵ近くえぐ↓	ぞれ穿たれま右足用の は右足歯は が、字状の られている。	ており、 ものと思 前歯に比 切り込み	前ツボは中 われる。係 して著しく	車より左 使用痕跡に まめつし	河川中層砂利層	
紡錘車状木	製品	18	直径8.4cm、厚さ1: ば平坦であるが他面 子によると思われる みられる。重量は 6 材質は針葉樹系のも	は若干丸 削り痕跡 g (水分)	未をもつ。; が認められ を含む)で。	丸味をも る。側面	つ面には音	B分的に刀	河川中央部上 砂利混り砂層	
琴柱状木剪	製品	19	全長47.5cm、幅4 cm るが、一方の突起付 起は他方の突起と比 ぼ一定である。 材質は針葉樹系のも	け近にはかっ こしてその!	すかに圧痕: 長さが異な	が認めら	れる。また	一方の突	河川中層 砂混り粘土層	
チキリ状木	製品	20	全長51.8cm、幅4.5c り刀子痕が認められ また突起部について 認められる。厚さは 材質は針葉樹系のも	るが、他同 一方は削り 、一部分を	面は平坦で. り痕が明瞭。 を除いてほ!	あり一部: に認めら	擦痕がみられ、他方に	れる。	河川中層 粘土混り細砂	層
		21	全長51.8cm、幅4.5c り刀子痕が認められ また突起部について 認められる。厚さは 材質は針葉樹系のも	一方は削り、一部分を)痕が明瞭(を除いてほ)	こ認めらこ	れ 他方に	もってお れる。 は圧痕が	河川中層 粘土混り細砂	層
		22	全長51.7cm、幅4.4c 痕が認められる。突 の突起部には身と持 ころで本品は一方の を切りおとしている 厚さはほぼ一定して	起部には する部分 側面のみ3 。	両方に圧痕) こ垂直方向の 突起部の手	及び刀子: の切り込. 前の身の	良がみられ みが認めら 一部分(角	Lる。一方 れる。と jの部分)	河川中層 砂混り粘土層	
		23	全長55.2cm、幅4.9c 両面に刀子痕が認め その付近には圧痕も 葉樹系のものと思わ	られる。突 認められる	起部につい	ても若干			河川右岸 砂利混り粘土	層
人形状木蓼	W EL	24	現存長15.7cm、幅2. 彎しており、表面に が、左右対称ではな り異なっている。 材質は竹と推定され	は一帯に万く、一方の	0.5cmを測 叮子痕が認 の側面は他ご	る。全体I められる。 方の側面	的にごくれ 。一見人用 よりその表	oずかに内 彡状を呈す 浸現がかな	河川右肩部上 粘土混り砂層	部
箱形木製	묘	25	長辺23.7cm、短辺16 縁に平坦面を残し内 坦ではあるが、整形 に削られている。周 見うけられる。尚、 て製作されたことか	部をくり打 をほどこし 象部上端面 削り痕跡の	友いてつく。 していない。 には幅1.70 り観察から、	られてい 外面の mほどの 鉄の刃	る。底外面 コーナーに 桟いくぼみ 先をもつエ	はほぼ平 :面とり風 :が一ヶ所 :具によっ	河川東隔壁南部灰色細砂	層
田舟状木蓼	品品	26	内部をくり抜いてつ cm、深さ7.4cmを測る ぞれ最大幅の平坦面 本品を田舟とするに 部に把手をつくり出	。周縁にに がある。札 は若干問題	は短辺部で2 オ質は針葉権 夏は残るが、	2.8cm、長 封系のも。 他に推算	辺部で3. カと思われ 定全長76cm	lcm、それ る。	河川中央部上 腐植土混り灰	
		27	現存長240cm、幅47c 材質は広葉樹系のも		される。				青灰色細砂層	
盤 状 木 製 (A)	品	28	全長54.9cm、幅25.5 内側にほぼ3cmの部 はしる。上面はてい 彎しつつ、上面に比 材質は針葉樹系のも	分にそれぞ ねいに仕」 してつく!	れ最大幅で 上げられ若-) は荒い。	0.4cmのi	毒状のもの	が平行に	腐植土混り砂	層
盤状木製(B)	! 品	29	現存長29.7cm、現存 をつくり出している					には脚部	河川中層 砂混り粘土層	
台状木製	品	30	全長28.1cm、幅15.1 されており、底面かっ そってつくられてお 材質は針葉樹系のも	ら4.6cm前行 り多少外側	後を測る。 ₹ 則にふんば -	また脚部の	は、両方の		河川下層 粘土層	

種 類	遺物番号	形態の特徴	備考
小型容器状木製品	31	全長21.7cm、現存幅6.8cm、高さ6.1cm、深さ(最深部)は4 cmを測る。 周線には短辺部で1.1cm、長辺部で0.9cmの最大幅の平坦面を有す。また一方の長辺部と短辺部が接する部分(周縁部)には直径0.3cmの穿孔がななめに貫通している。ところで上面には削り痕が認められるがつくりは非常に荒い。側面にも削りが認められる。本品は模造品の可能性も考えられる。材質は針葉樹系のものであろう。	河川右岸下層 砂混り粘土層
大型舟形木製品	32	全長73cm、現存幅19cm、高さ12cm、深さ9.1cmを測り、全体のほぼ2/3が現存する。内部をくり抜いて作っており、手斧痕が認められる。周辺には短辺部で6cm、長辺部で0.5cm幅の平坦面がある。底部内面にはダ円形の焼け痕が二ヶ所認められる。材質は不明。	河川 中層 砂混粘土層
小型舟形木製品 (A)	33	全長31.8cm、幅3.5cm、厚さ1.6cmを測る完形品である。ほぼ全面に刀子痕がみられ両端部は尖頭状につくられている。一面は全体にわたって浅くえぐられているが削りは荒い。他面は平坦である。 材質は針葉樹系のものであろう。	東畦畔 暗茶褐色粘土層
小型舟形木製品 (B)	34	全長25.3cm、幅3.8cm、厚さ3.3cmを測る完形品である。両端は刀子状の工具で削られ尖頭状に作られている。径4~5cmぐらいの太さの木を加工して作ったものと思われ両側面に丸味をのこしている。一面は最大幅2.5cm、深さ1.5cm、長さ15cmにわたってえぐられているが他面は1.6cm幅で長さ約12cmにわたって平坦に削られている。 材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中層 砂混り粘土層
小型尖頭木製品	35	全長10.9cm、幅3.1cm、厚さ3.4cmを測る。各所に刀子痕が認められる。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
建築用材	36	現存長61.2cm、最大幅14.3cm、最厚部14.3cmを測る。一方の端部から約13cmの部分からななめに削りを施している。破損部の厚さは5.8cmである。全面焼けている。材質不明。	河川中央部中層 暗茶褐色粘土混り 灰色細砂層
	37	現存長92.2cm、最大径10cm、最小径3cmを測る。かなりの部分が焼かれており、一方の端部は、焼かれてかなり細くなっている。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
	38	現存長98cm、最大径8.2cmを測る。一木の一端をとがらせたもので、一 部に焼いた痕跡が認められる。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	39	現存長125cm、最大幅16.5cm、最厚部12cmを測る。ほぼ中央部は6cm前後幅をもって、側面方向に貫通している。両面には手斧痕が認められる。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	40	全長150.5cm、幅21.5cm、厚さ3cmを測る。両面に手斧痕が見られる。 材質は不明。	河川中層 砂混り粘土層
	41	全長92.2cm、幅9.9cm、厚さ3.8cmを測る。一方の端部付近に手斧痕が 認められる。両面はほぼ平坦である。材質は針葉樹系のものであろう。	腐植土混り砂層
	42	全長156cm、幅11.1cm、厚さ3.2cmを測る。両面に一方方向に手斧痕が 認められる。手斧痕で明確なものは4.4cmの幅をもつ。	河川最下層 砂利混り青灰色粘土層
	43	現存長168cm、最大径9.6cmを測る。一木から作られており各所に方形のくぼみがみられ、それらのいくつかから2.1cm幅の削り痕が認められる。また突起部には全面に削り痕がみられる。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
	44	全長193.2cm、最大径10.8cmを測る。一木からなり一端は尖らしており 他端は表現が異なる。ほぼ全体に手斧痕が認められその明確なもので 4.7cm幅をもつ。また半分近く焼けている。 材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 粘土混り砂層
	45	全長121.8cm、最大径21.4cmを測る完形品である。半分の断面はほぼ円形を成し、他半分の断面は長方形を成す。両面に手斧痕が認められ、その明確なもので4.3cm幅をもつ。 材質は広葉樹系のものと思われる。	河川中層 砂混り粘土層
	46	現存長27.2cm、幅11.8cm、厚さ7.5cmを測る。一面に比して、他面は極めて荒くつくられている。材質不明。	河川中央部中層 灰色粗砂層
	47	現存長37.8cm、最大径8.6cmを測る。端面及び、その付近には明確に削り痕跡が認められる。材質は広葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
組材	48	全長74.8cm、幅7.8cm、厚さ2.1cmを測る。一方の端部には削り痕が認められる。一方半分は他方半分よりかなりうすい。 材質は針葉樹と推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	49	全長82cm、幅13.5cm、厚さ3.1cmを測る。両突出部の底面には外側に向って削り痕がみられる。また上面にも削り痕がみられ、二ヶ所ほどほぼダ円形の焼け痕がみられる。また突出部手前の両方のえぐり部にはそれぞれななめに穿孔がみられ貫通している。上面は若干傾斜するが底面はほぼ平坦である。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部中部 黒色粘土層

種 類	遺物番号	形 態 の 特 微	備考
組材	50	全長53.5cm、幅5.9cm、厚さ1.1cmを測る。一方の端部から約3cm内側まで平坦であるが、それ以外の部分はえぐられ彎曲している。本品は全体的に内彎する。両突起部の表現もかなり異なっている。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層灰色細砂層
	51	全長38.7cm、幅8.8cm、厚さ1.4cmを測る。一方の袖部は他方よりうすく削られている。材質は針葉樹系のものであろう。	河川上層 砂混り粘土層
	52	全長21.6cm、幅7.4cm、厚さ1cmを測る。一方の突出部は他方に比して かなりうすくつくられている。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上層 腐植土混灰色砂利層
	53	全長35.9cm、幅11.9cm、厚さ3.3cmを測る。切断面はていねいに仕上げている。両面は平坦。材質は針葉樹系のものであろう。	河川右肩部上層 粘土混り砂層
有孔木製品	54	現存長21cm、幅4.6cm、厚さ1.1cmを測る。本品は計14の穿孔を有すが、 それらはかなり不規則に位置している。両面には刀子痕が細かく認め られ、その削り方向は同一である。また厚さはほぼ一定しており材質 は針葉樹系のものと推定される。	茶褐色粘土層
	55	現存長28.6cm、幅5.1cm、厚さ1.2cmを測る。両面はは平坦である。一部に穿孔が存在しななめに貫通している。破損したものも含めて本品には計5の孔がみられる。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中央部中層 茶褐色粘土混り細砂層
	56	全長35.9cm、幅6.3cm、厚さ1cmを測る。両面ほぼ平坦。計3の孔が存在しその中には傾斜したものもある。両端部は削りおとされている。 材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	57	現存長18.7cm、幅5.5cm、厚さ2.4cmを測る破片である。一面に比して 他面は若干傾斜する。また一面には数ヶ所圧痕がみとめられる。孔は 破損したものも含めて計4である。 材質は針葉樹系のものと推定される。	河川下層 粘土層
	58	全長65.4cm、幅22.6cm厚さ4.4cmを測る。全面に手斧痕が認められ、 削りはすべて同一方向である。表面はは中央部には、刃あたりらしく 無数の切り込みがみられる。材質は針葉樹系統のものであろう。	西畦畔 暗茶褐色粘土層
	59	全長81.5cm、幅15.5cm、厚さ5.3cmを測る。 材質は針葉樹系のものと思われる。	
	60 (I)	現存長38.5cm、最大幅4.1cm、厚さ1.5cmを測る。一方の端部は円孔の一部分が残存する。またその端部から約2cm弱内側には段がついている。材質不明。	河川下層 黄褐色砂利層
	61 (II)	現存長65.1cm、幅3.1cm、厚さ1.8cmを測る。60と同様、一方の端部は 円孔の部分が残存している。さらにその端部から1.5cm内側に段がつき、 それよりさらに4mm内側にもう一段が存在する。4つの小円孔はすべ て右下りの方向に貫通している。材質不明。	河川上層 茶褐色砂混り粘土層
	62 (III)	現存長73.7cm、幅4.6cm、厚さ2.2cmを測る。60、61と同様、一方の端部には円孔の部分が残存している。さらにその端部から約2cm余り内側には段がつく。また他方の端部付近はその他の部分に比してうすくなっている。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川上層 粘土混り砂利層
部 分 材	63	現存長33.1cm、幅3.7cm、厚さ3.6cmを測る。両方の穴は貫通してはいるが木片によりそれをさまたげている。若干丸味をもち、各所に圧痕がみられる。材質不明。	河川上層 粘土混り砂層
	64	現存長21.8cm、幅3 cm、厚さ1.2cmを測る。ほぼ全面に刀子痕が認められ、一方の端部附近には切り込みがみられる。 材質は針葉樹系統のものであろう。	河川中央部上層 砂利混り砂層
	65	現存長26.2cm、幅6.9cm、厚さ1.3cmを測る。一方の端部から少し内側に円孔の部分が残存する。 また一面には部分的に無数の切り込みがみられる。 材質は針葉樹系のものであろう。	砂混粘土層
尖頭棒状木製品	66	現存長21.5cm、幅1.8cm、厚さ1.1cmを測る。一端を尖頭状につくり出き、一面は丸味をもつ。他面は荒い。枝を利用したもののようである。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上部 青灰色砂利層
	67	現存長25.6cm、最大径1.8cmを測る。全体に削り痕がみられる。一端は 尖頭状につくり出し、他端は0.1~0.2cm幅の切り込みがみられる。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川上層 砂混り茶褐色粘土層
杭状木製品	68	全長59.5cm、最大径10.1cm、最小径 2 cmを測る。丸味をもつ面もみられるが、かなり荒い面も認められる。全体の2/3には、ある部分は細かく、またある部分は大まかな手斧痕がみられる。この手斧痕から鉄製の刃先による加工が推定される。削りは一定方向である。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川下層 砂混り粘土層

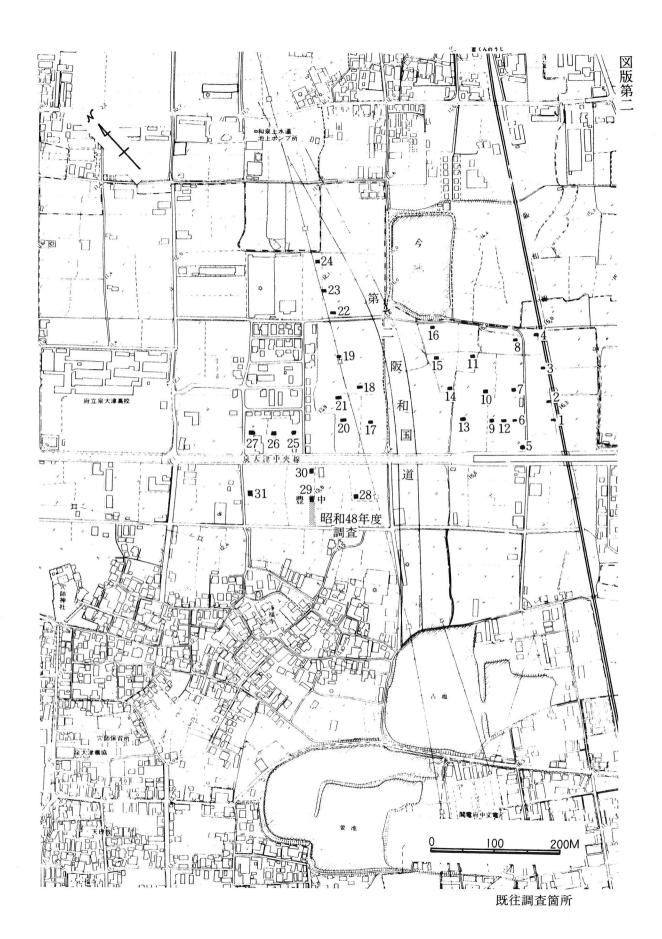
種 類	遺物番号	形 態 の 特 徴	備考
棒状木製品	69	全長27.5cm、幅 1 cm、厚さ0.5cmを測る。全体に厚さが一定でなくつくりも荒い。材質は針葉樹系のものと推定される。	河川下層 暗茶褐色粘土層
	70	現存長38.6cm、最大径2.1cmを測る。全面に刀子痕が認められる。本品には4ヶ所圧痕が存在する。材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 砂混り粘土層
	71	現存長43.2cm、幅2.9cm、厚さ2.8cmを測る。不明確ではあるが部分的 に刀子痕が残存する。一部圧痕も認められる。材質不明。	河川中央部上層 砂利混り砂層
板 材	72	全長104cm、幅14.8cm、厚さ1.4cmを測る。両端部から内側にそれぞれ 20cmおよび10cmの部分に段がみられる。他の面は全面に手斧痕が認め られ、明確なもので4.1cmの幅をもつ。 材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	73	長辺部75cm、短辺部28cm、厚さ2.1cmを測る。一方の端部付近には突出 部がみられるが、他方の端部にも欠損の為明らかではないが突出部が つく可能性もある。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川下層暗茶褐色粘土層
	74	現存長14.3cm、幅20.7cm、厚さ1.8cmを測る。両面に削り痕が認められる。 U字状のえぐりがみられる。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上層 灰色砂層
	75	現存長16.5cm、幅41.1cm、厚さ2.8cmを測る。両面ほぼ平坦。えぐりを 入れている。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川中央部上層 砂利層
	76	全長32.4cm、幅11cm、厚さ1.1cmを測る。一面は手斧痕が細かく認められるが、他面は両端部内側の方形の孔の周辺にのみ手斧痕がみられる。また手斧痕が細かく認められる面にはほぼ一定間かくで四本の切り込み線がみられる。手斧痕は一定方向である。この手斧痕の観察から鉄の刃先をもつ手斧であることがうかがわれる。材質は針葉樹系のものと推定される。	
	77	全長30.1cm、幅10.6cm、厚さ1cmを測る。両面に手斧痕が細かく認められる。この手斧痕の観察から鉄の刃先をもつ手斧の存在が考えられる。手斧痕は一定方向ではない。 材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂混り粘土層
	78	全長25.3cm、幅4.5cm、厚さ1cmを測る。全体的に若干内彎する。 材質は針葉樹系のものと推定される。	河川中層 砂利層
ヘラ状木製品	79	現存長28cm、幅3.4cm、厚さ2.1cmを測る。刀子痕が認められる。 材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中央部上層 砂利層
	80	全長33.8cm、幅3.7cm、厚さ1.4cmを測る。刀子痕が認められる。 材質は針葉樹系のものと思われる。	河川上層 粘土混り砂利層
把手付板材	81 (I)	長辺部79.8cm、短辺部35cm、最厚部4.4cm、把手部の最大径3.8cmを測る。一方の把手部にはその基部に圧痕がみられる。 また側面部には1ヶ所穿孔が存在する。材質不明。	河川中央部中部 黒色粘土層
	82 (II)	長辺部76.5cm、短辺部33.7cm、最厚部4cm、把手部の最大径3.8cmを測る。一面には孔が長辺部に向って、貫通する。 材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中層 砂混り粘土層
	83 (III)	長辺部73cm、短辺部36cm、厚さ4.3cm、把手部の最大径3.5cmを測る。 本品も81、82同様、両側面に把手部がつくものと思われる。一方の把 手のみ残存。一面には、短辺部に対して平行方向に孔が貫通する。 材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中層 淡青灰色細砂層
	84 (V)	長辺部49.7cm、短辺部39.2cm、厚さ4.6cm、把手部の最大径4.8cmを測る。 一面にのみ削り痕が認められる。 両面平坦。材質は針葉樹系のものと思われる。	河川中層 暗茶褐色粘土層
そ の 他 木 製 品	85 (A)	全長18.5cm、幅3.1cm、厚さ1.3cmを測る。一面には全体に刀子痕が認められ、他面は両端部付近以外はほとんどえぐられている。材質不明。	青灰色粘土混り砂層
	86 (B)	現存長21.6cm、幅7.9cm、厚さ1.9cmを測る。 材質は針葉樹系のものであろう。	河川中層 灰色砂層
	87 (C)	全長56cm、身部幅19.8cm、身部厚さ2.2cm、柄部幅4.1cm、柄部厚さ2.6cmを測る。身部の側面には削り痕が認められる。柄部は基部から徐々に幅を増し先端部にいたる。 両面ほぼ平坦。材質は広葉樹系のものと思われる。	河川中層 砂利層
	88 (D)	現存長38.8cm、身部幅22.6cm、身部厚さ4cm、柄部幅2.5cm、柄部厚さ 2.6cmを測る。一面には数ヶ所にくばみがみられる。両面ほば平坦。 材質は針葉樹系のものと推定される。	灰茶褐色粘質上層

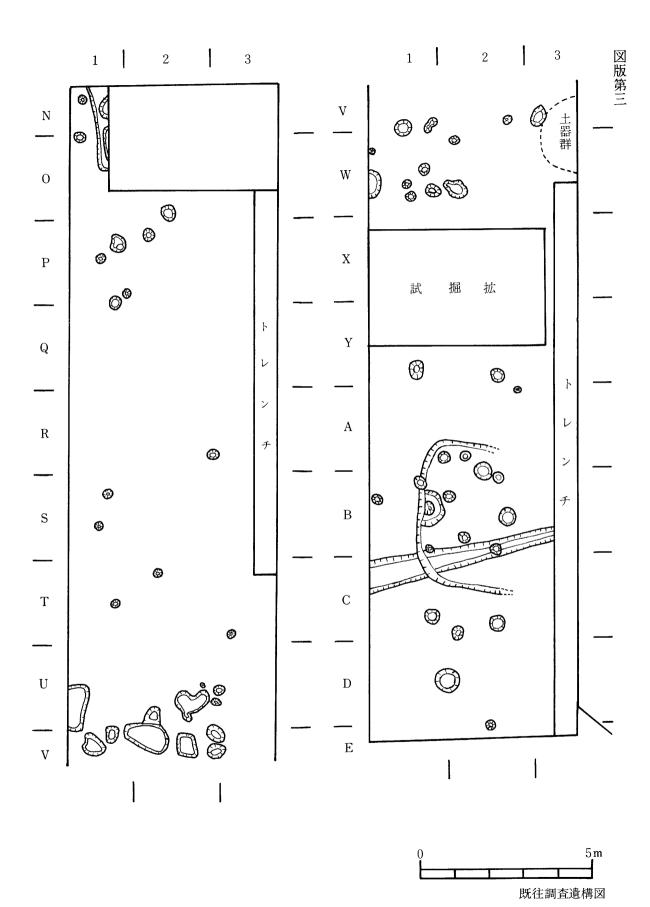
図 版



5. 池上· 曽根遺跡 6. 国 府 跡

7. 穴師薬師寺跡





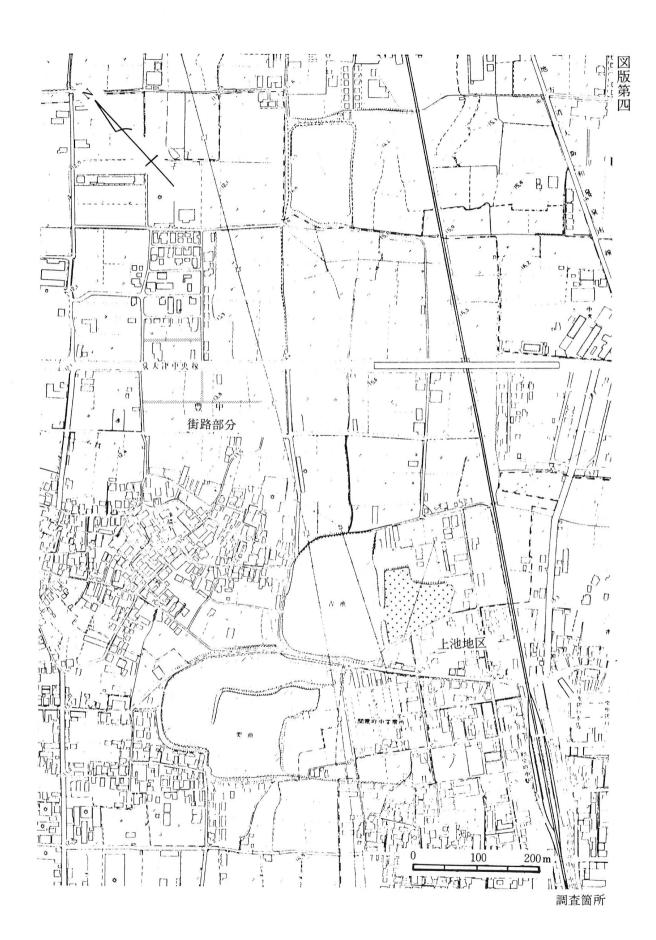
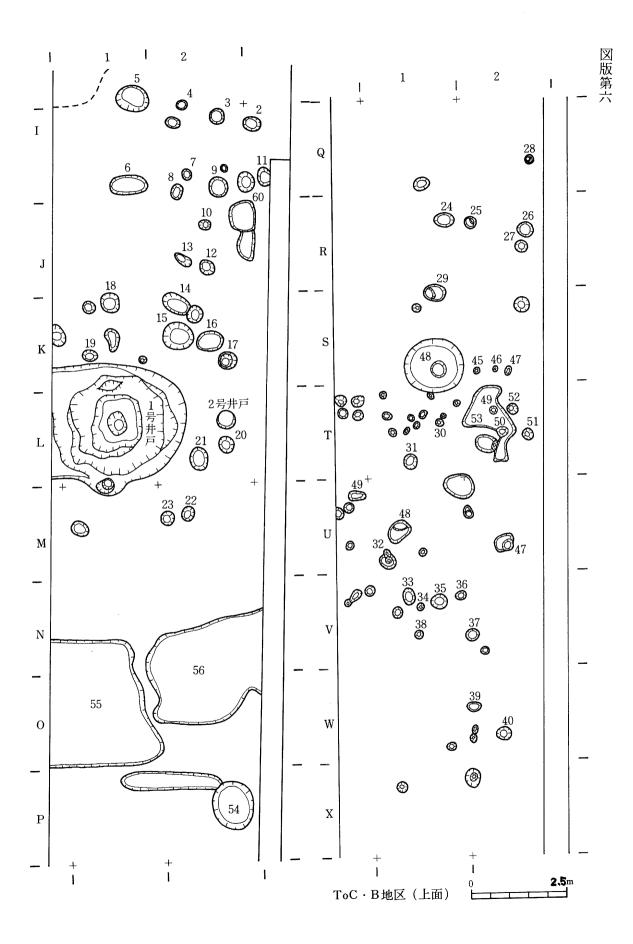
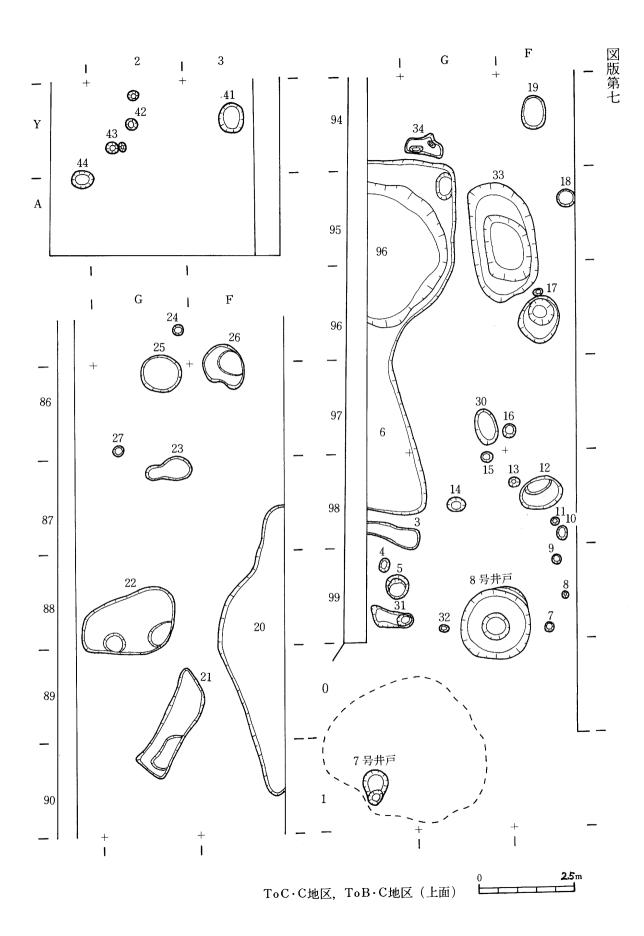
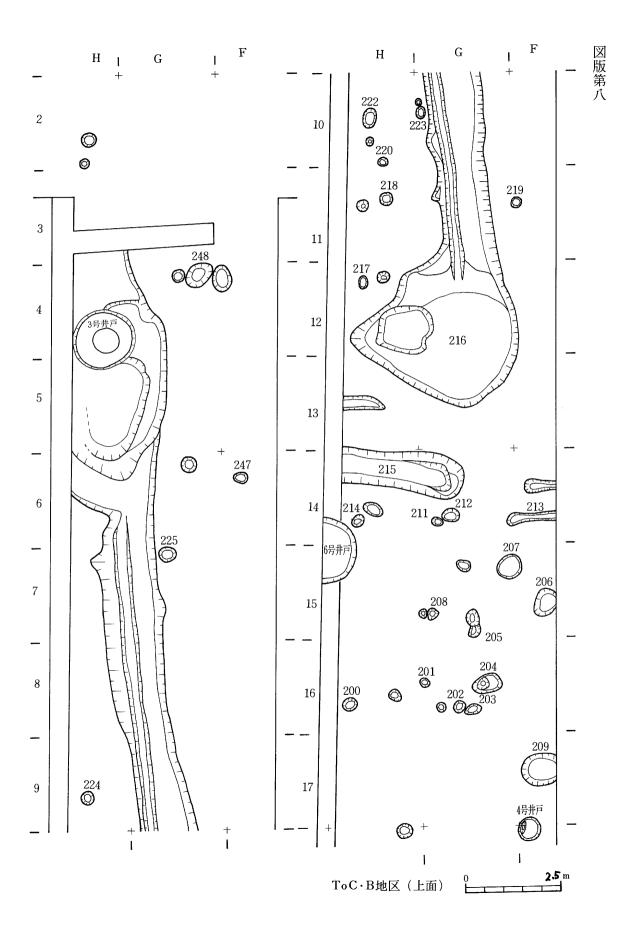
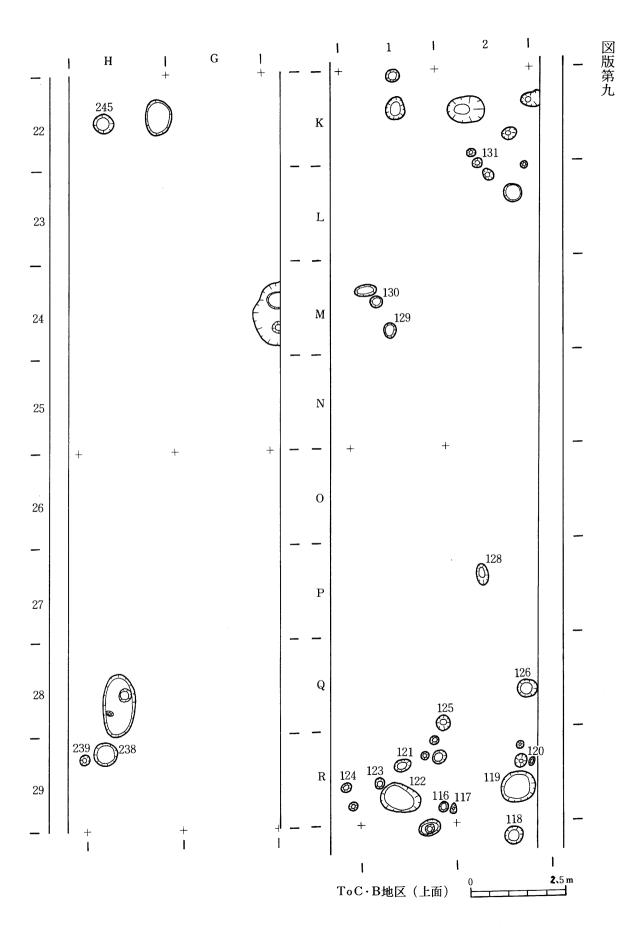


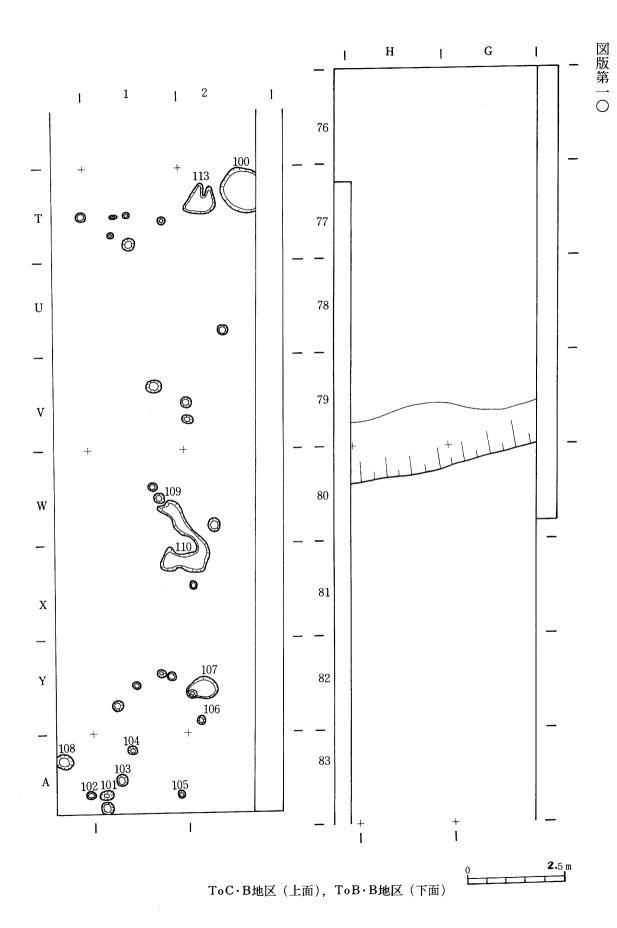
		図 版 第 五
ToB C地区	府道泉大津中央線	ToB B地区 道路 第 23 号
		道路第18号
道 ToC 第 C地区 25 号		ToC B地区

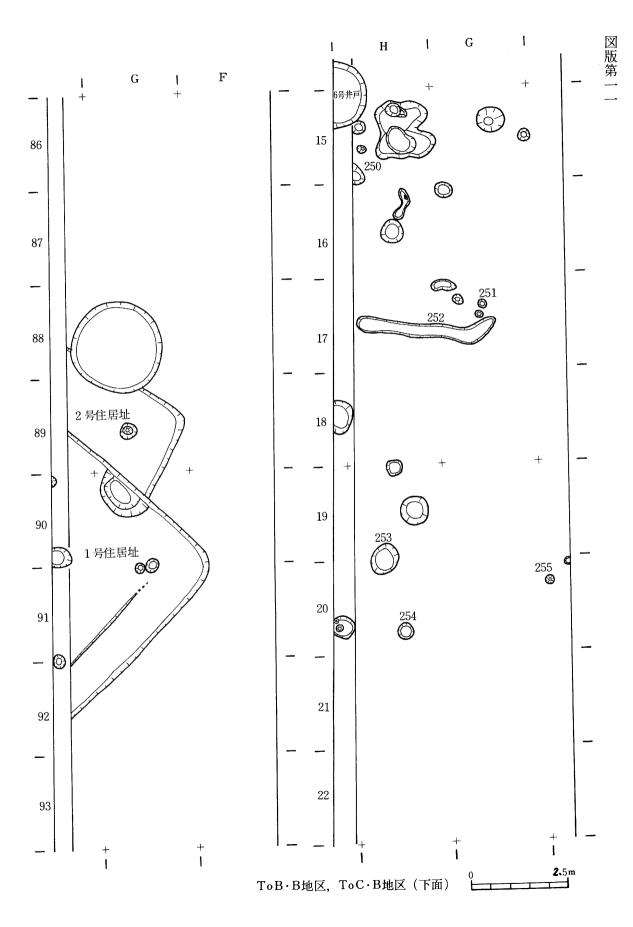


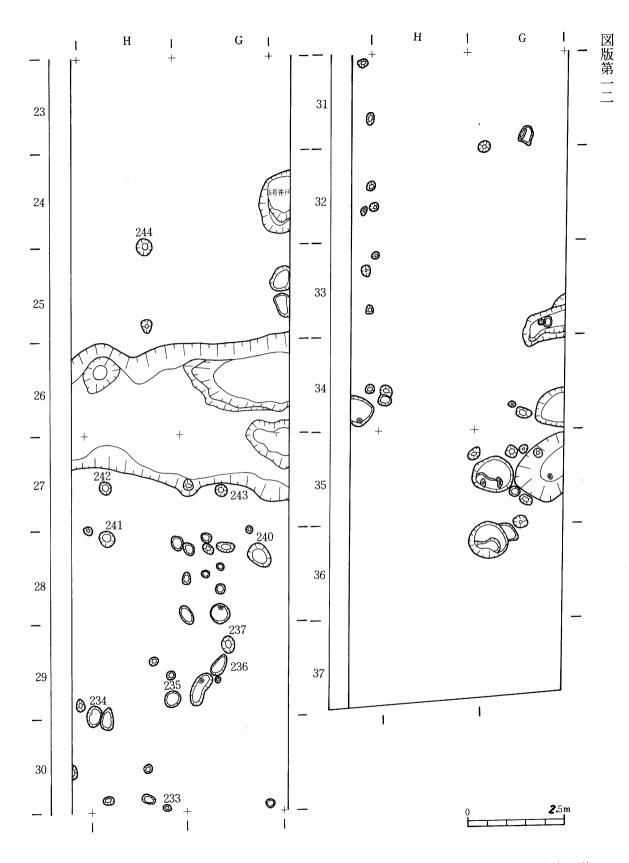




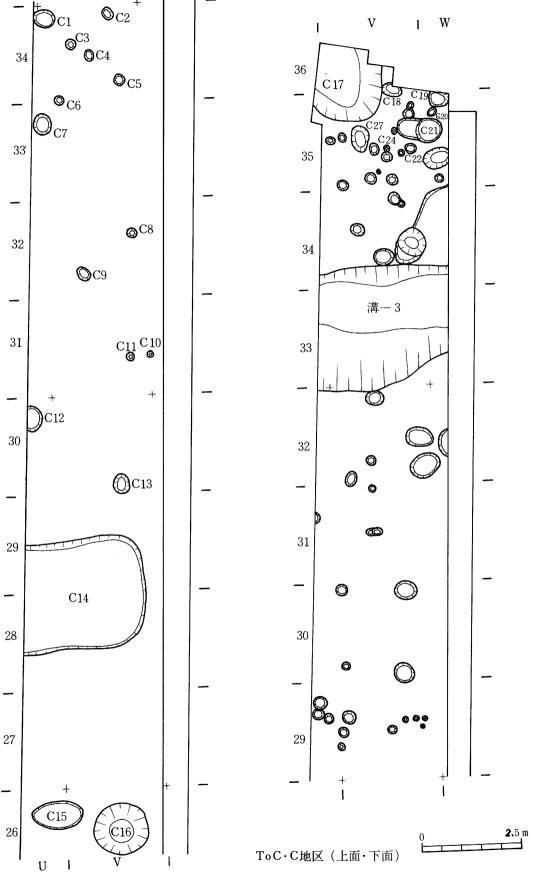


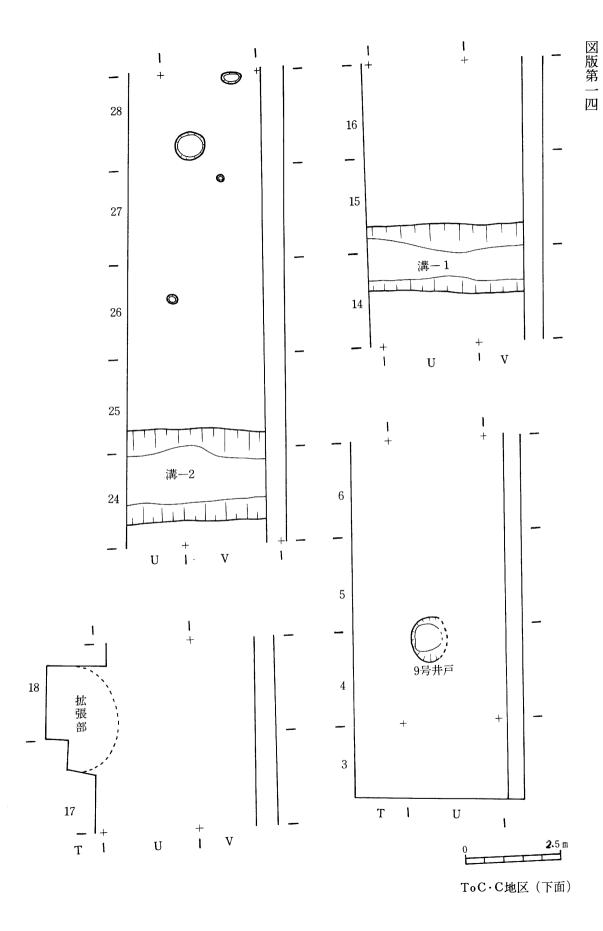


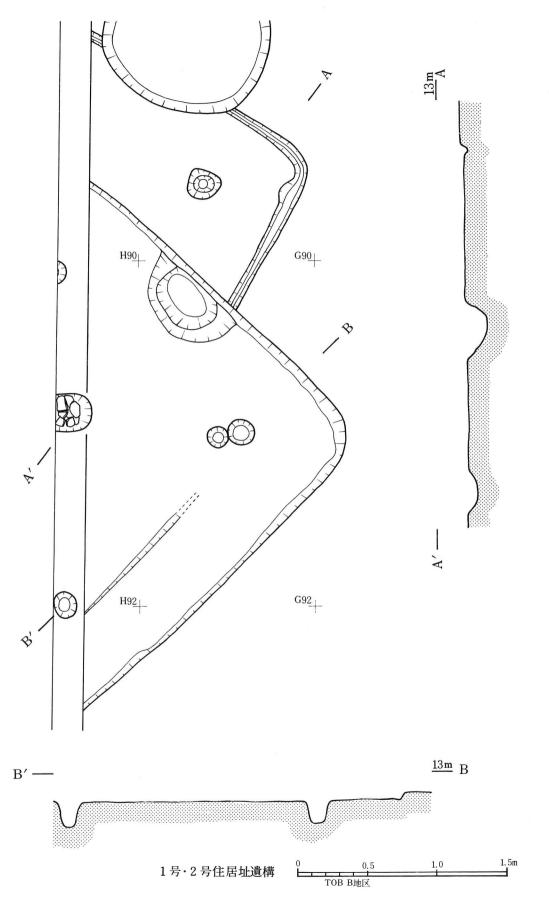


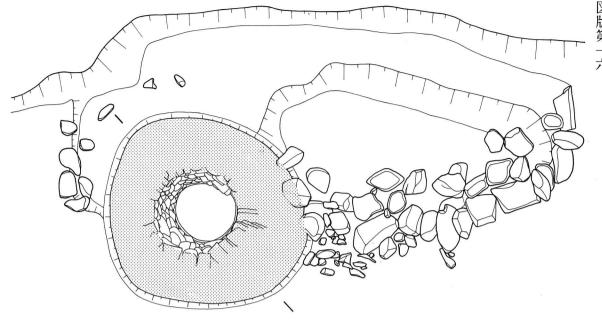


ToC·B地区(下面)

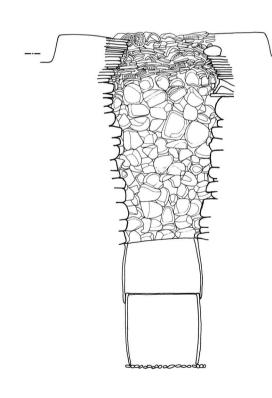








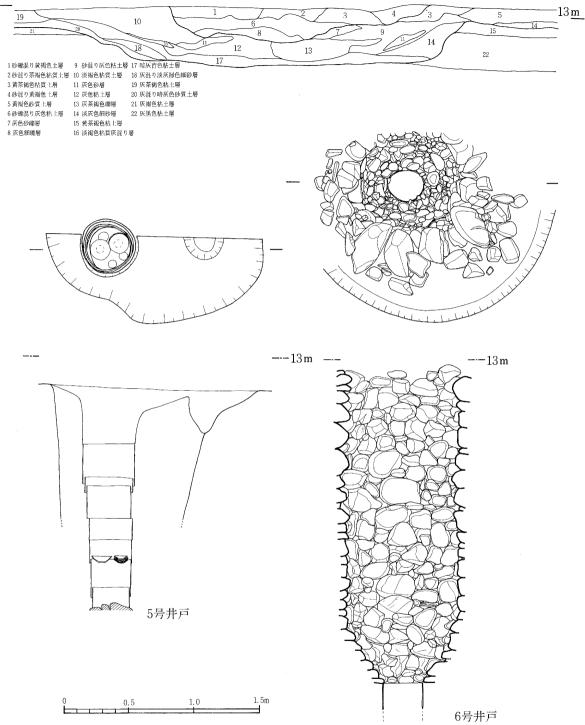
---13 m

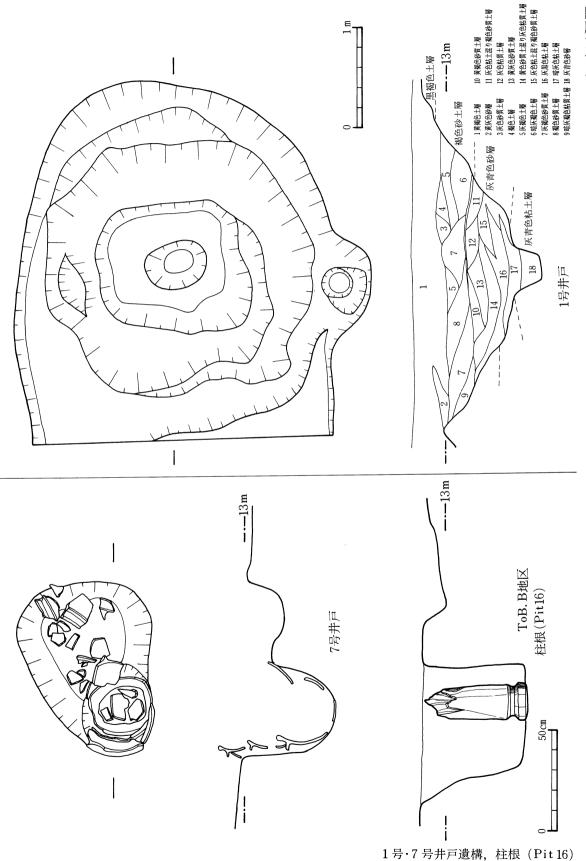


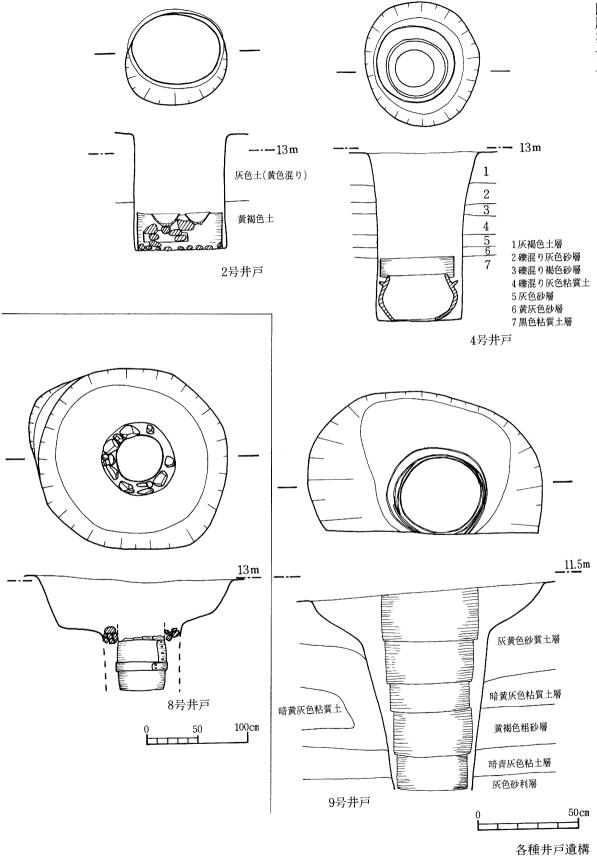
1.5m

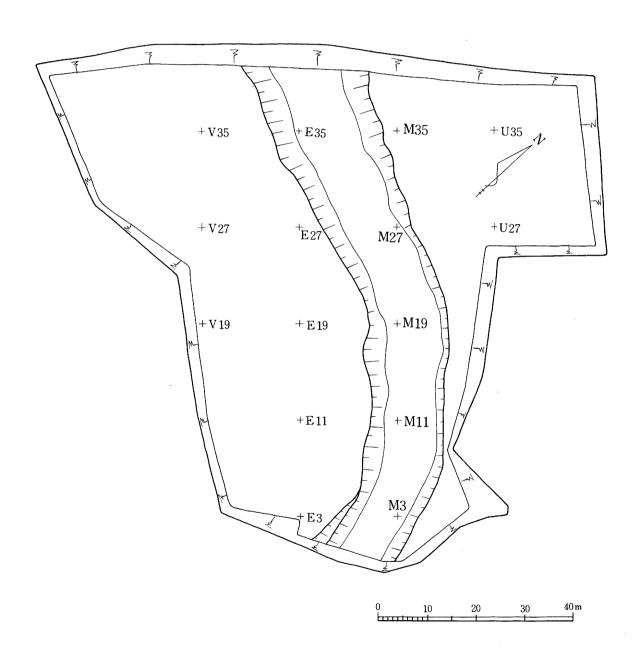
井	戸	 覧	表

		00.0		, ,	
番号	規 掘り方径	浸 さ	莫 直 径	井戸枠種類	
1	3 m 50	1 m		ナシ	瓦器碗 木片·下駄
2	45 cm	60cm	40cm	曲物	瓦器碗 2 桶
3		2 m 65	60cm	瓦+河原石+陶製甕	瓦器片 朱塗り椀 瓦
4	50cm	85cm	30cm	曲物十土釜	瓦器 9
5	長径 1 m65 短径 70cm	1 m75	41cm上段 38 34 33 31 28 下段	曲物(6段)	瓦器碗 7灯明皿 5
6		2 m 50	80cm(石) 41cm(曲物)	河原石十曲物	瓦器片
7		55cm	40cm	土釜 (3段)	ナシ
8	1 m 95	70cm	47cm上段 44cm下段	曲物(2段)	土師器片 瓦器片
9	1 m 50 底径 40cm	1 m	48cm上段 42 44 39 38 35 下段	曲物6段	ナシ

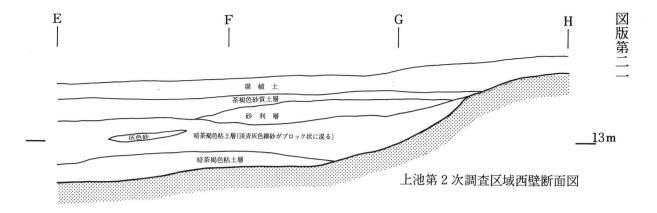


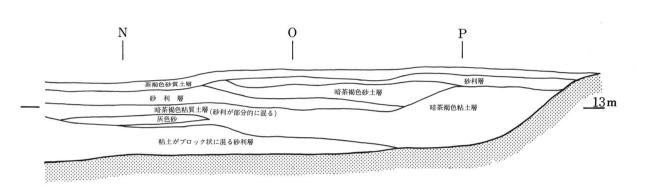


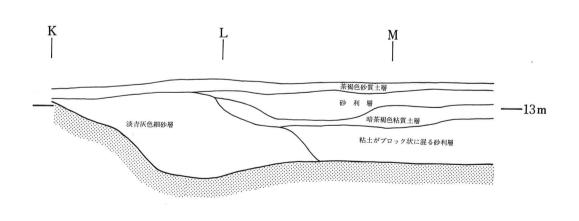




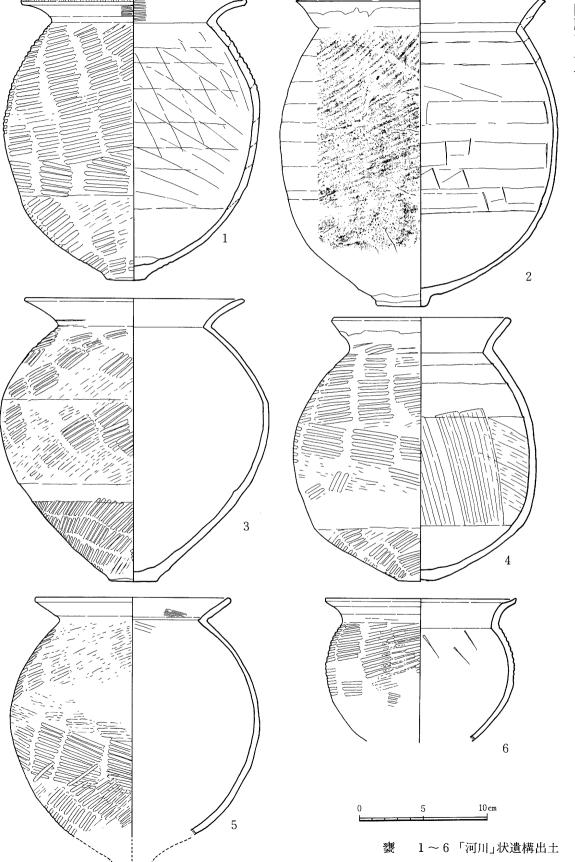
上池部分

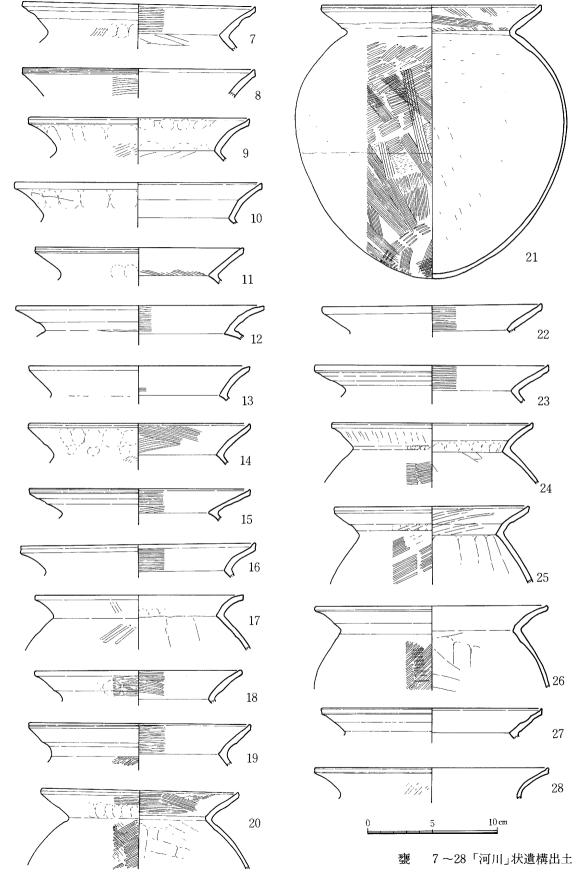






0 1 2 m





甕

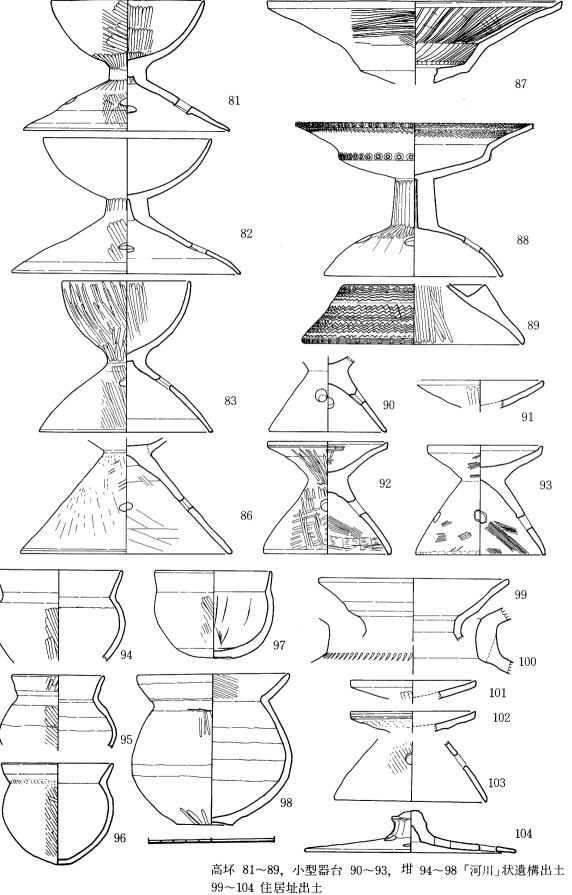
29~43「河川」状遺構出土

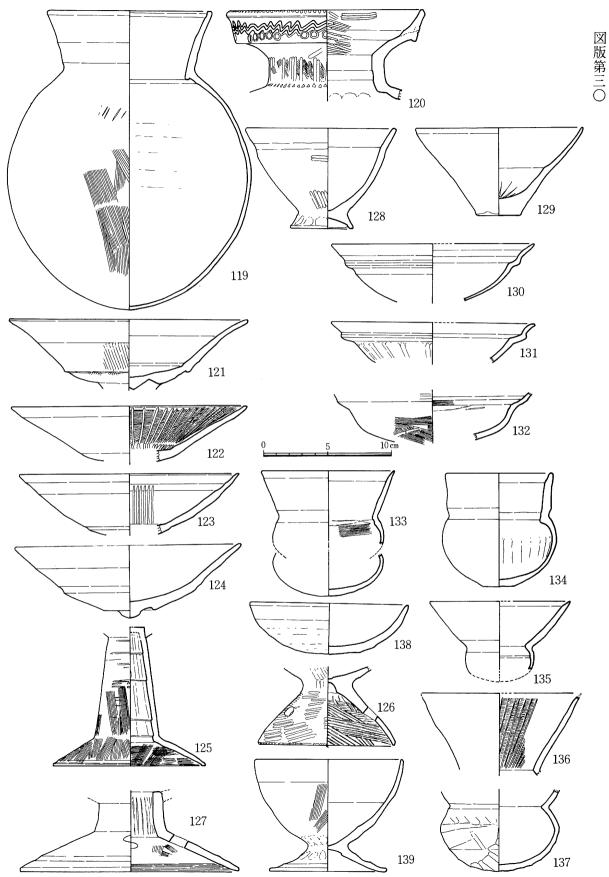
XXXXXX

30

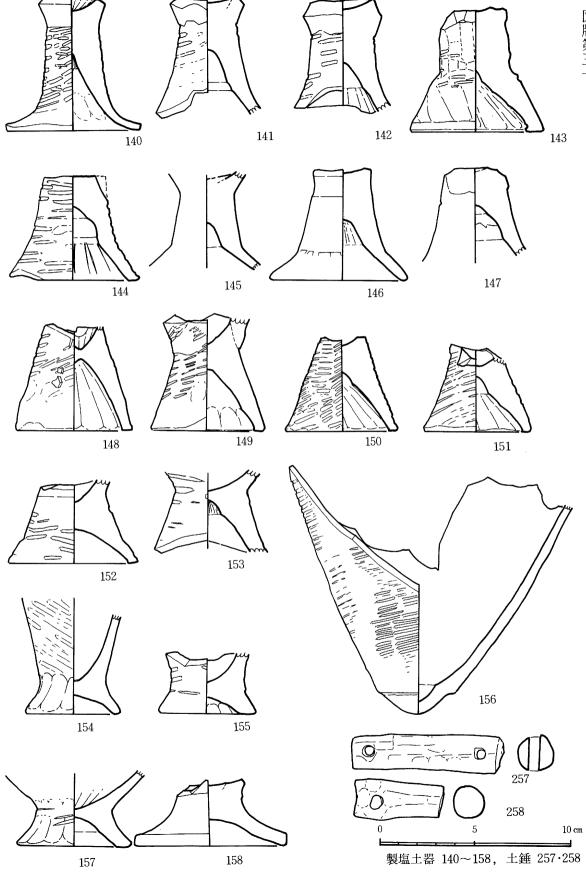
壷 54·57, 坏 59, 手焙形土器 58, 鉢 60~69「河川」状遺構出土

図版第二六

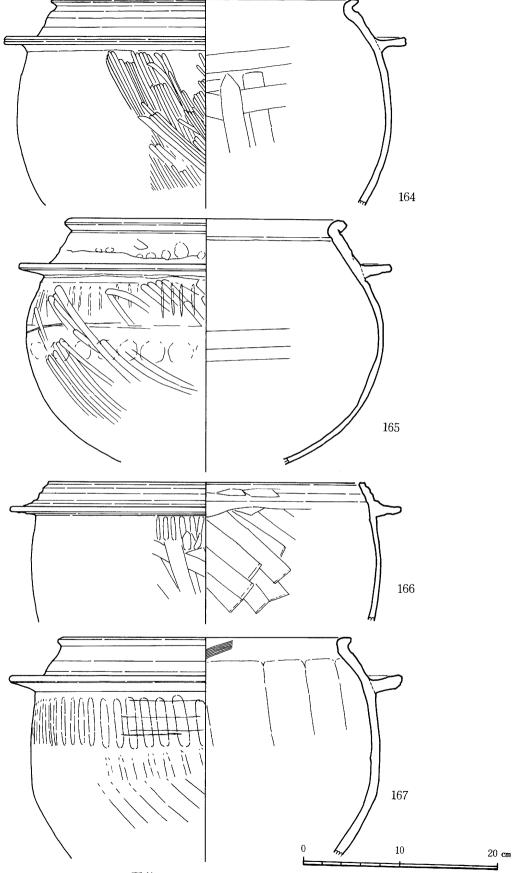




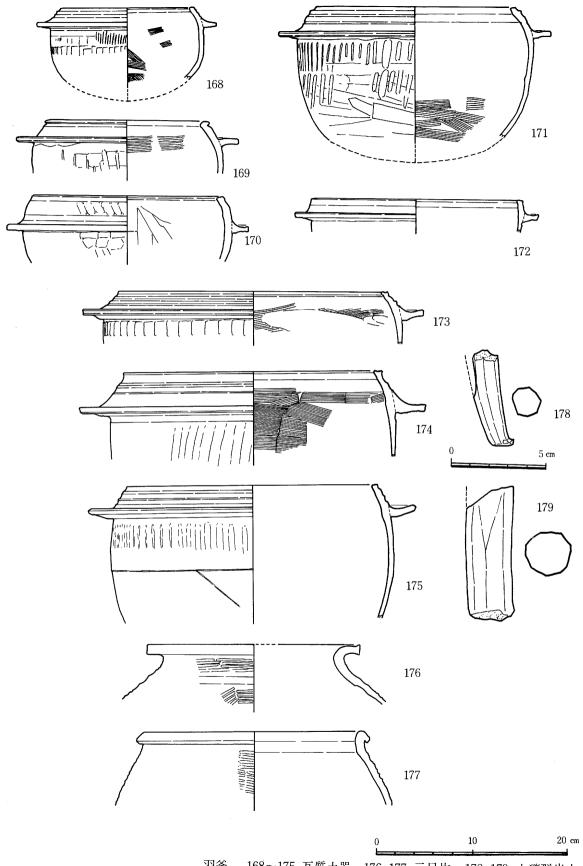
壷 119·120, 鉢 128·129, 高坏 121~127, 台付椀 139, 坏 138, 小型鉢 130~132, 小型丸底坩 133~137 ToC南北トレンチ・拡張部出土



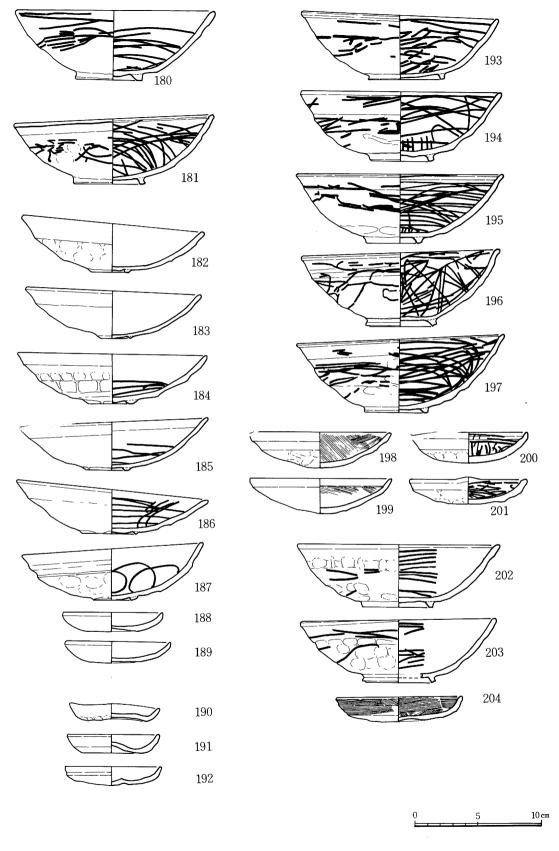
羽釜 159~161 4号井戸出土, 162·163 7号井戸出土



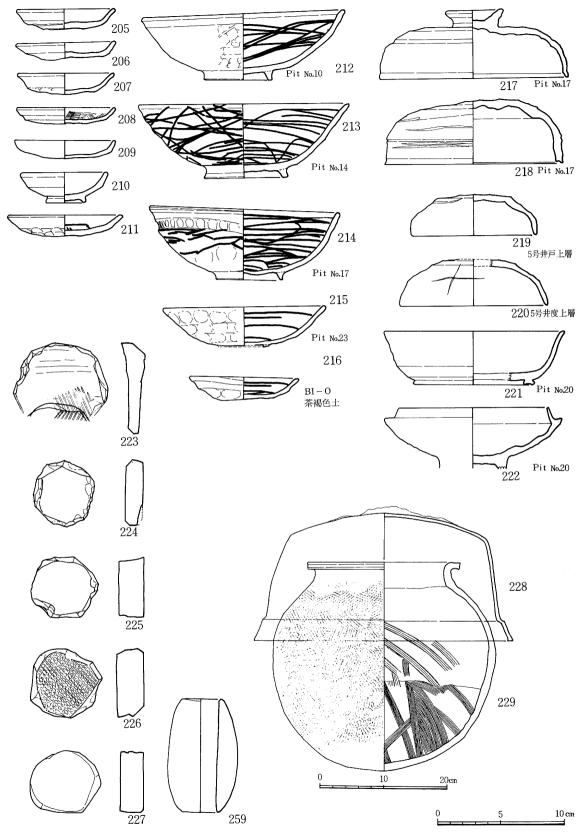
羽釜 164~166 7号井戸出土, 167 BH15·BG15褐色砂礫層出土



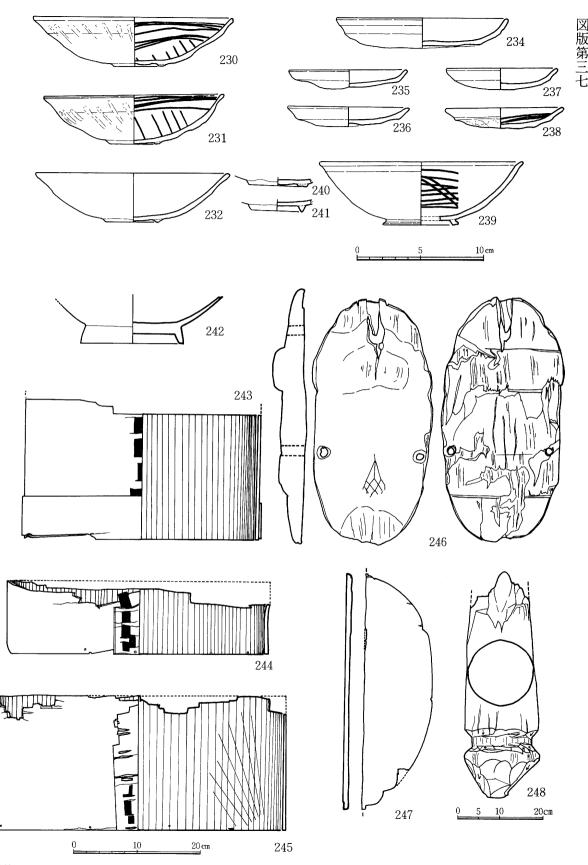
羽釜 168~175 瓦質土器, 176·177 三足片, 178·179 小礫群出土



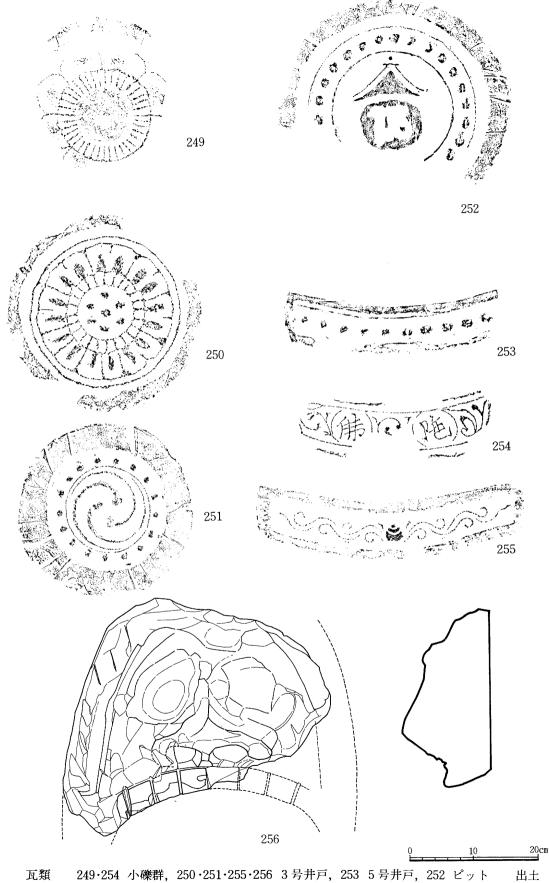
瓦器他 180 1号井戸, 181 2号井戸, 182~192 4号井戸, 193~204 5号井戸 出土



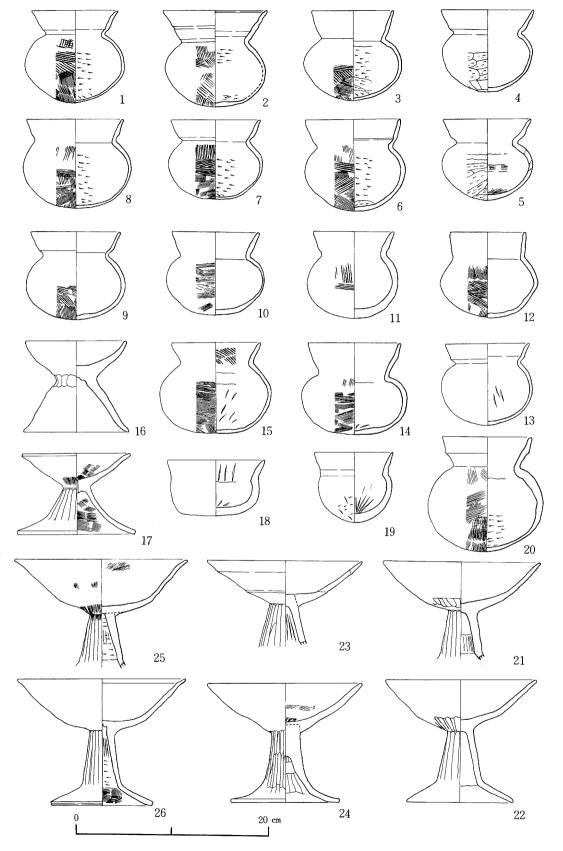
瓦器・須恵器他 205~211 小礫群, 212~222 各種ピット他出土, 円板 223~227, 骨壷 228·229, 土錘 259



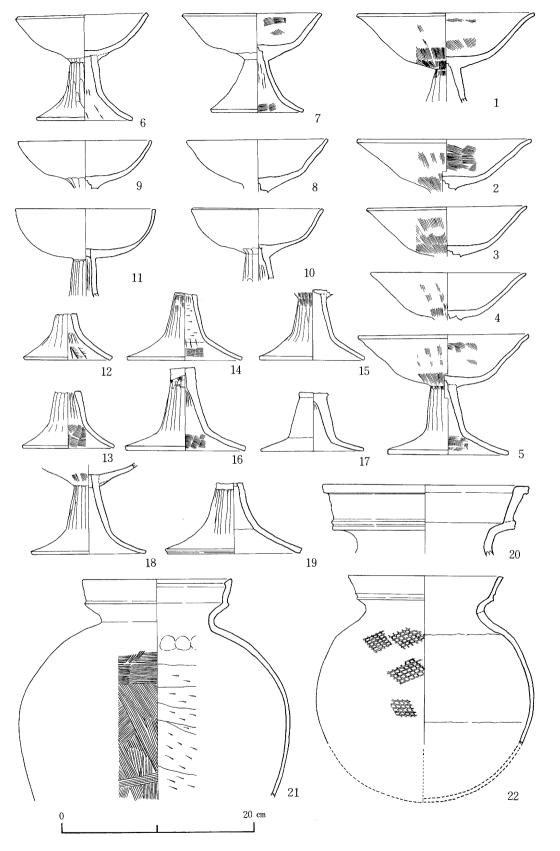
瓦器他 230~238 ToC溝 2, 240·241 ToC溝 3, 239 ToC C-16 木製品 242 3号井戸, 243·244 5号井戸, 2458号井戸, 246 1号井戸, 247 2号井戸, 248 ピット5 出土



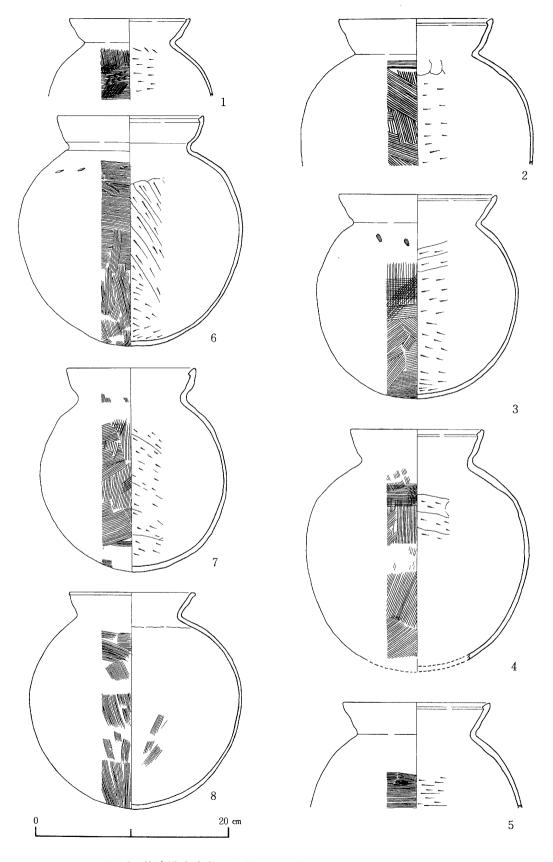
249・254 小礫群, 250・251・255・256 3号井戸, 253 5号井戸, 252 ピット 瓦類



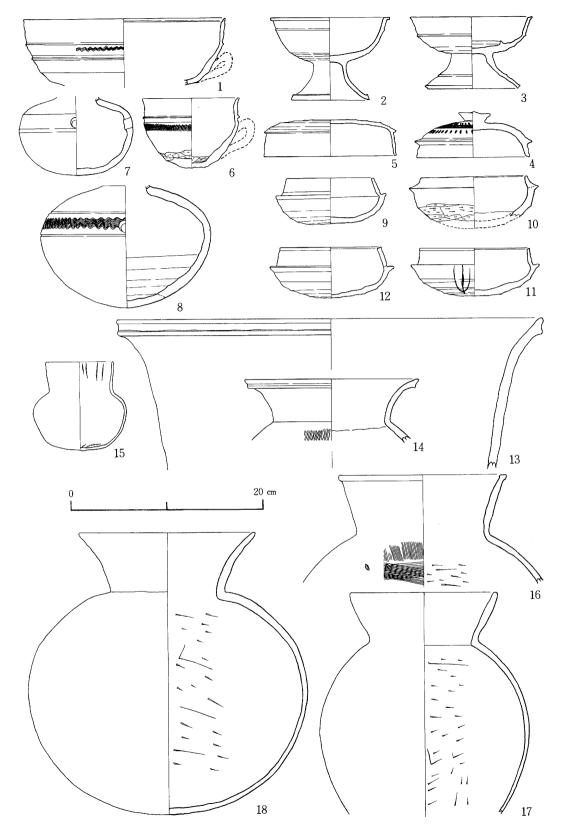
旧河川状遺構南岸堆積土(淡青灰色細砂層)および西端部(暗茶褐色粘土層)出土遺物



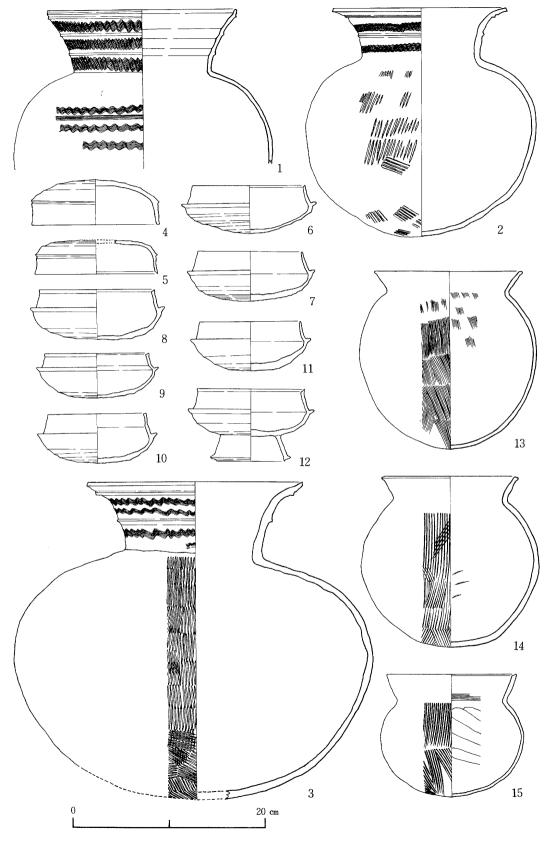
旧河川状遺構南岸堆積土(淡青灰色細砂層)および西端部(暗茶褐色粘土層)出土遺物



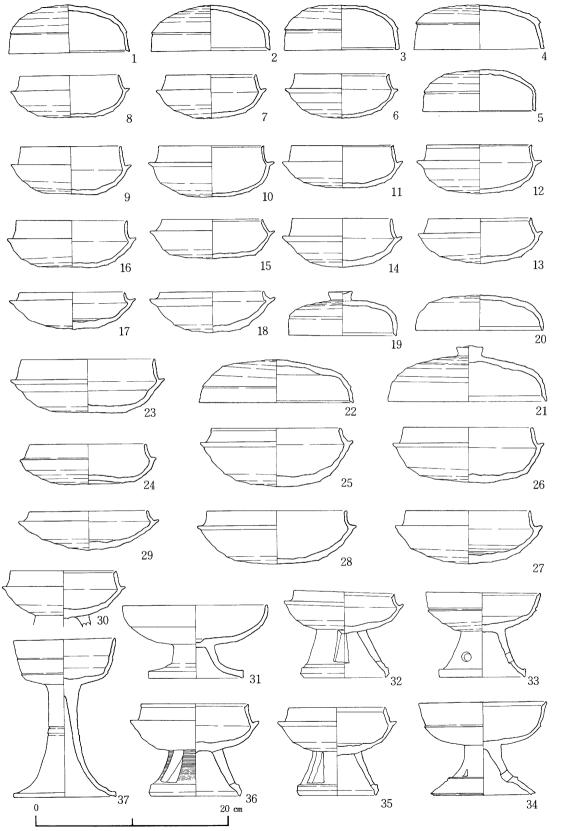
旧河川状遺構南岸(淡青灰色細砂層)ならびに西端部(暗茶褐色粘土層)出土遺物



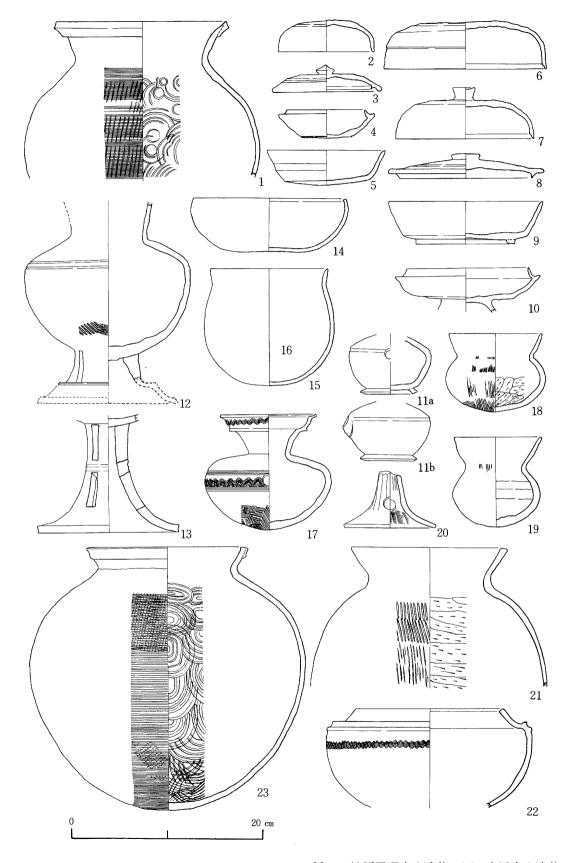
旧河川状遺構南岸(淡青灰色細砂層)ならびに西端部(暗茶褐色粘土層)出土遺物



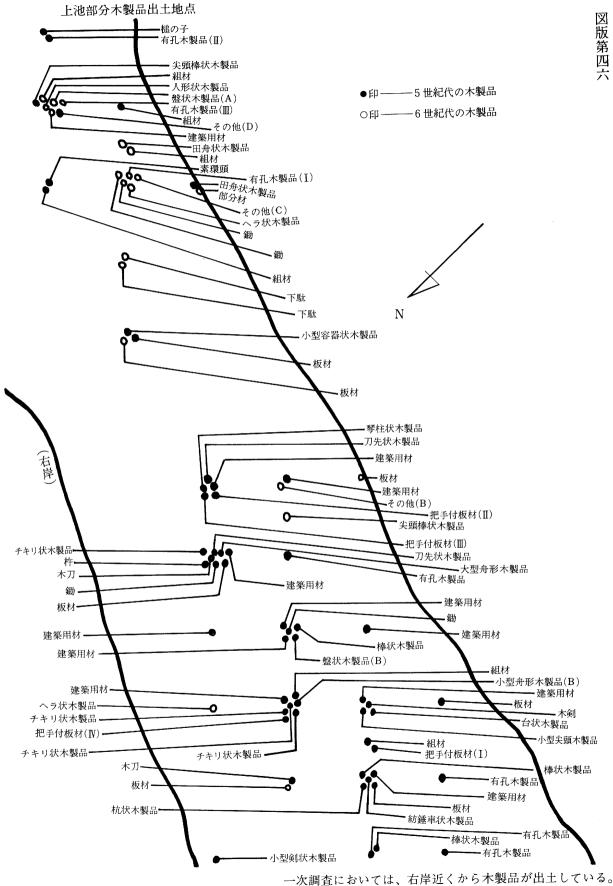
I-27地区周辺河川堆積土(暗茶褐色粘土混り灰色砂層)出土遺物

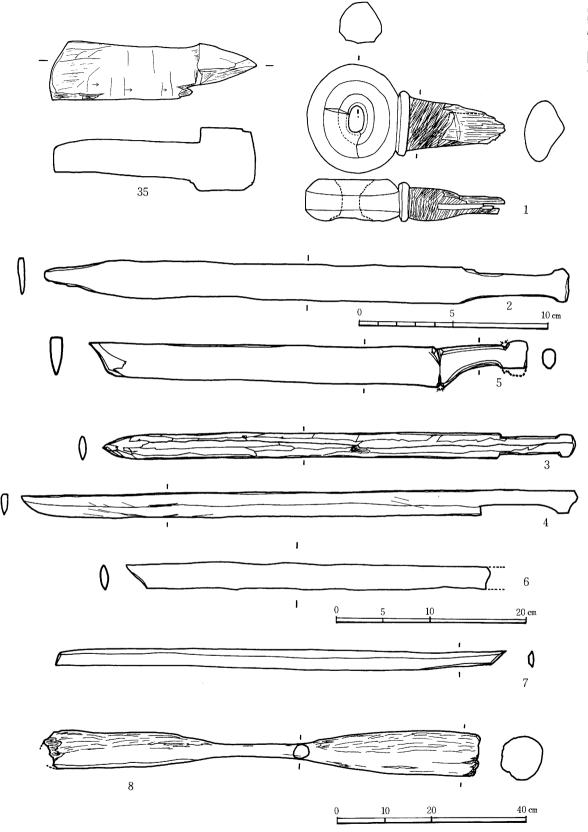


M-19地区周辺出土遺物

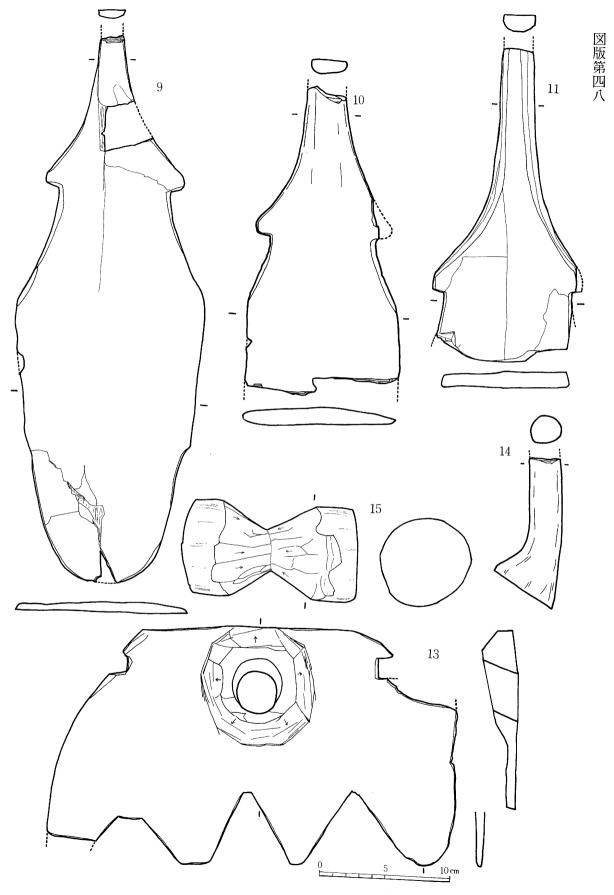


M-19地区周辺出土遺物、河川上層出土遺物



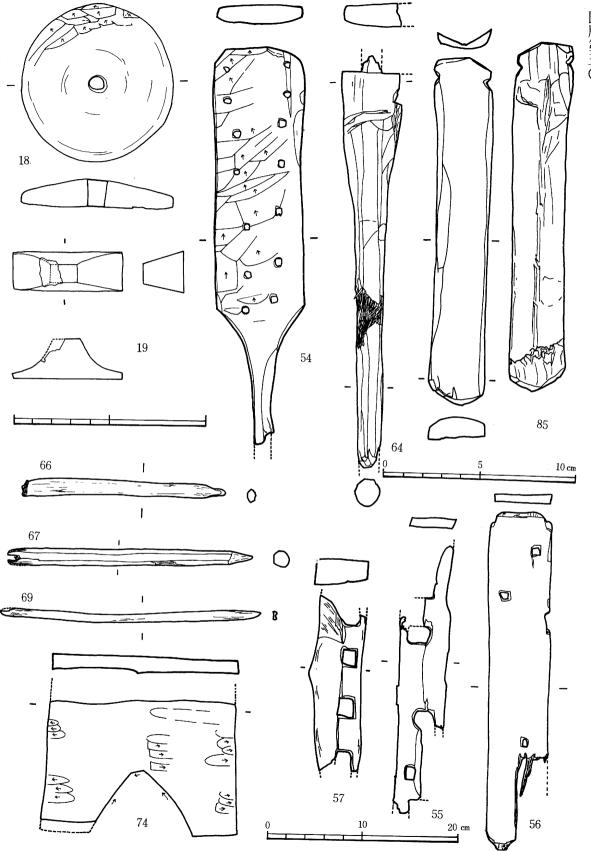


小型尖頭木製品, 1 素環頭, 2 小型剣状木製品, 3 木剣, $4\sim 5$ 木刀, $6\sim 7$ 刀先状木製品, 8 杵

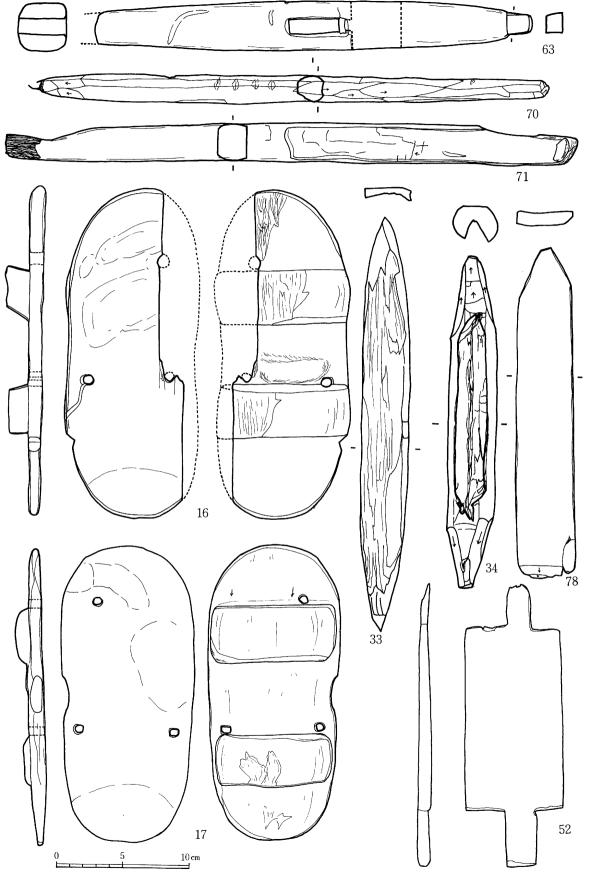


 $9\sim \!\! 11$ 鋤,13 又鍬,14 鎌柄,15 槌の子

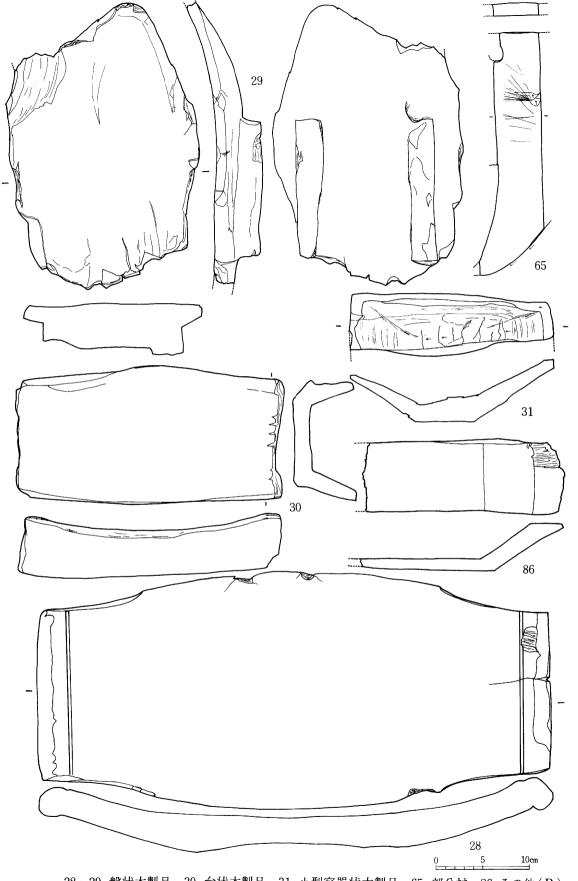
図版第四九



18 紡錘車状木製品, 19 琴柱状木製品, $54\sim57$ 有孔木製品, 64 部分材, $66\sim67$ 尖頭状状木製品 69 棒状木製品, 74 板材, 85 その他(A)

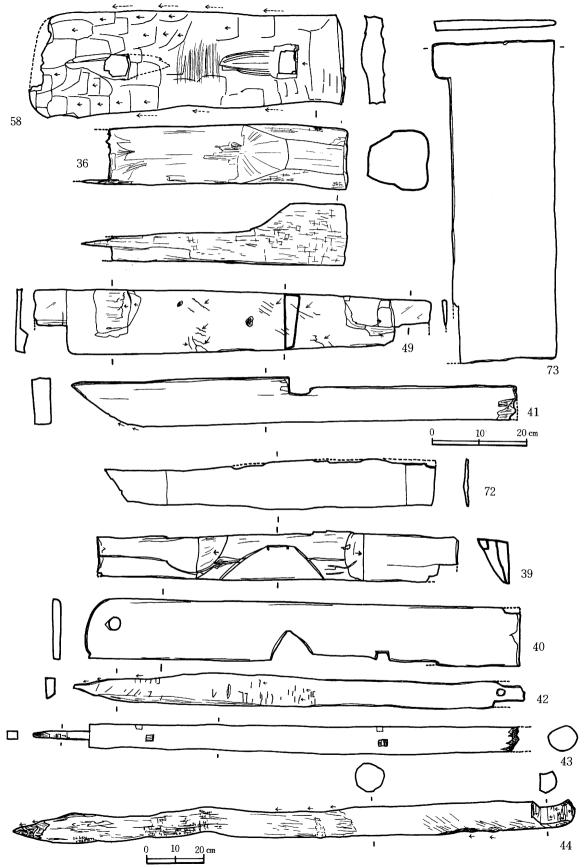


16~17 下駄, 33~34 小型舟形木製品, 52 組材, 63 部分材, 70~71 棒状木製品, 78 板材

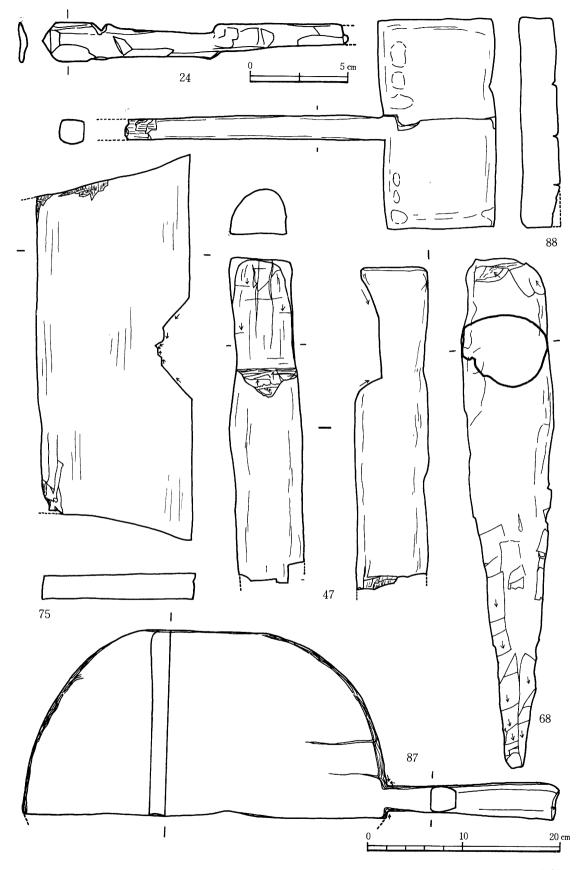


28~29 盤状木製品,30 台状木製品,31 小型容器状木製品,65 部分材,86 その他(B)

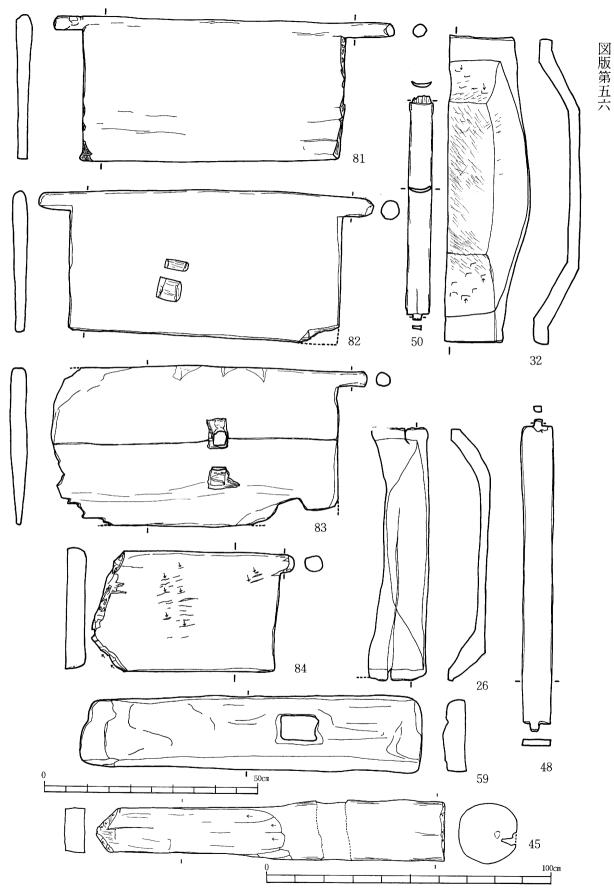
25 箱形木製品, $37\sim38\cdot46$ 建築用材, $51\cdot53$ 組材, $60\sim62$ 有孔木製品, $76\sim77$ 板材 $79\sim80$ ヘラ状木製品



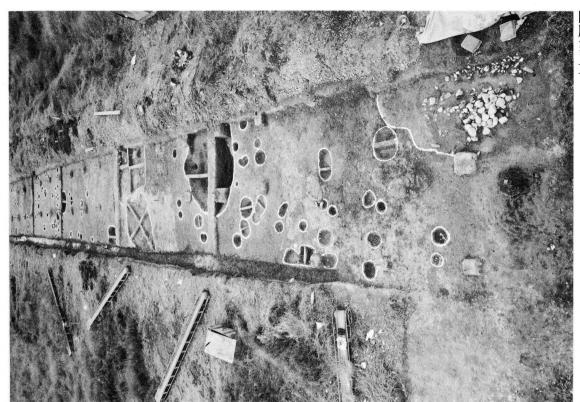
36·39~44 建築用材, 49 組材, 58 有孔木製品, 72~73 板材



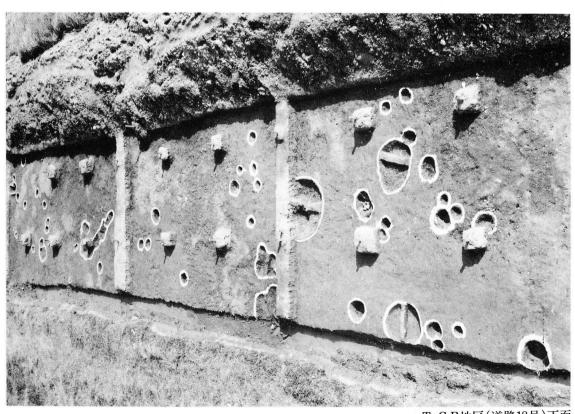
24 人形状木製品, 47 建築用材, 68 杭状木製品, 75 板材, 87~88 その化木製品



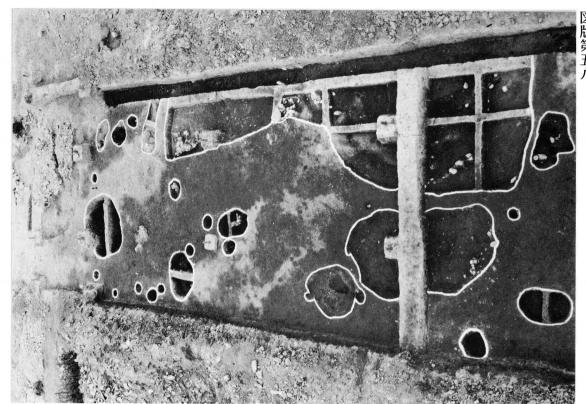
田舟状木製品,32 大型舟形木製品,45 建築用材, $48\cdot 50$ 組材,59 有孔木製品, $81\sim 84$ 把手付 $81\sim 84$ 把手付板材



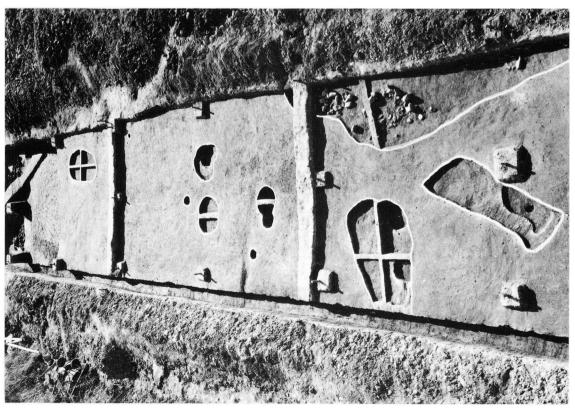
ToC B地区(道路18号)上面



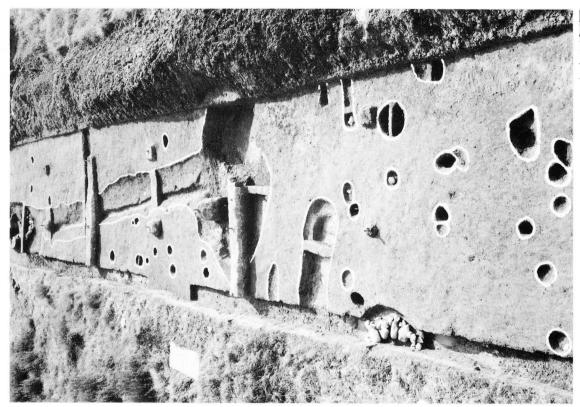
ToC B地区(道路18号)下面



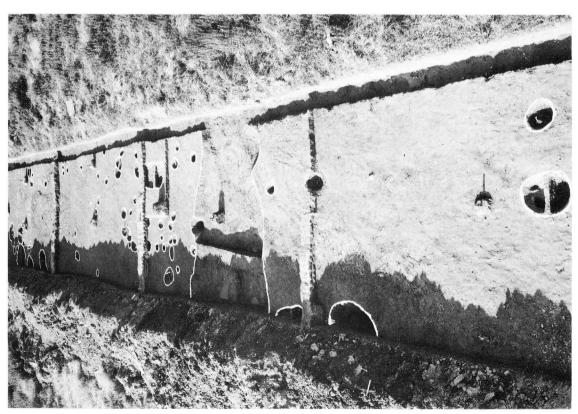
ToB B地区(道路23号)上面



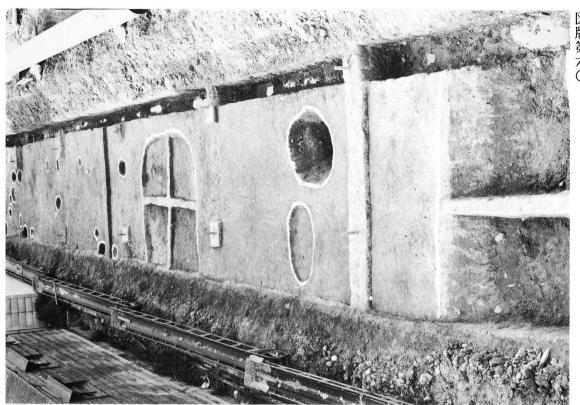
ToB B地区(道路23号)下面



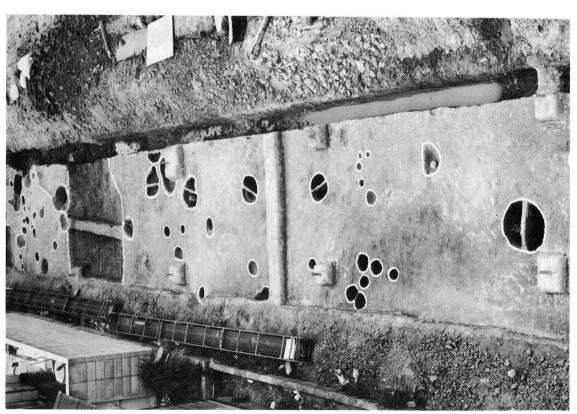
ToC B地区(道路23号)下面



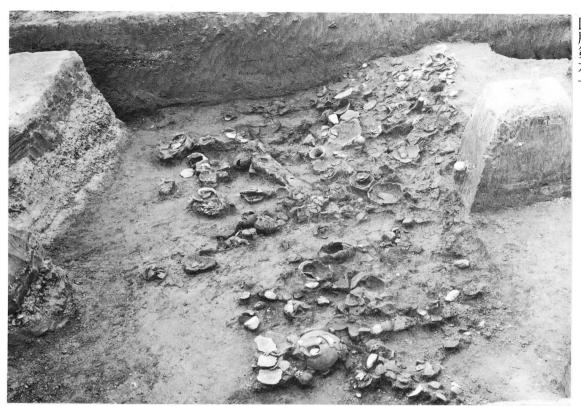
ToC B地区(道路23号)下面



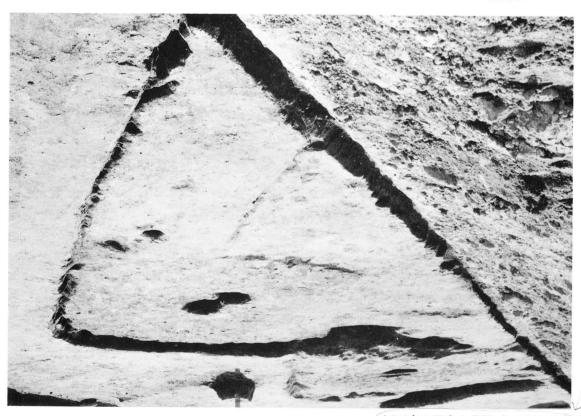
ToC C地区(道路25号)上面



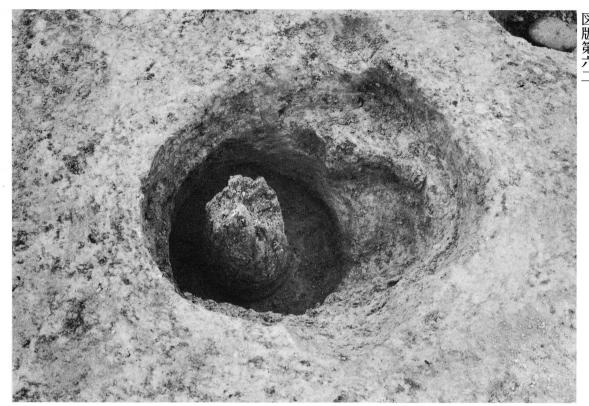
ToC C地区(道路25号)下面



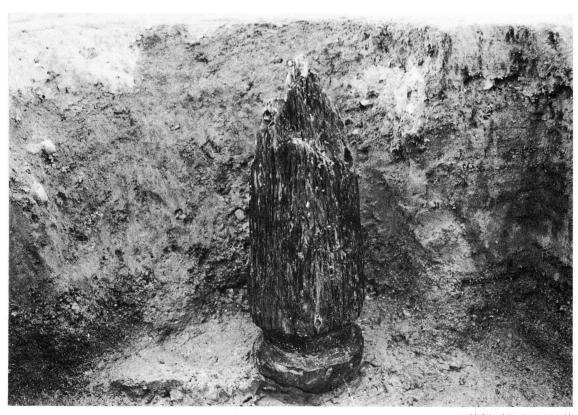
住居址(ToB B地)



河川内土器出土状態(ToB B地区)



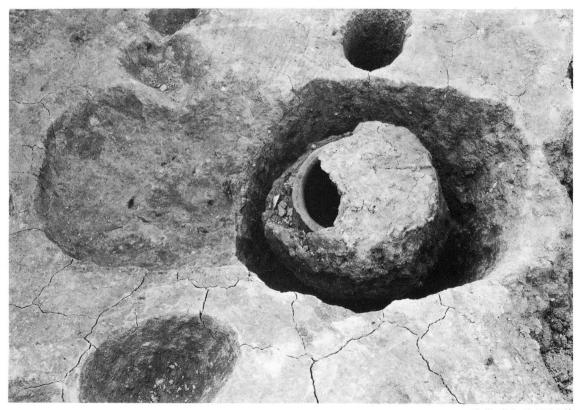
柱根(ToB B地区)



柱根(ToB B地区)



骨壷(ToC C地区)



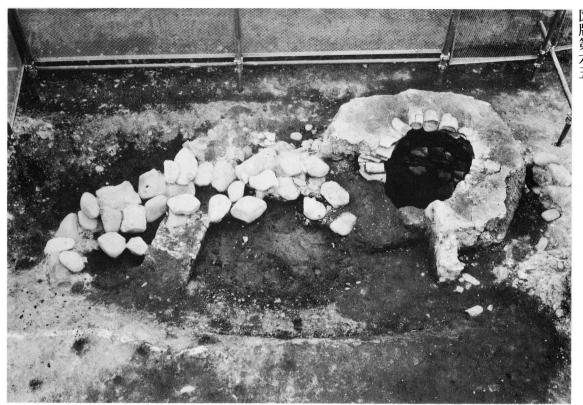
骨壷(ToC C地区)



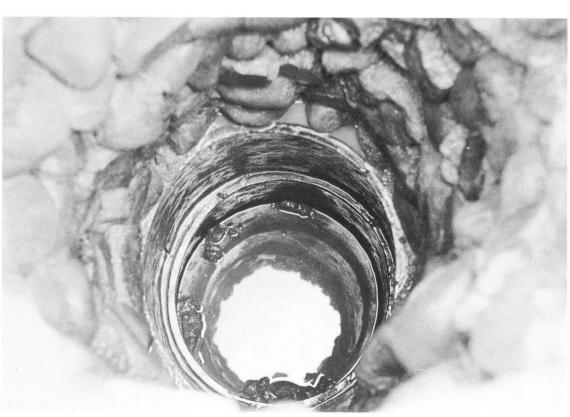
1号井戸



2号井戸



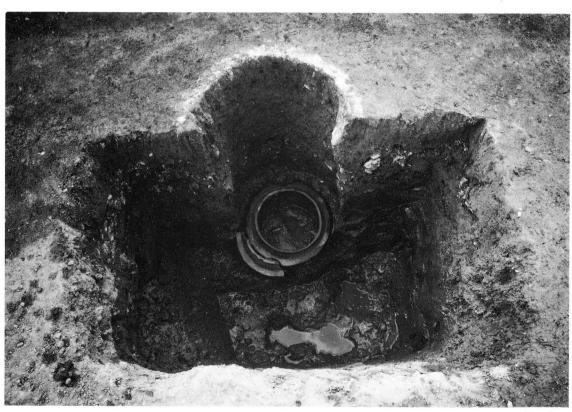
3号井戸



3号井戸(内部)



4号井戸



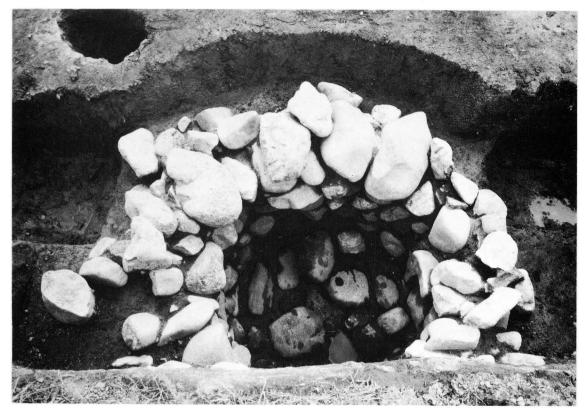
4 号井戸



5 号井戸



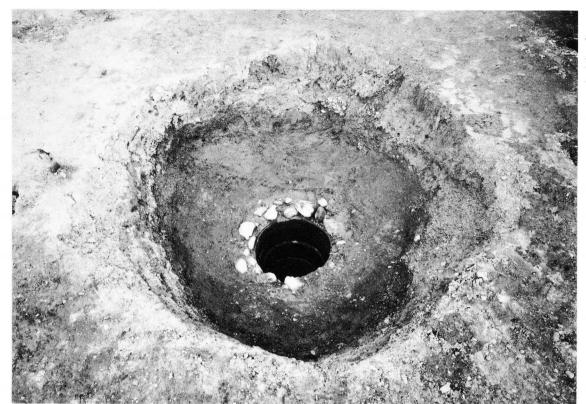
5 号井戸



6号井戸



7号井戸



8号井戸



9 号井戸



旧河川 (一次調査)



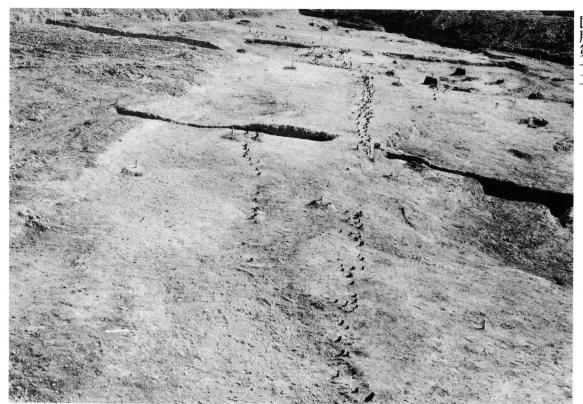
木製品出土状態



旧河川全景 (二次調査)



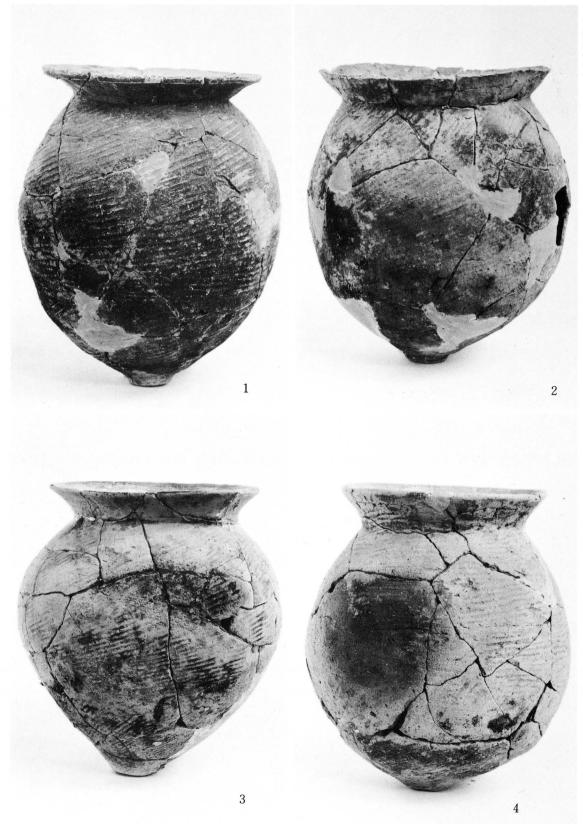
旧河川 (東より)



旧河川右岸杭列



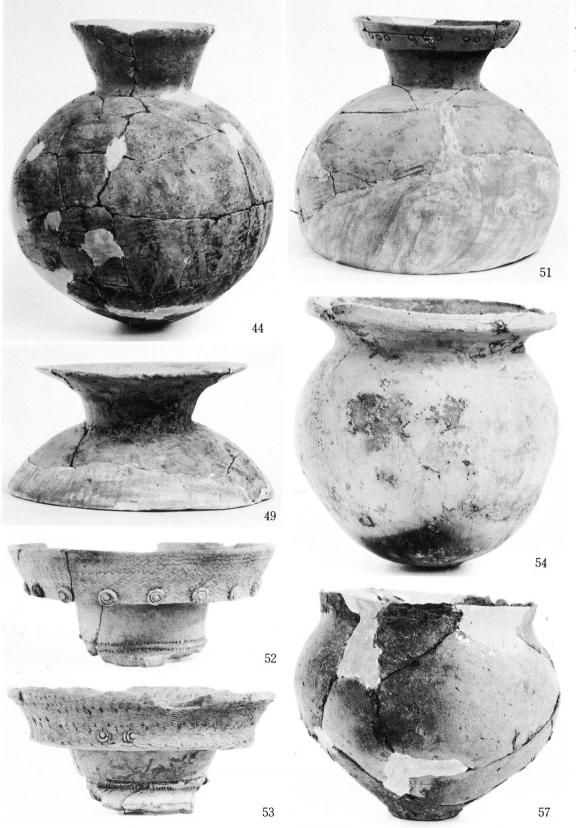
土器出土状態



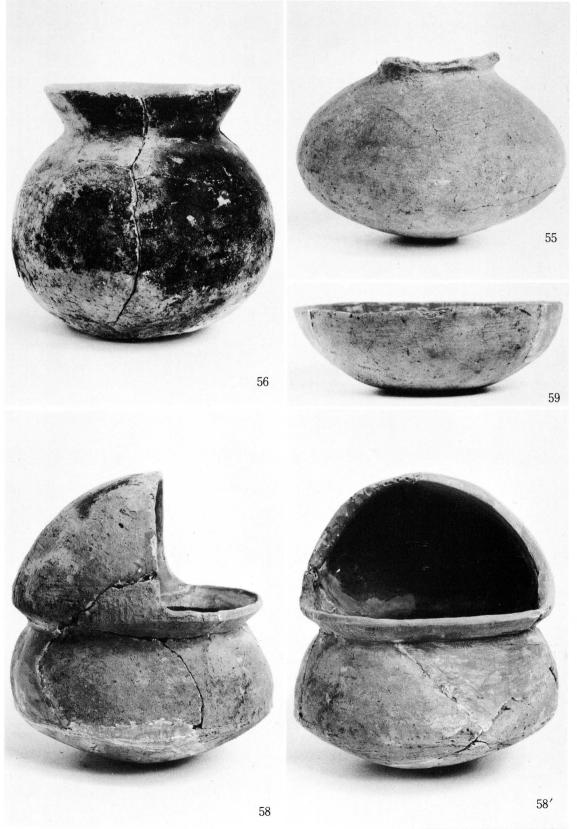
「河川」状遺構出土



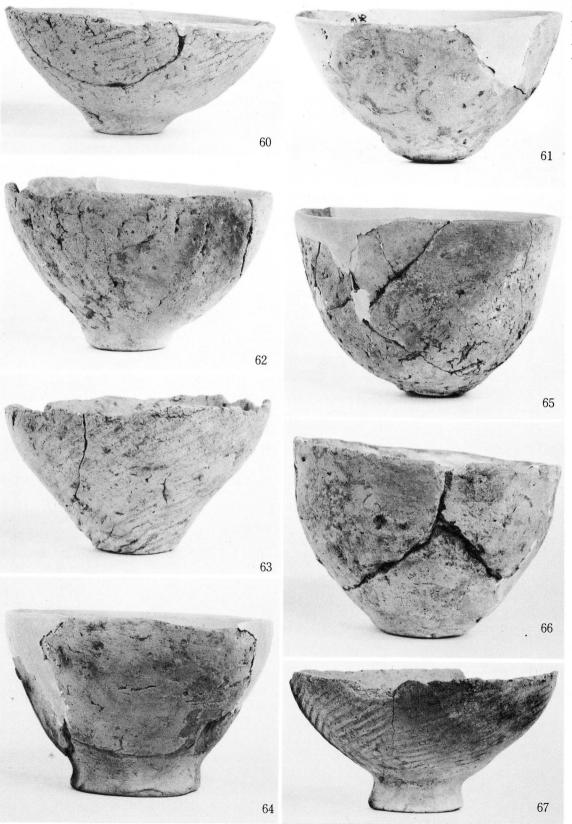
「河川」状遺構出土



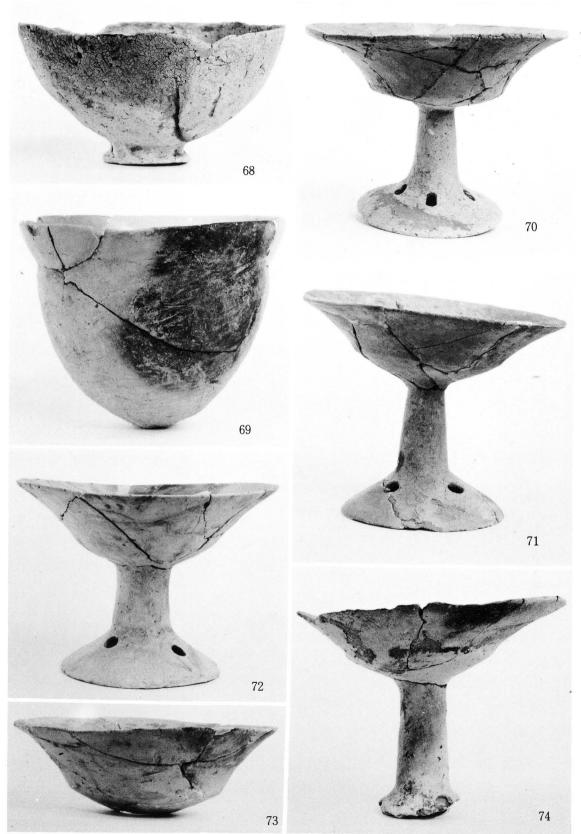
「河川」状遺構出土



「河川」状遺構出土

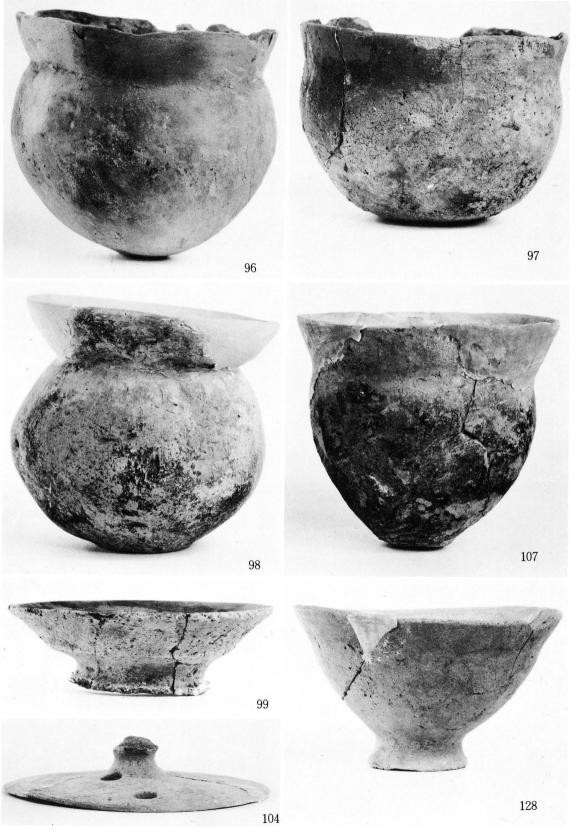


「河川」状遺構出土

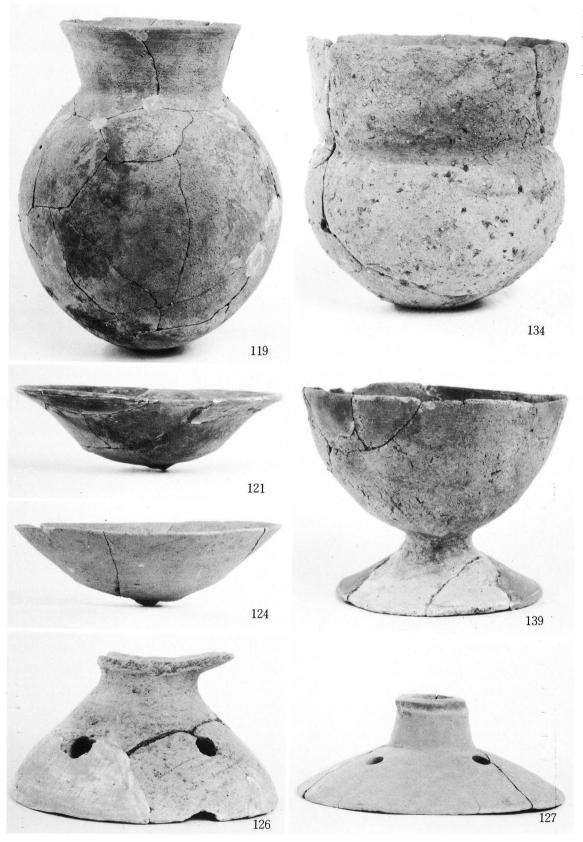


「河川」状遺構出土...

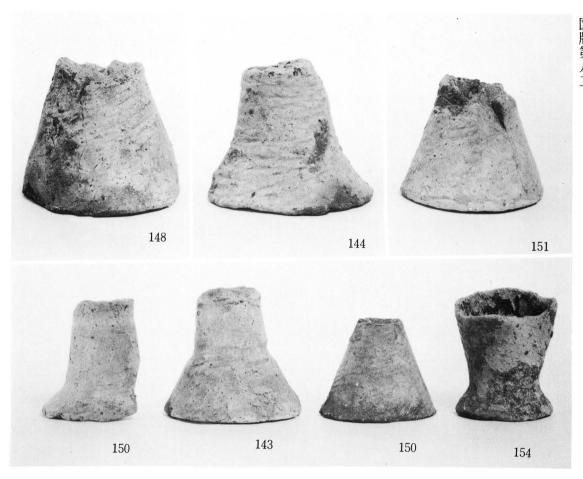


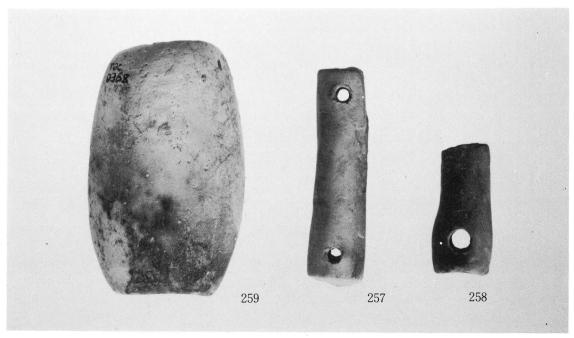


96~98「河川」状遺構 99 ピット20 104 住居址 107·128 Toc地区出土 T·O·C地区出土

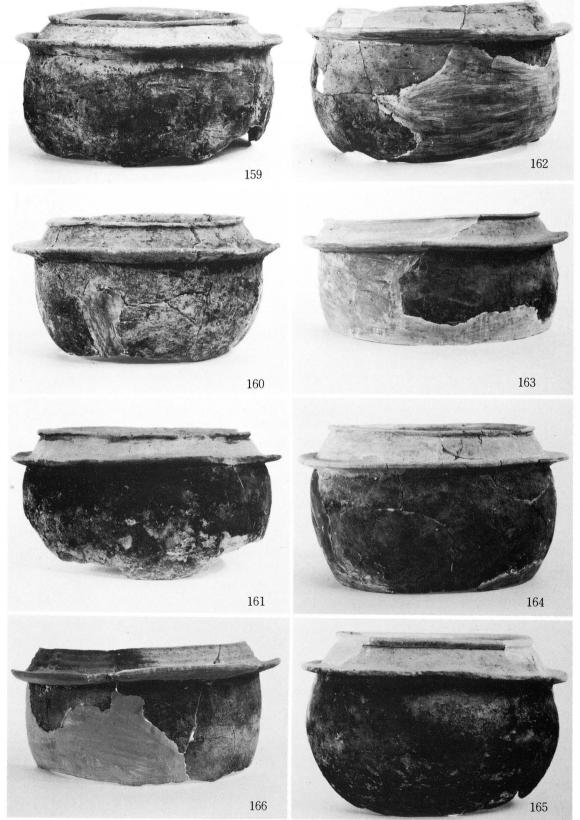


T·O·C地区出土



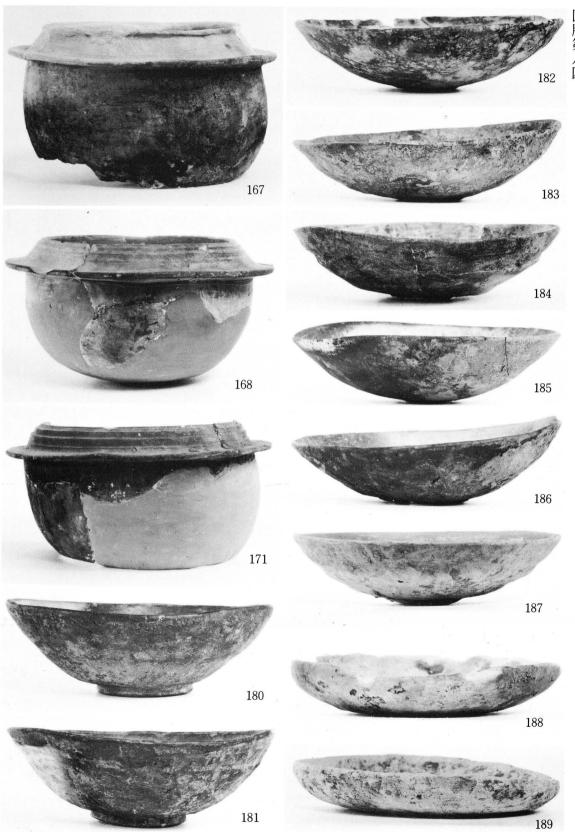


製塩土器 土錘



159~161 4 号井戸

162~166 7 号井戸出土



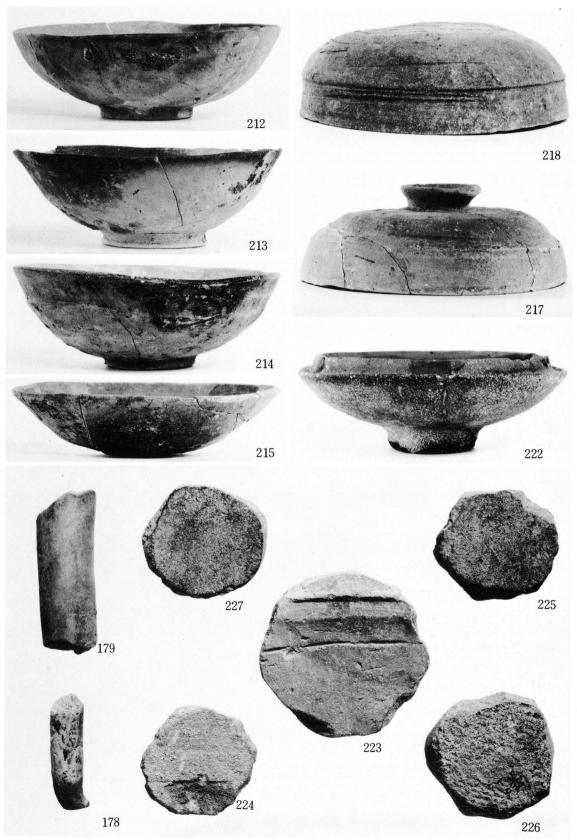
167 BH·BG15褐色砂礫層 168·171 小礫群 180 1号井戸 181 2号井戸 182~189 4号井戸出土



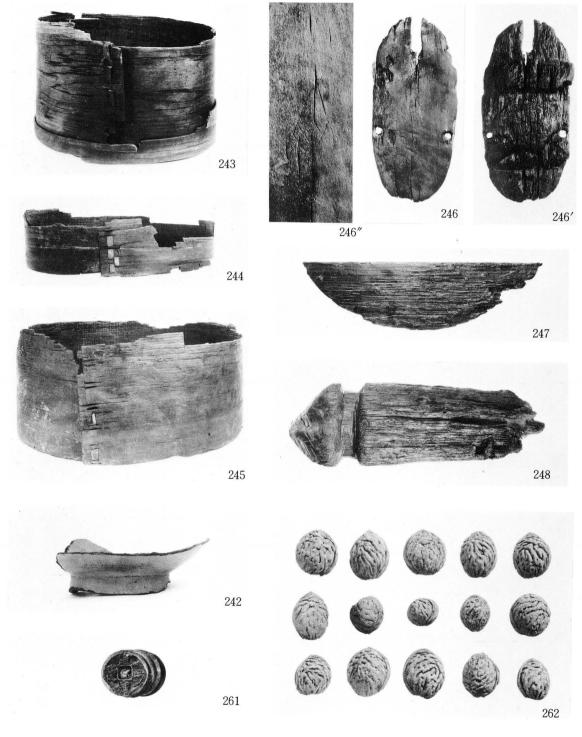
193~201



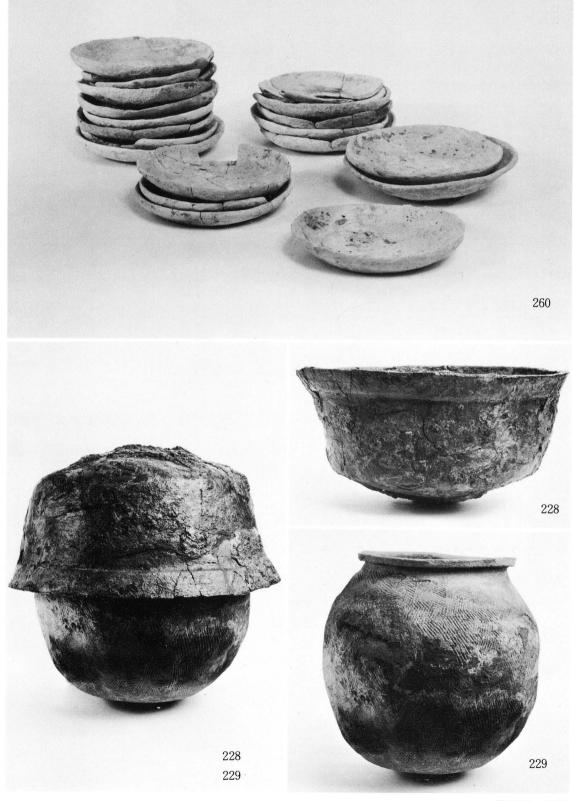
193~204 5 号井戸出土 205~211 小礫群出土



212~215 · 217 · 218 · 222 各種ピット地出土 三足片 円板



242 3 号井戸 243·244 5 号井戸 245 8 号井戸 246 1 号井戸 247 2 号井戸 248 ピット 5 261 TOC. C 262「河川」状遺構出土



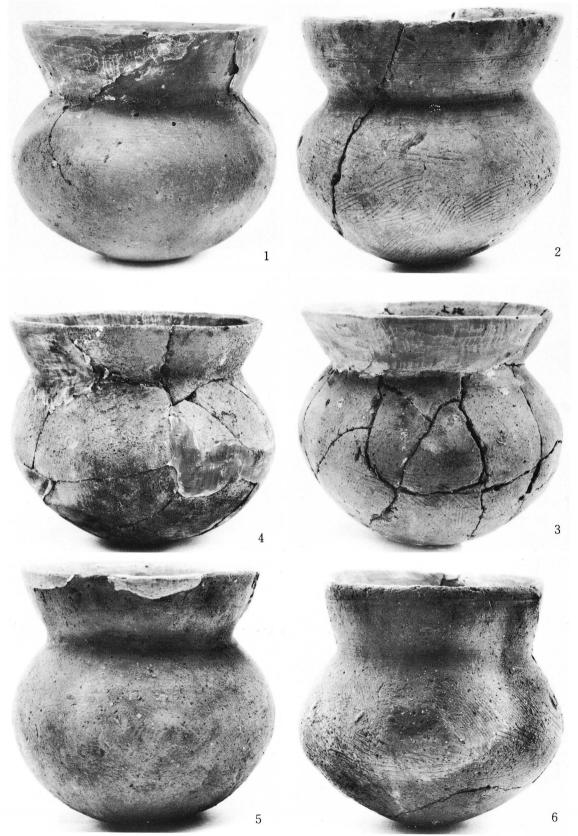
燈明皿・骨壷



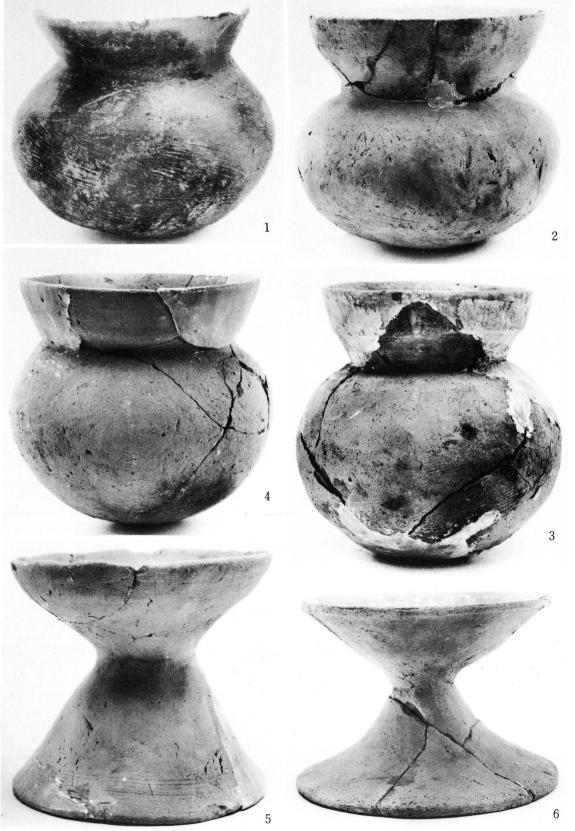
瓦類



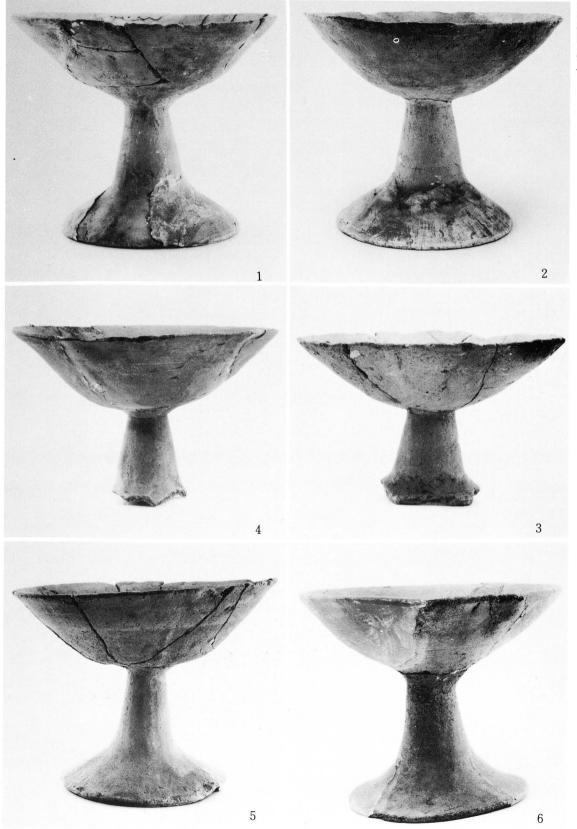
淡青灰色細少層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



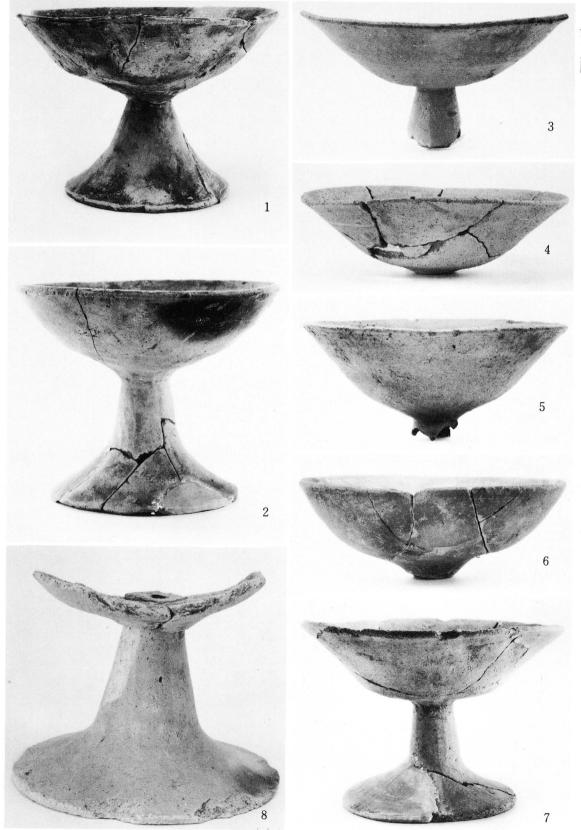
淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



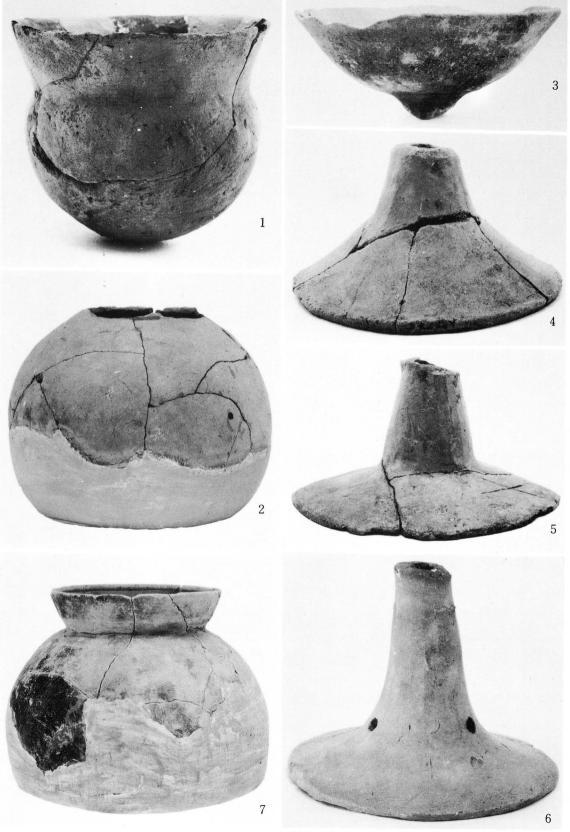
淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



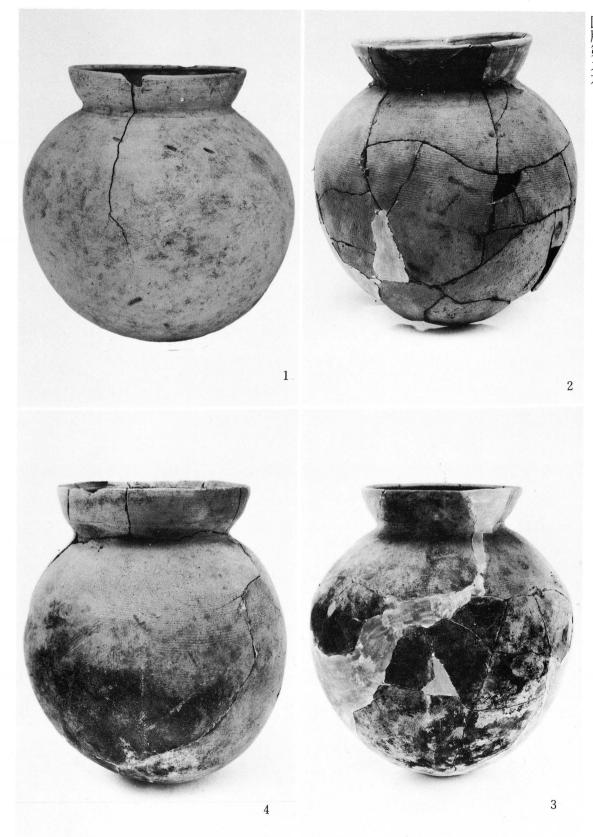
淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



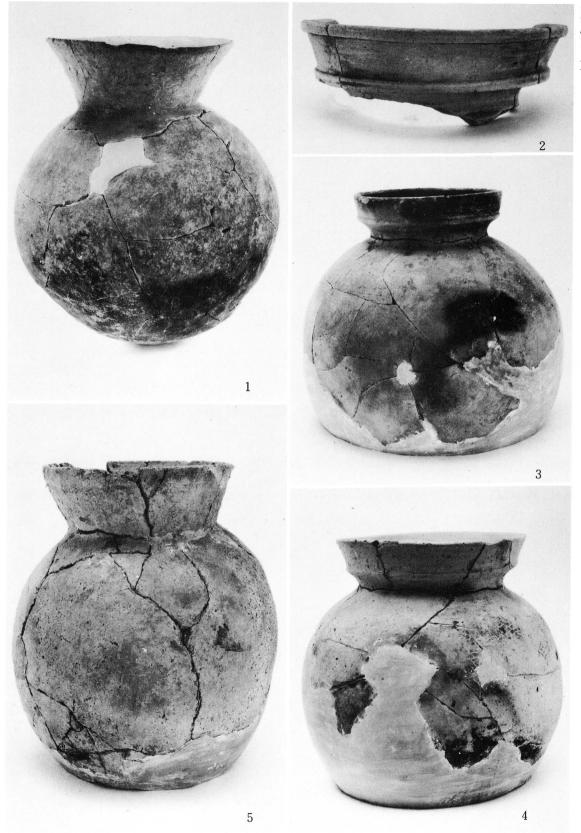
淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



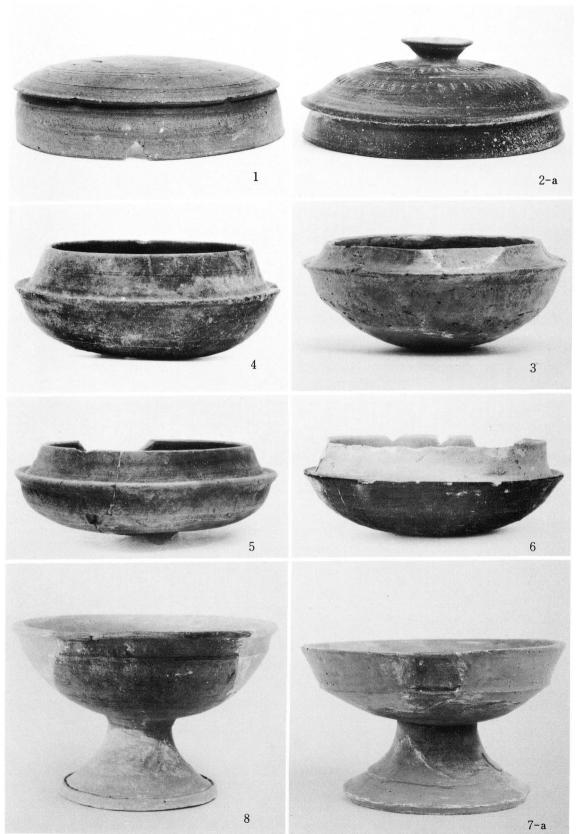
淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



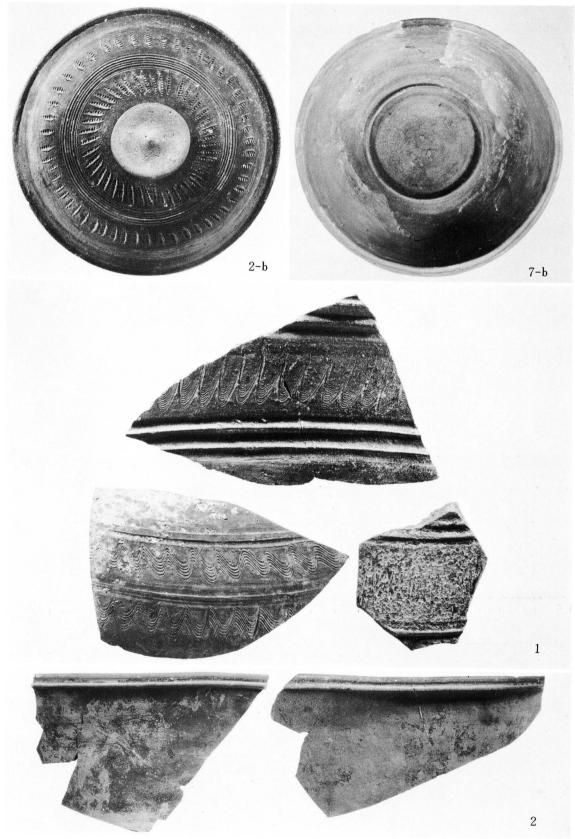
淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色細砂層出土土器



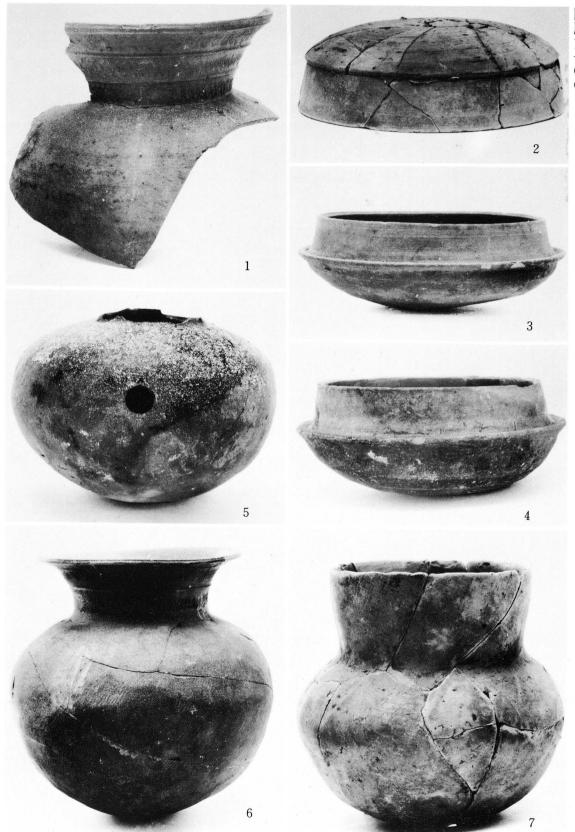
淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器



淡青灰色細砂層出土土器



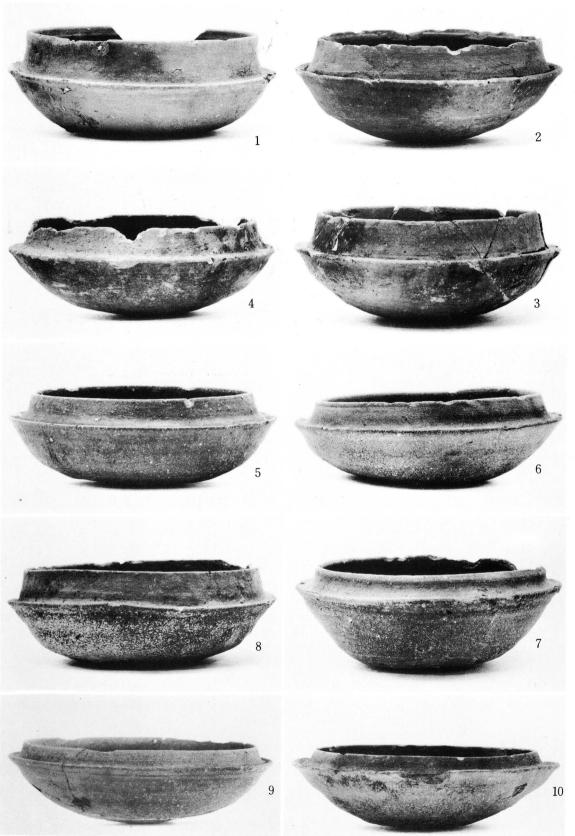
淡青灰色細砂層ならびに暗茶褐色粘土層出土土器 (1・5・7) I-27地区周辺粘土混り灰色砂層出土土器 (2~4・6)



I-27地区周辺粘土混り灰色砂層出土土器(1~3) M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器(4)



M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器



M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器

1~4は煤付着の杯



M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器



M-19地区周辺粘土塊混り砂利層出土土器(1・2・9・10) 河川上層茶褐色砂質土層出土土器(4~7)



M-19地区周辺粘土混り砂利層出土土器 ($1\sim3\cdot5\cdot6$) 河川西端部砂利層出土土器 (4)



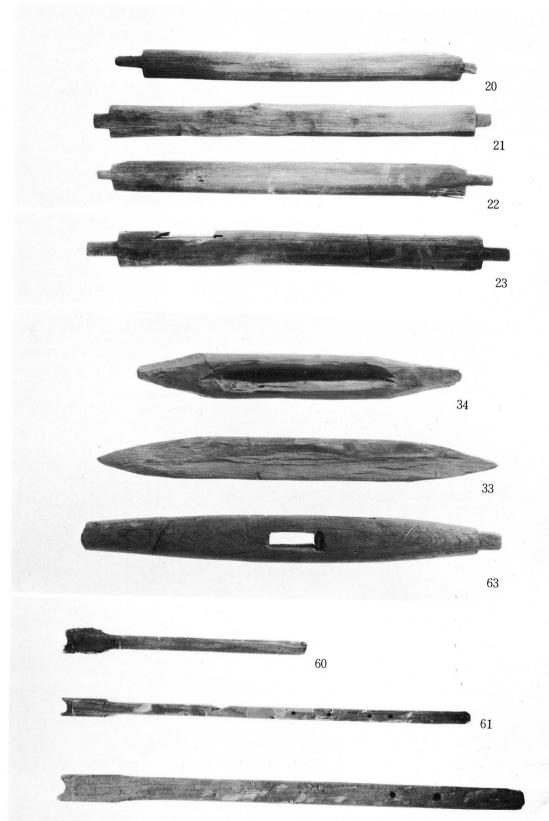
K-27河川底部砂利層出土縄文式土器

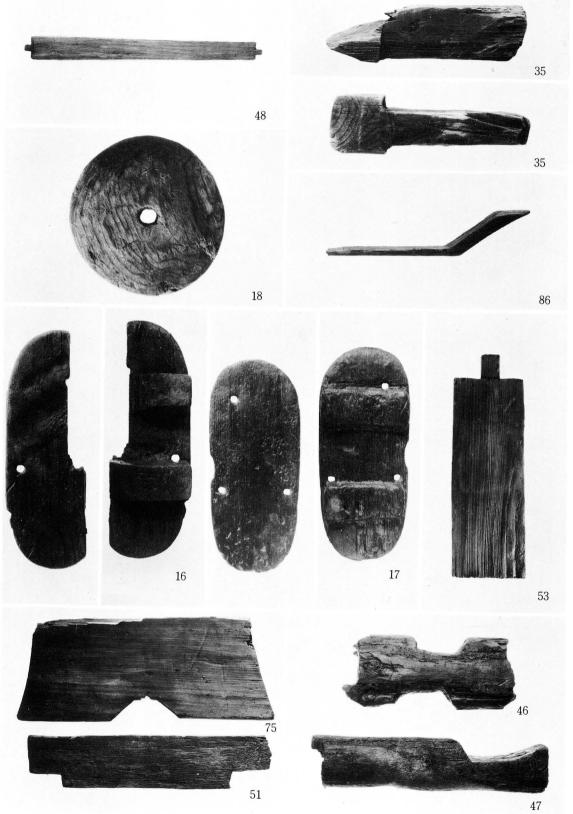


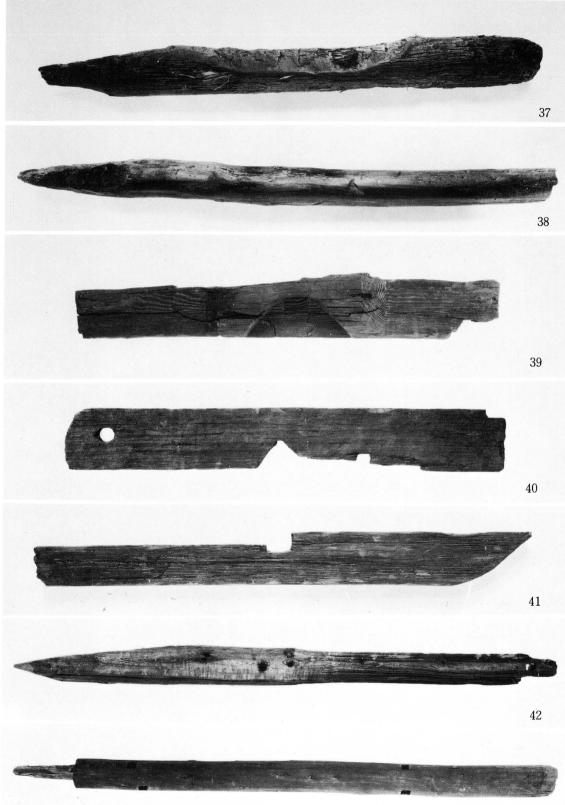
豊中遺跡A地区溝内遺物出土状況

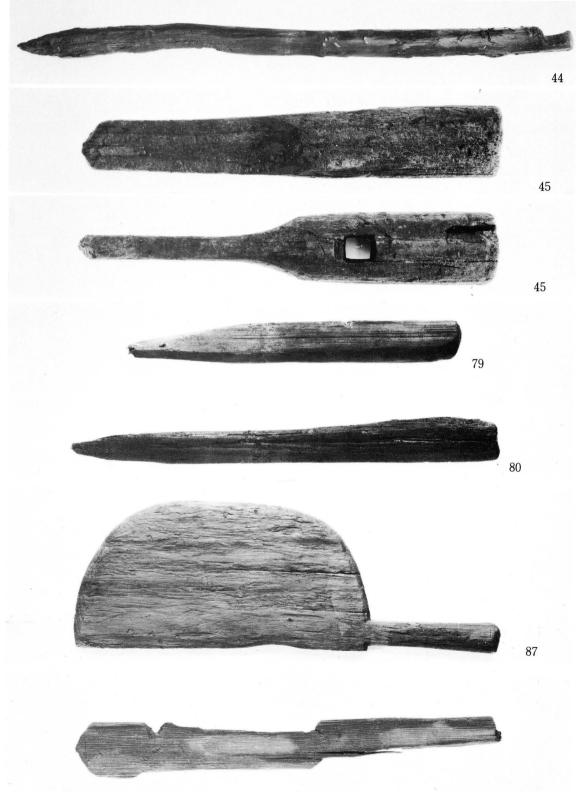


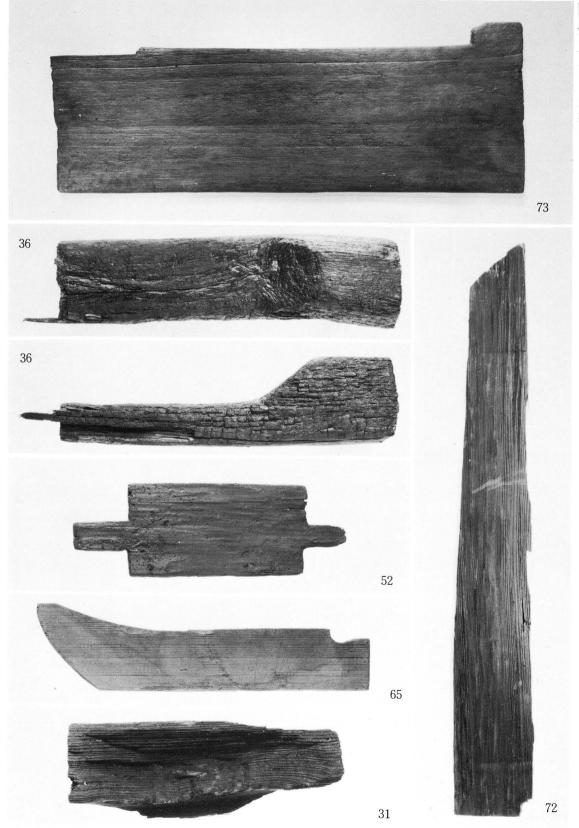


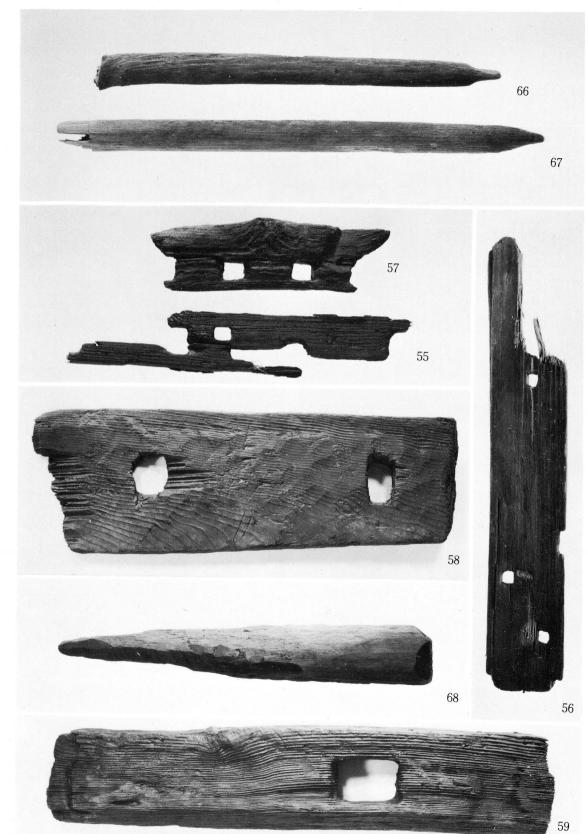












y .

